

# 中華料理店織斑

ロドニー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

織斑夫妻は引退を期にIS学園の近くに中華料理店を始めた。その中華料理店は学園から近い事もあり国家代表や国家代表候補生などの多数のIS乗りが集うお店でもあり、店主の一夏からお玉が飛んで来る事でも有名だった。

さて、今日は誰が空飛ぶお玉の餌食になり、常連客がどんな中華料理を注文するのだろうか？

## 目次

プロローグ	1
箸と海老チリ餡掛け炒飯	5
オータムとチンゲン菜炒め	10
ラウラと中華粥 前編	17
ラウラと中華粥 中編	23
ラウラと中華粥 後編	30
閑話 私は先生です!! By ティナ・ハミルトン	35
セシリア親子に温かい支那そばを	40
閑話 メアリーの初恋と過去	52
定休日の中華料理店とシャルロット	61
ラウラに中華スープを	67
クロエ襲来!! 前編	72
クロエ襲来!! 後編	81
簪と業火野菜炒め定食	90
I shall return in Kuroe	99
中華料理店織斑 学園の食堂で奮闘中? 朝食編	108
中華料理店織斑 学園の食堂で奮闘中? 昼食編	115
中華料理店織斑 学園の食堂で奮闘中? 夕食編	119
日本政府の暗躍と刀奈と麻婆豆腐	125
レゾナンスへ買い物 織斑家の場合	131
レゾナンスへ買い物 ボーデヴィツヒ家の場合	144
臨海学校 人外ビーチバレーだよ?	155
臨海学校 Happy Birthday in the ree piece Angeles	166

臨海学校	落ちる女神と墜ちた女神	176
臨海学校	女神アテナに導かれし者	194
臨海学校	三つの顔を持つ女神と降臨する闇の女神ヘカーテ	204
臨海学校	戦乙女三姉妹の宴	214
臨海学校	神々の黄昏ですか？違います姉妹喧嘩です!!	229
臨海学校	日本の落日とメアリーの恋の行方	238
臨海学校	学園への帰還	248
閑話	鈴音とメアリーとの決闘 前編	258
閑話	鈴音とメアリーとの決闘 中編	263
閑話	鈴音とメアリーとの決闘 後編	270
夏休み	幼女再び	276
夏休み	広州での出会いと青梗菜炒め	283
夏休み	巻紙先生の自宅訪問	295
夏休み	開幕 特級厨师試験!!	310
夏休み	特級厨师試験 激怒する一夏	316
夏休み	特級厨师試験 最終試験	323
時空旅行	駄女神再び	330
時空旅行	銀の福音事件 前編	338
時空旅行	銀の福音事件 後編	349
時空旅行	学園最強姉妹VSラヴァーズ	357
時空旅行	臨海学校終結	366
時空旅行	学園最強VS学園最凶	374
時空旅行	兔を狩る者たち	383
時空旅行	敗北と織斑邸で過ごす夏休み	390
時空旅行	篠ノ之神社での夏祭り	404

時空旅行	文化祭	未来のママに青椒肉絲	413
時空旅行	文化祭	亡国機業の襲来	421
時空旅行	文化祭	瞬殺の女王と元の世界への帰還	429
結婚式			436
最終話	中華料理店織斑		442

## プロローグ

皆さん、知っているだろうか？

第三回、四回大会を征した男性IS乗りを……

そして、第一回タッグトーナメント大会から無敗の夫婦ペアを……しかし、その夫婦は第五回以降からは参加していない。

何故なら、二人は中華料理店を営んでいたからだ……

その中華料理店は何故か、IS乗りが集う中華料理店でも有名な店だった。ただ、お玉が飛んで来る事でも有名なのだが敢えて語らないで置こう。

今、入店して来た彼女達の名誉の為に……

だがしかし、今日も飛んでいた。

お玉が二つ程だが……

この二人が夜の部と勘違いして来てなければだが……

「二夏、ビールと焼き鳥だ！」

「いっくんく束さんにはビーフジャーキーと黒霧島!!」

平日なのに開店したばかりの中華料理店にほろ酔い状態の二人がやって来た。

その二人とは、IS学園の古株教師（千冬姉）と新米教師（天災科学者）が居酒屋感覚で注文をするのだが、時間的な所を間違えた注文に店主は青筋を浮かべ叫びながら磨いたばかりのお玉を投げつける。

「千冬姉、束さんここは居酒屋じゃねえって、何時も言っているだろうが!!それに、学園はどうした!!昼間から酒を飲んでじゃねえ!!」

ビュンと投げつけたお玉は軽快な音を立てながら二人の額に直撃する。

無論、絶対防御は貫通している。

師匠仕込の中華料理店の名物、空飛ぶお玉である。

絶対防御は貫通だからダメージは諸に来る。したがって、直撃した二人は女性が出してはいけない声に出し目を回しながら床へと倒れ込む。

「ギヤア!!」

「全く、千冬義姉さんと束さんは懲りないわねえ…」

そう言って店主の奥さんが本来は夜の部で出るビーフジャーキーと焼き鳥をテーブルに出しながら夫が投げつけたお玉を回収。

しかし、義姉と天災の惨状に額に手を宛てながら苦笑する鈴音。

この中華料理店では日常である。

苦笑している彼女は一夏の奥さんでもあり、今は二児の母親でもある。

彼女との経緯だが、彼女も店主である一夏のタッグパートナーでIS乗りとしては有名な人物でもあり、学生時代は中国の国家代表候補生でもあった。

しかし、夫である一夏は学生時代のファントムタスク関連の事件や様々な事件関連で急激に成長した事から代表候補生に任命した日本政府が信用出来ず、IS学園卒業と同時に束さんが支援する形でフリーの選手となったのだ。

逆に彼女自身も代表候補生から国家代表への話が来たのだが一夏が旅立つ前に自国の中国にて「好きな人に絶対に付いて行くんだからね!!」と中国政府に啖呵を切り、自身の専用機を返却と国家代表の話を蹴ってまで押し掛け女房として無理矢理付いて来た経緯がある。

そんな経緯だが、IS学園時代の専用機は中国へ返却済みなのだが目の前で目を回して床に倒れている新米教師(天災科学者)である束さんが鈴音が着いて行くと決めた時に中国をおど：ゲフンゲフン回収して、そのコアから一夏の専用機である白椿改のデータを元に白椿改の対なる様に黒椿を作製して渡している。

意外でもあるが二人の選手生活は些細な話から逸話が多い事でも有名で、結婚する前までは恋人以上夫婦未満な話が結構多くが語られていたりもしていた。

そう、最も有名なのはタッグトーナメントのイギリス国家代表選手と日本国家代表のタッグパートナーである二人が直に目撃した後に語り、名付けられた事件名は

『夜の大魔神降臨事件』

これにより鈴音が引退する原因となった有名な事件である

それは、一夏が個人戦でもある第四回大会で優勝し、タッグトーナメントでは第五回を優勝を期にパートナーである鈴音がホテルで起こした事件だった。

一夏と鈴音の二人は選手活動しながら公私共に一緒に暮らしていた。

そう、まるで夫婦の様？

いや、恋人同士だろうか？

それは判らない。

だが、一つだけは言えるだろう。

彼は朴念人だと。

誰でもなら一度は思うだろう。

好きな人には抱いて欲しいと渴望しないだろうか？

公私共に一緒に暮らしていた鈴音が一番顕著だった。

そんな、鈴音も彼が朴念人だと学生時代から理解していた。

だが、頭が理解していても体と心は別だった。

そう、いくら誘惑しても手を出してくれなかった。

学園を卒業して鳴りを潜めていたとは感じてはいたが、某ロシア国家代表直伝でも一夏の朴念人が原因で手を出してはくれなかったのだ。

遂に我慢していた彼女の欲求不満が大爆発。

欲求不満が大爆発した彼女が取った行動はタッグトーナメント優勝し選手控えのホテルの一室にて、一夏を驚かせて誘惑しようとするキツンで必殺の裸エプロン（水着未着用）を披露したが、全く手を出してくれない事に激怒。

羞恥心より怒りが勝り、力技（部分展開からのフルパワーでのアツパーカット）でベッドに押し倒してベッドの上で一夏を徹底的に蹂躪。

いくら世界最強でもキレた鈴音には勝てなかった。

翌日、妹のマドカとタッグパートナーのセシリアが優勝を祝いに部屋に来たときには徹底的に搾り取られ全裸のままベッド上には放置



され痩せ細りボロ雑巾の様にダウンする一夏と同じく全裸のままお肌が艶々状態で徹底的に一夏を堪能して満足顔のまま惚けていた鈴音を発見したらしい。

この惨状を発見した二人はあまりの部屋の状態に小さな悲鳴を上げてその場から全速力で逃走したらしい。

それが原因で後の双子姉妹の娘の十夏と千秋の妊娠が発覚し、鈴音は娘の育児と結婚を理由に引退する。

一夏も料理店を開く夢を諦めてはいなかったのか、選手活動しながらも知り合いの五反田食堂の店主の厳さんに弟子入りして中華料理を学び、独立を認められたと同じく双子姉妹が五歳になったのを期に選手を引退。

IS学園からほど近い場所に優勝賞金を元手に中華料理店を始めたのだった。

余談だが、選手を引退はしてるが夫婦共に専用機を返却はしていない。理由は束さんからの個人的なプレゼントだからだろう。

まあ、そんな事ながらも中華料理店を営んでいたのだった。

そして、今日もお昼ご飯を目的に多数の常連客が集う。

## 箸と海老チリ餡掛け炒飯

私は今は学園で仕事をしている。

仕事内容は新米教師である姉さんの補佐である。

「はあ……」

研究室の片隅、姉さん宛の書類を整理しながら納得出来ない事があつた。

そう、未だに二人が結婚した事に納得は出来てはいない。

私も一夏を今でも好きだったからだろう。

しかし、私は二人の試合を全て観ていたから判つてしまう。タッグトーナメント大会で何度も姿を見ると二人の公私共にパートナーだと嫌でも理解してまう。

だけど、五年前の結婚式以降、二人をテレビから見なくなった。

理由は簡単だった。

鈴が妊娠して結婚したからだだった。

無論、結婚式にも呼ばれた。

「嫌味か!？」

と叫びたくなる様に偶然にも鈴が投げたブーケをキャッチ(独身貴族を謳歌し、アラフォーの姉さんよりはマシだが…)して寮の箆笥の上に飾れる様にコーティングして置物化している。

時計を見ればそろそろ昼時。

「確か、姉さんが…」

確か、学園の側に二人が中華料理店を経営していると姉さんから聞いている。なんでも、学園の食堂より美味しいからと外出届けを出してまで食べに行く教師や生徒が居るのだと聞いた。姉さんや千冬さんも常連客らしいが……

「久しぶりに会いに行ってみるか……」

引き出しにある外出届けにサインして提出。スーツ姿のままだが問題無いだろう。

学園から出ているモノレールから隣街に向かう。駅から歩いて数

分の所に三階建の中華料理店があった。

『中華料理店織斑』

真新しい建物ながら中国の中華飯店を思わせる純中国式木造建築。一階は店舗で二階以降は住居だろう。

扉を開き店内に入ると久しぶりに会った気がする。

私を見るなり

「いらっしやいませーって、箸じゃない。久しぶり！テーブルは一杯だから、カウンターでいい？」

チャイニーズドレス姿の鈴だった。

あの学生時代とくらべたらかなり成長したのだろう。

チャイニーズドレスが似合うほど、背は伸び（セシリア位）胸は私よりは無いが一般の女性よりある。当然ながら、娘を出産しているのだから胸に関しては当然だろう。

まあ、鈴に有無を言わされずにカウンターへ案内されお冷とメニューを出される。お冷を飲みながらメニューを見た瞬間、叫んでしまったと同時に額に衝撃がはしる。

「なっ!？」

「うるせえ!! さっさと注文しろ!!」

「痛あ!？」

額に当たり、飛んで来たのはお玉だった。

私は紅椿を未だに所持している。

絶対防御を貫く威力だと？

それよりも、値段が22万で満漢全席が食べれるって普通に叫ぶだろ!!

安過ぎだろ!!

他のメニューだっけそうだ。

支那そばと餃子、炒飯セットが450円だど!?

他には、回鍋肉セットだっけジャスト500円…

開いた口が閉まらない。

こんなんで採算は取れるのだろうかと不安になる。だが、見たことある生徒や教師？

まさか……

端つこの座席には織斑先生と姉さんが額から煙を出したまま気絶していた。無論、注文しただろう二人が好物にしている肴が傍にあったが……

まさか、あのお玉でか？

戦慄を覚えながら私は見なかった事にした。

メニューを見て考え込んでいたら、一夏がお盆を片手にやって来てメニューにはない物が来たのだ。

一夏は

「俺からの再会の記念だ。代金は要らない。常連客にしか出さないメニューを一口食べれば、俺が願う気持ちが解るだろう。」  
と言ったまま厨房へ戻って行った。

出されたメニューを見ると、卵炒飯に海老チリが掛けられた海老チリ餡掛け炒飯だった。

匙で炒飯と海老チリを掬い食べる。

「熱っ!?!ハフハフ……」

口の中に広がるチリの辛み。

海老のプリプリ感が堪らなく美味しい。

海老チリだけでも美味しいおかずになると思う。

今度は炒飯だけを掬い食べるが、卵の甘みしか感じない。

何かがおかしい？

そうか!?

私は咄嗟にレンゲを掴み、海老チリと炒飯を一緒に掬い食べる。

「!?!」

ああ、そうか……

判ってしまった気持ち……

判ってしまった気持ちとは裏腹に海老チリと炒飯のハーモニー。それは、チリの辛みと卵の甘み。

漣の様に襲われ、口の中で旨味が暴れ回る。

まるで、龍虎の様に……

だが、二匹は喧嘩をしない。

何か友として繋いで居るかのよう……

その、違和感を感じさせないのは海老チリソースに僅かに感じる爽やかな酸味。

そうか……

この爽やかな酸味は普段、何かで食べた記憶がある。

中華なのにイタリアンを感じる食材。

ああ、トマトか……

トマトの酸味が手を取り合い、味を纏めていたのだな。

そう、一夏が願う気持ち。

あの時の気持ちには答えられないが友として居たいか……

ああ、フラれたのだな。

その、気持ちに気付く前に二人が結婚した段階で気付くべきだったのだが今更遅かったな……

頬に温かい物を感じた。

ああ、私は泣いているのだな。

だから、私は見られたくないがために皿を掴み、泣き顔を見せたくないから掻つ込む様にご飯を食らう。

一気に食べ終わると烏龍茶が置かれていた。

一気に飲み干すとカウンターから一夏が顔を覗かせていた。

多分、お茶を出したのは一夏だろう。

「気持ち、判ったか？」

と一夏が尋ねて来る。

「友としてか？」

「そうだ」

と言ったまま、照れくさそうに厨房の奥へと行ってしまった。だから、趣旨返ししてやろう。

食べ終わり、カウンターから立ち上がると鈴がいた。

「もう、帰るの？」

「ああ、昼ご飯を食べに来ただけだからな」

「また、来なさいよね!!」

だから、これくらいは構わないだろう。

「ああ、何度でも来てやる!!結婚したからって負けない!!」  
そう言つて、店からでるが

「ちよつと、箸待ちなさい!!」

鈴に呼び止められ振り向くと、鈴が酔い潰れた姉さんと織斑先生を担いでいた。

「忘れ物よ!!」

と道端に投げ捨てる。

二人から「ヘツギヤ」と蛙が潰れた声が出たがお構い無しのだろう。

どうやら、二人を持ち帰れと言っているらしい。

そして、姉さんの額には約二万円の請求書が貼られていた。

メニユーがかなり安かったはずだから、お酒も安かったはずだ。だから、どれだけ飲んだのかを小一時間ほど問い詰めたいが不味いだろう。姉さんと織斑先生の分まで支払い二人の襟を鷲掴みして引き摺りながら学園へと帰ったのだった。

## オータムとチンゲン菜炒め

私は織斑十夏、6歳。

千秋の双子の姉でマドカ叔母さんと同じく飛び級で学園に通う一年生です。妹の千秋も飛び級で同じく学園に通っている。

理由は言わなくとも判るよね？

えっ？

判らないだつて!?

パパとママが現役時代でのISの選手として有名だったから安全を考慮しての強制入学だった。

学園には初等部はない。

だから、私と妹は頑張った。

束叔母さんや千冬叔母さんを家庭教師に四歳から高等部で着いて行けるだけの知識とISのパイロットとしての操縦技術を二年かけて叩き込まれた。

千冬叔母さん、マジで鬼だった。

パパが若い時の出来事が未だにトラウマレベルだったから安全面を考慮してママとパパが決断したのだから仕方ない。

一応、特例での自宅からの通学だ。

家に帰ると、昼間なのにお店は準備中。中に入れば、今日もパパが懸命に鍋を振るっていた。

イルカが奇麗に飛び跳ねるように複数のフカヒレが宙を舞う。

パパの十八番の一つでるフカヒレの姿煮だ。

あんな崩れ易い食材を簡単に返せるものだと見て惚れ惚れしてしまふ。

まあ、パパを男して認識したら絶対に夜叉（ママ）が出るから心だけに留めて置こう。

ママもママで点心料理である伊勢海老の蒸し餃子。メニューでの名前は翔龍餃子だったかな。大量の伊勢海老を中華包丁片手に下処理中で無口だった。あんな、下処理と膨張率の違う皮作りだけで神経

がすり減る料理が出来ると内心関心してしまう。  
最近、初めて知った事だけどママは凄かった。

あの狭き門である中国の国家資格である特級点心師の資格を取っていた。

パパもパパで近々、一年に合格者が一人出るか判らない特級廚師を取るらしい。

宴会だろうが、私には関係ない。

そして、居候のマドカ叔母さんは日本には居ない。

五年前の大会を最後に引退していて直ぐに中国に特級麵天師を取するために本場中国で修行中だったが、ママの話では特級麵天師が取れたらしく近々帰ってくるらしい。

引退理由はお兄ちゃんやんと競えないかららしい。

私はマドカ叔母さんが正直言えば嫌いだ。

私達姉妹がパパに甘えようと突撃するが

「お〜ん〜ちゃ〜ん」

と既にソファで猫の様に抱き着き、ただ甘に甘えて居るのだ。叔母さんだつて三十前なのと思つてしまう。口にしてしまえば叔母さんの専用機であるサイレント・ゼフィルスによる蹂躪劇に巻き添えになるから口が裂けても言えない。

だから、ムカついてしようがない。

それにプラスしてママがマドカ叔母さんに嫉妬して般若になつているので尚更近づけない。

あつ、苛ついてきた。

うん、決めた。

明日は副担任のティナ・ハミルトン先生を模擬戦に誘つてボコボコにしよう……

元イタリアの国家代表だか知らないけど、速さだけのテンペンスターマークⅢなんて私のアテナの拘束能力と妹のアルテミスのアルテミスの矢による一撃必殺だから敵じゃない。

絶対に泣かず。

ティナ先生もパパにトラウマがあるしく個人戦である第四回大会



の初戦でギネス記録になる速さで負けたらしい。しかも、あのお玉で一撃だったらしい。

因みに試合時間はたったの3秒。

正に秒殺

試合を観ていたママが曰く。

空飛ぶお玉の被害者第一号だと。

意味が判らない。

二人共、良い意味と悪い意味でギネス保持者である事には変わらないが…

やっぱり、辞めておこう。

ティナ先生が再起不能になるから…

私がティナ先生の事に考えていた時だった。

バツアアアンと勢い良く開く扉に粗暴な口調。

「二夏アアア！何か食わせr…」

「準備中が見えなかったのか馬鹿野郎!!」

何か食わせると叫びたかったのだろ。

私の一年三組の担任（礼子先生）は最後まで言う事無く路上まで吹き飛ぶ。

それを私はハイパーセンサーで見えてしまった。

必殺の空飛ぶお玉を…

だが、ただで吹き飛ぶ先生では無かった。

パパが仕込んでいたフカヒレを口に咥え、額を擦りながら再び入店。

「また、腕を上げたじゃねえか!!」

「だから、仕込中だ!!うるせえ!!」

「フツギヤン!?!」

多分だけど、あのお玉にフカヒレの切れ端が入っていたのだろ。礼子先生の性格なら、あの瞬間にお玉に入ったフカヒレを意地で噛み付いたに違いない。

だが、二度目は無理だった。

二度目は青白く光るお玉が再び礼子先生の額に直撃して入口を塞ぐ形で気絶していたのだから…

「オータムも懲りないわねえ…一夏も一夏でお玉に零落白夜を纏わせないの!!」

とママが仕込みを中断して礼子先生を担ぎ上げ、席に着かせる。パパに苦言を言いながら苦笑する。バツが悪かったのか、パパの視線が私に向きこう告げた。

「オータムに何か作ってやれ」

と有無すら言わせない視線。

パパの性格だから拒否出来ない諦め、野菜倉庫に向った。たしか、近所の農家さんが大量に持って来ていたはずだ。

案の定、段ボールに大量のチンゲン菜があった。

私は野菜倉庫からチンゲン菜を手に取り、厨房に入る。チンゲン菜を水洗いして、中華鍋に水を入れて沸かす。

私は鞆から竹筒に入れた秘密兵器を取り出す。

これはヒマワリから作った油だ。

それを数滴鍋に入れ、チンゲン菜を湯通しする。

湯通ししたら、チンゲン菜を一口大に刻み熱した鍋に入れて炒める。四川風にする為、鷹の爪を刻み投入して風味を出し蔴で味付けし塩胡椒で調べて完成だ。

副菜には自家製のザーサイと卵スープをお盆に乗せ、特盛ご飯をセツトに礼子先生のテーブルへと運んだのだった。

丁度、礼子先生は復活していた。

「あん？まさか、織斑姉が作ったんじゃねえだろうな？」

と言いながらきつい目付きで私を睨む。

私はパパを真似てみた。

「一口食べれば解る…」

全く、今日はツイてねえぜ。

今日は久しぶりにバテるほど忙しかった。

更織の仕事にガキ共の授業。

まあ、仕方ないか。

司法取引に応じて、刑務所暮らしはしたが身柄を引き取られたのは更織家だった。そして、まさかの新しい任務は織斑姉妹の護衛だった。

俺はふと思いだす。

あの一夏の誘拐から始まり、今は娘の護衛だ。

何かの縁すら感じる。

朝、昼と飯を食べ損ねたが一夏の中華料理店だけは毎日通つても飽きは来ない。ただ、飛んで来たお玉の中身に有り付ければだが…で、今日は一夏にしてやったぜ。

まさか、フカヒレの姿煮に有り着けるとは幸運だったが二度目はあんにやあろう。悔しかったのか零落白夜を纏わせやがって!!

って、気付けば目の前に飯が来てやがる。貴様が作ったんだろな。見るからにチンゲン菜炒め。

湯通ししていないシナシナなチンゲン菜炒めだったらぶっ殺す!

だから、嫌味を言ってる。

「あん?まさか、織斑姉が作ったんじゃねえだろうな?」

キツめに睨みついたら、織斑姉は親父の真似をしゃがった。

「一口食べれば解る」

ちっ、食えば良いんだろ!!

箸でチンゲン菜を掴み口に入れる。

「!?」

うめえじゃねえか!!

チンゲン菜特有の苦味は全く感じやしねえ。ほのかな辛みは鷹の爪だな。普通なら、脂っこいのに全く感じねえ。

ガツガツ食べながら、箸の乱舞が止まらない。

いつの間にか、チンゲン菜炒めが皿から消えていた。

だが、油っこさが全く感じねえは何故だか気になる。

だから

「織斑姉!!チンゲン菜炒めが油っこく無いぞ!!」

「フフフ…礼子先生、実はこれを使ったからだよ」

出されたのは小皿に出された透き通った油。一舐めしたら、全くしつこさを感じない。

「つてか、一夏の野郎…娘が会心の出来だからニコニコしやがって!!しかも、知ってやがる。」

悪態を付いていたら、織斑姉がネタばらししてきた。

「これはねえ、ヒマワリ油だよ。湯通しの時に使うラードの代わりに使ったんだ。だから、しつこくならないんだ」

「ちい、段々一夏に似てきてやがる。」

些細な気遣い。

個人に合わせた味付け

全く、親子似た者同士ってことかよ。

俺は飯を食べ終え店を出る。

何かを忘れていた様だが振り向けば、殺気を滲み出している相棒(スコール)がいた。

「あつ、やべえ…」

「随分、美味しそうに食べてたわねえ?」

スコールも同じ任務を受けていた。ニコニコ笑っているが、目が全く笑ってねえ。

「お腹空いていたのに仲間外れは酷いわねえ?」

そう、同じくお腹を空かせていたらしい。にじり寄る恐怖に後退るが問屋が許してはくれないだろ。

「ねえ?あちらでOHANASHIしましょうか?」

「はっひい!?!」

スコールが指差すのは裏路地。

その先の意味は解るだろう。

あまりの恐怖に声が裏返る。

正直、スコールを誘えば良かったと後悔するが後の祭りだ。スコールに引き摺られ、裏路地に入るなりボディブローを喰らわされダウ

ン。

「ふん」

と鼻を鳴らし、スコールは帰って行ったが正直、叫ばせて欲しい。

「ちくしよー!! 全く、ツイてねえ!!」

虚しい、俺の声が響いた裏路地だった。

## ラウラと中華粥 前編

日本の飛行場の到着ロビーでは人々が騒いでいる。その騒ぎの原因たる人物は実に八年ぶりに日本にやって来た。

その女性は学生時代から比べかなり成長したが軍服姿だけは変わらない。だが、それが霞むほどに美しい女性になっており、北欧神話の戦乙女を彷彿させるような銀髪で腰まで長いロングヘアに長身の女性はウキウキ顔の少女様に騒いでいる。

それが、とても美しい女性なのだから男性を振り向かせるのは世の常だから仕方ないだろう。

しかし、男性達は彼女の軍服姿と階級章に気付くなり視線を逸した。

まるで、畏怖の象徴の様に……

今では、世界最強を誇るドイツ空軍特殊部隊の黒兎隊総司令官で階級は中將であり、元ドイツ国家代表選手のラウラ・ボーデイヴィツヒだからだろう。

もう一人、母親を幼くした感じの少女は母親の手を繋ぎながら周囲に無邪気な笑顔を振りまき西洋人形のように可愛い6歳位の少女はラウラの愛娘であるレナス・ボーデイヴィツヒだった。

世界の人々はそんな笑顔の少女を見たら、こう思うだろうか？

『レナスちゃん、マジ天使』

と思うだろう。

ラウラがウキウキ顔なのは自称嫁（一夏）の居場所を突き止めたに他ならない。

まさか、部下で側近のクラリツサ大佐の娘がたまたま学園の友達とお昼ご飯に誘われて向った先がIS学園の側にある中華料理店だった。まさかの店主がターゲットだったので、それが嬉しく幸運だったのだろう。

「待って居るのだな一夏！」

と呟き、一夏がいる街へ向かうモノレールへと娘と一緒に乗り込ん

だのだった。

モノレールに揺られる事、約30分程で目的地の駅に到着した。まずは、お土産と思いいレゾナンスへ向かう。

「全く、変わってないな」

学生時代と全く変わっていない総合商業施設のレゾナンス。

だが、テナントの入れ替わりはあるだろうが学生時代に元フランス国家代表のシャルロットと通っただけに懐かしく思う。

クラリツサ大佐から間違った日本文化の認識でお土産におでん缶が最良だと言われそれを購入。娘にアイスクリームを購入しようとする振り向くと学生時代の親友に似た少女がアイスクリームを買い食いして居たのだった。

その少女を鈴と勘違いしていた。

「まさか、鈴ではあるまいな？年の割にIS学園の制服でコスプレとは…」

確かに、茶髪でツインテールにあの背格好なら鈴音で間違いないだろうとラウラは結論付けた。

それは鈴音の学生時代までの髪型あり背格好だった。

しかし、当の本人であるラウラは卒業以降の髪型を知らない。

それに、鈴音の今の髪型は食品衛生上の為に髪を切りショートヘアに替えて頭に三角巾を巻いている。それに、身長はセシリア並に成長したのだから…

ラウラが間違えたのは鈴音の愛娘の織斑姉妹の妹の千秋なのだ。

若い頃の鈴音に似ているのは親子だからに過ぎない。

だが、ラウラは自分の娘の前で過ちを犯す事になる。

「お互い、歳なんだからコスプレを…」

千秋は自分の制服が母親がかつて着ていた制服なのを知っていた。元は母親のだが動き易さを重視した制服には愛着もある。だが、自分はまだ6歳なのに母親と同年（オバサン扱い）の扱いにされた事に流石にキレた。

食べかけのアイスクリームを上空に投げ、地面を蹴りラウラに向けて一気に加速しながら姿を消す。

「誰がオバサンよ!! 私はまだ6歳よ!!」

「グツハア!？」

消えたかと思うと母親譲りの回し蹴りをラウラに決め、上空に投げたアイスクリームを再びキャッチしていた。

誰もが観たら、アクションスター顔負けのアクションだっただろう。

蹴られたラウラ自身は吹っ飛んだが、娘のレナスは咄嗟に手を離してバックステップで避けていたから無事だが、母親はアイスクリーム屋のゴミ箱へと突っ込んだのだった。

千秋はアルバムの写真を両親には秘密にして見てたからラウラの事は知っていた。

その、ラウラ本人から母親と勘違いされた挙げ句、オバサン扱いされたのだからキレて当然だろう。

まだ、麗しき6歳なのだから…

一応、千秋はIS学園の生徒会副会長（生徒会長は姉の十夏）なのだから…

伸びている母親（ラウラ）をオバサン扱いされた事に軽蔑な目で見つめる少女にレナスは何故か（母親に間違った文化を教える行くクラリッサとそれを信じてしまう母親の粛清）親近感を感じ得ずには居られなかった。

レナスの一目惚れだったが感情は出せなかった。

「ねえ、貴方がサリナ先輩が言ってたレナスちゃん？」

「そうだが？」

だが、レナスは母親が一撃で屠られた事に驚愕しながらも千秋に惚れつつも警戒していた。レナスは知らないだろうが、織斑姉妹は母親に中国拳法を習い、更にISの操縦技術は初代ブリュンヒルデの愛弟子でもあるのだ。近接格闘なら生徒では学園最強なのは当然だが姉には勝てない。姉の専用機であるアテナの単一仕様『イージスの盾』の拘束攻撃の前では赤子も同然なのだから……

「可愛い!？」



「ふっえっ!？」

千秋が可愛いと叫ぶと一瞬で消えレナスは抱き付かれている事に気付く。レナスは同じ年のはずの千秋に成すがままに愛でられ、嬉しさ半分恥ずかしさ半分で涙目だった。

レナスを愛でること、暫くして千秋は二人を自宅に案内する事になった。ラウラさんの目的には反対だが、パパとママのお客さんである事は変わらない。

途中、自宅付近の裏路地から自分の担任の悲鳴が聞こえたが聞かなかった事にした。どうせ、雨宮先生（スクール）が礼子先生（オータム）に折檻中だと思おうし礼子先生の自業自得だと思ったからだ。

ラウラ親子を連れ、自宅に到着。

「ただいまあ!!」

と勢い良く入る。

パパとママは予約の宴会の準備中だった。

お姉ちゃんは食器洗いをしたりして手伝っていた。

ラウラさんはパパを見付けて叫ぶ。

「一夏!!」

「ラウラか!? 久しぶりだな!!」

「ラウラ、久しぶりね!!」

「息災だったか、鈴」

だが、パパとママはラウラさんの愛娘を見ると様子がおかしかった。

「なあ、ラウラ?」

雰囲気が変わる。パパ。

何時もより、怖い……

ラウラさんも雰囲気を感じたのか咄嗟に構える。

「レナスちゃんに何食わせてやがる? 明らかに痩せ過ぎで肌の色も悪い。」

鈴も見てみる。

歳相応なら納得できるが……

ママもレナスちゃんの肌を観察したり頭皮の毛並を見て状態を理  
解して顔を顰める。

ラウラさんはレナスちゃんの事情を知っているのか跋が悪いよう  
な表情をしている。

「答えねえか!!馬鹿野郎!!」

パパの行き成りの雷。

ビクツんとラウラさんが背を飛ばし、レナスちゃんは何故、母親が  
怒られているのかが判らず涙目で泣きそうな表情だった。

ラウラさんはパパ達と久しぶりの再会だったが、行き成り娘の事に  
叱られた事に理解して慌てて鞆から大量のサプリメントを取り出し  
た。レナスちゃんは「あつ、隠された奴!!」と叫ぶが、更にパパとマ  
マの怒りと言う名の火に油を注ぐ事になった事に気付かなかった。

青筋を完全に浮かべたパパとママ。

濃密な殺気。

これは一番ヤバイ奴だ……

私は、姉の十夏お姉ちゃんの所にレナスちゃんの手を引つ張って走  
り厨房にいるお姉ちゃんへ緊急避難。お姉ちゃんもパパとママの状  
態を素早く理解したのかイージスの盾を部分展開していた。盾の内  
側に入り三人共身を屈めた瞬間。

パパとママの特大のカミナリが落ちたのだ。

「卒業する時にシャルや俺達が食事だけは気を付けろよなって言っ  
たよな?なあ、何で娘さんがああ何だ?」

「それは……」

「テメーはレナスの母親だろがあ!!この、大馬鹿野郎  
があああああ!!」

ガツシヤアアアアン

私が見た光景

パパとママからのダブルパンチを貰い、店の扉を粉々に粉碎しなが  
ら吹き飛んで行き、店の反対側のブロック塀に叩き付けられたラウラ  
さんはブロック塀にメリ込み気絶。

ドツサアと路面に崩れる様に倒れ、ブロック塀もボロボロに崩れた

のだった。

路上に居た人達はラウラさんの惨状を見ながら普段とは違う店主と奥さんの荒れように驚き、パパは私達の所に歩いて来るとレナスちゃんに「食事療法するから暫く家で暮らせ」と言い、レナスちゃんは母親のラウラさんが一撃粉碎されたショックと恐怖で首を縦に振るしか無かった。

## ラウラと中華粥 中編

ママを殴り飛ばしたあの人は無言のまま厨房の奥にある部屋へと籠もってしまった。

ただ、言えるのは持って行った食材が大量の内蔵ばかりだった事は言える。

でも、大好きなママにした事だけは許せず、千秋ちゃんをママの仇として睨むしか無かった。

だって、私にはママを助けられる様に早く大きくなってママの様に強く成りたかったから…

私がそう決意したのはパパが戦死した時だった。

パパはママが現役選手時代にママを唯一、ドイツ国内で撃墜判定を取ったドイツ空軍所属EUアフリカ方面航空隊のエースパイロットだった。そんなパパはママを模擬戦で撃墜した際にママのハートまで一緒に撃墜して選手を引退して黒兎隊に戻る際に結婚を申し込んだ。

そして、パパはママとの賭けに勝って二人は結ばれた。

ママが准将になった時に私を出産際に北欧神話の戦乙女の姉妹の名前であるレナスと名付けてくれた。

そんな私もパパとママに挟まれて幸せ一杯だった。

そんな幸せは長くは無かった。

私が3歳になり二人はファントムタスクの残党狩りで空軍とママの特殊部隊合同作戦だったが、パパの専用戦闘機のユーロファイター Mk-VIIが激しい空戦末撃墜され戦死した。

パパの呆気ない最後だった。

落とされたパパは敵ISのライフルからのレーザーでコクピットを貫かれて即死だった。

パパは一瞬で蒸発してしまっただから遺体すらない。

その日からママはママで大泣きしながらやけ酒や残党軍に阻まれ支援に来なかつた陸軍所属のIS乗り相手に喧嘩などして荒れに荒れた。

私はクロエ叔母さんに預けられていたから葬儀までパパが亡くなったのは知らなかった。

私も葬儀で初めて知り、帰って来ないパパに泣き狂った。

だけど、ママは強かった。

二度と悲しい想いをしたく無かったから、お酒も喧嘩も辞めて中將まで上り詰めて、今は軍政改革を行っている。

だから、私もママやパパの様に強く在りたかったから泣くのを辞めた。

作り笑顔だけど、今は振り撒こう。

五歳の時に5世代型ISの新型機のヴァルキリーシリーズの適正があるとの事でママの猛反対を押し切りトリアルに参加した。私を含めた八人がトリアルに参加したが新型機を手足のように扱えたのは最年少の私だけだった。

ヴァルキリーは手足の様に扱えるだけでは駄目だった。

装備された片手直剣である魔剣グラムを振るうためには強い筋力がある。

素早い動きに耐えられる強い身体いる。

普通の食事だけでは足りない。

だから、身体や筋力を強くする為にサプリメントに手を出した。ママにも咎められたがひたすら無視した。

栄養不足で体が痩せ細って行ったのは判っていた。

サプリメントが足りないんだと思って更に大量摂取した。

大量摂取したらママの手料理がお腹が一杯で食べられなかった。でも、早く強くなりたいが一心でサプリメントが辞められなかった。

そんな時、クラリツサ大佐からママに報告が来た。

ママの探していた同級生が見つかったと。

そして、私のサプリメントも報告と同じくして部屋から消えた。

犯人はママだと判り、文句を言いに行ったら日本まで強制連行されたのだ。

そして、ママは千秋ちゃんの両親に怒られ殴り飛ばされたのだ。

何で？

ママは悪くないのに  
どうして？

私は何故、ママが怒られ殴り飛ばされたか理解出来ないまま立ち尽くした。だけど、ママが殴られた怒りだけを残して…

ママはレナスちゃんを宥める様に優しく語りかけた。

「レナスちゃん、ママを殴った事は謝る。でも、ラウラは母親として私達に怒られたのわかる？」

「判らない!!ママは悪い事してない!!」

レナスちゃんに叫ばれるとママは完全にキレたのか再び額に青筋を浮かべ、ラウラさんが取り出した大量のサプリメントをレナスちゃんに見せ着ける。

「じゃあ、これは何よ？」

レナスちゃんは跋が悪かったのか小声で答えた。

「ママの様に大きくなって早く強く成りたかった。…だから、ご飯の代わりに飲んでた…」

気持ちは解りたくもない。

だけど、更に追い打ちを仕掛けた。

バアアアアンと机を強く叩き、ママが叫ぶ。

「何が、全く悪くないわよ!!」

全然、悪いじゃない!!

あんたねえ、サプリメントだけで大丈夫だって思ってるんじゃないわよ!!

こんなの飲むんだったら、しっかりご飯を食べなさいよ!!

あんたは、危うく栄養失調に成りかけて身体が危険だったの判んな

かったの!!

その事でラウラが貴女を守る為に怒られ殴られたか判ってるの!!  
母親として貴方の代わりに叱られたのよ!!

どうしようもない貴女の為に!!

さあ、何か答えなさいよ!!」

ここまで言われてしまったレナスちゃんはと言うと…

結論から言えば、ママの夜叉モードに完全に大泣きだった。

ラウラさんに謝るように叫びながら泣いていた。

「うっ、ウエエエエェン!? ママ、ごべなんなざい!!」

レナスちゃんに完全に言い切ったのか、ママは十夏お姉ちゃんを呼んだ。

「十夏、悪いけどそんなゴミは全部燃やしなさい!!」

ママが私達に渡して来たのは大量のサプリメントだった。段ボールの数にして約百二十箱。

「お姉ちゃん…これ、完全に密輸だよね?」

「だよね…」

と姉妹でラウラさんがレナスちゃんから取り上げたサプリメントの量とサプリメントを大量消費してた事実レナスちゃんの事に呆れつつ、お姉ちゃんはアテナの装備である槍で燃やし尽くしたのだ。

アレから目覚めた私は娘の為に嫁と鈴に汚れ役を頼んでしまった事に後悔していた。力を求め、嫁を憎んだあの頃の様子…

「痛たた…二人して本気で殴るなんてな…」

殴られた右頬と下顎にかなりの痛みを感じながら鈴の部屋のベッドから起き上がる。

こんな所をもし、最愛の夫に今の姿を見られたら、嫁と同じくカミナリが落ちただろうな。

正直言えば、嫁と鈴音の再会は今日が初めてでない。

3年前に私の夫の葬儀の時にドイツで再会している。その時、完全に憔悴していた私を暫く世話をしてくれたのを懐かしく思う。

だから、少しだけ昔話をしよう。

私とハンスの出会いはまだ、第三回大会が終わった後で空軍からの救援要請からアフリカへ向った時だった。

ドイツ空軍の一人のパイロットが私に喧嘩を吹っかけて来たのがハンスとの出会いだった。

ハンスは次世代型戦闘機のユーロファイター Mk-Ⅶ（最終生産モデル）の専属パイロットでアフリカ方面なら負けなしのエースで撃墜数なら優に三百機を超える。

しかし、そんな彼が小娘である私に子供が隊長なのかと喧嘩を売ったのだ。馬鹿にされた事に逆上した私は模擬戦を申し込んだが、攻撃は全て躲された挙げ句に飛行技術的に難し過ぎて廃れた逆落としからの急降下爆撃で嫁以外に撃墜されるとは全く予想出来なかった。

私は嫁以外に初めて、彼に惚れてしまった。

だけど、猛アピールして来たのは彼で結婚を申し込まれた時は嬉しくて泣いてしまったのはレナスには秘密だ。

結婚後は幸せで溺れそうになった。

仕事も上手く行き過ぎて怖くなった。

結果的に上層部に認められ、私は二階級特進で准将に昇格して愛娘のレナスにも恵まれた。夫も撃墜数更新で黒十字勲章を貰い大佐に昇格だった。

しかし、幸せは長くは無かった。

空軍と私の部隊の合同作戦が決行されファントムタスクの残党狩りを行なった。

敢えて言えば、待ち伏せからの空軍の惨敗。

夫も撃墜され戦死。

陸軍が残党の飛行場を襲撃する計画が進軍中に阻まれ失敗。迎撃の為に夫の部隊をI S部隊で待ち伏せして全滅させたのだ。

私は夫が殺された事に逆上して単機で襲撃して撃滅させたが、クラリッサ大佐が止めてくれなければ大破したレーゲンで追撃したまま失敗して夫の下に行っていただろう。

あの時のクラリッサのビンは身も心も痛かった。



娘を置いて逝くのかと：

クラリツサに叫ばれた時は流石に辛かった。

夫の葬儀が終わった後は私生活は荒れに荒れた。

特に娘が泣き狂った時は辛かった。

何もしてやれない私自身に：

抱いて慰めるしか出来ない私に：

それでも、強くあろうとした私のせいで娘が狂ったのは自覚していた。

鈴と相談しながらレナスをどうにか護ろうとした。

だけど、第5世代型ISのトライアルを娘が受けてから更に悪くなった。

私の手料理すら食べてくれなくなった。

私宛にサプリメント会社から来る請求書。

痩せ細る愛娘。

だから、嫁や鈴に相談したのだ。

あの頃のように立ち直らせてくれた様に：

だから、二人の返答には涙が止まらなかった。

「汚れ役は任せろ」

そして、私はクラリツサを使い嫁の居場所を捜させた。鈴の娘が学園に居るクラリツサの娘と接触する様に仕向けて：

情報が来るなり、レナスの部屋から全てのサプリメントを没収して拡張領域に収納。娘が怒鳴り込んで来たら作戦開始の合図で日本へ

向うと：

そして、娘を更生させるべく嫁と鈴に預ける事が出来た。

どうか、レナスが更生しますよう

お願いします。

レナスはハナスとの大事な宝物だから：



## ラウラと中華粥 後編

あの人が奥の部屋に籠もってから約二日がたった。その間の食事だけど味がとてもじゃないが地獄だった。

「うっ、げえええ苦い…」

千秋ちゃんのママが作る漢方薬を使ったとても苦い薬膳粥を食べさせられている。

何でも、私の内臓はサプリメントの過剰摂取が原因でまともに食事が取れる状況では無いらしい。

そう、ピンク色の髪をした愉快的叔母さんに無理矢理カプセルに投げ込まれたと思ったら身体検査を行なった。

私はドラム式洗濯機の衣類ではない!!

と内心突っ込みを入れる間もなく完了。

結果は当然ながら栄養失調と胃潰瘍の一步寸前まで荒れていて、他の臓器も一部が臓器不全に成りかけてたらしい。

それを聞いたママには抱き着かれ大泣きしてしまった。

本当に馬鹿な事をしたと反省中。

そして、あの大量のサプリメントは大量の箱ごと文字通り十夏ちゃんの手によって滅却処分したらしい。

更に、あのピンク色の叔母さんからのナノマシン治療に加えて千秋ちゃんのママによる漢方薬膳粥を加えた内臓の治療を二、三日するらしい

ここで暮すに至るに、日中は双子姉妹は学園だから居ない。

少しは動いた方が良くからと店の手伝いをまかされたが、これは無いだろと思ってしまう。

私とママの姿を見て、ニコニコ顔の千秋ちゃんのママ。

私とママはこんな姿に顔を真っ赤にしながら全身をモジモジするしかない。

今の気持ちは親子揃って眩いた。

「ああ、もうお嫁さんに行けない…」

「別に良いじゃない。普段はアタシはそれを着て仕事をしてるのよ？ラウラはスタイルが良いんだから似合ってるし、レナスちゃんは可愛いから文句無しね」

「でもな、スリット入りのチャイナドレスは無いだろ!!」  
とママが猛抗議する。

「仕方ないでしょ!!」

一夏は奥に籠もって出て来ないんだから、厨房はアタシが切り盛りするしかないの!!

「判った？」

とバツサリと逃げ道を切られ諦めるしか無かった。

諦めて注文を取ったり料理を運んだ。

しかし、繁盛店だけに忙しい。

千秋ちゃんのパパは、一人で鍋を振るっついてお客さんを待たせずに注文を捌いていく。

だが、お客さんを見ると安心してゐるのは何故だろうか？

その答えが判らないまま、午後三時になり昼間の部は終了。

そして、ママと私が安心した理由。

あの人が居ないと夜の部である居酒屋はやらないらしい。

理由は看板メニューである焼き鳥や刺し身の仕込みだけは千秋ちゃんのママでもやらせて貰えないらしい。

お店の入口には千秋ちゃんのパパ自ら『本日は終了』と掲げられていて、私とママのやる事は店内掃除して完了だった。

そして、翌日にはあの人が居て厨房で土鍋で何かを煮ていた。

私はあのカプセルに入って再び検査したら内臓の荒れは収まったらしい。

二階にある織斑家のリビングに私とママに加えて、あの人を除いた家の住人達が座っている。

あの人が土鍋に乗せたお盆を抱えて一階の厨房から上がって来て、そのお盆を私の前に置く。

ぽわあんと湯気から登る、美味しそうな匂いに鼻腔を刺激する。

グウウウ

「ハアウ／＼／＼」

その匂いが私のお腹から音を立てた。

久しぶりに聴くその音に顔を真っ赤にするには時間は要らなかった。

その人が土鍋の蓋を空けた。

透明なスープにお米が柔らかくなるまで煮込んだお粥だった。

ママは

「こんな手抜き料理を…」

と言い切る前に千秋ちゃんママにお玉で物理的に黙らされ、正座をさせられていた。無論、こんなに良い匂いがするのだから手抜きな訳がない。

「ラウラフ？」

これはね、一夏が内臓から煮出して三日三晩大量に出る灰汁を丁寧に取り続けて澄んだ出汁よ。

丁寧に作り上げた出汁からお米を丁寧に煮込んで作ったお粥よ。

決して、手抜き料理じゃないわよ。

アタシに作れって言われても絶対無理だからね」

「ああ、久しぶりに三徹したわ」

「一夏お疲れ様。

約二日もお店をアタシに任せただから、お礼はベッドでね♪♪そろそろ、3人目欲しいしね♪♪」

「マジか!?!」

「うん、期待するね♪♪」

しかし、奥さんからお礼の内容を聞いたあの人は顔を真っ青にして震えていた。

折角、格好いいなと思ったのに台無しである。

それよりも、目の前のお粥だった。

まさか、三日間も寝ないで灰汁を取り続けていたの？

私の為に？

どうして？

「レナスちゃん、冷めない内にどうぞ」とお椀にお粥を盛り、私に手渡す。

レンジで掬い、フーフーしながら一口食べる。

「!?」

ああ、美味しい。

体中に漲る力

これは…

生命なの？

そうか、体中に漲るのは生命の力。

サプリメントでは感じ無かった、溢れて来る生命の力。

気付けば、私はお椀ではなく手にグローブをして鍋を掴んで握った

レンジで食べる様にお粥を食べていた。

熱かったけど、身体が欲していた物がその鍋の中に在ると本能が騒

ぐから貪り、ただ食べる。

絶対に分けたりするものか!!

これは、私の物だ!!

気付けば、鍋は空っぽだった。

頭上に暖かい感触。

「満足したかい？」

「うん…美味しかった…／＼／＼」

あの人いや、一夏さんに撫でられていた。

はうろう

恥ずかしい…

どうしたのだろ？

このモヤモヤする気持ち。

そうか、これは私の初恋なの？

決めた。

「ママ!!」

「レナスどうした？」

多分、クラリツサ大佐は死ぬだろうが関係ない。

お願いだから一度死んで来て!!

「私、一夏さんのお嫁さんになる!!だって、親しい人が男性ならお嫁さんになるってクラリツサさんが…」

言った瞬間

「「「はあアアアア!?」」」

「良いよね?一夏さん♪♪」

「待て!!一夏は私の嫁だ!!たえ娘でも譲らんぞ!!」

「ちよつと待ちなさいよ!!親子揃って、アタシの夫を取らないでよ!!」

「十夏お姉ちゃん、チャンスだよね?」

「そうね。今こそ、下剋上のチャンスよ!!」

最早、カオスである。

一夏は学生時代の事を思い出しながら頭を抱え、一目散にリビングから逃げ出したが、それを追うレナスにラウラ。

二人をぶつ飛ばそうと黒椿を部分展開して追う最愛の妻である鈴音。

下剋上のチャンスだと各々の武器を部分展開して自分の母親に立ち向かおうとする双子姉妹。

これが何時もの日常である。

「そんな訳あるかああああ!!」

と締め括ろうとしたが、飛んできたお玉に直撃して路上に気絶する作者だった。

閑話　私は先生です!! B Y テイナ・ハミルトン

フロントムタスクの事件から出身国であるアメリカはテロ組織を抱えていた責任を取らされコアは個人所有であるシバリオゴスペルを残し、新しく生まれ変わった I S 委員会によって没収となり I S コアを全て失った。

そして、アメリカは世界大会への出場資格すらも剥奪されたのだ。しわ寄せは I S 学園に居たアメリカからの学生にも及び、自主退学するか、他国へ亡命を果たさなければ成らなかった。

しかし、私は母国で代表候補生の資格を失ったが、キャノンボール・ファーストで好タイムを残していた事からテンペスター Mk-III のトライアルに受かり、そのままイタリアに亡命して代表候補生の資格を与えられた。

その時のルームメイトだった鈴ちゃんと一緒に喜んでくれた事は忘れない。

同じ境地だった唯一の専用機持ちだったナターシャさんもアメリカ政府に命の危険を感じて学園の教師として日本へ専用機と一緒に亡命を果たした。

私は卒業後は血の滲む努力で国家代表まで上り詰め、政府の意向でキャノンボール・ファーストではなく第三回の世界大会の選手として出場させられるが、結果を言えば初戦から悪い意味での大会史上初やギネス記録を残して一回戦負けをしまった。

相手はブリュンヒルデである織斑千冬ですら成し得なかった二連覇を果たした弟であり同級生だった織斑一夏だった。

普通に在り得ない敗北の形だった。今でもお玉を見ると震えてしまうし、呆気なく敗北した自分への怒りだけである。

今でもあの光景は忘れない。

試合開始のブザーから電光石火の様に飛来する青白く光り輝く物体。



目の前で来て、その正体がお玉だと気付く頃には回避不可能な距離だった。

そして、高速飛来するお玉が私の顔面に直撃。

顔面に当たったお玉の衝撃で気絶をしながら落下。

地面に衝突してシールドエネルギーがあつという間にゼロになって敗北。

呆気ない敗北。

試合開始して3秒での敗北だった。

私はその敗北から帰国。イタリア国民から怒りを込めた意味で不名誉極まりない痕名を貰った。

『世界最速の敗北者』

本来なら、私の愛機であるテンペスター Mk-IIIと世界最速を名乗る筈だった。

敗北に落ち込む私に更に悪い事が起こる。

まだ、キャノンボールがあるからと思っていたが政府からの強制引退勧告により強制的に引退させられた。

私の選手生命が終わった瞬間だった。

愛機は不名誉極まりない事から破棄にされると言われたが退職金は要らないから愛機を返却してもらい、母校であるIS学園へ日本政府に亡命しながら教師見習いとして再就職したのだった。

学園での仕事は担任の補佐から部活動の顧問まで多彩で新鮮だった。教師として先輩だったナタル先生は三年生の担任を任されている、落ち込んでいた私を同郷の誼で新学園長の更織刀奈さんに話して副担任にしてくれた。

それから数年が経った。

私は教員免許が取れてやっと新任教師だが、新一年生の学年の教師陣の一員になっていた。

学園の新一年生の予定である名簿を覗いたら身体が震えた。

一年三組の担任は巻紙礼子先生で副担任は私だったが巻紙先生の姿を見て驚いたがそれよりも驚く生徒がいたのだ。

その、生徒名簿の名前に身体が震えたのだ。

しかも、二人があの人と同じ苗字だからだ。

その二人は

『織斑十夏』

『織斑千秋』

プロフィールの年齢には6歳とあった。

何でこんな小学生の年齢でも思った。

しかし、一学年の学年主任でベテラン教師である織斑先生は二人の親が元選手としてかなり有名で姉妹に危険が及ばない処置としての強制入学だと手短ながら説明された。

尚、十六歳になるまでは進級を一切認めてはいけないと日本政府の意向付きだった。

しかし、あの双子姉妹は私には持て余す存在で自分の考えが甘かったと今でも後悔していた。

入学するからには必ずテストを受ける。

6歳だから知識は不十分だろうと思っていた。

しかし、蓋を開けて見れば筆記は姉妹揃っての首席が確定する。

まさか、実技試験までも認識不足を痛感する。

実技試験は学年主任の意向で姉の千秋にはナタル先輩が担当し、妹の千夏には巻紙先生が担当する事になった。

結果を言わずともわかるだろ。

ナタル先輩はあのシバリオゴスペルを使ったが、彼女の専用機であるアテナの装備でイージスの楯と言われる実体のある楯を使い、シールドの絵柄にメデューサが現れると先輩は何時の間にか拘束されて動けなくなり槍にタコ殴りにされ敗北。

同じくして、巻紙先生はアラクネで挑んだが、彼女専用機であるアルテミスの単一仕様により植物を操作するとアリーナ全体の地面から生えた木々は彼女の絶対領域化する。ギリシヤ神話の狩猟を司る名前だけに絶対必中の弓を構えられて降伏したのだった。

双子姉妹は合格だったが、教師陣に違う意味での恐怖を植え付けたのだった。

入学式が終わり、アリーナから爆発音が聴こえた。

まさか、襲撃だと思ったたら現生徒会長であり十八代目の更織楯無（本名、更織白百合）と織斑十夏さんとの試合だった。

更織さんは卒業生で現学園長の先代更織楯無（本名、更織刀奈）の長女だった。しかも、アリーナは生徒会の権限で貸し切り状態での試合だった。

結果は織斑十夏の完全勝利だった。

あの、神々しい彼女の専用機の姿を忘れられない。

例えるならアリーナという戦場に舞い降りた、ギリシャ神話では知恵と戦を司るアテナの降臨そのものだった。

彼女が何故、現生徒会長を蹂躪するのか判らない。

単一仕様の焰で作られたペガサスに牽引されるチャリオットに乗り、空を駆け回るかの様に超高速機動で槍で何度も斬り刻まれる恐怖と通過後に焼かれる炎に絶対敗北を心身に絶望を叩き付けられる光景。

最早、試合ではない。

ギリシャ神話の一文を彷彿させる。

女神に刃向かう者には跪く事さえ許されず、抵抗すらも許されずにただ女神（アテナ）によって戦場（アリーナ）を蹂躪される。

蹂躪劇でSEをゼロにされた彼女はその場で恐怖から開放されたショックで地面にへたり込み泣き叫んでいた。

「お母様に言われたって二度と実力調査なんかやらないわよ!!本当に怖かったわよ!!生徒会長なんか辞めてやる!!うわアアアアア!」

泣き叫びながらも握りしめていた母親から譲られた扇子にはアンタが主役ではなく『貴女が生徒会長!!』と達筆な字で書かれていた。

彼女に相当なトラウマを植え付けたらしい。

そして、更織さんから十夏に生徒会長になり彼女が卒業するまでの十二年に渡る最強の生徒会の誕生の瞬間だった。

生徒会長を辞めたはず更織さんは十夏さんに強制連行され、生徒会書紀に任命されたのは別の話。

しかし、普段の二人は全く手の掛からない優秀な生徒で担任の巻紙先生のお気に入りでもあった。

一年一組の担任で学年主任の織斑先生は叔母であるが、鼻屑はせず  
に厳しくしていた。

ただ、五時限目が終わると寮ではなく自宅に帰る。

夕飯に有り着こうと織斑先生と篠ノ之先生は二人に付いて行くの  
が問題だったが警護が理由だったので問題には成らなかつた。

私も鈴ちゃんが作る酢豚や角煮を目的に二人の自宅の料理店には  
良く通っている。今は、元同級生で同僚の篠ノ之箒さんやナタル先輩  
と一緒に通っているが：

私は選手より教師が向いていたと今は言える。

二人がどんな風に成長するのかが楽しみである。

何故なら教師は教え子の成長を楽しみにするものだと思うし、私は  
学園での先生なのだから。

## セシリア親子に温かい支那そばを

ここは日本海。

S。十数機のラファールから攻撃を受けて逃げ回り追われる2機のI

青く美しいISが耐Gスーツに防寒着を身に纏った愛娘をベルトで固定はしてはいるが抱きしめながらレーザーライフルやマシンガンの弾丸をバレルロールを空中に描き躲しながら飛び回るセシリアと大親友でタッグパートナーはフアントムタスクのMだった頃の愛機、サイレント・ゼフィルスを駆り精密射撃や偏向射撃で確実に屠り十数機のラファールと奮戦するマドカだった。

セシリアは娘だけは絶対に意地でも当てはさせまいと、今は娘を抱えていはるがために唯一使える武器でBT兵器である青い雫を拡張領域の予備までも飛ばして応戦しながら逃げる。

マドカも大量のビットとレーザーライフルを乱射してセシリアの日本領空への撤退を援護する。

2機同時に放ち咲き乱れたレーザーの嵐に追手のラファールの数機はスラスターユニットを貫かれてた追手の彼女たちは悲鳴を上げながら黒煙を吐き海へと落下する。

ブルーティーアズのGPSでは、ほんの数キロで日本領空に入るのだとセシリアは安堵するがイギリス貴族がセシリアと娘のオーロラを亡き者にすべく放った追手のラファールはまだまだいる。

正直に言えば、自機のエネルギーは心許ないのは判っているが娘を安心させる為にプライベートチャンネルでマドカに話し掛ける。

「あと少して、日本の領空ですわ…」

「うん、早くお兄ちゃんに会いたいし、お兄ちゃんなら絶対に助けてくるれるから頑張ろう、セシリア!」

娘を安心させるのは流石はオーロラの母親で元イギリス国家代表のセシリア・オルコットと相棒で大親友である元日本国家代表で一夏さんの妹の織斑マドカだった。

二人はタッグトーナメントの決勝では敗北はしたが唯一、最強夫妻をコンビネーションだけでギリギリまで追い詰めた名選手だった。

話を少し戻すと、彼女と娘が逃げ回り逃亡生活をする理由は孤児院を保護する為の法律を貴族院の一員として上げたが孤児院の子供達を食い物にして来た貴族との政争に負けたに他ならない。

しかし、普通に負けただけならまだ良いだろう。

抱いている愛娘が問題だった。

セシリアは結婚もしていない。

本人には失礼だが、結果論で言えば彼女は忙し過ぎて結婚相手を探せなかったのだ。

理由は国家代表や孤児院の救済活動に加えて念願だったオルコツト家の再興に貴族として女王陛下が主催するお茶会への参加だった。跡継ぎが居なければオルコツト家は断絶である。

何故、娘が居るのだろうか？

答えはオーロラは今セシリアの養子として迎えた娘だが、赤ん坊だった頃にセシリアが保護して育てた娘だったのだ。

それは、現役選手だった時に第四回タッグトーナメントの結果を両親に報告しようとお墓参りに来た際に、両親のお墓の側に籠に入れられ捨てられていた赤ん坊だった。

籠の中には赤子の他に入っていた手紙には産んだであろう母親の手紙には『どうか、オーロラを育てて下さい』と書かれ、彼女は赤ん坊を保護したのだ。

セシリアは赤ん坊だったオーロラを初めて見た時、小さい頃の自分に瓜二つだった事に気付いた。

いや、気付いてしまった。

それは、まるで自分が産んだ娘の様に愛しく思ったのだ。両親の墓前だが、気付けばこう呟いた。

いや、叫んでいた。

「なんて、愛しいのでしょうか。この子はきつとお母様とお父様からの贈り物だわ。私、この子を幸せに育てて見せわすわ!!」

だから、非常に自分の子供頃に似たオーロラを彼女は両親からの贈り物だと思い、自分の娘として育てる決意をしたのだ。

初めての育児は未経験だった為に非常に大変だったが、セシリアは愛する愛娘をメイドのチェルシーに手伝って貰いながらも、選手としても一人の母親としても努力を忘れずに研鑽を重ねて、オーロラにたっぷりの愛情を注いだのだ。

無論、国家代表として活躍した。

ダックトーナメントでは準優勝までしたのだ。

準優勝の恩賜としてオルコット家の復興を果した後に、イギリスの現女王に最も忠誠を誓う大貴族に上り詰めたのだ。

3年の年月が過ぎ、オーロラが3歳になると貴族としての心構えの教育は勿論、オルコット家の次期当主として英才教育を施しながら育てたのだ。

引退してからはイギリス議会の貴族院の貴族の一つの当主として政治に参入したが、食い物にされていた孤児院への子供達に食料支援や保護する法案をだしたが否決。

しかし、セシリア自身が個人資産から孤児院への援助していたり、友人であるメアリー女王陛下への忠誠心の高さからも判るが女王の一番のお気に入りだった。

これが他貴族から嫉妬されていた事は女王陛下も含めて知らなかったのだ。

政争に負けた後は孤児院を保護する事に良くは思わない貴族から暗殺を警戒した。だが、暗殺で狙われたのは自分自身ではなく、次期当主として頭角を現し始めた八歳になる愛娘を標的にしたのだ。

最初は女王陛下へ貴族令嬢のお披露目会だった。

晩餐会で出されたデザートに麻痺薬を混入されたが味が変だった事から娘が吐き出した事で事なきを得た。

晩餐会だったが肝心な事が抜けていた。それは、犯人たちは女王陛下が主催する晩餐会だと忘れていた事が致命傷だった。

女王陛下はこの毒物混入事件で晩餐会を中断にされた事や女王の前で毒物を混入した事に大激怒し、玉座にある陛下の背丈以上に大き

い愛剣である大剣を抜いた事で騒ぎが拡大する。

陛下の愛剣を抜かせた事に、混入させただろうウエールズ地方の貴族二人がこの先起こるだろう自分達の悲劇を予想。陛下への恐怖心から顔色を変えたことで大剣を突き付けられて陛下自ら尋問。

尋問から貴族二人が自白したが、女王への毒殺未遂として問答無用で二人の貴族と一緒に参加した娘共々、その場で女王陛下が自ら斬り捨てる形での処刑となった大事件だった。

これだけでは無く、今度は貴族の子供達が通う学園だった。

とある貴族の馬鹿息子が娘を養子だと馬鹿にして、徹底的に痛ぶるため娘に決闘を申込み決闘を行なった。

決闘は娘が得意の細剣の技で勝利したが、負けを認めない貴族の馬鹿息子が懐から出したのは毒を塗った短剣で斬りつけようとしたが、止に入った教師に発覚して取り押さえられた。

偶然にも、この光景を学園に視察に来ていた女王陛下が貴族としての決闘を穢した事に激怒。

決闘を申し込んだ貴族の息子は教会に終身幽閉とし、父親はオルコット家へ多額の賠償金を支払いを女王陛下に命じられたが額が莫大で屋敷まで売却する事となった。

この出来事で、私と娘がメアリー女王陛下に護られていた事に気付いてしまった瞬間でもあった。

私は娘を愛していたが為に貴族からの嫌がらせに我慢の限界だったし、周囲の貴族には未婚なのは知られている。

そして、陛下が私達を庇う度に嫌がらせや娘の命を狙われる事が酷くなつて行つた。

だから、余計に貴族から狙われたのだ。

愛娘であり女王陛下のお気に入りの次期当主を消せばオルコット家は貴族としてお家断絶するだろう。

そんな理由でも狙われたのだ。

この事件を機に取った行動は素早かった。

そう、この国から逃げようと決心した瞬間だった。

直ぐにオルコット家の資産を全て売却して逃亡資金を作り上げ、娘



を連れての逃亡生活を始めた。

無論、女王陛下にはイギリスから逃げる事は報告している。しかし、陛下は

「セツシー!! 貴女まで居なくなるのは嫌よ!! 私が女王として権力を使つてまでも貴女を護るから行かないで!!」

「メアリー、いえ女王陛下。申し訳ありませんわ」

友人であるセシリアに私室にも関らずに跪かれた事に驚愕する。だから、一つの勅命を降した。

「セツシー、いえセシリア・オルコツト卿。

私への忠誠、誠に大義だった。

私から一つの勅命です。

貴女の愛娘を死なす事は勿論、貴女自身が死ぬ事は絶対に許さない

!!

だから、絶対に生き延び私と再会する事。

これが、最後の貴女への勅命とします」

「女王陛下、謹んで拜命致しますわ」

セツシーが居なくなるのは嫌だった。

未だに私に跪くセツシーを豊満な胸に埋め抱きしめた。

彼女はタップしながら「苦しい!! 離して!!」と叫ぶが私からの細やかなお仕置き。開放したあとはやり過ぎたのか睨まれたが時間が許す限り二人だけのお茶会を楽しんだのだ。

私室から居なくなり、バツキングラム宮殿から出て行くセツシーの寂しそうな背中を見て悲しくなり、声を上げて泣くだけ泣いたのだ。

そして、セツシーが何時でも帰って来れる様にあの糞共（腐り切った貴族）を粛清すると誓ったのだ。

そして、宮殿から帰り大英博物館へ急ぎ向かい、現役時代に使用していた専用機が展示されていたが返却と愛機と一緒に展示され、イギリスに返却されたかつてのマドカの専用機サイレント・ゼフィルスを奪い国外へを逃亡を始めたのだ。

悲しい事もあった。

古くからの私の専属のメイドだったチエルシーは意地で一緒に付いて来た。スイスに入る直前のホテルの入口で貴族からの追手に娘が狙われ、チエルシーは咄嗟に娘を突き飛ばして庇ったが拳銃に撃たれて亡くなった。

チエルシーが亡くなった事に泣く事も出来ずに娘を抱き、そのままスイスへ逃げ続けた。

スイスに入り、娘には寒い思いをさせたが山脈越えのルートならスイス空軍が監視している理由で安全性が高かった。マドカの専用機であるサイレント・ゼファイルスのステルスモードを使いISでの低空飛行で山脈越えを敢行したのだ。

山脈越えを無事に終わり日本に向けて兔に角飛び、中国ではある人物と再会を再び果たす事になった。

それは、中国に入って成都に着いた時だった。

食事と休息を取るために国営の四川飯店に入ると厨房から出て来たのは修行中のマドカだった

セシリアはマドカから引退後は中国で特級麺天師を取るために修行中だったのを聞いていた。

この再会が最初の幸運だった。

四川省の成都で再会を果たしたマドカに暫く愛娘を休ませる為に保護を求めてみたら二つ返事で許してくれた。

マドカの住むアパートへ案内されたが三人で暮らすには狭かった。だけど、娘を抱きながら安心して一緒に眠れたのは嬉しかった。

出会った当初、オーロラはマドカの鋭い目つきに怖がって居たが直ぐに慣れ、不本意ながら私の作る料理よりマドカの作る料理を気に入ったのは悔しかった。

だけでも、マドカには感謝が絶えない。アパートに案内された初日の夕飯にマドカから出された支那そばには身も心も暖めてくれた。

今でも忘れない。

あの鶏ガラスープをベースにした黄金色のスープにコシがあり小麦の甘さや香りが食欲を刺激する。

寂しいけども、一枚だけ乗るチャーシューは豚の特有の旨味がスープと絡んで更に引き立っていた。

「お母様、非常に美味しいです」

逃亡中だが、束の間の休息。マドカの料理で娘の無邪気な笑顔とこの一言に私がどれだけ救われただろうか。

「そっ、そうですわね」

だから、娘の前では泣かないと決めたのに涙が止まらない。

安堵感からくる安心から辛かった日々を思い出すと私には辛かったのだ。だから、泣いてしまったのだろ。

泣いてしまった私に娘は心配して来る。

「お母様、何処か具合が？」

止めどなく流れる涙。

折角のマドカの料理がしよっぱくなくなってしまおう。

だから、オーロラを抱きしめてしまった。

「違うのよ…うつつぐう…違うの…」

娘と居られる細やかな幸せ。

娘の体から感じる温もりを感じながら声を堪え泣いたのだ。

マドカには少し怒られたが、資格を取り次第日本へ帰るらしい。

「えっ？マドカは飛行機で？」

「今は専用機が無いからね」

マドカは引退後は専用機を篠ノ之博士に返却している。そして、私を持つて来たサイレント・ゼフィルスはファントム・タスク時代の専用機だったが学生時代に一夏さんに捕まった後にイギリスに学園を通じて返却。

返却後のサイレント・ゼフィルスはイギリスの管理下だった。だが、もしもの為に管理場所だけは把握していた。あの時、私の専用機ブルーティーアーズも返却後は2機揃って大英博物館に展示されていたとは思わなかった。女王陛下の勅命書を使いティーアーズを返して貰い、手続き中の空きを狙ってサイレント・ゼフィルスを待機状態にして回収したのだ。もし、山脈越えならステルスモードがあるゼフィルスを使う気だったからだ。

「マドカ、専用機なら御座いますわよ」

「これは、サイレント・ゼフィルス!？」

「どうして、セシリア!!」

「ゼフィルスはイギリスに返却された筈なのに!？」

「無論、私の専用機共々返して頂きましたわ。これで、マドカも羽ばたけるのではなくて?」

「これ、ゼフィルスだけは返却じゃなくて強奪だよね?」

「こほん…ごう…返却ですわ!!」

「もう、強奪って言うてるよね…」

マドカに呆れられたが待機状態のサイレント・ゼフィルスを手渡した。マドカは直ぐに使える様にパーソナルデータを自分のデータに書き換えるために今まで保管していたフロントム・タスク時代のUSBメモリーをコアに接続して数分で書き換えたのだ。

ただ、マドカは帰って来たサイレント・ゼフィルスを見て嬉しそうな顔だった事は黙っておこう。

現在に至る。

私もマドカも既にエネルギーが底を尽き、飛ぶだけでも危うい状況だった。

「ピンチですわ…」

「全く…」

追手だったラファールは反撃出来ない私達を取り囲むが、凄まじいスピードで来る白い機体と真っ赤な機体に戦と愛の女神と狩猟の女神を思わせる機体が焰で作り上げた古代ギリシャの戦車に乗り、その2機を入れた4機が私達の前に現れたのだ。

白と赤の2つのISだけは見覚えが有った。

あの決勝戦以来の最強夫妻の専用機で私とマドカの二人でも勝てなかった存在。

今では伝説のIS。

その2機が現れたのだ

白い侍を思わせる高機動型マルチタイプの織斑一夏の専用機『白

椿』と番である重装甲高機動型近接格闘タイプの真つ赤な機体は織斑鈴音の専用機『黒椿』だった。

そして、マドカは残り2機の機体を知っていた。

今ではIS学園の教師となったが、天災籐ノ之束博士が開発した六世代型ISの2機だ。

それだけなら良いだろう。

双子姉妹が駆る2機は、流星にリミッターはしているだろうが、最も凶悪な性能のためにコア自身が使い手すらも選び、北欧神話やギリシャ神話の女神をテーマにした女神シリーズとして全8機が完成してはいるが2機以外は危険極まりない事から束博士が封印処理した機体でもあるのだ。

開発した博士には呆れて何も言えないが、全ての機体の性能の内容を知る織斑家（双子姉妹を除いた）としてはコアが双子姉妹を選んだのがコアの性格が穏健なアテナ（戦闘狂な一面がある）とアルテミス（大好きな千秋に命の危険がなければ大人しい）で良かったと今では思う。

もし、フレイとフレイヤの双子のコアだったら学園は吹き飛んだだろう。（だが、双子のコアは意地でも双子姉妹を選ぼうとしたらしいが博士が慌てて電子ロックをして防いだらしい）

まあ、私とセシリアはエネルギーが無い為に戦闘自体が見学状態だった。

チャリオットを駆る十夏のアテナは千秋のアルテミスの『アルテミスの矢』で援護されながら武田の騎馬隊顔負けのチャリオットでの突撃でラファールを文字通りに蹂躪。

お兄ちゃんはと言うと、見ていたセシリアが叫んでいた。

「いつ、一夏さん!! すつ、鈴さんそれはいけませんわ!!」

龍巻を纏う黒椿の鈴お姉ちゃんに、それを撃ち出す為に掌底を構える白椿のお兄ちゃん。

「鈴、行くぞ!!」

「ええ、一夏行くわよ!!」

「ですから、作品的に駄目ですわよ!!」  
とセシリアが突っ込み叫ぶが既に遅い。

「超級」

「霸王」

「『電影弾!!』」

最強夫婦の必殺『超級霸王電影弾』が完成し、お兄ちゃんに撃ち出された鈴お姉ちゃんは射線上にいた全てのラファールを龍巻の渦に巻き込み全て撃墜していたのだから…

一夏さん達に助けられ救助された私達は一夏が営む料理店に案内され連れて行かれた。店内はあの四川飯店の様に綺麗な店内だった。そこでは懐かしい人とも再会した。

「なっ、何でラウラさんが居ますの!?!」

「うん? 娘と一緒にだが? そう言えば、嫁にお客が来てるぞ」

一夏さんにお客様ですか?

誰だろうと付いて行くと、一番奥のテーブルには何故か見覚えがある大剣が壁に立て掛けられており椅子に座る金髪でロングヘアの女性。

そして、聞き覚えがある透き通り威厳を感じる声の主。

「セツシー、遅かったわね。待つのもなんだから、先にお食事を頂いていたわ。ほら、セツシーもオーロラちゃんも早く座りなさい」

「女王陛下!?!」

こうして、テーブルに誘う御方はメアリー女王陛下本人だった。ただ、周りは女王陛下だと知り慌てたようだがメアリーは笑っていたのだ。

「あら、今は女王じゃないわよ。貴族の粛清をやり過ぎて、お母様である先代のエリザベス三世に王位を没収されましたわ」

「メアリー、またやり過ぎたの?」

「エッへへ…テへペロ」

ゴツッ

「はっ!?!」

友人時代の二人に戻っていたのか、メアリーに拳骨を落とす。メアリーは昔からそうだった。何でもやり過ぎているのだから…

二人のやり取りを尻目に私と娘のオーロラには熱々の支那そばが出ていた。

「全く、一夏さんはやはり兄妹ですわね」

「そうか？」

そう、兄妹揃って出したのが支那そばだった。

でも、友人に愛娘と食べる食事は優雅な時間だった。何時の間にか、お店は私達と一夏さんの家族で貸し切り状態だったが、メアリーは一夏さんを観てニヤ付いていた。

「あの一夏さんがセツシーの初恋の相手ね…」

「ブツブツ!？」

思わず、飲んでいた烏龍茶を吹き出す。

「なっ、なな何を言ってますの!？」

「うむ？そうだったのかセシリア？」

と今度はラウラも参入する始末。

「だってさ、私もセツシーの様にIS適正があればもしかしたら一夏さんに恋をしていたのかなって?？」

「メアリー殿下でも嫁は渡さん!!」

「ラウラ、私だって一夏さんを諦めていませんわ!!」

「あら、私も参戦しましょうかしら？」

美人な嫁さんが居るけど、料理が美味しくて世界最強のIS乗りだもの。

私にしたら最良物件ですわ」

「メアリーでもいけませんわ!!」

メアリーの参戦。

言っでは行けないがメアリーは剣術だけならイギリス国内最強を名乗れる技量はあるし、過去に生身でラファールをあの大剣で斬り刻んでいる。

つまり、強過ぎる為に男が寄り付かないのだ。

「アンタ達ねえ、妻であるアタシが居るのにいい度胸ね!!その喧嘩、

買ったわよ!!」

あつ、これは死んだと思った。

私も危うく忘れ掛けたがあの『夜の大魔神降臨事件』の目撃者だったのを忘れていた。キレた鈴は手に負えない。

つまり、アリーナか何処かで鈴との模擬戦をする運命だと警鐘がなっているのだ。

既にラウラはお店の奥の地下へ向かうエレベーターに蹴り入れられ、私とメアリーも鈴に肩を握られ逃げられない。

鈴さんは満面の笑みで

「さて、殺ろうか?」

「ひっ、ヒイイイイ!?」

と抱き合い怯える私達を引き摺り、地下アリーナへと連行されたのだった。



## 閑話　メアリーの初恋と過去

私、メアリーがセシリアと出会ったのは国立の貴族育成の為の学園だった。

私はロイヤルファミリーでは第三王女で継承権も第三位でお姉様より低かった。

しかし、女尊男卑の世の中では二人いるお兄様はイギリス憲法により継承権があっても王位にはつけない。

だけど、第一王女のお姉様は別だった。

高いIS適正に文武両道に優れ、学園では誰もが羨む高嶺の花だった。

だけど、お姉様はそれだけだった。

宮殿内では豆腐メンタルの弱い女性だったし、記憶に新しい『白騎士事件』が原因で王位を簡単に放棄してしまった。

あの事件でお姉様の婚約者だったイギリス空軍大佐だったチャールズ義兄様が米軍と共同作戦での白騎士を取り逃がしたのだ。

義兄様は今だったら言えるが相手が悪い。しかし、誰かしらが責任を取らなくては成らずトカゲの尻尾切りの様に責任を負わされ降格処分を言い渡れた。

無論、婚約も取り消しだった。

だけど、お姉様は王位継承権を破棄してまで彼に付いて行った。

お姉様は彼を愛して居たから。

彼もお姉様を愛して居たから。

そう、二人は演劇の悲劇の恋人同士の様に駆け落ちしたのだ。

そして、もう一人の第二王女のお姉様は第一回世界大会でブリュンヒルデの織斑千冬に二回も敗北して国家代表が重く感じたのか失踪した。

二人のお姉様を失った失意と壊れていく自分の心、そんな中でも支えてくれたのはセシリアだった。セシリアも両親が亡くなったばかりなのに気丈な振る舞いはイギリス淑女としての鏡だった。

学園での三年間はセシリアのお蔭で無事に卒業出来た。私も王家の一員としても学年で主席をとり、セシリアと共に学園最強として武芸を極めたのだ。

卒業式の後、セシリアと修練所で決闘を申し込んだ。

勿論、お互いの獲物は得意とする得物でだ。

大好きだからセシリアとケジメは付けたかった。

どちらが学園最強かと。

私はかつてフランスとの百年戦争で最強と云われた剣術である王国流剣術にある大剣術を学び、技を全て自分の物にしていた。

勿論、得物は愛剣であり日本では南北朝の時代では斬馬刀と云われた両手直剣で刃渡りは2メートルを越す剣を大剣として打ち直した物だった。

セシリアは射撃術の中でも最も得意とする二丁拳銃術で応戦してくる。

「甘いわよ!!」

と叫び、銃弾を全て斬り捨てる。

流石はクラス一番の突っ込み役。

「銃弾を剣で斬る何て非常識だわ!」

そして、弾切れだった所を剣で首に突き付けて私が勝った。

学園卒業後はセシリアはISの適正とBT兵器の高い適正があった為、候補生として訓練に励んだ。

私は適正が全く無かったが、この剣を更に極めるべく武者修行の旅にイギリスから出たのだ。

彼女があゝの学園に入学した頃に、私はイギリスに戻り次期女王としての教育を受け始めた。

そんな時、側近から報告が来たのだ。

内容は世界初のISの操縦者である織斑一夏がセシリアに勝ったと…

「えっ?」

嘘ですよね？

セツシーが負けただなんて!!」  
シヨックだった。

一緒に研鑽を重ね努力して来た親友が負けた事が信じられなかった。そこで、I S学園から配信された映像を観て変わり果てたセシリアに怒り、再生プレイヤーを拳骨で殴り叩き壊したのだ。

「セツシーのバカアアアア!？」

あれ程、セシリアは嫌っていた女尊男卑に染まっていた。それを打ち碎いてくれた織斑一夏。

彼に興味を抱いた瞬間だった。

それからは配信された映像を観るようになった。

彼を中心に取り巻く彼女達の中にセシリアがいた。

「羨ましいわ」

彼女達は彼を廻り牽制をしていた。

呟いた事で気付きたくない事に気付いた瞬間だった。

「私もあの中に…えっ？

私、今何て？

あっはははは!!

そうなんだ。

そうなんだ。

私は彼をお慕いしてしまったのね」

まさか、セツシーの初恋が彼だと気付くには十分で、私がセシリアと同じ彼に初恋をした事実と彼と一緒に居るセシリアに嫉妬している事に気付いた瞬間だった。

それからは、私も頭の中では彼から離れる事が出来ずに剣術、帝王学などに打ち込み忘れようとしたが無理だった。

セシリアを理由に彼に逢いに行きたいとすら思った。

そんな思いの中、嬉しい事があった。

セシリアが学園祭に招待してくれたのだ。

いち早く彼に逢いたい気持ちを知らずにか、彼女は久しぶりの再会に喜び、私を連れ回して学園祭を楽しませてくれたのだ。

だが、彼と逢えないまま諦める私ではない。

学園の最後の出し物は生徒会主催で、彼が冠る王冠の争奪戦だった。目標はあの王冠を手に入れて彼を私専用の王女の近衛騎士もとい、あの糞ババア（現女王）に羨ましがらるほどの自慢の旦那様にしたかったが、残念な事に親友は彼に軽くあしらわれていた。

「フッフ：私の出番ですわね。セツシーには悪いですが彼は私が頂きますわ」

「えっ!?マジですよ!?ちよつと、メアリー!？」

と呟き、無様にフランスの候補生が絡み合い、私の言葉に驚愕する親友を見ながら、一般人の入場で一気に私の前に居た者達を一刀両断はまず間違いない大剣を振るった風圧で前に居た人達を全員を吹き飛ばして先頭に出る事が出来た。

しかし、何時の間にか彼の姿が消えた。

膝から崩れて落ち込んだが、そんな時にファントムタスクが来て襲撃しているとセシリアから知った。

折角、一夏さんとお話が出来ると期待し、彼を本国に旦那様としてお持ち帰りをと期待したのにと、この私への仕打ちに八つ当たりではあるが連中に激怒もしたが、奴らを回収する為に必ず増援が来るだろうと読んでいた。一応、持参していたドレスアーマーを身に纏い、母親から許されたあの旗印を持ち掲げながら沿岸部へ走ったのだ。

そして後にまで、IS学園が事実を隠さなければならぬ悲劇が起こるとは誰も知らない。

当時、作戦指揮官だった織斑千冬と生徒会会長だった更織楯無ですら、イギリス王室からの来賓のメアリーの行動だけは予想してなかった。

皆さんは『血塗れの白百合の王国旗』を知っているだろうか？

多分、現代の人達は誰も知らないだろう。

この悲劇の前に、この旗印を知って置かねばならない。

白く美しい白百合が描き足されたイギリス王家の旗を血で染めた旗印である。

そして、過去に旗印が掲げられたのは一人だけで、*仏英の百年戦争*の末期に敗北濃厚だったフランスが*圣女ジャンヌ*の活躍により、イギリス軍をフランスから追い出したがフランスの勝利の代償してイギリスは*圣女ジャンヌ*を捕まえて処刑した。しかし、フランスはイギリス本国へ逆襲して上陸。イギリスは敗北寸前だった。

そして、当時の女王だったエリザベス女王が『約束された勝利の聖剣』別名、エクスカリバーを抜き掲げて、上陸して来たフランス軍を排除すべく戦場を先陣で切り込み出陣した時だけである。

だが、先陣を切ったエリザベス女王は勝利と引き換えに討死していた。

この功績以降、イギリス王家では王女または女王のみに許された戦場で掲げる旗印になった。

その中でも、特に武に秀でた女王又は王女でなければ掲げる事を許されず、剣術、武力共にイギリス最強のメアリーは無条件で許されている王女なのだ。

そんな、曰く付きの旗印であり、相手に死にたくなければ降伏をしろと勧告する意味もあるのだ。

そして、海岸沿いのマラソンコースには一人の王女が大剣を肩に担ぎながら仁王立ちし、純白のドレスアーマーを纏って地面に突き刺された槍に血塗れの白百合の王国旗を掲げてる。

イギリスの歴史家なら意味を理解して、その場から一目散で逃げ出すだろう。

それだけの濃密な殺気と覇気を出していた。

後に、元オータムにして現巻紙礼子の取り調べではこう話していた。

『利用した女性権利団体にもし、イギリス人が居たらアレは避けられただろう』と語っている。

調査には元Mの織斑マドカや元スコールの雨宮茜も同じ事を語っていたと記載されている。

沿岸部に侵入出来た女性権利団体が使用していたのはラファールや打鉄の混成による十三機だった。

その女性権利団体は待ち受けていた姫騎士姿のメアリーを観て時代錯誤だと馬鹿だと爆笑する。

あの、旗印の意味も判らないまま

しかし、織斑一夏を殺す話になるとメアリーが豹変したのだ。

「この女は無視して織斑一夏を殺しに行くわよ!!」

「今、何て言いましたか?」

「殺すって言ったんだ!」

「お慕いする彼を…そう…」

「時代錯誤の姿で私達に勝てr」

「ひっ、人殺し!?!ギヤアアア!?!」

打鉄に乗る女性はメアリーを馬鹿にするあまり葵を抜いて襲い掛かる。

しかし、メアリーは絶対防御を無視する斬撃で襲い掛かってきた彼女の首を一瞬で斬り落としたのだ。

絶対防御無視の斬撃に斬り殺されて行く仲間を観て悲鳴を上げ錯乱する権利団体の女性達にそれを一撃で屠りに行くメアリー。

ここからは彼女達の女性権利団体の悲劇だけが木霊したのだ。

メアリーに結局斬殺されのは襲撃した女性権利団体の全員だった。

彼女達は一撃で首を刎ねられ即死だったり、頭から胴が薪のように真っ二つに斬り捨てられた。

時を同じくして作戦室では襲撃で守備する教師たちが居ない筈なのにリーダーから次々とロストしていく沿岸部側の襲撃者達の事に気付いたのは織斑千冬だった。

「嫌な予感がする…山田先生、ここの指揮は任せる!!」

「えっ、えええ!?!」

沿岸部にたどり着き、織斑千冬が見た光景は地獄だった。

織斑千冬が駆けつけた現場には、ISの機体ごと斬殺された女性権利団体の遺体と大剣を片手に返り血を大量に浴びていた王女だった。

「襲撃者を殺したな?」

まさかと思いながら千冬は彼女に質問する。

「ええ、全て殺りましたわ。」

テロリストには死を。

当たり前ではなくて？

「ブリュンヒルデさん？」

こいつは狂っていると思った。

これが本当なら、絶対防御を完全無視した斬撃には恐怖すら感じる。そして、彼女のあの剣は身体的に細身には似合わないが軽々と扱っている時点で私より化け物だろう。

しかし、メアリーが大剣を構えたと思ったら、急に姿がブレると目の前から消えたのだ。

「しっ！！」

「くっ！！」

私は拡張領域から一つの太刀を取出して、彼女から感じる殺気を読み斬撃を受け止めた。しかし受け止る事は出来たが余りに重い斬撃に驚愕する。

いや、受け止めさせられたが正しいだろう。

「フッフ…流石はブリュンヒルデですわ。信じて頂けましたか？」

「信じるしかあるまい。一応、調書を取るから来い!!」

ニコニコ笑いながら千冬に叩き込む重く鋭い斬撃。

束がこの太刀を鍛えてなければ、この太刀は折られて斬られていただろう。

そして、あの旗印は確かイギリス王家の王族の女性で武に秀でた者にしか許された人物だけの筈だ。

こんな化け物と呼んだ人物に心当たりがあり、その人物に王女が取り調べ室に入るのを確認して悪態を吐いていた。

「セシリアめ、とんでも無い小娘を招待して…後で反省文を書かせてやる!!」

一夏さん宅の客間の布団の上では、愛娘のオーロラが可愛い寝顔で寝ている中でセシリアとメアリーが学園祭での出来事を懐かしむ様

に話している。

「懐かしいですわ。メアリーが沿岸部の対処してくれた事は非常に感謝ですわね。私達はマドカさんとスコールの対応で苦戦してましたし」

「でも、ブリュンヒルデに散々絞られたわね。来賓が勝手な事するなってね」

「まあ、そうですね。メアリーも織斑先生の出席簿を喰らいませんでしたか?」

「うん、アレは確かに痛かったわ」  
未だに卒業生でも謎の出席簿だった。

そして、セシリアは昼間のメアリーの一言を気にしていた。

鈴音には地下アリーナで私達全員が折檻を受けてもやはりまだ彼が好きなのだ。

「ところで、メアリー」

「やっぱり、一夏さんをお慕いしてますの?」

「ええ、セツシーがああの学園に入学した頃からお慕いしてたわ。

今は、素敵な奥様も居る。

二人の愛の結晶とも言える可愛い娘も居る。

そして、こんな素晴らしいお店を夫婦二人で幸せに切り盛りしている。

二人に割り込む隙間なんて無いのは判ってるわ。

それは、セツシー貴女もよね?」

「判って居るのでしたら?」

「正直、言いますわ。

セツシー、私は貴方が狡い!!

憧れた彼と彼女達と三年も学園で共にし、研鑽を重ねていつも一緒だった。

私はあの檻のような宮殿からしか彼を見ることが出来なかった!!

だから、狂っていると言われたって構わないわ!!

お慕いする彼の側に居たい!!

たとえ、奥様である鈴音さんの障害に成ろうとも!!」



メアリーが心内を暴露したのだ。  
最早、狂気すら感じる。

私達はやはり、イギリス人で英国面なのだろう。

一夏より、鈴音さんを上手く誘導して、一夫多妻の国に引越せしませればと思ってしまう。

だって、一番は鈴音さんなのだから。

だったら、私達は二番でも三番でも構わない。

二人して黒い笑みを浮かべる。

ガツチリと結ぶ手は共闘の証。

「私達二人なら必ず!!」

私とメアリーは十数年ぶりに共闘する事にしたのだ。

そう、狙うは

「一夏さんよ!!」

と叫ぶが、オーロラが私達が煩くて目を覚ました。

寝起きで、機嫌が最悪なオーロラは私達を睨み

「二人共、うるさい!」

「ギャフン!?!」

蹴られたのだった。

そして、マドカが部屋に起しに来るまで二人して気絶したのだ。

## 定休日の中華料理店とシャルロット

今日は週に一度の定休日だ。

休みな訳だから、妻とデートする事だつてある。

だが、俺と鈴だけに限っては嫌な予感をしていた。

こんな定休日に狙ってやって来る元同級生が一人だけだが心当たりがある。

そう、気配でも解るが、店まで全速力で走って向かって来る現デユノア社の女社長であるシャルロット・デユノアだった。

扉が壊れるのではと疑問になる勢いで開くと

「イチカ!!助けて!!」

シャルが困る度に、某アニメの眼鏡を掛けた少年の様に青色の狸モドキに助けを求めて来るのだ。

「だから、俺はドラ○もんじゃねえ!!」

「お玉じゃ無ければ!!」

飛ばしたのはお玉ではなく、朝ご飯を作る為に熱したばかりの中華鍋を投げつけたのだ。

シャルは何時もとは違い、鍋を軽やかに躲して突進。

俺にそのまま抱き着いてゴールしようとした。

別に、サツカーの様には蹴りでクリアしても構わないのだが、俺の隣にはGK（妻）がいる。

そして、突進するシャルの頭を鈴が片手で搦んだのだ。

鈴のスーパーセーブによりゴールを阻止し、そのままアイアンクローをシャルに決めるのだった。

「ギャアアア!？」

降参するから、手を離して頭が割れる!!」

「朝っぱらから、私の旦那に抱き着くなんて、いい度胸じゃない?」

「おっ、お慈悲を…」

「死にさらせ!!」

怒りの炎が真っ赤に燃える!!

貴様を倒せと真っ赤に燃える!!

灼熱!!

○○○○フィンガー!!」

某格闘家の○○不敗と対等に渡り合えるだろう必殺技で鈴が決めると、頭からグツシヤッと鳴らしてはいけない音を立てて、シヤルは浮いた体を宙ぶらりにされたまま気絶した。

シヤルを床に投げ捨てた鈴は、何も無かった様に俺の隣で包丁を握り朝食の準備と夫とのデートと一緒に食べる為に広東風酢豚弁当を作ったのだった。

そして、鈴が店内の床に投げ捨てたシヤルを今は2階の客間で寝ている5人が見ると流石に良からぬ疑いが掛けられるので店の椅子に座らせて寝ている様に誤魔化したのだ。

朝食を向かえる頃にはシヤルが復活。

「ねえ、僕の扱い酷いよ!!」

「うっさい!!これでも食らいなさい!!」

「鈴!？」

それ、黒椿のコツドフィンガーだよね!？」

やっ、止めて!!

頭が溶けるから勘弁して!？」

ねえ、正直に話すからさ!!

ギヤアアアアア!？」

「ヒートエンド」

と抗議するが、朝っぱらからシヤルが騒いで来た理由を話してくれた。いや、鈴がゴツ…あつ、はい判りました…アイアンクローにして置こう…吐かせたが正解だった。

(姐さんに脅されて…誰か来たようだ…)

どうやら、デユノア社がまたピンチらしく、シヤルが持参したISは3、5世代型のカスタム機でサーペントカスタムと言うらしい。今では4世代型が主流の時代だが、このサーペントカスタムは3世代型

のサーペントをカスタムいや魔改造により0、5世代ほど世代アップ出来たが、これは研究成果らしくて量産するにはコストが高いので量産向きではないらしい。

しかし、低コストで同じく出来る様になれば会社が存続するらしい。

今では、旧式化したラファールを販売していたデュノア社も最近では3世代型の汎用型支援タイプのサーペント開発に成功して量産していた。

サーペントはデュノア社製の4世代機は全く作れず、他国が試作型の4世代型の中で未だに量産型の3世代型にも関わらず、デュノア社製では傑作機のラファールの汎用性を拡大し、ウエポンシステムでどんな場所でも対応する事に重点にして開発された機体だった。

ただ、機動性能だけがラファールの強化に留まる程度なのが欠点だが、高い汎用性とウエポンシステムによる対応能力だけなら4世代型には引けは取らなかった。

シャルが持つて来たのは会社の研究所で魔改造して3、5世代型まで改修したサーペントカスタムだったのだ。

そして、シャルが欲しいのはサーペントカスタムの戦闘データや稼動データだった。

今、俺の家にいる専用機持ちの機体を簡単だが纏めよう。

白椿改、4、5世代型高機動型マルチタイプ

黒椿、4世代型重装甲高機動型近接格闘タイプ

アテナ、六世代型高機動型広範囲殲滅タイプ

アルテミス、六世代型高機動型長距離狙撃タイプ

サイレント・ゼフィルス、3世代型高機動型射撃タイプ

シュヴァルツ・レーゲン、3世代型重装甲型長距離射撃タイプ

ブルーティーターズ、3世代先行試作型長距離射撃タイプ

ヴァルキリー、5世代型高機動広範囲殲滅型近接特化タイプ

流星にやりはしないが、千冬姉並の人外元女王のワンマンアミーまで居るから国の一つや二つ位は滅ぼせる戦力だろう。

そして、サーペントカスタムのデータを取りたいと来たシャルだっ

だが、実際の問題上では協力は出来ない。

先ずは、娘の十夏の専用機は本人が生徒会長である限り、学園の防衛の観点から情報漏洩になり兼ねないし、妹の千秋も同じだ。

次にラウラ親子も軍属であり、レナスは軍属のテストパイロットだ。特に、トライアル中のレナスのヴァルキリーはドイツの最新鋭技術の塊であり論外。

セシリアとマドカはメアリーが女王だった時に権力でマドカの国際指名手配は外されたが、専用機であるブルーティーアーズとサイレント・ゼフィルスは旧式で論外。

残る、俺と鈴の専用機は条件に当て嵌まるがリミッターを掛けている4,5世代型の白椿と黒椿。承諾したら束さんが怒りかねないから無理だ。

それでも、娘達が何かあった際の備えでもあるし、俺も鈴もセシリアとマドカの件では暴れたが白椿も黒椿も使う気はない。

だから、シャルには悪いが断りとある人物を紹介する事にしたのだ。

そう、束さんの愛弟子であり、あの学園長いや変態痴女の妹の簪なら解決出来るだろと紹介しようと思った矢先だった。

シャルを獲物にして獰猛な瞳で見つめる一人の少女が居たのだ。

「レナス、シャルを見つめても駄目だぞ」

「えっ、えええ!!」

ママ、良いじゃん!!

ヴァルキリーの例のシステムのデータを取ってドイツの開発局から命令書が来てるじゃん!!」

「レナス、お前は栄養改善の為に療養中だ。母親である私が許さん!!」

「私が直接やる訳じゃないじゃん!!」

と母親のラウラがレナスを嗜めるが聞こうともしない。

「駄目な物は駄目だ!!」

「ママ?」

千秋ちゃんや十夏ちゃんとも模擬戦で引き分けたのに3,5世代機

の量産機に負けるとでも?」

シャルや俺達の存在を忘れ、ラウラ親子は二人で親子喧嘩が勃発。肝心な事だが、レナスは娘二人と俺か鈴に許可なく模擬戦をしていた事も暴露。

馬鹿娘二人は顔を逸して誤魔化そうとするが、鈴は見逃さなかった。

「十夏?千秋?」

ママとあちらでOHANASHIしようかな?」

「ひっ!」

レナスちゃんのバカアアアア!!」

襟元を掴まれ、叫びながら鈴に連行される馬鹿(戦闘狂)娘二人。結局、ラウラがヴァルキリーのエンフェリアシステムの戦闘データを取得する条件でレナスの意地に折れた。

仕方なく、地下アリーナを開放する事になりレナスのヴァルキリーとシャルのサーペントカスタムが模擬戦をする展開となったのだ。

アリーナ中央に展開する2機の機体。

レナスは例のシステムを最初から使う気の様でヴァルキリーを囲う様にISを纏う人型のエンフェリアと呼ばれるビットを展開していた。

「えっ!?!5対1なの!?!」

シャルは驚愕する。

これはエンフェリアシステムと呼ばれるモバイルドール型のビットで脳波感応システムを用いるBT兵器である。

ヴァルキリーには最大4機の専用のビットが拡張領域に入っており、ヴァルキリーに存在する二つの単一仕様の一つの『英霊召喚』により強制展開される。

ただ、ビットは過去の大会参加機のデータやシュヴァルツェア・レーゲンの学生時代からの戦闘データを元に出現するが基本は元日本国家代表の更織簪の専用機『打鉄式式』や元ロシア代表の更織楯無の専用機『ミステリアスレディ』フリーランスの旧織斑一夏の専用機

『白式』に元中国代表の専用機でもあり、鈴が使用していた専用機『甲龍』などの今では旧式扱いの3世代機である。

しかし、ビットにはAI処理されており集めたデータを元にパイロットの癖や戦い方などはバターン化され脳波で命令を出してビットに積まれているAIで処理するのだ。

レナスのヴァルキリーに積まれる脳波感応システムにより脳に負担が凄いとはいえ、何の問題もなくトライアル（他のトライアルのテストパイロットは脳に異常を起して入院）では同時処理で最大8機を従え、ヴァルキリーの専用パイロットに選ばたのだ。

そして、BT兵器であるため人型のビットはアラスカ条約にすら抵触していない。

さらに、ヴァルキリーはこの単一仕様が無ければ只の高機動型近接特化だったが機体に積まれる脳波感応システムやこのBT兵器の所以で広範囲殲滅型を付けられていると過言ではない。

シャルとレナスの模擬戦はと言うと、サーペントカスタムは凄まじい弾幕を張り奮戦するがAI処理されたインフェリアドールビットの4機のチームワークにより、奮戦虚しく数分でサーペントカスタムはスクラップにされ、アリーナの片隅で膝を抱えていじけるシャルをレナスは勝ち誇り眺めて居たらしい。

しかし、双方には凄まじい量のデータが取れたらしくサーペントカスタムはウエポンシステムでは無く、ハードポイントシステムにてコストダウンしてデュノア社はサーペントの改修とサーペントカスタムにより持ち直したらしい。

そして、レナスのヴァルキリーもドイツからとある国の国家代表の専用機（イタリアのテンペスターMK-IIとフランスのラファール・リブアイブカスタム）を模範したモビルドールビットを作りレナスの元に送ったのだった。

## ラウラに中華スープを

娘とシャルの模擬戦の後、戦闘データを纏めたり各国へ報告するモビルドールビットの稼動データをPCに纏める作業していた。

モビルドールビット

イギリスが手掛けたBT兵器を我がドイツが高性能化させた兵器だった。その兵器を作るに居たり、私のシュヴァルツァ・レーゲンにあるデータは学生時代から蓄積した学友のデータが大量に使われた。

そう、一夏の元専用機の白式、簪の打鉄式式、鈴の甲龍、生徒会長のみステリアスレディーなど数えるだけでも面倒だ。

そして、各国政府にはモビルドールビットから得た戦闘データと稼動データを渡す代わりに、それらを渡す条件で機体を製造していた。

それが、旧式の第三世代機でもだ。

そして、国内と織斑家以外では極秘であるBT兵器の反応性能を向上すべく積まれたヴァルキリーの脳波感応システム。

BT適正や空間把握能力値が幾ら高くても常人が扱えば忽ち、脳に多大な負担を掛けてしまい廃人になる恐ろしいシステムだ。

実際、レナスの八号機以外の試作一号機から七号機は脳波異常からトライアルしたパイロットは使い物にならなくなった。

だから、娘であるレナスが恐ろしい程に脳波感応システムに異常なまでに適応する事に恐怖すら感じる。

多分だが、セシリア以上のBT適正と空間把握は最初から有ったのだろ。そうでなければ、4機同時操作で滑らかな動きには説明出来ない。

あの嫁の妹のであるBT兵器の申し子のマドカの様…

それでも、マドカがヴァルキリーのスペックを知ると

「あんな物、脳が焼き切れるから絶対に乗りたくもない」

と一蹴していた。

幾ら、AI制御はしてはいるが同時に動けるのはレナスからの話だと4機が限界でトライアルの時は動く必要が無いからと8機の同時



使用が出来たらしい。

ある程度、報告書が纏まり振り向けば嫁がお盆を抱えて待つていた。

「ほれ、差し入れた」

嫁が持つて来たのは温かい中華スープだった。

ふつくらと浮かぶのは卵。

香りは胡麻油だろう。

「ああ、すまない。それと、白式の稼動データだ。多分、篠ノ之博士は今時になつて3世代機のデータは要らないと言うだろうが、約束は約束だからな」

「ありがとな。十夏に渡して束さんに渡しておくよ」

やっぱり、狡い。

だから、だろうな。

今の私の身も心はハンスの物だ。

ハンスと出会っていなければ、嫁をずっと追いつけただろう。

例え、鈴が立ち塞がろうとも：

だが、嫁には鈴がいる。

悔しいが、例え追い続けても鈴には全てに負けている。

嫁に捧げる愛にしても、一緒に走り続ける気概にも：

だけど、ハンスとのいちやいちやだけは誰にも負けないと自負する。

だって、ハンスが生きていれば猫耳カチューシャをして一晩中甘えられる自信がある。

「ハ〜ン〜ス〜今日も抱いて欲しいニヤア〜」

とクラリツサに言われた通りに猫耳カチューシャに下着姿で誘惑（クラリツサ曰く、合法ロリのラウラと）して見れば、ハンスはやはり男だった。

誘惑に負けたケダモノハンスが出来上がり、ベッドにお姫様抱っこでベッドに連れて行かれ一晩中抱いてくれた。

いくら、絶頂で気絶しても赦してくれなかつただろう。

今では、良い思い出だろう。

だから、嫁と呼ばずにお兄様だろうか？

それだと、重度のシスコンのクロエお姉様が許さないだろうな。

だが、今でも嫁はクロエお姉様を苦手としている。

理由は知らない。

だけど、あの頃のクロエお姉様は心臓が弱く目も見えなかった。義母上である束さんでなければ死んでいたし、私と再会して姉妹に戻る事は無かった。

今は、義母上の尽力で目と心臓は移植手術で治す事が出来た。そう、私の細胞で時間が掛かったが人工培養で目と心臓を作ったのだ。

余談だが、私も目の移植手術をしている。

あの忌々しい能力を捨てる代わりに：

だから、両目で見て娘を抱けたのだから感謝しても仕切れない。

それよりも、嫁の作ったスープだ。

胡麻油からの香りが疲れた体を刺激する。

レンジでスープを飲めば、出汁は乾燥ホタテの貝柱と鶏ガラをベースにしているのだろう。

フワリと浮かんだ卵に旨味が絡みなんとも言えない美味さを感じさせてくれる。

こんなスープが、この店では普通に定食のスープに付いて来るのだ。

全く持って狡い。

気付けば、何時の間にか飲み干していた。

お代わりしたいが、部屋の時計は18時を指して夕飯時だった。

「恨めしい…」

と呟いていたが、一階から美味そうな匂いに限界だった。PCの電源を切り下へとおりる。

夕飯は油淋鶏に今度はわかめスープだった。

私は嫁に餌付けされている感を感じながらも箸とお茶碗を片手に、このご馳走を食べるのだ。

そして、視線の先には幸せそうに夕飯を食べるレナスの姿と織斑家の一家団欒で心温まる情景に感謝するのだった。

場所は変わり、成田空港。

ラウラと瓜二つの女性が到着ロビーについた。

その女性の名前は、クロエ・S・ボーデヴィツヒ。

ラウラの姉に当たる女性だった。

ただ、気になるのはトランクからはみ出ている衣類だろう。中身が全て衣類なら恐怖すら感じる。

何故、クロエが日本にと思うが本人であるクロエでなければ判らない。

「ああ、待ってて下さい。

愛しいラウラ。

可愛いレナスちゃん♪

会ったら、いっぱいお着替えを…」

ただ、彼女の眩きから想像が出来るだろう。

絶対、着せ替え人形にする気だろうと周りの乗客は内心、ツツコミを入れていたが本人は知らぬ顔だ。

ただ、気になるのは行き先がIS学園だった事だろう。

「それにしても、衛生から監視してましたが東様はまたも食生活を乱して先にお仕置きを…それに可愛い妹に美味しそうな料理で餌付けをする一夏様にも少々お仕置きを…」

と何か怖い事をサラリと言ってはいるが知らぬが幸せだろう。

だが、先に言っておこう。

IS学園の職員寮に木霊する二つの悲鳴。

それは、学園の寮で酒盛りする馬鹿な教師である二人から出た物だと。

「ユーちゃん…助けて…おっ、鬼が…出たよ…」

「きつ、きやアアア!?

しつ、篠ノ之先生!?

えっ、衛生兵!!」

そして悲鳴でもわかるが、翌日には寮の窓に布団で素巻きにされ吊るされた新人教師だったと発見者だった生徒会書記は語ったらしい。

## クロエ襲来!! 前編

私達には、一瞬の出来事だった。

一年三組のクラスメイトの一部は気絶して血の海に成り果てていた。

全く、斬殺とか銃殺の類いでは無いが、クラスメイトの全員が私達の姿のせいで鼻血を大量に吹き出しながら気絶したり、気絶からは辛うじて逃れたが、可愛い姿に笑ってはいけないと我慢しているのか腹筋を痙攣させて過呼吸になっていた。

そう、私達三人の今の姿が原因だろう。

幼稚園生の衣装を着せられ、羞恥心から泣き生徒会長としての威厳を無くした十夏お姉ちゃん。

良いように何度も着せ替え人形にされ、ショックから泣きながら幼児退行している所に、止めにと黒いゴスロリドレスを着せられ、とあるアニメの水銀燈の姿にされ蹲りながら泣くレナス。

私は何故か叫びたくなる様な、とある時空魔法管理局の白い悪魔の衣装を着せられ、窓から逃げる糞ババアに持たされたビームが撃てる魔法の杖で狙っても当たらないのは判ってはいたが、羞恥心から来る怒りでビームを乱射して息が絶え絶えになっていた。

そして、時を前にして学園長室でも同じく大爆笑で腹筋を痙攣させ、笑い過ぎで過呼吸を起こして酸欠で気絶した学園長と生徒会書記の更織親子。

矛先にされたのは

「もう嫌だ…オウチカエル…オネエサマ…コワイ、コワイ、コワイ…」

「ぐっ、何故、おれがいつの間に、こんな格好を!？」

「あたしもよ!？」

覚えてなさい!!

クロエエエエ!!」

学園長室に入る瞬間を狙われ、アヒル付きのバレリーナの格好にさ

れたパパと、泣き叫び完全にキレたがなんとも締まらない、とあるアニメの罰ゲームだったピンク色のあんこうスーツを着せられたママ。極め付けはラウラさんだろうか？

抱きしめられ、暫く愛でられたかと思えば、何回も着せ替え人形にされた挙げ句、似合わなくもないが一瞬で金髪ツインテールにされた後に娘のレナスと同じシリーズのキャラクターなのだろう。真っ赤なゴスロリドレスを着せられ精神的ダメージで泣きながら幼児退行していた。

東先生も一緒になつて楽しんでビデオカメラを回していたから判つてはいたが、過去に一緒に居ただけに二人して逃げる逃げ足の人的速さに一同は項垂れるしか無かった。

だけど、私達はある物を失つたのは確かだった。  
何故、こうなつたのかは時間を遡らなければならぬ。

織斑家のリビングでは朝食後に何故かレナスはIS学園のワンピースタイプの制服を着ていた。

「エッ？レナスちゃんなんで？」

「うん、私も今日から学園に通うぞ!!」

元気一杯に答えるレナスだが、生徒会長だつたお姉ちゃんは何も聴いてなかったらしく首を傾げる。

「十夏、レナスは国からの命令とお前達と同じ理由で学園に編入になつたぞ」

「それって、まさか叔母さんからの指示？」

「ああ、千冬姉からだ」

それをパパから聞いたお姉ちゃんがキレた。

それが、パパが大好きな叔母さんであつてもだ。

「うがアアアアア!？」

あつ、あの糞ババアアアアアアア!？」

あれ程、何かあるなら生徒会に書類を前もつて出せつて言つてるの

に!!

ああああ、もう嫌だ!!

可愛い姪に書類に埋れろって言いたいの!!

ねえ、6歳の私に埋れって言いたいの!!

もう、決めた!!

絶対、殺つてやる!!

他の先生方を地獄に落としてもやってやる!!

会長権限で職員寮にアルコールの類いの持ち込み禁止にしてやる

!!

はあ、はあ、千秋みつ、水頂戴…」

「う、うん…」

キレたお姉ちゃんに呆気に取られ、壊れた玩具の様に首を縦に振りコップに水を入れて渡す私。パパはまるでママを見ていたかのように後ずさり顔が真っ青だった。

それもそうだ。

キレた時のお姉ちゃんはママと同じく気性が荒くなり手に負えなくなる。だけど、滅多にキレない事だけが救いなのだ。

だから、私とパパの間ではママ同様にキレさせてはいけなさと同意していた。

そして、地雷を踏んだ？

いや、地雷を踏み抜いた千冬叔母さん。

それと同じく、更織の仕事をせずに私達姉妹に情報を渡さなかった書紀の白百合先輩にもお灸を据えてやると決める私だった。

多分、怒りから落ち着いたらだろうお姉ちゃんと三人仲良く学園へ登校。

しかし、お姉ちゃんだけは一部展開したアテナの腕で抱えていた様で見れば人を布団に丸め込んで搦んでいた。

「う〜ん…ここは…はっ!？」

なっ、何で素巻きなのよ!!

っつて、十夏ちゃん!?

良い子だから、私を放しなさい!!

ちよつ、ちよつと!!

私、下着姿のままじゃない!!

元女王としての威厳を喪うから止めて!!

「大丈夫。」

学園の教師寮を潰したら終わりだから。

会長権限で許可する」

「そこが問題じゃなアアアアアアい!!」

それは、布団に包まれていたのが下着姿で意識が覚醒してからずっと叫ぶメアリーさんを素巻きにしており、メアリーさんを連行もとい同行させてる辺り、お姉ちゃんの本気度が伺える。

無論だが、お姉ちゃんの行き先は職員寮だと予想出来る。

勿論、お酒大好きな一部の先生方に起きる悲劇も：

私はお姉ちゃんと別れてレナスを一度、職員室へ案内する。

「失礼します。本日から編入するレナスさんを案内して来ました」

「おお、来たか織斑妹とレナス。クラスは一年三組でアタシが担任の巻紙礼子だ。まさか、あのチビの娘が来るとは思わなかったがな。ティナ、悪いがSHRは任せた。アタシは織斑姉が居ない事に嫌な予感がするから職員寮に戻る。じゃあ、任せた!!」

と副担任のティナ先生に丸投げして寮に走り出す巻紙先生。多分、巻紙先生も飲ん兵衛なのだろう。

丸投げされたティナ先生は額に手を当てながらゲンナリしていた。

「エッ?!巻紙先生!!」

はあ：

レナスさん、私は副担任のティナ・ハミルトンです。

レナスさんよろしくね?」

「はい、よろしく頼む」

「キヤツ!!レナスさん昔のラウラさん並に可愛い!?

お持ち帰り：じゃなかった。

SHRの時には教室に案内するから職員室に居てね。



千秋さん、案内ありがとうね」

レナスを任せましたが、ケダモノ化したティナ先生に心配したが、私も遅刻する訳には行かず職員室を後にした。

そして、レナスとはクラスが私達と同じだとティナ先生と巻紙先生から聞いたのだった。

私は教室行くとクラスメイト（変態共）が騒いでいた。

「ねえ、織斑姉妹の様に可愛い娘（幼女）が編入するらしいよ!!」

「!!!エツ?!」!!!」

「マジ!? よつ、幼女が三人に増えるの!?!」

「らしいよ。ああ、三人揃ったらマジ天使!!」

「母性がくすぐられるわ!!」

「お持ち帰りして愛でたいわ!!」

「じゃあ、林間学校は三人の天使な水着姿を…ジユルリ…」

「涎出さないでよ!!」

と変態共が騒ぐ。

私は顔を引き攣らせながらも、流石に学園最強姉妹である私達には手は出さないだろうと思うが、変態共の会話から貞操の危機を感じるのは気のせいだろうか？

だが、私が教室に入るタイミングが非常に悪かった。

職員寮から爆発音。

多分、お姉ちゃんやんが叔母さん達飲ん兵衛（教師達）のアルコール類を灰にしたあげく、メアリーさんと寮で暴れているのだと判る。

そして気付かれ、一斉に振りいい向いた方角には、そつと入ろうとした私。

そう、ケダモノ達の視線が私に向いたのだ。

「!!!あつ、丁度良いところに!!!」!!!」

「ひっ!?!」

そして、一人の生徒が爆弾を落とした。

「そう言えば、今朝の登校時に見ただけで千秋ちゃんと十夏ちゃ

んが三人で一緒に歩いていた娘が編入生じゃない？」

「「「なっ、何ですとおおお!?」「」」」

「もしかして…私、ピンチ?」

「諸君、あの天使に突貫!!」

「「「おおお!!」「」」」

「ひっ、ぴいひい!」

一斉に振り向き、私に更に視線が集中する。

質問しようと、にじり寄る変態共いやケダモノ達とジワリと後ずさり逃げる私。

気付けば、既に壁際だった。

「っっ、怖い…」

B u u u

「「グッハア!!」「」」

恐怖心から床に尻餅を付いた状態で上目遣いだったのがいけなかったのだろ。

にじり寄る変態共の数人が鼻血を吹き出して気絶する。

だが、変態共は未だに近寄ってくる。

貞操の危機に瀕していた所に出席簿がブーメランの様に飛び、ケダモノ達を一掃していた。

投げたのは、悲壮感丸出しで機嫌が最悪な巻紙先生だった。

「テメエ等!!」

「サツサと席に着きやがれ!!」

「ブツ殺すぞテメエーら!!」

「サツサとS H R始めんぞ!!」

「と言われながら生徒達はシュンとして席に着く。

私も恐怖心から腰が抜けたので這いずりながら席に着く。

巻紙先生から漂う悲壮感は多分、未だに教室に來ないお姉ちゃんが原因だろう。

未だに職員寮から鳴り響く爆発音はアルコール類を処分する為に奮闘するお姉ちゃんとメアリーさん。叔母さんを中心にアルコール類を護ろうとする教師達の攻防だろう。

そして、巻紙先生は既にアルコール類は全て処分されたから悲壮感を漂わていると私は思う。

だが、暫くして爆発音は聞こえなくなりお姉ちゃんがウキウキ顔で教室に戻って来てS H Rが始まった。

「巻紙先生、戻りました」

「糞がアタシのコニヤツク…」

お姉ちゃんに処分された事を根に持ち睨む。

「先生？」

恨むなら、織斑先生を恨んで下さい。

アルコールにうつつを抜かして、書類を溜めて出さなかったのが悪いのですから」

「ちっ、S H Rを始めろぞ!!」

まずは、ドイツからの編入生を紹介する。

入れ!!」

とバツが悪そうにレナスちゃんを呼ぶ。

「私はドイツから来た、レナス・ボーデヴィツヒだ。一応、6歳ながらもテストパイロットをしている。今は、治療の為に織斑姉妹の元で暮らしている。よろしく頼む」

と自己紹介をする。

シーンとするクラスメイト達（変態共）

しかし、レナスを見た瞬間に騒ぎだす。

『きゃ、キヤアアアアア!?!』

「ぐっはあ!?!」

至近距離で音響兵器を食らった巻紙先生は気絶。

ティナ先生に至ってはケダモノ教師に変貌していた。

「レナスちゃん、マジ可愛い!!」

「私の妹になって!!」

「三人共、お持ち帰りしていい!?!」

「もう、嫌だ。」

何なの？

この変態共」

と変態共に毒気付くお姉ちゃん。

レナスちゃんは変態共に怯え、モビルドールビツトを呼ぼうかと悩み、私は溜息を吐くばかりだった。

そして、三人で生徒会室へ避難しようかと判断した時だった。

教室に乱入してきた一人の女性に捕まるレナスちゃんは見覚えある顔に悲鳴を上げた。

「ひっ!?!」

「レナスちゃん、可愛いですねえ…いっぱい、お着替えしましょうねえ」

「嫌アアアアア!?!クロエ叔母ちゃん嫌ああああ!?!」

ラウラさんそっくりりで、レナスちゃんを抱きしめて愛玩動物の様に愛でられていて着せ替え人形化していた。嫌々と抵抗するが成すがままにされていた。

「今度はコレですねえ♪」

「嫌ああああ!?!」

漸く、着せ替えが終わり見てみれば、レナスはローゼンメイデンの水銀燈の衣装を着せられていた。

「オバチャン…コワイ…うえええん!?!」

と幼児退行して蹲り泣いて居たのだが終わりでは無かった。

ブツブツオオオ

と吹き出した様な音に振り向けば、変態共が一斉に鼻血を吹き出していた。

そして、お姉ちゃんを見たら服装が変わっていた。

「おっ、お姉ちゃん!?!」

ふっ、服装が!?!」

「エッ?」

嫌ああああ!?!」

お姉ちゃんの服装が幼稚園生の服装になっていた。

そして、変態共も腹筋が痙攣しているのか笑いを堪えていた。

そして、私もだった。

「千秋ちゃん、コレ上げるね♪」

と手渡されたステツキとセリフが書かれた紙。

そして、着せられた衣装から導き出した衣装は

「何で私だけ、時空魔法管理局の白い悪魔なのよ!!

良いわよ!!

殺つて、やろうじゃない!!

行っけええ!!

スターライトブレイカー!!」

ステツキから放たれた魔導収束砲ではなくビーム砲は躲されたのだ。

あの糞ババアは身軽に躲すと、窓から飛び出して逃げていったのだった。

逃げた糞ババアはパパ達に厄災になるだと理解した瞬間だった。

そして、クラスメイト達は

『尊い』

と呟き鼻血を流しながら気絶していた

## クロ工襲来!! 後編

レナス達が教室に向かった頃、俺達は学園長室の前だった。卒業以来とはいえ、全く変わらない扉には歴史すら感じる。

学園長室に来た理由だが、三人に対して日本政府とドイツ政府が同じ内容で出した命令に関して刀奈に直接問いただす為でもあった。

俺と鈴は日本に住みながらも政府を信用していない。

当然だろうが、日本政府はあの事件を後に俺の意思に関係なく在学中に国家代表候補生にした事だけではない。

そして、決定的な出来事もあった。

ファントムタスクとの最終決戦ではエクスカリバーの収束ビーム砲の斉射により、俺は腹部を貫かれる直撃が要因で瀕死の重症を負い専用機も大破して修理不能となった。そして、俺の新たな翼として束さんが修理不能となった白式のコアと新たに作ったコアの二つのコアを使用して開発してくれた俺の今の愛機である(リミッターを掛ける前は7世代型高機動強襲型近接火力特化タイプ)白椿を制作して渡してくれた。

だが、絶対的破壊力と超高性能機(各国では未だに3世代機又は4世代機が中心)である7世代機の存在を知った日本政府は俺には過ぎたる機体として、国家代表(白椿は俺の脳波登録している為に他人は使用出来ない事を政府は知らない)に使わせるからと渡せと強要して来て、卒業する頃には姉弟が揃って日本政府に対する信用は地に落ちていた。

そして、卒業後は国家無所属の選手であるフリーランスになっても日本政府からの執拗な要請は続いたが、束さんが専属のメカニクス並びに鈴が中国国家代表を蹴り無理矢理にも俺に付いて来てからは鈴との関係を認め、俺達二人を護ろうとする束さんが怖いのか、一時的にだが鳴りを潜めた。

そして、二連覇を果たした後だが鈴とタッグを組みタッグトーナメント大会参加中に完成したばかりの黒椿をめぐって一悶着が起きた。

俺の専用機と同じく、鈴にも専用機『黒椿』が未完成な機体だったが自身を護る力として学園を卒業して一緒に付いていく時に束さんから渡されて居たのは知っていたが白椿と同じ7世代型のISだった。

束さんが専属メカニックになった時には黒椿の開発は再開するが、鈴のパワーが凄いか格闘技術が凄いか解らないが開発した本人ですら頭を抱える問題が起きていた。

頭を抱えた理由は、特に鈴の専用機は近接格闘特化タイプ特有の関節部への強度問題と重装甲化による低機動化が問題が足枷となり開発が難航していた。

近接格闘特化タイプ特有の問題とは殴る蹴るはもちろん、中華拳法を主体とした戦い方の為に関節に掛かる負担による関節の破損や装甲の重装甲化による機動性能の低下は避けられなかった。

しかし、妥協を一切許さない束さんは機動力不足を補う為に白式や紅椿と同じ技術であるウイング型の展開装甲の追加に加えて、装甲と装甲の間に小型で超高出力のスラスタを組み込むなどの技術を開発して重装甲ながらも高機動化に成功して黒椿はようやく完成を見た。

その技術の代償として燃費は悪くなったが、重装甲ながらも白椿並いやそれ以上の高機動性能を可能としてしまい、黒椿は白椿と同様に日本政府と中国政府が二人の専用機を欲し狙われる事になる。

そして、両国から狙われている事は知らず、鈴が付いて来るようになっても大会もプライベートも関係なく鈴とは二人で一緒に暮らすようになり、何時も自分の訓練をやりながらも健気に食事や身の周りの世話などしている姿に幼馴染から一人の女性だと気付いてしまったのかも知れない。

今では一緒が当たり前に成りつつもあるが、第三回タッグトーナメント後では鈴の存在が無くてはならない存在だと気付かされた。

事件の発端は、ロシア国家代表と日本国家代表の更織姉妹との四人で卒業以来の再会を喜び、試合後のディナーでだった。

鈴もディナーの為、レストランがドレスコードである為にパー  
ティー用のチャイナドレスを着て、俺と一緒に滞在するホテルからレ  
ストランへ向かう途中で鈴が襲撃された。

その時、俺は指輪を秘密裏に買う為に先に出て、襲撃された鈴  
からの緊急連絡から慌てて鈴の元に駆け付けて無事を確認した時に  
無事な姿に安心して抱きしめて謝ったが『許す代わりに一緒に寝な  
さい』と言われてから一緒に寝る様になった。

流石に寝顔は可愛かったが手を出す事だけは躊躇い、あの時の事件  
以降まで手を出す勇気が無かった。

それ以降、鈴が刀奈から何を教わったか知らないが鈴の執拗な誘惑  
に手を出してはイケないと悶々する日々を送ったのだ。

話を戻すが、幸い俺が着いた時にはチャイナドレスは一部肌が開け  
ている程ボロボロだったが鈴一人で襲撃した犯人は全員が病院送り  
にしたらしい。警察での犯人達の調書では中国政府から雇われ、マ  
フィアによる黒椿を狙った犯行だったらしい。

ただ、ここで言えたのは中国国家代表の二人は二回戦を棄権してい  
る事実だけだろう。

こんな事があるから政府を信用出来ないのだ。

そして、今度は娘達に毒牙を掛けようとしている日本政府。

更織の返答次第では娘達を護る為に、白椿と黒椿のリミッターを解  
除しなければならぬ決断が必要だろう。

そう、日本の中枢である東京を火の海にしてでもだ。

さて置き、学園長室の扉に手を掛けようとした時だった。

「うっひゃ!?!」

とラウラの気の抜けた悲鳴。

声の方を向いてみれば、何時の間にか現れたクロエがラウラを膝の  
上に乗せて愛でている最中だった。

娘の事を考えている最中に現れたのは流石、シリアスブレイカーな  
クロエだった。

当のクロエだが、ラウラの着ていたカジュアルなブラウスやジーン



ズを無理矢理脱がし放り投げた衣服は空を舞い俺が見た姿はラウラの  
の下着姿だった。

その姿は見た目とのギャップで鈴よりエロい姿にごくりと息を飲  
み込むが妻の鈴に目潰しをされた。

「おっ、お姉様!?

赦してえええ!!

よっ、嫁!?

はっ!?

みつ、見るなあああ!?

嫌ああああ!!」

とラウラが悲鳴を上げ

「ハアハア…

ラウラちゃん、今度はコレにしましょ♡」

「二夏!!

アンタねえ、アタシが居ながらラウラの下着姿を見る訳!?

目でもつぶれてろ!!」

「むっ、無罪だあああ!?

「死にさらせ!!」

「ギヤアアアアア!?

クロエが暴走し興奮しながら新しい洋服を無理矢理に着せて行く。

その間、ラウラの悲鳴の度に振り返っては鈴に何度も目潰しをされ  
たのはご愛嬌。

更に布が擦れる音がする事、数回。

「うくん?

やっぱり、レナスちゃんとお揃いが良いですねえ…」

「やっ、止めろ!?

それだけは、止めろ!!

お姉様?

嫌ああああ!?

………もう、嫌だ。

お姉様、怖い…ひいぐう…コワイ…コワイ…うわアアアアアん」

ラウラのプラチナシルバーの髪は金髪に髪を染められて髪型はツインテールに束ねられて真っ赤なゴスロリドレスを着せられたラウラが出来上がっていた。

勿論、ラウラはクロエの膝の上に乗せられまま幼児退行して泣いていたが、お構い無しに愛でているクロエだった。

そして、クロエは満足するまで堪能するとゴスロリ姿のラウラを残して何時の間にか居なくなり、俺達も何時の間にか着せ替えられている事に気付かないまま学園長室の扉を開けたのだ。

今では学園長である更織刀奈。

元はロシア国家代表選手であり学生時代は生徒会長だった人物だ。

今はロシアの軍人との結婚を期に引退して二人の娘を出産しているが、元からのサボリ症である刀奈はラブラブな夫婦生活と学園長生活を楽しみたいが為に楯無の名前と当主の座を娘である長女で学園の二年生になる白百合に譲り、現ロシア国家代表である白百合に生徒会長をさせながら満喫していた。

しかし、平和な学園長生活にヒビが入る。

悪夢の始まりは織斑姉妹の学園への緊急編入だった。

日本政府の陰謀から護るべく、双子姉妹の叔母である織斑千冬先生からの要請で織斑夫妻の双子姉妹が6歳ながら学園に編入する事と姉妹がその年齢ながら専用機持ちである事は知っており、篠ノ之束先生から専用機のスペックを纏めた書類を見て編入する理由を知っていた。

そして、更織の力での調査で織斑先生と篠ノ之先生の二人が双子姉妹の家庭教師をしていた事も把握済みだった。

結果から、彼女の悪癖ではあるが興味を惹かれるのは判りきっていた。

そして、学園長の権限で双子姉妹には新一年生が試験を受ける時を狙い編入試験をさせたのだ。

先ずは、筆記試験だった。

「はあああああ!？」

「主席で合格!？」

と驚愕の結果に学園長室の執務机の椅子からずり落ちてお尻をぶつけて悶絶し、次の実技試験では

「おっ、お母様!!」

もう、嫌あああああ!？」

いきなり、試験官として実力をを見て来いって言っときながら、あの姉妹があんなに強いだなんて聴いてないわよ!!

二度と威力偵察なんかやらないわよ!!

負けたんだから、生徒会長を辞めてやる!!

「うわアアアアアン」

「えっ!？」

マジで…」

と双子姉妹に実技試験では蹂躪されてズタボロに負けてしまい、落武者と言ってしまったいそうなボサボサになった髪と全身が煤と泥だらけで泣きじゃくる娘の姿に『悪戯成功!!』とは扇子を見せる事を躊躇い、学園長室の真ん中で生徒会長としても更織家当主としての威厳すら消えて泣き叫ぶ一人の少女になってしまった娘の姿にどうにも出来なかった。

双子姉妹が入学してからは、姉の織斑十夏が生徒会長に副会長には妹の千秋がなると、規律が緩んでいた学園は双子姉妹による改革の嵐が吹き荒れて学園長に来るお洒関連の苦情や報告書などの書類が山の様に来る日々になる。

元生徒会長の娘は双子姉妹に連行され嫌々ながら書紀にされ、書類作業から逃げられたと思っただけにいたが双子姉妹の処理速度の速さに翻弄されていた。

そんな改革の嵐が吹き荒れていた時だった。

日本政府から双子姉妹に対しての要請が来たのは…

双子姉妹の授業態度は林間学校前での成績は主席をキープし、実技に関してはトップクラスの強さをほこる二人には飛び級を認めて6歳でも2学年に進級は確定だと思っていた。

そして、来た要請は政府から16歳になるまでは進級を認めないと要請が来たのだ。

不思議に思いながらも、林間学校を前にもう一人が編入。名前はレナス・ボーデヴィツヒ。

年齢は6歳。

所属、ドイツ空軍所属特別技術研究所テストパイロット。

階級は中尉

学園の卒業生であるラウラ・ボーデヴィツヒの一人娘。

専用機 ヴァルキリー

見た瞬間、頭を抱えた。

まさか、ラウラの娘まで編入だ。

抱えたくなる。

そして、ドイツ政府からも日本政府と同じ要請。

胃が痛くなる。

それを知ってなのか、三人の親である織斑夫妻と母親のラウラから面談要請が来ていた。

正直、母親の鈴音ちゃんが怖いから逃げ出したい。

多分、鈴音ちゃんの事だから旦那様を連行しながら話し出す内容は、今回の要請についてだろうし、此方も把握しきれていないのが現状だった。

学園長室の外が騒がしいから来たと思うのだが、扉が一向に開かない事に苛ついたが数分後に扉が開いた。

私は三人の姿を見て、見ては行けない物を見てしまった気がする。

一人はアヒル付きバレーリーナー姿の一夏。

その妻は、大洗女子学園の戦車道部との試合に負けた時の名罰ゲームである『あんこうスーツを着てあんこう音頭を踊らされる』と言う、実際に着てあんこう音頭を踊ったら嫁に行けなくなると言う、伝説のあんこうスーツ姿の鈴音ちゃん。

極め付けは、ラウラちゃんだろうね。

金髪ツインテールは見事と思いながら決めており、真っ赤なゴスロリドレスはローゼンメイデンの真紅の姿だった。その姿に恥じらう二人の姿に娘は

「年考えて、着なさいよ!!」

と突っ込み、鈴はババアと言われキレた。

「誰が、ババアよ!!」

クロエ!!

覚えてなさい!!」

「キレても締まらないわよー!」

と半泣き状態の鈴に更に娘はツッコミを入れてしまい、それが、原因で飲みかけの紅茶を吹き出したのだ。

ぼっふうううう

これがきつかけだった。

親子で腹筋が痙攣して崩壊。

学園長室は親子で大爆笑となったのだ。

「ぜえ、ぜえ…面白過ぎるから…止めて…」

「アンタねえ!」

キレながら取っかかる鈴は羞恥心でクネクネしてしまい全く締まらないし、それがあんこう音頭に見えてしまい更に笑いを呼ぶ。

ラウラちゃんと一夏君に限っては既に死んだ魚の眼になっている姿を見て、鈴音ちゃんですボにはまっていた為に更に腹筋を崩壊して酸欠状態になり娘共々気絶したのだった。

そして、目覚めた頃には三人は既に帰っておりテーブルには『話したら、学園関係者だけ値上げする』と白いペンキで書かれていた。

もし、話したら学園内の常連客の連中が暴動を起こすと思うと顔を真っ青にしたのだった。

再び、成田空港。

手荷物だけになったクロエはルンルン気分でドイツ行きゲート

に向かっていた。

「旦那様の浮気の八つ当たりでしたが、妹と姪のいい写真が取れましたね。

次は、セシリア様とメアリー殿下様に着せ替え人形になって頂きましょう。

ですが、千冬さまも捨てがたく思いますが、更織親子に恥ずかしい思いをしてもらいましょう。

では、旦那様が浮気したら、次はこの四人で……」

眩き、ゲートを潜ったのだ。

ただ、彼女は何か楽しそうだが、丸聞こえだった周囲の乗客がドン引きして居たのは気のせいだと思いたいが、対象にされた四人に同情しつつ合掌していたのだった。

## 簪と業火野菜炒め定食

クロエに散々な目にあつた夫とその娘達は自宅に帰るなりリビングのソファで座りながら死んだ魚の眼になつて放心していたが、妻の鈴と現在居候であるラウラは荷物をまとめてドイツ行きの準備をしていた。

「鈴、クラリツサ大佐に頼んで黒兎隊の出撃準備をさせたが、お姉様に対してやり過ぎでは？」

「甘いわよ!!」

クロエはあの束さんの愛娘でもあり、着せ替えと言つた悪戯と逃げ足だけは人外規格よ!!

それに、アンタの所にクロエの旦那から『ゴメンゴ』つてメールが来てたじゃない。

つて事はあの陸軍機甲戦車連隊の隊長のビットマンじゃない!!

また、あの馬鹿が浮気したに決まつているじゃない!!」

「そつ、そうだが、すつ、少し穏便に…」

「ええ、もちろん穏便に済ませるわよ。

ビットマンをぶん殴つたらね!!」

ただ、クロエには謝りたかつたから…」

ラウラは鈴の怒りにたじろぎながらも、夫だったハンスが作戦中にも関わらず、ビットマンに酒場で女の口説き方や抱き方などを教えてしまった手前であり、ラウラは妻として罪悪感はあるらしく否定は出来ない。

戦車乗りとしては超一流だが女癖が非常に悪い。

それが、クロエの結婚式で鈴から見たビットマンの感想だった。

それに、クロエの妹であるラウラには言えないがクロエが変わつた発端はアタシにある。

学生時代にはセシリア、ラウラ、刀奈、箒、シャル、簪、クロエなどが一夏に恋をした結果、みんなとの激しい話し合い（肉体的言語を含む）の末に抜け駆け禁止と約束して置きながら、アタシはまた一夏

に置いて行かれたくないと思う一心から約束を破って抜け駆けをして、フリーランスとして頑張ろうとした一夏にアタシの全てを捨てて無理矢理付いて行った。

一緒に暮らしてからは、みんなから邪魔されない嬉しきで沢山一夏に甘えたし、身の周りの世話や選手として頑張る一夏を支えてきた。その報いが救われたのか、やっとアタシを一人の女として認識してくれた。

だけど、今思えば一夏に対して卑怯だとは思ったが、あの襲撃事件の時に『一緒に寝てくれたら許す』と言つてからはベッドに一緒に寝てくれたし、一夏の腕に抱き付きながら寝られるのは嬉しいが手を出してくれない事だけは不満だった。

だから、アタシはあの時に恥ずかしい格好（下着を身に着けてない裸エプロン）してまで誘惑したのにあつさり流され、怒りからたまりに溜まった欲求不満から一夏を襲い一晩中蹂躪して、結果的にアタシはそれが原因で妊娠してしまった。

妊娠が判り、選手から引退しなければならぬ事だけは流石に泣いた。

だって、一夏の隣で競い合い歩んで行きたかったから…

これは、みんなとの約束を破った事に対しての身から出た錆かも知れない。

でも、正直に言えば全く後悔はしていない。

だって、愛してやまない可愛い娘も愛する夫の両方を手に入れたから…

だけど、一つだけ悔やむなら、みんなから一夏をアタシの夫として奪ってしまったことだけだ。

だが、みんなは結婚式ではただ一人除いて祝福してくれたが、クロエだけは結婚式には参加してくれなかった。

そして、今度はレナスの栄養失調での一件だった。

ラウラから聞いたが、クロエが夫との事がある度に妹であるラウラに甘えに来るらしい。

今回はあの件で親子で日本に来ていた。



そして、結果的にラウラの自宅に甘えに行ったら居なくて、甘えたい反動からあんな事をやったのではとラウラが分析していた。

今更だが、居ないラウラを探す為にクロエはインターネットを通じて衛星のカメラから見ってしまったのだろう。

甘えながら愛でるはずだったラウラとレナス親子が一夏とアタシの自慢の料理に餌付けされて可愛がられている光景と娘達と無邪気に遊びを学び楽しそうに遊ぶレナスの姿に…

だから、今更だけど謝りたい。

これはアタシの問題でもあるのだから…

旦那と子供達三人が死んだ魚の眼をしたままのリビングでは放心状態の間に自宅から出てラウラを単車の後部へ乗せて横田基地へ向かったのだ。

横田基地には既に到着し離陸準備中のドイツ空軍所属の六発式ジェットエンジン搭載の超大型戦略爆撃機ヨムンガルド（黒兎隊仕様）が二人の為に遥々ドイツから迎えに来ていたのだ。

無論、ヨムンガルドならドイツまで早く尚かつ無補給で行けるしクロエの先回りして、浮気した旦那にやり返す事が出来るだろう。

こうして、鈴とラウラは一路ドイツへ向かったのだ。

正氣に戻り、鈴とラウラが居ない事に気付いたが店を閉める訳には行かないので仕込みを始めたのだ。

「鈴の出産以来だな…」

と一人しか居ない厨房に懐かしみながら、仕入れで入れた大量の野菜が入ったダンボールを開けて野菜を刻み明日使う分を桶に入れて行く。

夕飯までには人参、キャベツ、ニラ、白菜などを終わらせ、夕飯後には居酒屋として店番をしながらマドカと一緒に叉焼や日替わり定食で使う牛肉を細切りに刻んだり仕込んで行ったのだ。

翌日、三人娘とセシリアの娘オーロラは朝食を済ませて学園だったり小学校に登校する。

俺は、開店までに残りの仕込みを終わらせて、現在進行形で居候で住み込み店員であるはずのセシリアとメアリーは未だに起きて来ない。

ただ、マドカだけは別で閉店後もラーメン用のスープの仕込みと夜の部でもラーメンを出しているので部屋でまだ寝ている。

「何時まで寝てやがる!!」

セシリア、メアリー起きろ!!」

叫ぶが起きてこない為に部屋に行くが、部屋から聞こえるのは聞いてはイケナイ寝言だった

「いつ、一夏さん…そこは…あはん♡…いけませんわ…」

「アツふう!」

らあめえ♡…吸つちやイヤあ…」

二人揃ってどんな夢を見ているのか小一時間ほど問い詰めたいが藪から蛇に成りそうなので辞めておこう。

罅が開かない為、部屋に突入して布団を捲り上げたが百合百合しい光景に頭を抱えた。

「きゃっつと起きろ!!」

「きゃあ!」

寝言を言いながら誰かとは言わないが勘違いしながらR18指定の絡み合う二人と色違いのグリネジエ姿と部屋に充満する女性特有の甘い匂いにドキツとして首裏をとんとんしながら急ぎ部屋から出たが、本来、起こし行く事になっていた鈴がいたら半殺しでは済まなかった。

二人も慌てながら直ぐに起き上がり制服であるチャイナドレスを着て下りて来て用意した朝食を済ませた。

開店直前にはマドカが覚めて開店となった。

開店後はいつも以上に忙しく、学園からの常連やサラリーマンなどが多数が来店し、麺類担当のマドカに手の足りなさから厨房で日替わり定食である青椒肉絲を炒め鍋を振るう。

「セシリア!!」

三番、十六番テーブルの日替わり上がったよ!!」

「はいですわ!!」

四番、五番テーブルに日替わり定食二つですわ!!」

と料理店は戦場だ。

そう、青椒肉絲定食が日替わり定食の日だけは何時もの倍は客がくる。シンプルに筍、ピーマン、牛肉だけだが、合わせ調味料に入れるのは熟れた渋柿のペーストを砂糖替わりに使うため、更に天然の甘みを引き出してくれる人気メニューである。

そして、渋柿のペーストを作るにも仕入れと渋柿を熟成させるなど手間が掛かり、量が作れない為に限定の二百食分が限界だった。

それでも、一時間もしないで完売となり、次に無くなるのはマドカ特製の焦がし醤油と鶏ガラスープの醤油ラーメンと鯛出汁ベースの塩ラーメンだった。

漸く、昼飯のピークを過ぎた頃にはラーメンと日替わり定食は材料切れによりメニューから消えていた。

そして、閉店となる三時を前に懐かしい人物が訪れた。

その人物は更織簪。

今では篠ノ之束博士の愛弟子としてIS関連では有名な人物であり、IS学園に研究所を移して研究している。

ただ、簪は研究に夢中になると研究室に引き籠るため、気付けば寝食を忘れて過労で倒れている事があった。

そんな簪もこの料理店の常連客であり、裏メニューの全てのメニューを知っている一人だった。

ただ、鈴が苦言で言って注意はしていたが、ボサボサの髪型にズレた眼鏡に極めつけはヨレヨレの乱れた衣服。

鈴ですら女を捨てたと言わざる得ない姿。

師匠である束さんが見たら卒倒しそうな程だった。

だが、今日はそれ以上に酷かった。

顔は痩せ細り、目の下には酷い隈が出来て何日寝てないのか丸わかりな上、いつも以上に乱れた服装と完全に爆発した髪型だった。

これを観て、俺は

コレはアカンやつだ。

と思つた。

「あつ、「夏くん、何時もの…」

簪からは何時ものと言えば業火野菜炒め定食だった。

更織メイド軍団の一人で元は刀奈のメイドだった虚さんは五反田と結婚して俺の師匠の店を夫婦で切り盛りしている。俺も修行時代に簪が姉の刀奈を連れて来て食べているのは見かけていたから知っているし、それしか注文しない。

しかし、待ち時間まで研究とは…

「忙しいのか?」

「うん、日本国家代表用の専用機の製作依頼が3機も来てるし、その他に代表候補生の専用機まで…」

鍋を振りながら聞いて見ればブラックな内容だった。

千冬姉の優勝以降は日本は一回戦敗北ばかりで満足の結果を残せて居ないし、国家代表クラスの優秀な選手は早々とフリーランスになつたり、自由国籍で他国に流れたり、終いには簪の様に研究者になつていたからだろうし、マドカも元は日本国家代表だったが俺が引退するなり引退している。

それに、俺の娘は学園で千冬姉と束さんにより護られているが迂闊な事をすれば俺と鈴が出て来る事を理解しない日本政府。

簪に業火野菜炒め定食を提供しながら考えてしまう。

これで良いのかと…

そんな時、店の扉が一斉に開き黒服の連中が雪崩込んだのだ。

日本政府からの注文に頭が真っ白になった。

理由はわかるだろ。

国家代表用の専用機の製作と学園に通う代表候補生の専用機を合わせて5機を作れと注文が来たからだ。

余りにも無茶な注文だった。

そして、マドカさんの現役時代の専用機だった4世代型広範囲殲滅型射撃タイプの胡蝶は誰にも扱えないし、胡蝶は師匠が管理している為に手が出せない。

打鉄式式をベースにした近接型の疾風と砲戦型の烈風は3世代型でしか無く、4世代型やドイツの様に5世代型を作れる訳でないが、日本に6世代型と7世代型は存在するがあくまで個人所有だ。

今、目の前にいる一夏君の家族が所有している。

師匠謹製の機体だ。

そして、日本政府は散々あの家族に手を出して来た為に師匠にすら見捨てられた。

私も研究所を学園内に移しても要請である為に作るしか無かった。寝食すら忘れる程に：

師匠からはコアの作り方を教わっていたから、コアに困ることはない。ただ、結婚したクロエさんの方が何倍も上手く作り上げる。

無茶な注文から徹夜続きで6日目。

お腹も減り、体力も限界だった。

機体も個人の仕様に合わせるだけまで完成させた4世代型のI.S。

頑張った私にご褒美だ。

だから、学園内の研究所から私の癒やしのおアシスである中華料理店織斑へふらつきながらも、モノレールに乗り向かう。

そして、私のオアシスに着き何時もの業火野菜炒め定食を注文する。

一夏くんが心配しそうに私を見ながら鍋を振るう。

鍋の中はキャベツ、人参、ニラ、玉葱、木耳、豚バラ肉、もやしとバランス良く入った野菜やお肉が香ばしい匂いを出しながら鍋で踊りを踊る。

そして、胡椒と塩の雪が降り更に旨さを引き立てる。

最後の仕上げはオイスターソースと蔐の合わせ調味料。これだけ

で食欲が更に増すような匂いを暴走させる。

そして、完成し私の前に業火野菜炒め定食がやって来たのだ。

最初は、卵スープからだ。

ふんわりとした舌触りの卵に鶏ガラ：えっ!?

今日は違って乾燥帆立から取った出汁をベースにした卵スープだった。

もう、我慢出来ない。

箸で野菜炒めを掴み、豪快に頬張る。

やはり、何時もの味だ。

そして、その余韻に余すことなくご飯を掻っ込む。  
行儀悪いだろうが関係ない。

6日ぶりの食事に大好きな業火野菜炒め。

それをひたすらに野菜炒めを頬張り、ご飯を掻っ込む。ルーチン化した作業。

誰にも邪魔させない。

そして、最後は卵スープで流し込み至福の時間。

本当に生き返ると言っただけはこんな感じだろう。

しかし、余韻に浸っていたらお店の扉が開いた。

雪崩込んだ連中は更織ではお馴染みの日本政府の連中だった。そして、私を捕まえるべく店内で暴れた矢先に店主がキレた。

「更織簪博士!!」

機体はどうした!!」

「てめえ等、誰の店だと思っただけで暴れてやがる!!メアリー!!、セシリア!!、マドカ!!馬鹿共を片付けるぞ!!」

「「はい!」」

と私に怒鳴り込む一人の日本政府の人だろうが、ここが誰の店か先に理解すべきだった。

お玉が人数分である全八本が一斉に飛んでいく。

全て連中の額に当たり、連中は悶絶している。

そこへ…

「えっ!?

メアリーって、あのイギリスの女王様だよね!!

なんで、『鮮血の戦姫』がいるの!?!」

と私は叫びツツコミを入れながらも、日本政府の連中はメアリーさんと一夏君により殺されはしなかったがボコボコにされて近所のゴミ置き場に出したのだった。

しかも、ご丁寧にロープで縛り上げて『生ゴミ』と張り紙して出したらしい。

私は再び、ヒーローを見る事が出来て嬉しかったが師匠からメールが来ていた。

メールの内容は

『ハローハローカンちゃん!!』

暫くは、いっくんの所でお世話になってね。

今、帰るのは逆に危険だし

クーちゃんが離婚して日本にまた来るからよろしく』

「なっああああ!?!」

シンクロしてハモる私と一夏くんの絶叫。

一夏くんも鈴さんからメールが来ていたらしく内容を見て、何故か死んだ魚の眼をしていたのは何故だろうと聞きたいが止めて置こうと思う。

I shall return in Kuroe

毎回、使い回されてはいるが此処は成田空港。

到着ロビーに現れた三人の美女に男達は目を見張る。

一人は茶髪でショートヘアに纏めたアジア系の美人だが左薬指には銀色の指輪を嵌めている事からも人妻だと判る。

もう二人は双子の様に似た顔立ちでプラチナシルバーの髪を背中まで伸ばしたストレートヘアーだが、姉だが妹だかは判らないが片方に抱き付き甘える姿はとて百合百合しい空気が流れロビーに居た男達は鼻から一筋の温かい物が流れていた。

そう、この三人はドイツから帰って来たのだ。

だが、特に茶髪の女性は非常に疲れている様子なのは抱き付いている女性が原因だと断言出来るだろう。

「クロエ、いい加減ラウラから離れさない!!」

怯えて震えてるじゃない」

鈴はラウラを愛でる様に抱き付いているクロエを叱るが『これはクロエの物です』と更に周囲に人形の様に見せびらかして愛でるが、抱き締め事で更に潰れた胸部装甲に目は釘付けとなり男共は黄色い声を上げて鼻血を吹き出していた。

「鳳さま、嫌です。」

可愛い妹を愛でるのは姉である私の権利であり特権です」

震え怯えるラウラを抱きしめ愛でるクロエはドヤ顔で答える。

「アンタねえ!!」

アタシは結婚したから、鳳じゃなくてお・り・む・らよ!!

判った？」

クロエとのやり取りで更に疲れる鈴に『もう、いやああ…』と念仏の様に呟き力無く項垂れ、諦めの境地に達していたラウラだった。

ドイツに着いてクロエと合流したが、クロエは学園での着せ替え人



形事件は謝ったが、別の浮気された件は浮気相手の妊娠を知り相手諸共許す事が出来ずに泣き出して結果的に事実を知ってキレた束さんが出てきてしまいアイツと離婚に至った。

理由は言わなくとも判るが、アイツは軽い火遊びの積りで浮気をしていたらしく、相手は同じ機甲戦車連隊の部下で気付けば妊娠中。

そうとは知らず、何時もの浮気だと思いアタシ達に甘えたい理由と八つ当たりをしてしまったクロエ。

浮気相手の妊娠を知ったクロエはアイツに愛想を尽かしてしまい『尽くして来たのに…』と眩き膝を着き泣き出してしまい、それを見たアタシとラウラは当然ながら激怒して黒椿とシュヴァルツァ・レーゲンを展開して演習と言う名の名目でアイツの戦車連隊を全て撃破して来たのだ。

まあ、浮気して妊娠させたのだから当然だが…

演習と言う名のお仕置きが終わって、クロエの所に慰める為に戻った所でクロエを泣かした事を衛星のカメラで見えて知ってしまい、マジギレした束さんによって殴られ顔を腫らしたビットマンはクロエの前で正座中だった。

ただ、アタシ達が来て束さんが片付けた段階で意味が無いのは目の前の光景のせいだと思いたくないのは気のせいだと言って欲しい…

ただ、束さんに肩を寄せられアイツを見下しながら佇む姿で目尻に涙を浮かべながら、ニコニコ笑ってはいるが目が笑っていないクロエと愛娘を泣かした事にマジギレ状態の束さんの姿に恐怖し怯えるアイツとその部下達は話し合い（肉体的言語）が終わるまで全員が土下座状態だったのだ。

そして、未だにキレている束さんからクロエの直筆の署名入りの離婚届を手渡され、震え怯えながらサインするビットマン。

アタシ達も束さんのマジギレ状態を見るのは夫である一夏が最終決戦の時に瀕死の重症になった広範囲殲滅タイプで衛星型のI Sであるエクスカリバーの一件以来だが、未だにあの束さんの姿に慣れる事は無い。

それだけ、マジギレした束さんは怖いのだ。

こうして、束さんに美味しい所を持って行かれ不完全燃焼のままクロエを連れて日本に帰る事になったのだ。

無事にクロエは離婚が終えたが、問題は其れだけではなくクロエはアタシが抜け駆けして結婚した事を未だに根に持っていてアタシと一夏が結婚した事を認める気が一切無いらしい。

そして、クロエはニッコリアタシに微笑み、宣戦布告はして来るし、ポンコツ元貴族と脳筋元女王と共に一夏はアタシと結婚してるのに争奪戦に参戦してくるのではと思っ頭が痛くなるのだった。

再び、空港口ロビー

「いいえ、鳳様。

鳳様の一夏様との結婚にクロエは、まだ認めてません。

それに、クロエは離婚して、また一夏様との恋の続きを再び出来るのです。

抜け駆けして一夏様を射止めたと言ってもクロエの目が黒いうちは認めませんよ？

まあ、瞳は碧いですがね♪」

やっぱり、クロエだと思いが売られた喧嘩だ。

買ってやろう。

「クロエ!!」

その喧嘩、買ったわよ!!

だけど、その前にアタシはお・り・む・らよ!!」

叫ぶが、ため息を吐いて答えてくる。

「はあ…鳳様、強調しなくてもそこは言いたく無いですね。言ったら負けですから。いくら成長したからって頭は脳筋で身体は貧相では話にならないです」

「なっ!!」

ひっ、貧相ですって!?

昔と違って貧乳じゃないわよ!!」

「あら？」

言ってもなんですが、鳳様は身長は158cmでスリーサイズがB79W56H76で、クロエの身長は162cmにスリーサイズがB83W56H80では勝負にならないですね？

当然、クロエが（胸も身長も）大きいですから♪

あつ、言い忘れてましたがラウラもクロエと同じスリーサイズですから♪

「おっ、お姉様!？」

いつの間にスリーサイズを!？」

「ぬっ、ぐぐうう…アンタねえ!!」

人の身長とスリーサイズを勝手に暴露してんじゃないわよ!!」

「あらら、現役時代の一夏様と鳳様のISスーツはクロエが束様に頼まれて作ったのですからスリーサイズと身長位なら見て正確にわかりますよ?」

「そうだったわね。」

でも、どんぐりの背比べじゃない!!」

「ふふふ…」

余裕タツプリの笑顔で三人のスリーサイズを暴露するクロエだが、周囲の男共はアタシ達の裸を想像したのか鼻血を垂れ流していたり、二人の醜い争いから目を逸らしながらも自分の胸を気にし出した女性客達。

最早、空港は二人の口喧嘩と混沌と言う名の戦場化しつつあるのだが、一夏とマドカに店を任せている以上はクロエに口喧嘩に勝てないと悟り手を出す事を諦めて店へと帰宅を急いだのだ。

帰宅するなり、アタシと一夏の『中華料理店織斑』は崩落した外壁に休業中の縦看板、店内に入れば店内の惨事を見て硬直してしまっ

た。  
店内はある程度は片付いているが、壁は穴だらけで宴会用回転式テーブルは粉々になったり四角いテーブルすら二つに割れていたり  
と開店して営業する事が不可能な店内だった。

一夏は壊れたテーブルや椅子を路上に置いてある産廃業者のコンテナに投げ捨てながら片付けをしたり、セシリアとメアリーは店内の掃き掃除に勤しんでいた。

「一夏、何が有った？」

あたしは一夏に質問したらとんでもない答えと怒りが湧いた。

「鈴、おかえり。」

簪が昼ご飯を食べに来た時に日本政府の連中が襲撃に来たよ。

簪は無事だったけど相変わらず無茶苦茶な要請みたいで、なんとか六徹して5機を組み立て上げた後は個人の仕様に合わせるまで完成した所で体力と気力がやばくなってウチに食べに来たみたいがな。やつと、一息着きに來たらさっさと仕上げろとあの連中が來たもんだ。

あの連中、俺が店をやっているのを知っている筈だが、襲撃して來た連中は全員ぶっ飛ばしたが、俺の店だと全く知らなかったらしいな」

「で、一夏？」

日本政府には文句は言う積りなの？」

「別に構わんだろうな。」

店にはメアリーと簪が居たから、イギリスと学園から抗議が行くだろうし、場合によつてはイギリスは元だけど、女王を襲撃したと見て判断して強く出るだろ？」

なら、後は簪は『更織』刀奈の妹だし、束さんの愛弟子だから日本はトリプルパンチを食らうからな、別に構わんだろう。

後、止めに元日本国家代表の千冬姉とマドカが店をメチャクチャにした事にキレてるからなほっとくさ」

一夏の黒い笑みで説明されたが、一番聴きたくない事を聞いた気がした。

千冬義姉さんとマドカの二人がキレた？

何でかな？

アタシも含めてだけど、織斑家の女系って揃いも揃って直にキレる家系なの？

それを聞いて、義理の姉には成りたくは無く、アタシの怒りは消えていた。

更織家にイギリス王家、束さんに義理の姉と妹…

姉妹（千冬義姉さんとマドカ）二人で暴れ過ぎて、日本も店も無くならなければ良いのだけどな…

ああ、でもこの店の惨状だと暫くはお店は休業ね…

「あと、店は暫く休業だが、学園から店が直るまでは学園の学食で店を開いても構わないと刀奈から連絡が来たから受けたぞ」

学園での仮店舗か…

あの人数だから腕が鳴るわね。

それよりも、クロエだった。

「そうだ、一夏。

クロエが離婚してウチに住む事に…」

「クロエか…」

嫌そうに頭を抱える夫。

当然な反応だろう。

現役選手時代にはクロエは一夏とアタシと一緒に寝ているベッドにアタシを床に投げ捨てベッドに潜り込んだり、入浴している所に突撃して一緒に入ろうと画策して来ていたから余計だろう。

それでも、料理の腕前は一夏と同じだから腹が立つ。

だけど、現役時代は試合の機体のサポートは束さんとクロエに見習いだった簪が支えていた事もあるから強くは言えない。

だけど、襲撃で外壁は崩れているし店の内部は使用不可だし防犯の都合上、寝起きしている二階と三階も一階を直さないと娘達を危険に曝す事に成り兼ねない。

なら、一時的とは言え居住と店舗を学園に移すのが最善だろう。

一応、ラウラとセシリア、アタシと一夏の四人は元国家代表だったリフリーランスの選手だから店以外でも臨時講師ぐらいなら何とかなるだろう。

「一夏、刀奈先輩の話は受けるわよ。

だけど、その代わりに店が直るまでは娘の安全を考えたら自宅では

寝泊まりは無理だから、職員寮と空いている学生寮の寮部屋を借りられるか先輩と相談してみてね。

あたしは二階に行つて娘達の着替えとかあたし達の着替えを纏めるわね。

セシリアとメアリーも一応、準備してね。

あつ、忘れてた。

セシリア、オーロラの着替えと荷物もお願い!!

ラウラは言わなくても判るけど自分の着替えとレナスちゃんの着替えを任せたわ」

「鈴さん、わかりましたわ。

メアリー、着替えと荷物を纏めるから部屋に行きますわよ」

「ええ、セシリア行きましよう」

セシリアとメアリーは自分の部屋に向かう。

ラウラもクロエにペコペコしてからダツシユで部屋へ逃げ出したのだ。クロエはドイツから持って来た荷物で行く事になった。

あたしも二階に上がり、娘達の荷物を纏めて黒椿の拡張領域に投げ込み、自分と一夏の荷物を纏めて一階に降りたのだ。

既に、先輩との話が纏まっていた様で調理道具や包丁などを白椿の拡張領域に仕舞い、仕入れ業者には仕入れを暫く停める連絡をしている最中だった。

ただ、仕入れ業者から『おのれ、日本政府許すまじ』と怨念を感じたのは気のせいだろう。

一時間程で店の前には更織家の車が数台が迎えがきており、刀奈先輩の車を先頭にあたし達は学園へと向かったのだ。

そして、夫の携帯電話には学園に向かう車内では店が直るまで約二ヶ月掛かると自宅兼店舗を作った工務店（中国の古代建築専門の工務店）から連絡が来たのだった。

同じ頃、IS学園の駅では…

私と千秋にレナスの三人は今日も自宅に帰る為に学園の駅に来て



にハマったのだろ。

「何故、先生が？」

「ああ、そうだった。

てめえら餓鬼共は期限付きだが、今日から寮に入る事になった。ほれ、寮の鍵だ。

それと喜べ、部屋は1025号室だ。

一夏が学生時代に寝泊まりした部屋だ」

それを聞いた私と千秋は

「イヤアアアホオオオイ、最高だせ!!」

と渡された鍵の番号を聞いて叫んでいた。

ハイテンションの私と千秋に着いて行けないレナスは何故と首を傾げていたが四人部屋だと聞いて喜び、私達のお姉さんであるオーロラと合流して学園に戻って寮に入った瞬間

『キヤアアアアアア!?』

てっ、天使が四人に増えたアアアア!?』

『者共出合ええええ!!』

天使を確保して愛でるのだアアアア!?』

『うおおお!!』

と寮にいる変態共を先にどうにかしないと不味いと思ったのだった。



中華料理店織斑 学園の食堂で奮闘中？ 朝食編

誰も居ない学園の厨房に三人の人影が有った。

一人はこの学園の古株教師の若かりし姿に似ていて、本人より大きい寸胴鍋を軽々とコンロに置き、丁寧の下処理した大量の鶏ガラに大量の香味野菜を投入して鶏ガラスープを作ったり、もう一つの寸胴鍋には一晩水に漬けた乾燥帆立の貝柱を漬けた水ごと投入して行きながらも熱した鍋の熱に汗を流し、その汗を拭い魅せる視線は彼女が現役選手だった頃のように鋭い目付きで灰汁をすくっていた。

もう一人は、店主の妻でありながらも点心の命とも言える皮作りは最も力作業である事は見て判るが、特級点心師である彼女は元からの馬鹿力で練り上げながら大量の生地作りをしていた。しかし、今の時代は機械によりる作業が主流の中、生地だけは機械による作業を嫌い全て手作業で行なっていた。

それは、生地は点心の命であり職人による手の感触と経験が皮の出来を左右するからだろう。

その練り上げた大量の生地は饅頭や小籠包の皮にする為にの小分けにして用意した箱に入れて寝かせる様に布を被せてから彼女は一息を入れた。休憩後は、倉庫から大量の箱を抱えて来て小籠包と揚げ饅頭の具になる豚足から取ったコラーゲンや豚挽き肉、椎茸、筍、屑フカヒレ、香味野菜などを中華包丁を握って物凄い速さで大量に刻んでいく。

彼女が朝食のメニューを選び仕込みの真最中なのは点心係のメニューで人気がある小籠包や手軽に食べれる揚げ饅頭だ。

特に、揚げ饅頭は河北省などの寒い地方では屋台などでは人気のある家庭料理でもあるし、餡を皮に包んで置いとけば揚げるだけで、手早く出来たてを提供出来るメリットがあり、同様な理由で小籠包も小蒸籠に入れて置けば、重箱の様に重ね手軽に大量に蒸し上げられるからでもある。

そして最後は、店主である一夏は切株のように見えるまな板の脇には大量の野菜が入った段ボールと切った野菜を入れる為の大量の空の桶があつて、大量の野菜の下処理中だが中華包丁を握り一心不乱に野菜を切り、切られた野菜はまるで意志があるかの様に桶へと飛んで行き放物線を描いて入って行く。

彼が作るのは、朝から出しても問題ない業火野菜炒めや回鍋肉などの炒め物係の定食や手軽な鶏ガラベースの中華粥などだった。

三人はひたすらに仕込みの真最中だと言えよう。

だが、学食は用意する量が大量であり、今の時間だが朝の三時を過ぎた時間から仕込み作業をしなければ間に合わないからでもある。

ただ、三人にしたら朝からの仕込み作業は迷惑この上なく、本来は学園長との話し合いで昼と夜だけだった筈が前日の寝る前になって急遽変更となり、学園長から朝食からやって欲しいと言われて朝の2時半に起きてからは軽い軽食で済ませ、ひたすら仕込み作業に追われて三人とも学園長に文句を言いたげだがそれすらも忘れてたのだ。

特に朝からの仕込み作業で不機嫌なのは出汁作りと付け合わせのスープの仕込み作業に追われているマドカだった。

スープを煮込み出汁を取るのに時間が必要だ。

だが、マドカは特級麺天師でありプロの料理人でもある。

7時から食堂が開く事を卒業生だから知っていた為に一応、三時から始めれば素材によっては間に合うだろうと思い、スープの出汁に選んだ出汁の具材は二つだった。

短時間で濃厚な出汁が取れる乾燥帆立の貝柱と鶏ガラだった。貝柱は鈴から聞いた夜に飛び出して、閉まる前のアメ横の乾物店から乾貨である大量の貝柱を購入して来て水洗いしてから寸胴鍋に入れて水に漬けて置き、鶏ガラは一度水洗いして血を洗い流す下処理してから使用している。

そして、灰汁を取りながら煮込み澄んだスープが出来ると火を止めて次の作業は麺づくりだった。

朝食で気軽に食べれる麺料理に選んだのは米粉から作るフォー

だった。マドカは軽々と米粉の入った袋を担ぎ厨房に運ぶと米粉で半透明で綺麗で薄い麺を練りあげて作って行ったのだ。

本来、米粉を使った麺はベトナム料理の一部に分類されるが、中国の華南などの暑い地方では普通に屋台などで提供される大衆料理だ。

そして、付け合わせは偶然にも仕入れて入っていたパクチーを思い出して、屋台同様にシンプルに鶏ガラベースの塩味のスープに香味野菜のパクチーと鶏ガラと一緒に煮込みながら煮込んだ鶏胸肉のチャーシューを乗せるだけと思いついたのだった。後はお好みで入れたりする黒酢を用意するだけだった。

他にも、学園の料理人が仕入れてある麺を使つての帆立出汁の塩ラーメンや鶏ガラベースの醤油ラーメンを作れば大丈夫だろう。

五時になり、学園の料理人達が出社して他の料理の仕込みを始めようとするが三人が仕込んだ大量の料理を前に啞然としながら黙々と作業をするのは、この道のプロだと関心する三人だったし、仕込みの手伝いをしながらの交流も悪くないと思えたからだろ。

そして、7時になると学生や教師達が腹をすかしてぞろぞろと食堂に現れたのだ。

そうなると、食堂と厨房は戦場になる。

急な変更の為にメニューの数を少なくしたが、学園の食堂に中華料理店織斑が来ていると話を聴きつけた学園にいる生徒は二つの意味で歓喜して食堂に押し寄せたのだ。

二つの意味は一つは中々、外出届けで許可が降りずに食べに行けずにいて学園に来てくれた歓喜が理由なのと、二つ目は引退したとは言え世界大会を二連覇を達成し、2代目ブリュンヒルデの織斑一夏とタッグトーナメントで無敗のタッグパートナーである織斑鈴音を生で見たいからだろう。

無論、大事な事だから書くが、中華料理店では名物であり畏怖の対象である『空飛ぶお玉』を知らずに騒いだ生徒は問答無用で飛んで来たお玉と静かに食事中の千冬姉の出席簿の餌食となったのは言うまでもない。

騒げば二人のブリュンヒルデの餌食になるからと騒がずにいた生徒や教師が食券を買えば厨房の電光掲示板には既に大量のオーダーが入る。それを見ながら注文を捌いていく三人。

中華以外で作る料理人達まで忙しくなるのだ。

そして、忘れがちだが最近ではクラス対抗戦が終わった時期でもありデザートのフリーパスで鈴が作る杏仁豆腐の数種類やマンゴープリンに桃饅頭は料理店の人気デザートである為に、これが食べられる一隅のチャンスと大量注文が来てたりと更に戦場化したのだ。

そんな戦場を混沌の渦にするべく、値段が高額な7800円のお任せ定食を頼んだ阿呆が数人がいた。

言わずとも判るが、一人は学園長だった。

お任せ定食は数が限定でありながらも、その日仕入れた海鮮だったり山の幸を使った贅を尽くした限定の定食である。

この料理は一夏達が学生時代にも存在していて、2500円の高級幕の内弁当がそれにあたるのだった。

そして、限定定食で仕入れたのはフランス産オーマル海老、カナダ産ブラックタイガー海老とキングサーモン、スウェーデン産の山苺など多岐に渡る。

一応、昼用に中国からは角煮に使う金華豚のバラのブロックや焼売用に卵付きの上海蟹や皮蛋を取り寄せている。

相当楽しみにしていたと断言出来る程にニコニコ顔でカウンターに食券を渡して居たのだ。

「一夏君、お任せお願い」

と食券を持参して来る刀奈。

注文された以上、作るしかない。

今日のお任せ定食のメニューはオーマル海老のエビマヨ炒め、フカヒレスープ、海老炒飯、山苺をジャムにして杏仁豆腐に添えたボリュームある内容にお茶には中国産の花茶と呼ばれるお茶で、耐熱ガラス製の急須に入れたお湯の中で咲く花と淹れたお茶の二つを楽しむ高級茶が付くのだ。

仕入れの関係から限定二十食のみ。

刀奈に仕上げたお任せ定食を渡すと業火野菜炒め定食を抱えた簪と一緒に食べ始めたが、ハムエッグセットを持つナターシャ先生も一緒にだったようだった。

三人が去り、未だに來ないのは十夏に千秋にレナスにオーロラの四人だった。

「二夏、馬鹿娘共が來ないわね……」

「ん？ そうだな。早くこないともうすぐ閉まる時間だな……」

「あっ!？」

そう言えば、馬鹿娘共の部屋つて一夏が卒業まで使つてた部屋だつてオータムか言つていたわね……」

「まさか……」

「そのまさかね……」

「二人共、パパっ子だからな。」

想像はしたくないが、鈴の想像通りだろうな……」

変なスイッチが入つただろう馬鹿娘共に夫婦二人で溜息を吐いて、鈴は仕事用のエプロンを外して寮へて走つて行つたのだ。

「全く、馬鹿娘が!!」

アタシだつて、学生時代は一緒に部屋に成れなかつたどころか、一夏のベッドをクンクンスカスカしたかつたわよ!!

一緒に部屋に成れた、箒、シャル、ラウラ、刀奈は狡いわよ!!

今度は、馬鹿娘!？」

ああああ!!

ふざけるなああああ!!」

ただ、廊下の壁を蹴り壊す鈴の怒りと呪詛の呟きは聞かなくなった事にして置こう。

俺だつて、命だけは大切だからだ。

場所は変わり生徒寮の1025室

変態暴走機関車状態の馬鹿姉妹は自宅の両親のベッドから拝借した毛布に包まりクンクンスカスカ力をしていた。

彼女達もクラスメイトに言えないが最早変態である。

弁明も出来ないこの状況を初めて見るレナスとオーロラは頭を抱えるのだった。

「あつ、いい……パパの使ってた寮部屋……」

「うん、分かる……自宅から通学だったら味わえない……」

「お姉ちゃん、こんな匂いに包まれたら■■■■したくなるよね？」

「千秋、生々しいわよ……でも、判る……」

「二人を停めて起こさなくて良いのか？」

「うん……無理」

「なら、着替えて逃げるか？」

「そうね……」

私とオーロラは諦め、着替えて部屋から逃げ出したのだった。途中、馬鹿二人の母親である鈴音さんとすれ違いはしたが気にしないで置こう。

だって、寮部屋から聞こえて来る怒声は紛れなく

「何時まで寝てるのよ!!この馬鹿娘がああああ!!」

「ひゃアアアアアア!?!」

鈴音さんに叱られる二人の悲鳴だからだろう。



中華料理店織斑 学園の食堂で奮闘中？ 昼食編

朝食の騒ぎから、メニューは変更となった。

まず、鈴が担当するメニューは点心はデザートと焼売だけとなり、他はパイナップル入りの広東風酢豚に土瓶に詰めて煮込む角煮に上海蟹と皮蛋を贅沢に使った焼売と決まった。

マドカは麺料理に拘り、牛肉タツプリの肉そばと担々麺をメインに海老餃子がサイドメニューにした定食とした。

俺は、金華豚を叉焼にしてから全てを刻み炒めた叉焼炒飯とマドカが作る海老餃子を貝柱の出汁のスープに合わせた水餃子の定食と店では馴染みの熟成させた渋柿のペーストを隠し味にした青椒肉絲定食、キャベツタツプリの回鍋肉定食を担当する事になった。

無論、お任せ定食は限定40食のお弁当で中身は雛鳥のお腹の中身を綺麗に洗い流してから筍や椎茸、お米を詰めてオーブンでじっくり焼き上げた炊き込み御飯にキングサーモンを昆布と酢で締めてから薄口醤油に漬け込み、パクチーと海老をライスパーパーで包んだ生春巻き、鴨を吊るして炭火焼きで香ばしく焼き、鴨皮を一口大に切り出して千切りしたネギを付け合わせにした北京ダックとデザートにマングロープリンを合わせた定食である。

値段は4500円と朝食より安くしている。

お任せ定食はお昼が始まるなり完売。

その他も看板メニューだっただけに凄まじいスピードで仕込んだ材料が無くなって行く。

特に鈴の焼売定食とマドカの担々麺定食の人气が凄まじく、開始五分で売り切れとなった。

朝食とは違い、食堂に来る生徒と教師の数はかなり多く、注文と言う名の嵐は終わることは無い。

それでも、三人はプロであり特級が付く厨師としての意地で注文を捌いて行く。

まるで、炎と食材がダンスを踊るかの様に可憐で美しい光景。



鈴音は直径50センチの特注中華鍋を振るい、中で踊るのは大量の色とりどりの酢豚の具材。

マドカは中華鍋を片手に担々麵に乗せる牛挽き肉が宙を舞い。

一夏は片や青椒肉絲で片や回鍋肉を作りながら二つの中華鍋を振るう。

そんな厨房の中を観て、生徒や教師達終いには厨房で働くコックまでが三人の動きに見惚れていたのだ。

それでも、注文は増えて行くのはそんな光景を観たら食わずには居られない生徒や教師の心理だろう。

だが、注文を捌くにも限界は来る。

「一夏!!」

回鍋肉追加三十人前追加よ!!」

「マジか!?!」

キャベツと豚バラの仕込みがもうないぞ!!」

「一夏、アレをやるわよ!!」

忙しい悲鳴を上げる鈴音は一夏にアレをやらせるしか無いと思いつぶ。冷蔵庫から取り出した大量の豚バラと箱にある仕込み前的大量のキャベツ。

一夏と鈴音は中華包丁を握ると気合をいれる。

「二覇!!」

二人息のあつた包丁捌き。

大量に宙を舞う刻まれたキャベツ。

刻み終われば、豚バラを刻み油通しする。

生徒や教師が観れば二人がトチ狂ったようにに見える。しかし、中華鍋に投入された山盛りのキャベツと油通しした豚バラ。

『えっ!?!キャベツを一気に!?!』

「はああアアアアアア!!」

『マジで振るえるの!?!』

一夏と鈴音は精神統一すると鍛え抜かれた筋肉がメキメキと軋み中華鍋を一気に振るう。

もし、一夏が上半身が裸なら鍛え抜かれた筋肉に見惚れて女性達は鼻から暖かい物を流しただろう。

鬼神迫る表情から振るう鍋は芸術だろう。

燃えるのではと思う火力で炒められているキャベツは凄まじい速度で回転しながら火が通って行く。鈴音が合わせ調味料をボールで作って投げ渡すと振り向かないで片手で受け取り鍋に合わせ調味料を投下する。

炒め終われば、マドカが用意した皿に次々と盛って行き回鍋肉定食が提供されて行ったのだ。

回鍋肉定食の回鍋肉を食べた生徒や教師は最早至福の頂点を味わって居るだろう。

何故なら

『おっ、美味しい!』

至福…』

ト口顔となり至福の時間を感じていたからだろう。

夫婦二人が回鍋肉をやっている間にも、食堂には生徒や教師は更に増える。

そして、提供した数は軽く300食を越える。

しかし、時間は有限だ。

昼休みはもうすぐ終わる。

「ラストスパートよ!!」

と鈴音が気合を入れて定食を作り提供して行ったのだ。

昼休みが終われば、つかの間の休息。

「朝以上に忙しかったわね…」

「そうだな。鈴…」

鈴音を自分の肩に抱き寄せると、鈴音は目を細めて猫の様に甘える。

バカッブルともおしどり夫婦とも言える光景。

厨房は二人のピンク色の雰囲気になり、マドカはそんな空気に当てられたのか濃い目の烏龍茶を淹れて飲みながら目を逸らしていたが

若干羨ましそうに睨んでいた。

しかし、この厨房は中華料理店織斑ではなくIS学園。

そして、これだけは言える。

IS学園は女の園とも言える学園で甘々空気は猛毒であると。

そんな光景を学園の教師や移動中の生徒が観ればどうなるか判る  
だろ。

二人の甘々な空気に耐性が無かったり、自分に彼氏又は旦那が居ないのだから、見せ付けられた教師や生徒達はそこら中の壁や床を叩いたりして激しい嫉妬の嵐が吹き荒れていたのだから。

「むっ、むつきいいい!？」

「ずっ、狡いですわ!!」

と実技指導で移動中のセシリアはそんな甘々な二人に対してハンカチを噛みながら悔しがり。

「鳳様!!」

「直に変わって下さい!!」

と実力行使で鈴音を一夏から離そうとするクロエ。

「いつ、一夏様!？」

「大衆の前で…」

メアリーは耐性が低かったのか顔を真っ赤にしてフリーズして立っただま気絶していた。

しかし、メアリーに関しては誰かが武蔵坊弁慶と言ったが為、本人に聞こえてしまってキレたメアリーが復活。大剣を握り言っただろう生徒を『死の鬼ごっこ』デスマーチを繰り返していたのだ。

それでも、クロエを軽く捻り甘える鈴音に一夏は苦笑しながら仕事で頑張った妻の頭を撫でながら甘やかしたのだった。

中華料理店織斑 学園の食堂で奮闘中？ 夕食編

夕飯は昼よりは少なかったが、それでも生徒や教師は多かった。

「二夏、刀奈さんに相談して昼と夜だけにして欲しいわね。

流石に仕込みがっらいわよ」

「ああ、相談はするさ。」

昼と夜だけにしないと、仕込みだけで寝不足になるしな」

他愛のない夫婦二人の会話。

店では昼だけなのは仕込みが大変でもあるが夜の店は昼の半分だけ仕込み、後は居酒屋として酒の摘みだけを仕込むだけだった。

学園では今迄とは全く違い定食など作る量が多く、サラリーマンなど大衆向けの濃い味付けだったがここは女子校で味付けと脂っこさは控えなければならぬ。

そんな女子高生達と同性であるが為にカロリーを気にする年代だと理解する鈴にしては大切なあの店の方が気にしないで済むと気楽だったと思っていた。

それから食堂は閉まり、時刻は既に生徒達の就寝前だが私達料理人は翌日に向けての仕込み作業をしなければならず、特にマドカは手間の掛かるスープを煮込んでいる所だったし、笹一杯の刻まれた野菜は冷蔵庫へ仕舞う夫と包丁を研ぐ作業の鈴の二人の会話からして朝の朝食の提供に憂鬱気味だった。

ただ、笹を仕舞った夫だけは許可が降りた居酒屋をやる為に大量の鶏もも肉と葱を切り始めて串に刺したり鶏レバーの焼き鳥の準備を始めていたし、私も初めてだが焼き鳥の一部だけは夫が学園に来てからは許されてつくね作り練り上げながら竹串に刺して準備していた。

そんな時だった。

「ハアハア…すくいくまくせくん!!」

食堂は既に閉まり、居酒屋の準備中に駆け込んで来た一人の女性。

特徴的な間の伸びたような口調にたゆんたゆんに揺れる巨乳にしては40歳前とは思えない童顔に見覚えがあった。

「麻耶先生!？」

私は懐かしさと驚きに叫んだ。

「まだ、食堂は…」

そう、駆け込んで来たのは御手洗麻耶先生だった。

またの名を年下バスター。

私達夫婦の中学からの悪友である御手洗数馬と結婚して三人目の産休から復帰したと娘から聞いていた。

そして余談だが、もう一人の悪友である五反田弾は布仏虚と結婚して五反田食堂を継いでいる。

妹の蘭は現在の日本の国家代表であるが、大会での結果は一回戦敗退していた。

「食堂は終わりだけど、居酒屋はやるわよ?」

「よっ、良かったです」

産休から復帰しつ早々から、織斑先生と篠ノ之先生に仕事を押し付けられて終わったのが今でしたし、娘達を預けた千葉の実家に帰るにしても銀座につく頃には終電で帰るより学園に泊まるのは確定でしたから」

「そっ、その…うちの義姉がすいません…」

私は相変わらずの義姉の暴君ぶりに頭を抱えるが、被害者である麻耶先生に謝るしか無かった。

内心、義姉に結婚出来ない理由がそれだと気付いて欲しいが無理だろう。

「いえ、いえ…織斑さんが謝る必要は…」

「いや、愚姉が本当にすみません」

「一夏、お詫びに居酒屋でも軽食メニューは有ったわよね?」

「そうだな。」

お詫びにご馳走するか…

マドカ!!」

「お兄ちゃん何?」

「また、愚姉が麻耶先生に御迷惑を掛けたから何か出してやってくれ」

「また、駄姉!!」

産休から復帰したてだから残業はさせるなって言ったのに!!」

マドカは怒りながらも、冷蔵庫に寝かせてある製麺前の玉をと取り出して青竹で踏みながら玉を伸ばしながら麺を製麺して行く。

佐野ラーメンの様な麺打ちだが、かん水を使わなくても強いコシが生まれるらしい。

製麺した麺を茹でている間に器に特製焦がし醤油、魚粉、鶏油、鶏ガラスープを順番に投入して茹で上がった麺を入れて又焼とメンマを乗せて醤油ラーメンを麻耶先生に出したのだった。

出したメニューは裏メニューである宇都宮ラーメンだった。何故、マドカがと思うが神奈川にある店で宇都宮ラーメンを出せるのはマドカただ一人だけだった。

まあ、マドカはご当地ラーメンなら全て作れるのだ。

麻耶先生はと言うと、宇都宮ラーメンを見た途端に目を輝かせてラーメンを食べていた。

「まさか、夫の転勤先のラーメンが食べれるなんて…」

奴は、宇都宮に転勤中らしい。

「あれ?」

お子さんはどうしたのよ?」

鈴は母親なのか麻耶先生のお子さんを心配していた。

「さつきも言いましたが、子供達なら私の千葉の実家に預けてますよ。数馬くんは転勤が多いですし、私は学園の教師で中々帰れませんから」

と言っていた。

鈴も自分の夜食であるラーメンを作り、麻耶先生と一緒にラーメンを食べながら子供談義に夢中となっている最中、俺が焼き始めた焼き鳥の匂いに釣られて教師達が集まり出していた。

「焼き鳥盛り合わせと枝豆にビールだ一夏!!」

焼き鳥の匂いに釣られてやさぐれ気味の筈が注文すれば、連れの名ターシャ先生は何時ものメニューを注文していた。

「私はコーラにフライドポテトの盛り合わせを頂戴」

ナターシャ先生は今日は飲む気が無いのかコーラを注文したがLSサイズを頼んだ事から、やさぐれ気味の筈の事だから束さんに対する愚痴でも聞くのだから。

いつの間にか来たティナも仕込みを終えたマドカを連れて話し込んでいる鈴と麻耶先生の輪に入り、持参しただろうアメリカ産のビールとナッツで話を盛り上げていた。

「おい、一夏!!」

オレとスコールにチーズの盛り合わせと赤ワインだ!!」

プライベートな時間を楽しもうと普段着姿のオータムとスコールは三種のチーズの盛り合わせとイタリア産の赤ワインを注文して生徒達の授業での実技談義をしていた。

「全く、織斑姉妹は…」

「まあ、それでもクラスでは優秀なんですよ？」

「だがよスコール。」

最近、オレに影響されたのか戦闘狂になって来てやがる」

「確かにねえ…織斑姉妹だけじゃなくて、クラス全体があなたの戦い方に似てきてるわよ? ティナちゃんじゃ、経験不足であなたを抑え切れないものね…」

「スコール、うるせえ…」

だから、悩むんだよ…」

荒々しいのは自分でも分かってるからよ…」

娘の担任だけに頭を抱えるのだから。

サービスで赤ワインに合う串焼きの牛バラ肉の塩焼き付けたのだった。

「おっ、一夏済まねえな…」

「いえ、馬鹿娘の事ですいません…」

「気にすんなって。」

元から荒々しいのは鈴音に似たんだろ?」

「そうね。」

容姿からしても似てるもんね。

でも、双子なのに見分けるのが楽で良いわね。

十夏は一夏に似て黒髪で、千秋は鈴音ちゃんに似て茶髪だもの。

将来は美人確定ね」

スコールは三年生の担任だから双子姉妹を褒めるが、オータムだけは担任であり娘の実状を知るだけに頭を抱える。

昔なら見られない光景だと思っ。

「でもよ、国家代表資格を取りながら生徒会の権力を使って自由国籍を修得しようとしてんだぜ？」

「多分、フリーランスでタッグトーナメントを出る気ね…」

「おい、ちよつと初めて聴くんだが!？」

馬鹿娘の行動力には脱帽だが、まさか自由国籍からの出場を狙っていたとは知らなかった。

多分、束さんと千冬姉は知っているだろう。

「あら、あの二人なら知らないわよ。国家代表の資格は取れたのに年齢制限で駄目っぽかったからね」

俺の思考を読み、知らないと答えるスコール。

「ただ、もし資格があるなら日本政府が黙ってねえだろうな。

もうすぐ、臨海学校だけに心配だぜ…」

一学年の専用機持ちは確か一組に二人とオレのクラスの三人を併せて5人だけだった筈だ。

学園だけなら何とか護れるがな…」

オータムは更に憂鬱な表情で心配事を愚痴っていた。

確かに、今の学園なら元国家代表や元亡国企業などのIS乗りのベテラン級の専用機持ちは多数いるから安全だと言える。

それでも、娘はトラブルを呼ぶ性質だけは俺と似ているから余計に心配だった。

シリアスな空気の中、あの二人がとうとうやって来たのだ。

「いっく〜ん!!」

焼き鳥盛り合わせと黒霧島のボトルを頂戴!!」

とやって来た束さんと



「二夏!!」

私にも刺し身の盛り合わせと大吟醸だ!!」

最凶の飲ん兵衛である千冬姉。

麻耶先生の悲惨さを考え、やる事は同じだった。

「お前に食わせるタンメンはねえ!!」

「ぎやアアア!!」

ズゴオオ

お玉を全力で投げて二人を撃沈するが、鈴を始めとした他の連中の全員が何故かズッコケている事に疑問すら感じるのだった。

「二夏、あんたねえ!!」

くだらないギャグかましてんじゃないわよ!!」

「グッハア!」

ただ、復帰した妻（鈴）から全力のドロップキックを喰らった事だけは懐かしく思うのだった。

## 日本政府の暗躍と刀奈と麻婆豆腐

「何故、あの中華料理店織斑から莫大な金額の請求書が来てるんだ!!」

怒鳴る日本政府の官僚。

「更織簪博士が日本代表と代表候補生用に制作中の専用機を急がせる為に匿おうと航空自衛隊の特殊部隊が動きましたが尽く失敗はしましたが中華料理店は半壊。」

しかし、報復に元日本代表の織斑姉妹によって百里基地は半壊して所属の打鉄参式率いる部隊は半数以上が壊滅的な被害です。

尚、作戦失敗の原因としましてベテランならあの店に手を出さない筈でしたが、今回は若手ばかりで中華料理店織斑だと知らなかったようです」

「バカモン!!」

あの店にはイギリスの元女王のメアリー殿下の下宿先でもあり織斑家の自宅でも在るんだぞ!!

しかも、メアリー殿下と織斑一夏によって撃退されているじゃないか!!

「貴様等のせいで更織家だけならまじだが、イギリス政府からはメアリー殿下襲撃に対する賠償と謝罪要求とIS学園から抗議が殺到しているんだぞ!!」

「どうすんだ!!」

「知りませんよ!!」

百里基地の修理と織斑一夏の自宅の修繕費をどうするかが先ですよ!!

「中国政府まで敵にしたくない!!」

最早、官僚同士の責任転嫁の応酬。

そして、人気店である中華料理店織斑の地下にあるIS用アリーナを除き、地上施設の自宅兼店舗は半壊しており、一夏から修理を受けた中国の工務店からは中国政府経由して4億円近い請求が来ている

のだ。

当然、官僚の一部の暴走で無理矢理行つた作戦であり内閣を通してないのでから払える予算は全く無い。

しかし、払わなければ中国政府から抗議は必須だと顔を真っ青にしていた。

「そもそも、あの夫婦はIS委員会公認だからと専用機を日本政府に渡さず、引退しているのだから専用機を素直に渡せば良いのだ!!」  
官僚が無茶苦茶な事を言つてはいるが、織斑夫妻と織斑姉妹の専用機は篠ノ之束博士自身が開発した機体であり一夏と鈴音へプレゼントした機体だ。それに、織斑姉妹の専用機は姉妹が身を守る為に博士自ら開発して渡した機体である。

日本政府がとやかく言う権利は一切無く、織斑家の全員は篠ノ之束博士と委員会との政治的な取り引きによりIS委員会からは個人的な所有を特例で認められている。

それでも、日本政府は進化して7世代型とは言え喉から手が出る程欲しい超高性能な機体でもあり、あの夫婦の娘である織斑姉妹の専用機も全世界が開発困難を極める6世代型だから同じ事が言えるのだった。

織斑夫妻の日本政府への不信任は根強く、過去に白椿を日本の専用機にすべく学園在学中である織斑一夏を無理矢理に代表候補生にしたが、姉の織斑千冬と開発者である篠ノ之束博士により魂胆を見抜かれて卒業と同じくして自由国籍を取得されて失敗。

幾度も無く専用機の引き渡し要求を行ったが拒否されてしまい、無国籍によるフリーランスの選手として出場して世界大会二連覇の偉業とタッグトーナメントでは後に妻になった鳳鈴音とタッグを組んでの4連覇の偉業をしたのだから日本政府としては面白く無かった。

そして、暗殺と潜入捜査を主にする政府特別調査機関の第零課を使って第三回タッグトーナメントの1回戦後に更織姉妹とのデイナーで会おうと情報を入手して中国政府の刺客を装いながら鈴音の専用機を強奪を企てて実行するが、タッグパートナーだった鳳鈴音への襲撃が逆に全員が彼女一人によって撃退されて逮捕された。

逮捕された連中の荷物からは偽造した中国秘密警察のIDカードにより中国政府の襲撃とIS委員会は判断して中国の国家代表選手二人が出場禁止となったが、逆に織斑千冬と篠ノ之束、織斑一夏を更に警戒させる事になるとは思わなかった。

二人が引退後も日本政府は専用機を渡すように強要したが、篠ノ之博士並びに織斑千冬により委員会を通じて警告して来たのだがそれを無視して襲撃していた。

ところが、襲撃はするが襲撃者達は一夏や鈴音の手によって撃退または瞬殺されて全員が仲良く逮捕となる。

元生徒会の更織楯無により更織家からもこれ以上襲撃するならば日本政府から手を引くと警告されて襲撃を一時凍結したのだったが、今回の襲撃でどうなるかもわからない政府官僚だった。

元を辿れば、第一回以降の優勝が無い日本は後が無かったとも言える。それでも、唯一の戦果は元イギリスの国家代表のセシリア・オルコットと組んでタッグトーナメントを準優勝した元日本の国家代表である織斑マドカだけだった。

そして、現在の国家代表は織斑一夏の後輩の五反田蘭と更織白百合だけだった。

五反田蘭は個人戦は一回戦敗退していて、無理矢理出したタッグトーナメントではドイツの国家代表であり黒兎隊にいる学園時代の同級生と組んで出てはいるが敗退していた。

「こう成ったら、あの姉妹をやるしか…」

「道は無いな…」

一方、更織家とIS学園の上層部は近々IS学園の臨海学校では日本政府の襲撃があると睨み警戒しておりデュノア社から最新鋭量産機のサーペントカスタムを大量購入して打鉄参式改と機種変更して臨海学校で使う更織家傘下の宿にベテランのIS乗りと併せて集中配備していた。

無論、集中配備の指示を出したのは先代楯無であり現IS学園の学園長である更織刀奈本人だった。

「ああつ、もう!!」

学園長室で書類に埋もれ日本政府に対してキレる刀奈。  
当然だろう。

学園の生徒である織斑姉妹の実家と自身の妹の簪が中華料理店織斑が襲撃を受けた時に居たと聞きいた時に刀奈は泣き出しそうになる程に慌てた。

現在でもシスコンぶりは健在だった。

直に更織の暗部を送って倒された襲撃者達を捕縛し連行。尋問から襲撃したのは航空自衛隊の特殊部隊だったと知り顔を真っ青にしたのだ。

そして、織斑姉妹の実家は半壊。

襲撃時に居たお客さん達は地下アリーナに強制避難させられて無事だったと安堵はするが明らかに更織家が出した警告を無視した襲撃だと見ていた。

「この案件は一夏君に知られたら…」

一度は惚れた男性。

刀奈自身は嫌われたくないので必死だったが、報告しない方が逆に怖い。

何より現在、織斑一家は学園の寮を仮住まいとして住まわせており、見返りに学園の食堂で飯店舗を出して貰って常連客である生徒や教師達の不満を回避させているのだから下手な事は出来ない。

「心配なのは、一年生の臨海学校ね…」

新たな書類を見ながら頭を抱える刀奈は、娘に当主を譲った事を軽く後悔していた。

「うーん、白百合ちゃんにこの案件は荷が重いかな…」

そう想いながら刀奈は宿泊施設の防衛任務を更織に命令書として書き判を押し学園長室を出ようとしたが、扉を開けた途端に目に隈を作り疲れ切った顔をした織斑鈴音が立っていたのだった。

「先輩♪」

夕飯を持ってきたわよ」

「えっ?」

たべ…」

にこやかに笑う鈴音に食べたと言おうとしたが、鈴音の無言の圧力に負けてソファに座らされて目の前に出されたのは麻婆豆腐だった。

「お腹が空いたでしょ？」

さあ、どうぞ♪」

「ええ…」

鈴音が持つて来たのは本場四川の麻婆豆腐だった。

正直に言えば、日本人の舌に合うのは豆板醤の辛みと山椒による痺れる辛さを調整してあるからだ。

つまり、鈴音が持つて来た麻婆豆腐は日本人向けに調整していない麻婆豆腐なのだ。

この麻婆豆腐を作ったのは、中国の四川省にある国营の四川飯店で修行をしていたマドカだった。

明らかに辛そうな匂いに顔を引き攣った刀奈は無言の圧力を掛ける鈴音に負けてレンゲを取って食べる事にしたのだ。

「辛っ!? ヒーハァー!? 舌が痺れる!? 何これ!?!」

唐辛子による辛みと山椒による舌の痺れが口内を交互に責め立てる。そして、豆腐による甘みが両者を引き立てる。

そう、永遠のワルツを踊るかの様に…

辛いのが苦手な私にしたら地獄かもしれないが止まらない旨さと辛みと痺れに最早中毒者の様に麻婆豆腐を掻っ込み食べて行く。

気付けば、麻婆豆腐が入っていた大皿は空となり、私は鈴音を見る。

「お仕置きにもならなかったわね…」

「えっ? お仕置き…」

「一夏からの伝言よ。」

明日からは昼と夜のみだけにするからな。

だって」

「朝はどうするのよ!?!」

「私の目の隈を見て判らない?」

「もしかして、かなり寝不足?」

「当たり前じゃない!!」

あんた、中華を舐めるな!!

仕込みが九割で調理が一割と中華では言われているのよ!!  
仕込みだけで寝不足よ!!

工場で作れた物と本格中華を一緒にするんじゃないわよ!!」  
鈴音がキレている理由が判った気がしたのだ。

「ごめんなさい…」

「まあ、先輩の苦勞は判るけどね。それと、夏休みは

一家で中国に行くから食堂は出来ない事だけは言っとくわね」

「旅行なの?」

「違うわよ。」

「一夏の特級厨师の試験よ」

聞いた事が有った。

中国では最高最難関の国家資格があると…

「試験?」

生徒達は夏休みも中華料理店の特別デザートが食べれると思った  
ままだ。

「ちよつと待ちなさい!!」

と叫ぶが、既に皿は片されており、鈴音が学園長室から居なくなっ  
ていたのだった。

「絶対、生徒の暴動が起きるじゃない!!」

どうやって暴動を防ぐか刀奈は更に頭を抱えたのだった。

## レゾナンスへ買い物 織斑家の場合

食堂が閉まり、親子四人で談話室での会話。

十夏と千秋は生徒会が忙しく中々会えないし、俺と鈴にマドカは食堂での仮店舗での仕込みと仮営業で娘と話す機会が無かったとも言える。

だが、俺と鈴は一番に家族との会話と食事やお出かけなどは大事にする。俺の両親は娘の年頃で蒸発し、鈴は中学生の頃に両親が離婚して母方に引き取られた。

だから、この時間だけは大切にしたい。

こいつは自宅が半壊してから学園で行われる初の親子の会話だろう。

「十夏、千秋

もうすぐ、臨海学校じゃないか？」

俺は卒業生だから判るが、コーヒーを飲みながら娘に臨海学校の準備をしたか聞いてみたが

「そうだった!？」

生徒会が忙しくて忘れてた!？」

パパ、水着買って!!」

と生徒会が忙しくて準備を忘れてたいらしい。

そして、水着か…

「懐かしいわね。

一夏がいろんな意味で死にかけてたわね…」

確かに、アレは流石に死んだと思った。

それよりも、浜で水着姿の鈴に肩車をされた方が記憶に鮮明に残っていた。

「懐かしいな…鈴に肩車を強請られたな…」

「何よ。

今を思えば、あたしの生の太股を味わえたんだから役得じゃない」  
確かに、役得だった。



あの頃は鈴と結婚するとは全く思っても無かったし、クラス代表戦の前に鈴からの質問の意味が判っていたらと思うと、もしかしたら娘達と出会うのは早かっただろう。

「それより、マドカは？」

「マドカ叔母さんは「誰が叔母さんだ？ん、小娘、私をクソババアと言っているらしいな？」げっ!? 千冬叔母さん!？」

マドカの髪型と口調を真似して、悪戯成功と口角を上げて笑う千冬姉。見事に誘導質問に引掛かった十夏は全身から冷や汗を流して顔を引き攣っていた。

「ほう、十夏は後でオータムを交えてOHANASHIするが、一夏と鈴は馬鹿娘達とレゾナンスに行く予定なのか？」

「そうね、義姉さん。」

一夏、今日の日曜は久しぶりに娘達と出掛けるわよ。せっかく、厨房のコックから休みを貰ったんだし、あたしも新しい水着欲しいからね」

「そうだな、行くか」

「やったあ!!。パパ、大好き!!」

「そうか、なら私も巡回ついでに行くとしよう。一夏、また悪いが水着を選んでくれ」

「わかったよ。千冬姉」

と娘二人が俺に抱きつくが、鈴にも抱き着かれて床に倒れた。

千冬姉は呆れた顔で妻と娘に押し倒されながら答える弟の姿に苦笑していたが千冬姉も新しい水着を買うため、ついに行くと言って部屋に戻ったのだった。

当日、駅前には水色と蒼色の色違いのワンピース姿の娘二人と何時ものミニスカートにTシャツに裾の無いスカジャンを着た鈴、プリッツスカートにブラウス姿で清楚感を出しているマドカ、何時ものスーツ姿の千冬姉の姿だった。

『ちっ、ハーレム野郎がもげろ!!』

この光景は傍らから見れば、ハーレムに見えるが織斑一家だとは思わないだろう。

一応、千冬姉が仕事着なのは買い物に行く生徒達への巡回を兼ねているらしい。

一家全員でモノレールに乗り向かうが、先に両腕を娘に取られた鈴とマドカは

「ぬっぐぐぐ…やるわね…」

「早いもの勝ち!!」

勝ち誇る娘二人に嫉妬していた。

「ぬぐぐぐ…狡いですわ!!」

ハンカチを噛み締めながら悔しがるセシリアと

「セツシー、叫ばないのよ。バレますわよ」

セシリアを戒めるメアリー。

この二人は織斑一家の後を尾行しながらも双子姉妹が一夏に甘えている姿に嫉妬しつつも、鈴音とマドカが悔しがる姿を見て楽しんでいた。

「メアリー、わかりましたわ。ですが、鈴音さんの悔しがる姿を見てスッキリしましたわ」

「セツシー、同感だわ。スキがあれば一夏様を匿って甘い時間を共有しましょ」

「ふふふふ…」

そして、見るからに怪しい姿で駅の柱から覗き見ているポンコツ元貴族（セシリア）と脳筋元女王（メアリー）は英国面丸出しの黒い笑みを浮かべながら織斑一家の後を尾けたのだった。

総合商業施設であるレゾナンス。

今も昔も変わらず、一夏の元ハレム軍団が抜け駆け駆け上等のデートをする為に最も争ったショッピングモールである。

そして、今回は娘二人に鈴音とマドカにと腕の取り合いの激戦は必死だろうと思っただけだったが、一家が着くなりマドカは姉であり半ギレ状態の千冬に連行されていた。

「マドカ、行くぞ」

「えっ、お姉ちゃん!？」

お兄ちゃんに水着選んで貰おうと思ったのにいい!!」

「私もそうだ!!」

文句言うなら馬鹿共に言えマドカ!!」

「お姉ちゃん、横暴だ!!」

学園の仕事なら一人で行け!!」

「やかましい!!」

お姉ちゃんだつて寂しいんだ!!」

バツチイイイン

「ぎゃふん!？」

と拡張領域から取り出した出席簿で叩かれ引き摺られながら連行されたマドカだった。

「これで、マドカさんが居なくなりましたわね…」

「千冬のアドレス知って置いて正解ね。」

メールでアイスクリーム屋さんで暴れてる生徒が居ると嘘のメールをしたから、嘘のメールに引っ掛かった千冬に感謝だわ」

後が怖いことを考えずに、再び黒い笑みを浮かべるメアリーとセシリアもそれを忘れて、あの三人をどう引き離すか思考しながら、再び尾行したのだ。

織斑一家が水着売り場に着くと、十夏と千秋に鈴音の三人は水着を選び始めたが、娘二人が着れるのが子供用しか無かった。

「子供用しか無いの!？」

「嘘…」

「こんな着たら、クラスの変態共に…」  
クラスの変態共に捕まり愛でられる事を想像して、顔を青褪める二人。

忘れがちだが娘二人はまだ6歳だし、身長の関係から子供用しか着れないのだ。

それでも、ここはレゾナンスの良い所で品揃えはさすがだろう。子供用の中から水着を選び抜き、十夏は胸にリボンを飾った水色のワンピースタイプの水着を選び、千秋は蒼系統の姉と同じワンピースタイプの水着を選んだのだった。

センスとコーデイネットは流石に双子と言える。

「二夏、これなんかどう？」

と言いながら試着室から出て来たのは鈴だった。

鈴は赤いビキニにセパレートを付けて大人の女性を認識させる。昔は引き締まった体付きだったが、今は柔らかく括れた身体付きと胸が大きくなったおかげで、無難無く着こなしている。

「似合うぞ」

「良かったわ♪♪」

少し太ったから心配したけど、あたしでもまだ、イケるわね。

でも、襲うのは無しだからね♪」

「襲わねえよ!!」

「あら、残念ね」

「ぬぐぐぐ…」

「二人共、悔しかったら早く成長する事ね」

「ママの横暴だ!!」

「親子して何しているんだか…」

と終始上機嫌な鈴だった。

「じゃあ、支払ってくる」

と妻と娘の水着をかごに入れてレジで支払いをしようとするが

「そこの貴方、私のも支払いなさい!!」

と大量の水着が入ったかごを置く女性。

ああ、何度か経験したが、女尊男卑に染まった風潮の女性には反吐

を吐きたくなる。

「何故、お前のまで払うんだ？」

「せっかくの家族団欒を邪魔しないで欲しいが？」

「なっ、男風情が女である私に盾突くの!？」

「その店員!!」

「警備員を呼びなさい!!」

「あの、そのお方は……」

「うるさい!!」

「さっさと呼べ!!」

と店員に警備員を呼ばせようと叫ぶが、カード支払いで店員にカードを渡しており、カードに記載された俺の名前を見て逆に店員は顔を真っ青にしていた。

そして、世界最強を共に手にした妻の存在を女性は忘れていたのだから……

「あの、うしろ……」

「後ろが何よ!!」

「さっさと警備員を呼びなさい!!」

漸く、フリーズから回復した店員は顔を真っ青にしたまま女性の裏に立つ女性に指を指しながら震えていたのだ。

「警備員が何ですって?」

女性の肩を思い切り握り、女性の後ろに立つのは鈴だった。

「ぎゃあ!？」

えっ!？」

元世界大会タッグトーナメントの秒殺の女王、鳳鈴音!？」

「うちの夫に何してるのよ!!」

空いている左手を握り拳を溜める鈴。

「鳳鈴音の夫？」

はっ!？」

まさか……

二代目ブリュンヒルデにしてタッグトーナメントの覇者の織斑一夏!？」

「ママ、コイツぬつ殺して良い？」

「げっ、IS学園で最年少で生徒会長と副会長になった織斑姉妹!」  
女性は俺達を知るなり顔を真っ青にして怯え出したが、般若化した妻に肩を握られて逃げられないし、得物である槍と弓を部分展開した十夏と千秋に得物を突き付けられて逃げ道が無くなっていたのだ。

「駄目よ。」

あんた達がやったら退学レベルの問題だから、あたしがやるわ」

「えッええ、つまんない!!」

「おっ、お慈悲を!」

と慈悲を感願する女性だが、旦那を無罪の罪で警備員に捕まえさせようとした事を許す鈴ではない。

「死にさらせ!!」

バツキイイイ

「ギャアアア!」

鈴の渾身の腹パンを受けた女性はつの字に身体を曲げて吹き飛び、向かい側の壁に激突したのだった。

「しぶといわね。」

まあ、コソコソと隠れてる二人に任せて行きましょ」

ただ、女性が落ちた先に聞き覚えがある女性の小さな悲鳴を聞いたが聞かなかつた事にしよう。

今の鈴が怖いとは言わない。

家族サービスだからな。

その後、レストランで一家全員で食事をして学園に戻るが、終始ご機嫌な妻や娘と一緒に一家水入らずの食事に満足した千冬姉だった。

おまけ

英国面のメアリー

「おっ、おげえええ…酷い目に会ったわね…」

あら、胃液を吐いて口を拭くのに丁度良い所に布が在るわね  
いい生地ね」

お腹を殴られ壁に激突し胃液を吐いた私は丁度良い所に布が垂れ下がっていた為に口から吐いた胃液で汚れた口周りを拭くため、その布で拭いた所に上から声がしたので。

「だれが、私のドレスで拭いて良いと？」

「えっ？」

まさか…」

ドスの入った女性の声に反応して顔を上げると、本来なら日本に居るはずの無い女性。

それは、絶対女王の申し子にしてイギリス最強の姫騎士であるイギリスの元女王のメアリーだった。

もう一人、私を睨む女性は元イギリスの国家代表のセシリア・オルコットだった。

そして、私が拭いた布はメアリー元女王陛下のドレスの裾だったのだ。

一夏様を尾行したは良いのですが、日本がここまで女尊男卑が酷いとは思わなかった。イギリスは先代女王であるお母様が女尊男卑を禁止する法律である男女人権平等法を施行したお陰であるの様なことは無いし、違反すれば女王の勅命で施行された法律である為、女王の名の元に国家反逆罪が問答無用で適用されて禁固刑になる。

一応、私の大親友であるセシリアは学園での学生時代に法律違反を仕出かしたが、学園内との事でお咎め無しとは行かず、先代女王により始末書を書かされたのと当時同じ候補生で先輩だったサラ・ウィルソンに監視並びに再教育をする様に勅命を下していた。

それよりもだ。

「鈴音様はもう少し、手加減を覚えて欲しいですわ。危うく、私達にこのゴミが当たる所でしたわ」

気絶してらるだろうと思って、飛んで来た女性を無視して一夏様を尾

行しようとしたが違和感を感じたのだ。

そう、違和感はドレスの裾が引つ張られる感覚を感じて、下を見下ろせば鈴音さんに腹パンチを受けて私達の下に吹き飛び胃液を吐いた女性が私のドレスの裾で口を拭いていたのだ。

「誰が、私のドレスの裾で口を拭いて良いと？」

ドス混じりの声で女性を問い詰めたが、私の正体を知っているのだろ。

「あっ…うわあ…」

私の顔を見て正体を気付き、顔を真っ青にしながら言葉にならない事を発しながら震える女性。

それに、女尊男卑とはいえ一夏様の財布で紐にしようとした罪は万死に値する。目線をセツシーにすると、目線でギルティと答え同じ意見だと判る。

「だから、誰の許しを得て、私のドレスの裾で口を拭いていると聞いている!!」

バッキイイ

ピンヒールの爪先でお腹に蹴りを入れる私。

女性は更にお腹を蹴られ、口から吐血しながら壁へと吹き飛び激突して跳ねる様はサッカーボールと言える。

私的にはこの場で首を刎ねる事はやぶさかでは無いと思うが、ここは日本であり首を刎ねる事は許されない。

なら、治外法権がない場所に連れて行けば良い。

そう、あの場所なら大丈夫だろう。

アラブ首長国連邦と同じ手なら大丈夫だ。

「ぎゃああ!？」

髪を引つ張らないで!!」

私は女性の髪を握り女性ごと引き摺るが、髪を引つ張られて女性は痛みが悲鳴を上げて周りのお客さんから注目を浴びていたのだ。この光景を目撃したお客さんの誰かがいたたまれなくて呼んだのだろう、呼ばれた警備員に女性の連行を止められるが、セツシーに渡してあるイギリス王家の身分証明である家紋入りのコインを警備員に見



せて黙らせる。

その女性を引き摺ったままレゾナンスを出るとタクシーを呼んでタクシーに女性を放り込んでからセツシーと乗り込み、私はその女性を連れイギリス大使館がある赤坂へと向かい女性を大使館内へと連行したのだ。

治外法権がない場所とは大使館内だ。

先を言わずとも分かるだろ。

「めっ、メアリー様!？」

その女性は!？」

私に跪くのはイギリス大使館の職員だ。

「今すぐに、この女の家族を全員連行して来なさい!!」

王家に対する不敬罪である」

「ふっ、不敬罪…」

「はっ!!」

不敬罪と聞いた女性は自分が仕出かした事の重大さに気付き気絶するが再び蹴られ覚醒させられ、命令を聞いた職員は慌てた様子で仕事を再開して家族を連行する為に大使館に待機中のM I 6の諜報員達が慌てながら黒い車に乗り込み大使館を出ていく。

「あと、この女を地下牢にぶち込みなさい!!」

女は職員に連行され地下牢へと連行されたのだが、大使館にはあの一件で呼び出した日本政府の外交官が偶然にも居たのだ。

「メアリー殿下!!」

その女性はどうなされたのか!!」

「私への不敬罪で連行しましたが何か?」

「ぬぐっ!?!ふっ、不敬罪!？」

「それと、イギリスから私の下宿先である織斑家へ手を出さぬよう本国の王家が警告しましたが、先日の中華料理店織斑への襲撃は如何に責任を取るのか、今すぐにでも説明を?」

元女王と言えども、女王の眼光は衰えていない。

外交官をその場で睨み竦ませる。

「その件は、未だに調査中です…」

くだらない理由で逃げる外交官。

「調査？」

くどいわ!!

既に犯人は白白済で、更織家にて監禁中ですわ!!

日本政府は警告を無視して、イギリスと戦争をしたいとでもお思いか!!」

「そんな事は…」

私から戦争がしたいのかと言われ、顔を真っ青にする外交官。

「なら、そうしたくないのであれば、総理に速やかなる謝罪と私を襲撃した賠償請求の返答をして貰えますかしら？」

「そつ、そんな!？」

「今度の臨海学校は学園長の許しを得て視察を兼ねて同行致しますわ。今回の予防策でI S学園の臨海学校では学園長からの依頼で更織家の護衛集団を送り、我が本国では、新女王のエリザベス4世の勅命により国家代表並びにロイヤルガードナイトを護衛として送りますわ」

イギリス最強集団であり、王家の女王の守護者たるロイヤルガードナイトは女性のみで構成され、本国王家の切り札であり私の直属の配下である。

そして、ロイヤルガードナイトの恐ろしさはドイツの黒兎隊とまではいかないが、女王への忠誠心は非常に高い上に君主の為と命を捨ててまで戦う最強の女性騎士団とも言えるのだ。

「なっ!？」

「非を認めないならば致し方無しと新女王であるエリザベス4世陛下は言っておいでですわ。それと、恩人である織斑家に対してイギリス王家は日本国籍だろうと保護対象であり、日本政府が手を出すなら容赦しませんわ」

外交官はイギリスが日本政府に対して非常に厳しい対応にガツクリと項垂れて大使館を後にしたのである。

一時間もせずに、女性の家族が連行されて来たのだ。

母親は娘が仕出かした事の重大さにその場で泣き崩れ、妹は制服か

らIS学園の生徒だとわかる。

「あの、姉さんは…」

姉を心配した妹は私に質問して来たが

「不敬罪で厳罰かしらね。それと、イギリス王家の保護対象の人物に対しての女尊男卑による冤罪での逮捕未遂もあるから判らないわね」

「そつ、そんな!？」

メアリー様、姉をお願いします!!

私ならどうなつても構いません!!」

姉想いで女尊男卑に染まってない妹か…

確か、プロフィールには日本の代表候補生だったわね。しかも、I  
Sの適応値はA+だった。

とても、欲しい人材だわ。

ふふふふ…

なら、司法取引を理由にイギリスに引き込んで、ロイヤルガードとして教育しようかしら？

どの道、イギリス本国はイギリス議会と妹のエリザベート（エリザベス4世）が日本政府に対して報復処置をするのが目に見えるし、今の内に優秀なIS乗りとか人材を引き抜いてしまった方が良いだろ。

なら、決まりだ。

司法取引をちら付かせて、優秀そうな妹を日本から引き抜いてしま  
いしよう。まあ、あの女はメイドとして女尊男卑が如何に愚か徹底的  
に再教育致しましょう。

「ふふふふふふ…」

結局、司法取引に応じた女性により、女性の妹の身柄はイギリス国  
籍を取り、私の直属の部下として教育を受ける事になったのだ。

ただ、イギリスの新女王であるエリザベス4世は自由気ままな姉に  
今回の出来事で胃を痛めているとロイヤルポストの新聞にゴシップ  
ネタにされたらしい。



## レゾナンスへ買い物 ボーデヴィツヒ家の場合

IS学園の職員寮には長期休暇で過ごすラウラが暮らしている。無論、本来なら中華料理店織斑で過ごす筈がこないだの襲撃により下宿先が半壊して住めなくなってしまったからだ。

それに、娘のレナスは栄養失調により体調を崩したといえ復調してからは学園に編入して一夏の娘である双子姉妹の部屋でルームメイトとして過ごしている。

そして、編入したレナスは槍投擲術は得意だが逆に専用機たるヴァルキリーの専用武器である片手直剣は使えてはいるが使用するための剣術は私自身教えられないから剣術が出来る部下が教えていた。何故なら、自分が娘に教えられたのは軍隊式格闘術とナイフによる格闘術だけだった。

そんな時に剣術の指南役を買って出てくれたのはセシリアの親友であり元女王のメアリーだった。

彼女は古代剣術である王国式剣術を収めていたし、何よりレナスの初の友人である双子姉妹も半ば強制的に昔教官だった織斑千冬により参加させられている。

双子姉妹の専用機も西洋の女神を元にされている為に槍や弓だけでなく、レナスのヴァルキリーと同じ片手直剣を装備しているからだ。

そして、今日もアリーナでは

「おっホホホ!!」

可愛い子猫ちゃん達、行きますわよ!!」

「あっだあ!?!」

「フツギャン!?!」

「グツエ!?!」

メアリーの遊び半分が高笑いしながら繰り出す剣撃を西洋剣を模範した木刀で受ける三人は文字通りにボコボコにされていた。織斑

姉妹の得意な得物である槍と弓だったら食らいつけるだろうが、苦手とする西洋剣での剣術では全く太刀打ち出来ずに木刀を弾き飛ばされボコボコにされていた。

「んっ、ラウラ。」

「娘と馬鹿娘二人を覗いていたのか？」

「きつ、教官!？」

観戦席で娘の訓練風景を覗いたら、声を掛けて来たのは教官（織斑先生）だった。

「織斑先生だ」

ベツシイ

「あつだあ!？」

久しぶりに出席簿で叩かれた私だった。

「それよりも、ラウラに似て不器用ながらも剣術の訓練を頑張るな。私も姪に剣術を教えたが装備が西洋剣ではな」

確かに私に似て不器用な娘である。

「ですが、レナスは私の時と違い『仲間』に頼る事を6歳で知りました。これは、一夏に鈴音、あの双子姉妹に感謝でしょう。今は十夏から槍術を教わったり、勉強を頑張る姿にホッとします」

「ふん、自慢の家族だからな」

仲間に頼る。

一言で表せば簡単だろう。

しかし、あの頃は力を求める事に溺れ見失っていた。

それを一夏は気付かせてくれた。

そして、レナスには織斑一家が教えてくれたのだ。

深い縁すら感じていた。

そして、娘を覗ながら今回の襲撃が気になっていた。

一夏の話からの話では以前からも襲撃はあり、日本政府の一部が一夏と鈴に加えて娘達の篠ノ之東博士謹製の専用機を狙った犯行らしい。

「織斑先生、今回の襲撃はどの様に？」

「ラウラ、一応機密だから他には喋るなよ？」

東の分析だと、臨海学校の時に馬鹿娘共の専用機を狙って襲撃は確実に有るそうだ。

一応、臨海学校では更識の護衛集団とメアリーが臨海学校では私のクラスと四組に居るイギリス候補生の視察と訓練を兼ねて直属のロイヤルガードが護衛に当たる」

イギリスのロイヤルガードと聞き、青褪める私。

「ラウラ、顔色が悪かいがどうした？」

「いえ、イギリスのロイヤルガードには嫌な思い出ししか無いので……教官の前にも関わらずに全身に冷や汗を出しながら答え思い出しだが、本当に嫌な思い出ししか無い。」

メアリーがまだ女王だった時に行った世界最強の特殊部隊である黒兎隊とロイヤルガードナイトとの合同演習では、イギリスの三世代型量産機であるティアーズシリーズの中で近衛騎士団用に特殊にカスタマイズされたティアーズナイトに半数以上を撃破判定されたのだ。

そして、ロイヤルガードナイトに全滅判定は下せされたが、最後まで残ったのは私と部下のクラリッサ、リン、ハーネスを入れた四人だけだった。

遠距離からの狙撃に複数機同時によるBT兵器でのオールレンジ攻撃。

そして、味方からのレーザー射撃による嵐の中でもお構い無しに剣を片手にレーザーを全て躲けて高笑いしながら突撃して来る女騎士達の気狂い突撃とも言える光景。

変態的な回避技術を目の当たりにした黒兎隊の若手連中は恐怖してしまい戦意を失って武装を投げ捨てて逃げ出してしまい、逃げる若手連中に対しては追いかけて回してトラウマを植え付けただけで無く、圧倒的な技量で攻めて逃げた若手連中を薙ぎ払う女騎士達と逃げた若手を囷に使うしか無く、巧みに陣地移動しながら女騎士達を遠距離射撃の砲撃で吹き飛ばすベテランな私達。

そして、あの女騎士達は実は見習い騎士だと演習後に知り、黒兎隊の幹部隊員達全員が見習い騎士ではなく演習でロイヤルガードの正騎士だったらと思うと絶望の顔に染まっていた。

思い出しただけで鳥肌が立ったのだ。

もし演習に、団長にして元女王であるメアリーがロイヤルガードの正騎士と一緒に参加して居たら全滅は我々の黒兎隊だったと…

剣術の訓練が終ったレナスと手を繋ぎ寮へ向かう途中にレナスは臨海学校の準備する水着を強請って来たのだ。

「あつ、ママ臨海学校で水着使うから買って!!」

「うむ、水着か？」

水着なら軍支給品にあつただろう?」

「ママ?」

クラリツサ大佐が私への支給だと送りつけたオタク趣味丸出しのスクール水着を着ろって言いたいのかな?

それと私用にとヴァルキリーメールまで送り付けてますが?」

私はコスプレする気もないし、ヴァルキリープロファイルのレナスじゃないですか?」

「なつ、何だと!」

あれは、クラリツサの趣味だったのか!」

「私は部署が違うから言うけど、軍支給品には水着はありません!!  
クラリツサ大佐をいい加減に更迭したらどうですか?」

それとも、ママの親友のシャルロットさんにクラリツサ大佐の自室を再びシャルロットさん必殺のグレネードランチャーで灰にするように頼みましょうか?」

「レナス、それだけはやめ…」

「あつ、シャルさん。」

また、ママがクラリツサ大佐から何かを吹き込まれた見たいで…」  
『ごめん、仕事で日本に居るからクラリツサの部屋を灰に出来ないや。だけど、ハーネスにバズーカで吹き飛ばす様にお願いしとくね』  
と言いつ切る前にレナスは私の親友、シャルロットに電話をしていた。スピーカーモードから聞こえるシャルロットのクラリツサへの無慈悲な返答。

一度、クラリツサはシャルに部屋を灰にされている。



趣味である日本のアニメ文化たるコレクションの全てをポテトマツシャーもとい手榴弾とグレネードランチャーで寮の部屋ごと吹き飛ばされ、残骸であるフィギュアを掴みながら泣き崩れて真っ白になったクラリツサを覗いているからだろう。

それを覗いていたレナスはオタク文化を私とレナスに教え込もう（布教）とするクラリツサを目の敵としている。

ただ、完全にオタク文化に染まり切った姉であるクロエだけには流石のレナスも抗えない。

でも、ここは話題を変えないとクラリツサが大変だし泣き付かれる。確か、先程レナスは臨海学校で水着を所望していた。

なら…

「クラリツサの事より、レゾナンスに行くか？」

「うん、だから水着買ってね」

「判った。」

休みにレゾナンスに行くぞ」

「やったあ!!」

じゃあ、お昼は@クルーズだね!!

ハンバーグ楽しみ!!

でも、クラリツサ大佐の話は別だよ？」

「なっ、何だと…」

話題を替えてクラリツサを弁護する事も叶わず、クラリツサのアニメコレクションが再び灰になる事が確定し、お昼が@クルーズと聞いて何かフラグが立った気がするが気しないで娘と楽しむか…

「クラリツサ、すまない」

と部屋で一人、クラリツサに謝るのだった。

当日

レナスとお揃いの白いワンピースを着て出掛けるのは何年振りだろう。

最後に思い出すのはハンスとベルリンでまだ幼い娘を抱えてデートした以来だろうか？

「ママ、ベルリンじゃないよ。」

最後は私の3歳の誕生日だったブリッセルのレストランだよ」

そうか、あの時以来なのかと、私はつくづく駄目な母親だと認識される。

ドイツでは軍の休日以外はクロエ姉様の自宅に預けていたからな

：

「ラウラちゃん!!レナスちゃん!!」

お姉ちゃんを置いていくなんて酷い!!」

「クロエ姉様!? (叔母様!?)」

モノレールのホームで待つ中、姉様が呼ぶ声に反応して振り向けば黒いゴスロリドレス姿の姉様だった。

姉様も離婚した後は、束さんの研究の手伝いを理由に学園に戻っており、簪博士と仕事をしていた筈だったが私と娘のお出かけを多分、盗聴で知り付いて来たのだろう。

「可愛い二人の洋服と水着はクロエが選びます!!」

最早、シスコン極まり。

レナスは姉様の宣言に若干涙目となるが、たまには姉妹と私の娘で出掛けるのは良いだろ。

「そこの、美人さん。」

お茶でも…」

「娘と一緒になので結構だ」

「娘なんか、ほっといてさ」

だが、何故かホームで私達がナンパされるのだけが理解出来ない。

だが、娘をほっとくだけと?

「きみ、ウザい」

ドッボン

「…」

「さあ、行きましょ?」

と私よりに先に動く姉様は防犯カメラにハッキングしながら映像

が映らない様にしてからナンパして来た男を姉様の専用機である冬椿の腕を部分展開して男を掴み、駅前の噴水に投げ捨てていた。

ちよつとしたハプニングがあつたものの、レゾナンスの水着売り場に着くなりレナスは姉様に試着室へ投げ込まれ水着の着せ替え人形化していた。

「叔母さま…嫌あ…」

「ちよつと、違うわね…今度はコレかしら？」

「もう、いやああ…たしゆけて〜」

レナスの履いていた白いパンツとワンピース脱がされて試着室の上に舞い、試着室の中ではレナスがクロエ姉様に新たな水着を着せられる光景。次は我が身と姉様に恐怖するが、レナスが姉様の手に落ちている以上は逃げられない。

そして、水着を試着する事20着目で白いワンピースタイプの水着に決まり満足する姉様。その後、私も姉様に試着室に投げ込まれてレナスと同様に着せ替え人形にされたのだった。

水着も買い、お昼は娘と約束した@クルーズへ入ったのだが、@クルーズ店内のテーブルではコーヒーを飲みながら商談をする二人うちの一人がシャルロットだと気付いた。

「あれは、シャルだな…」

「ママ、シャルさんの反対に座って居るの学園長だよ？」

「うむ、確かに更識さんだな」

「ラウラちゃんにレナスちゃん。

多分、学園長は学園の分と更識家用にデュノア社製量産機のサーペントカスタムをかうんじゃないかな？

確かサーペントカスタムの整備用のマニュアルが束様の所に」

「姉様、待ってください!!」

学園で3・5世代型のサーペントカスタムを購入するのは判るが、更識家には元簪博士の専用機だった打鉄式をベースに開発した三世代型量産機の打鉄参式が有るだろ？」

久々に真面目モードで淡々と説明する姉様。

「打鉄参式は確かに優秀。」

でも、打鉄参式は打鉄式をベースに改修して追加で増設されたマイクロミサイルポットと荷電粒子砲である春雷をライフル化したビームライフルと薙刀の替わりにビームサーベルだけの平凡な機体よ。打鉄参式がガンダムで例えるならジムⅢ程度なのに対して、サーペントカスタムを例えるならハードウエポンシステムによるマルチロール機であるF-90を簡易量産機にした様なもので、既に打鉄参式は三代型ながら旧式なの」

そして、私も襲撃された時に見たが、襲撃者達を回収に来た空自の機体は打鉄参式だった。鈴が肘鉄を喰らわせてパイロットを気絶させて更識に回収させたが…

「あれ？」

「ラウラじゃないか」

クロエ姉様に説明されているうちにシャルが私達に気付き皆を相席させる。

「シャル、更識学園長と商談か？」

「うん、言っているのかな…」

「生徒のレナスちゃんが居るし、臨海学校の件もあるから構わないわよ」

「ラウラの言う通り学園との商談だよ。」

僕の会社、デユノア社製の量産機サーペントカスタム10機と専用パッケージの高機動白兵戦用パッケージのB（ブースター）タイプと長距離砲撃戦用パッケージA（アサルト）タイプ、重装甲遠中距離支援戦用パッケージのC（キャノン）タイプの三種類のパッケージセットの値段交渉だよ。学園長は臨海学校に行く教師部隊用に先行購入として臨海学校に間に合うギリギリの10機纏めて買うし、臨海学校後は旧式化した教師部隊の専用機の代替え機の採用条件に値段を半額以下としたんだ」

「訓練機はラファールとテンペスターで、サーペントカスタムはあくまで教師部隊の専用機よ。それよりも、お腹が空いたわね。お昼に

しましょ」

とお昼となつたのだ。

レナスの頼んだお昼はハンバーグセットだった。

「ママ、おいひいです〜」

「『可愛い…』」

ナイフで一口大に切り、口一杯に頬張る姿はリスの様に愛らしくて堪らない。クロエ姉様はポトフセットを食べているが、更識学園長と同様に娘の愛くるしくハンバーグを頬張る姿に『可愛い…』と呟き鼻血を流していた。

そんな、家族と旧友との食事の最中だった。

ガツシヤアアアン

と食器が割れる音に振り向けば

「デメエ等!!」

床に伏せて大人しくしやがれ!!」

と@クルーズに入つて来たのは拳銃を持った強盗だった。

「ふん!!」

私が机を蹴り上げ、簡易の盾としたがレナスと更識さんは反対側のソファの裏に隠れ、レナスはハルバードを展開し更識さんはバツクから拳銃を取り出していたのだった。

私とシヤルと言えは

「ラウラ、ボクは何かデジャヴを感じるよ」

「うむ、懐かしな」

学生時代で起きた同じ光景。

しかし、クロエ姉様が居ないと思えば

「ねえ、クロエのラウラちゃんとレナスちゃんの可愛らしくご飯を眺める楽しい一時を邪魔しないでくれる?」

「グツエ!?!」

バツキイ

ドツガア

ガツシヤアアアン

と入つて来た強盗の男達を殴り気絶させてから腕を掴み、窓の外に

投げ飛ばす光景。

「僕達、出番無くない？」

「ねえ、クロエちゃんがあんなに強いって私、知らなかったですけど!?」

「うむ、流石は東母上の娘だな」

「えっ? 篠ノ之博士の娘だって!？」

ねえ、ラウラ。

今、東母上と言わなかった？」

「言ったが?」

クロエ姉様は私とは遺伝子的に姉妹であり東さんは、今の私の義理の母親と言える。

姉様と私はドイツの研究所で産まれた試験管ベビーで成功体が私で姉様は失敗作として破棄される筈だったが、母上に救助され育てられたのが姉様だった。

姉様は度重なる人体実験で失明と心臓が弱り長く生きれない身体だった。母上が開発した生体同期型のISにより一命を取り留めていたが最終決戦後に亡国企業から回収した生体製造器のカプセルで弱った心臓と失明した眼を新たに製造した心臓と眼を移植したのだ。

私も部隊の皆もその製造器のお掛けで眼を移植している。

母上が言っていたが、大変だったのはクロエ姉様や部隊の間では無く、学園の教師をしている旧姓キャシー・ケーシー、今の名前は雨宮茜で元亡国企業の幹部だったスコールだったらしい。

スコールは頭や腕を除く上半身以外が全てサイボーグで移植手術が大変だったらしい。

そして、話を戻すが移植手術では母上の細胞の一部を眼や心臓を作る際のベースとして貰った事で、私とクロエ姉様は人外レベルへとなってしまうた。

眼のリハビリは大変だったが卒業後は正式に姉妹となったのだ。私のファミリィネームには入れてないが姉様だけはクロニクル出はなくSを入れて篠ノ之と私のファミリィネームであるボーデヴィツヒを名乗っているのだ。

だから、シスコンだがクロエ姉様は大好きだと言える。家族の居なかつた私に姉様と母上が出来たのだが、レナスも秘密にしている様だが母上が大好きらしく「ばば様」と研究所の研究室で見られない様に甘えているらしい。

## 臨海学校 人外ビーチバレーだよ？

私達が乗るバスがパパとママに見送られて更識家が所有する旅館とプライベートビーチがある九十九里へと向かった。

無論、私のクラスの三組の変態共は私達をスキがあれば後ろから抱き締めて愛でようと画策するが、自宅が襲撃された事は担任である巻紙先生により知らされ釘を刺されていた。

副担のティナ先生も今回ばかりは釘を刺してクラスの変態共に私達姉妹とレナスに手を出せば一組と二組の臨海学校での合同訓練に強制参加させると言い放ち、聞いたクラスの変態共は一組の担任で双子姉妹の叔母にあたる織斑先生による地獄の扱きが待っていると思いきや震え上がらせたのだった。

そして、クラス代表を努めた妹の千秋はと言うとバスの道中、仲がいいクラスメイトの御手洗月乃とお菓子を食べながら話していた。

「千秋ちゃんのお陰で、デザートのフリーパスありがとう!!。あのフリーパスで、千秋ちゃんの実家の中華料理店のデザートをフルコンプ出来たしね」

「えっ?、別に決勝戦で一組のイギリスの代表候補生のマリア・ウィルソンさんの突撃が怖くて矢で蜂の巣にしたらただだよ?それに、お店のデザートは裏メニューにも在るからコンプにはならないよ」

「えっ、マジ!?

お店が直ったら裏メニューの教えてね」

「後で裏メニューの一覧表を上げるね」

「ありがとう!!」

「そう言えば、千秋ちゃんは試合後に泣いていたよね?」

同じく、クラスメイトの清川さんにクラス対抗戦の決勝戦の後に大泣きしていたのを観られていたのだ。

「清川さん、当たり前だよ!!」

あんな気狂い、怖過ぎて真っ向から戦いたくないよ!!」



「千秋ちゃんの専用機は武器が違っても射撃タイプだし、マリアさんはイギリスの射撃型の代名詞の量産機ティアーズタイプだったけど、マリアさんのティアーズは近接特化仕様だったからね」

「あんなの射撃型のティアーズじゃない!! アレは、イギリス近衛騎士団のロイヤルガードナイト仕様に改造されたティアーズナイトだよ!!」

「ティアーズナイト!?!」

千秋の言う通り、イギリスの近衛騎士団のロイヤルガードナイト仕様のティアーズナイトだった。

決勝戦の始めから大量の樹木の種や蔓の種を弓を射ながらばら撒き、アルテミスのファーストアビリティー『女神の狩場』による植物操作の効果で植物を一気に成長させて、アリーナのフィールド全体を木々が生茂る密林に変えて密林の中に潜みながら狩人の様に矢を射ち続けた。

しかし、隠れ場所を察知して高笑いしながら矢を変態機動で回避して、アルテミスを叩き斬ると言わんばかりに大剣を片手に突撃して来る様は自分が対峙したらと思うと恐怖しか無い。

千秋は相手が変態機動を描き高笑いしながらの突撃に対してあまりの恐怖に涙目になり、遂には恐慌状態となって混乱してしまった。

混乱の最中、本来は使いたくは無かった絶対必中であるセカンドアビリティーの『アルテミスの矢』でティアーズナイトの全身に至る所に矢を浴びせて大破させて蜂の巣にしたのだ。

それでも突撃は止まらず、ティアーズナイトを必中の矢で大破して回避が出来ない状態だったが、更に高笑いしながら飛んてくる矢を斬り捨てて突撃する様は、千秋からすればゾンビを相手にしている様で恐怖でしか無かった。

終いには千秋は試合にも関わらず泣き出してしまったが戦意喪失はしなかった。

それでも、泣き叫び涙と鼻水で顔をグチャグチャになりながらも、近付けさせまいと矢を乱射する光景は鮮明に覚えていた。

ただ、全ての攻撃を無効化し自分すら攻撃が出来なくなるサードア

ビリテীরの『アルテミスの盾』を使わなかった事だけが幸いだった。泣きながら空中から密林に逃げ込み、ファーストアビリテীর『女神の狩場』の効果による植物操作で蔓を成長させて相手を何重にも蔓で素巻きにして行動不能にしたのだった。

一応、試合には勝ちましたが試合の後にピットで千秋が余りの恐怖感から私に抱き着きながら大泣きしたのは言うまでもなく、慰めようとクソババアも千秋を慰めるが叱咤ばかりで、全く役に立たずに余計に千秋を泣かすだけだった。

結局、慰めるのに私のデザートのフリーパスを生贄にして妹の好物であるイチゴパフェをご馳走して泣いていた妹が一転して嬉しそうにパフェを食べて泣き止んだが、フリーパスを無くした私の怒りは叱咤し、余計に泣かしたクソババアの寮の部屋に隠してあるお酒を全て灰にして発散したのだ。

いつの間にか、九十九里の旅館に着き部屋割は私と千秋にレナスは何故かクラスの皆とは違う部屋だったのだ。

そう、私達が寝泊まりする場所は教師達の部屋だったのだ。

「私と一緒にの部屋で嬉しいだろう?」

一組の生徒達の点呼が終わりロビーで待っていた千冬叔母さんは得意げに一緒にの部屋だと言うが私生活の実情を知る姉妹には地獄でしかない。

「ぐっ、クソババアと一緒になの!」

「織斑先生にクソババア!」

「勇者だ!」

「墮天した十夏ちゃんも可愛い…抱き締めたい…」

私は何時もの感じで悪態を突くが、まだ、その場にいた一組の生徒達がざわめきながら青褪める。

「ほう、クソババアか…どうやら、十夏は巻紙先生と同様に死にたいらしいな?」

鋭い目付きで睨む千冬叔母さんに逆に睨み返す私。

「「「りっ、呂布が出たああ!」」」

サラリと酷い事を口走る一組の生徒。

「誰が、三国志の英雄だ!？」

スツバ・パパン

「「あつだあ!」「」

出席簿の餌食になる口走った生徒四人だったが、我慢していた私はとうとうキレた。

「呂布が可哀相ですよ。」

武だけなら呂布でしょう。

ですが、寮の部屋を一日もしないでゴミ屋敷に替えるのはどうかと思いますし、今はパパが掃除をしてくれてますが、以前はゴミ屋敷の様な部屋を片付けさせられる私と千秋の身にもなって下さい!!

しかも、生徒会に提出する書類は期限付きにも関わらずに何時も提出期限ギリギリに出して、可愛い姪を書類に埋めたいのですか？

と言うより、何回も書類で生き埋めになりましたが？

後はパパとママに事付かった説教ですが、学園の事務用のパソコンで婚活サイトにアクセスして登録して趣味が剣術の鍛錬はどうかと思えますが？

容赦の無い身内からの暴露話に顔を真っ赤にして手で覆いながら蹲る千冬叔母さんは自宅モードで私に許しを得ようとお追い継りながら半泣きになる。

「とくおくかく、いつ、一夏だけには言わないでくれ」

野菜だけの定食だと…」

偶然にも四組副担任の雨宮薫（元ダリル・ケーシー）先生と飲む約束を取り部屋へ向かう途中だった巻紙先生だった。

「あつ、巻紙先生!!」

「どうした？

それより、織斑先生が蹲っているが？」

「気にしないで結構です。」

生徒会長の権限で部屋割を変更して私達の部屋は巻紙先生の部屋で一緒に構いませんか？」

「おつ、強権発動だな。」

別に構わねえが、アレはどうすんだよ?」

「とくおくか?」

「放置一択です。」

一組の副担任が優秀な先生なので問題無いと思いますし」

「だな。」

篠ノ之姉先生は織斑先生と同じだから、どうかと思うが篠ノ之妹と御手洗先生ならどうかするだろ?」

「えっ、えええ!!」

オーちゃん先生酷いよ」

「姉さん、馬鹿言つてないで御手洗先生と一緒に織斑先生を片付けますよ」

「箒ちゃんまで!」

「わっ、私もですか!」

キュポンと間抜けな音を出しながら白旗を出している千冬叔母さんを見ながら巻紙先生でも心配するが、一組の生徒の前で精神的にズタボロになって体育座りしてポンコツ状態の千冬叔母さんは放置確定だった。

そして、一組の副担任の三人掛かりでドナドナされ片付けられた千冬叔母さんだった。

部屋に行くと、巻紙先生の部屋はティナ先生と一緒にだった。

私達も海で遊ぶべく水着に着替えようとするが、どうしても水着に着替え中のティナ先生のたわわで巨大な胸部装甲に眼が行くのだ。

「お姉ちゃん、ママよりデカい…」

と呟き、ティナ先生の胸を羨ましそうに見る千秋。

ただ、何処からか『アタシは貧乳じゃないわよ!!』と叫ぶママの声が聴こえた様だが気にしない。

「えっ?」

千秋ちゃん?」

確かに、良い形に丁度良い大きさ…美味しそう…

「うん、確かに…何か美味しそう…」

「十夏ちゃん？」

レナスは既にたわわな胸にターゲットロックオンしてシエパードよろしくと言わないばかりに涎を垂らしていた。

「ジュルリ…」

「レナスちゃん、お口から涎が出てるけど!？」

「確かにデカイな。だが、茜といい勝負か？」

「まつ、巻紙先生まで!？」

貞操の危機を感じて胸を腕で抱きながら隠すが、ただ胸が潰れるだけで、腕からはみ出た胸は隠す事が出来ず、更にエロい姿からケダモノ四人を煽る事にしかならない事をティナ先生は気付かない。

ティナ先生に手をワキワキしながら躪り寄る私達。

これが、ケダモノでは無く天使だったらと思いつながら、貞操を守る為に部屋から全裸のまま逃げようとするティナ先生。

カップツ

「ちよつと、レナスちゃん!？」

駄目、先っぽは…アツフン…」

しかし、逃げる事叶わずレナスが我慢出来ずに生身の身体なのにI S並の瞬時加速で加速してティナ先生に抱き着き捕獲して胸の先に喰らいついていた。

「お姉ちゃん、ゴメン。」

我慢出来ない!!」

「千秋ちゃんまで!？」

イヤン…反対側は弱いからラメえええ!!」

レナスから貞操を護れないまま成すがままに襲われ、ティナ先生から溢れる甘い声に脳が蕩けた千秋もティナ先生の空いている反対側に喰らいついていた。私も我慢出来ず、飛び付いていたのだった。

「私も!!」

…しばらく、お待ち下さい…

結局、ティナ先生はケダモノ三人の餌食となりエロい顔のまままで茹で揚がった蛸のようになって、水着に着替える事が叶わないまま全裸姿でイカされ気絶していた。

ただ、畳の上で横になりながら気絶した場所では、お股の辺りだった畳に発情した様な匂いがあるシミを作り全身をピクピクしていたのは気のせいだろう。

「オメエ等、やり過ぎだ!!」

ゴツチン

「「ギャファン!?!」」

と私達は拳骨をもらいながら巻紙先生に怒られたが、ティナ先生があの状態ではしばらくは復帰は無理だと巻紙先生は諦めていた。

巻紙先生に叱られたものの、水着に着替えて浜に行くとき水着に着替えたクラスメイトや他の組の生徒が遊んでいた。

「レナスは海は初めて?」

「いや、ドイツ海軍の最新鋭戦艦のビスマルクIIでISでの離着陸訓練以来だよ」

「でも、泳いでは無いでしょ?」

「泳いではないね…」

「じゃあ、一緒に泳ご!!」

「千秋、レナスちゃんは多分金槌だよ?」

「十夏ちゃん、何気に酷い!!」

私だって、泳げるもん!!」

「よし、レナスちゃん勝負よ!!」

「「負けないもん!!」」

千秋とレナスの言い合いから三人での水泳勝負となったが、黒いビキニ姿の千冬叔母さんが来て勝負を止めた。

「ほう、水泳勝負か?」

十夏!!

私も「結構です!!」なっ、何だと!?!」

「叔母さんが入ったら、勝負にならないでしょうが!!」

私対千冬叔母さんの第二ラウンドの言い合い。

周りの生徒は、降臨した天使対閻魔大王の決闘と騒ぐが、空気を読まない御手洗先生により言い合い争いが急遽終結した。

「織斑先生くビーチバレーはどうですか」

「よし、十夏!!」

「ビーチバレーで決めるぞ!!」

「大人気無いね。」

良いわよ!!

私達は千秋とレナスに巻紙先生でチームを組むよ」

と母親に似た獰猛な笑みで笑い、三人では不利と思えばビーチパラソルの下でメロンソーダを飲みながら寛ぎながら黄色のビキニ姿で寝ている巻紙先生を巻き込む事にしたのだ。

「おい!？」

織斑姉、なんでオレまで!？」

「巻紙先生、積年の怨みを晴らして織斑先生をぶちのめすチャンスだよ?」

「くっ、くくく…確かにぶちのめすチャンスだ。」

オレも混ざるぜえ!!」

上目遣いから亡国企業時代からの積年の怨みを果たせるよと甘い言葉で巻紙先生を落としか掛かり、あっさりと誘惑に負けて巻紙先生が陥落する。

『巻紙先生だけ狡い!!』

織斑姉妹やレナスちゃんとは三組の共有財産なのに!!』

上目遣いをお願いされ無かった三組の生徒は違った意味で一斉にブーイングが起こる。

「ティナ先生!!」

ちっ、アレは部屋で寝たまんまだった。

仕方ねえ、ナターシャ先生!!

ちいっと、交んな!!」

「ちよっと、巻紙先生!？」

ティナ先生は部屋で寝ている事を忘れていた巻紙先生は教師部隊として着いて来ていて、巻紙先生と同じくビーチパラソルの下でノンアルコールのシャンパンを飲みながら寛いでいた三年二組担任のナターシャ先生が私達のチームに入る事になった。

巻紙先生がナターシャ先生を交ぜた事で私達は思い知る事になるとは知らない。

そう、私達三人はビーチバレーのコートでは千冬叔母さんにナターシャ先生、御手洗先生に篠ノ之姉妹先生達5人のたゆんたゆんした胸部装甲に社会的格差を目の当たりにして死んだ魚の眼をする羽目になったのだ。

『テメエ等、俺は貧乳じゃねえ!!』

私達と同じく、巻紙先生も見学する生徒に一組の巨大な胸部装甲の持ち主の先生方と味方のナターシャ先生のタワンとした胸部装甲と見比べられて、生徒からの視線から自分の控え目な胸が覗かれてると気付き社会的格差を感じたのか、若干キレて生徒に叫んだのは言うまでもない。

「行きますよ〜」

「OK!!私が取るわ!!」

緑色のビキニを着た摩耶先生のサーブでたゆんと揺れる胸に目線が釘付けになる私達だが、逆に銀色のビキニを着るナターシャ先生がレシーブで受け止めるが胸がたゆんと揺れ羨ましく思う。

「巻紙先生!!」

と私がトスするが箒先生が口走った言葉で巻紙先生が完全にキレたのだ。

「胸が重くて動きにくい!?!」

「モップウウ!!」

オレに対する嫌味かアアア!!」

ズツバアアアアアン

巻紙先生の凄まじいアタックは

「顔面だど!?!」

ギアアアアア!?!」



「箒ちゃん!?!」

箒先生の顔面へと当たり、コートの外へと吹き飛び砂浜を削りながら止まるが箒先生は気絶していた。

しかし、箒先生の奇跡の顔面レシーブしたボールが束先生へと向かう。

「よくも、箒ちゃんを!!」

ちーちゃん!!」

妹の箒先生と同じく赤いビキニの束先生が織斑先生へと手をあげる。

「ナイスだ束!!」

ズツバアアアアアアン

と巻紙先生並のアタックがレナスを襲う。

「取って見せる!!」

と意気込むがレナスは失念していた。

「レナスちゃん、逃げて!!」

「フツギヤン」

と私が叫ぶが、レナスは既に遅くレシーブで受け止めようとするが織斑先生の本気のアタックを受け止められる訳が無い。

ボールの真正面から構えて腰を落としていたが、失念していた身長差を忘れていた為に飛んで来たボールの高さがレナスの顔面の位置だった。

スパイクを直接顔面で受けたレナスの小さな身体は宙を舞いながらコートの外へ飛んでいったのだ。

「レナス（ちゃん）!!」

「お姉ちゃん!!」

まだ、ボールは生きてる!!」

レナスの決死の覚悟で顔面で受け止めたボールはコート外に落ちそうになるが、千秋がジャンピングレシーブでコート内へ打ち上げる。

打ち上げたボールはナターシャ先生がアタックをしようとしたタイミングがピッタリだった。

「二人の犠牲は無駄にしないわよ!!」

「死んでないから!!」

「貰ったぜ!!」

「なっ!?!」

ジャンピンググレイブで砂浜塗れとなった千秋と顔面グレイブで吹き飛び鼻血を流しながら起き上がったレナスの二人がナターシャ先生に突っ込むが、ナターシャ先生は気にすること無くアタックするが全くの空振り、巻紙先生が時間差アタックで御手洗先生の足元に打ち込み決めたのだった。

そして、ビーチバレーは泥沼な試合となった。

本人は八つ墓村の様に海に足を出したままで頭から突き刺さる束先生に頭に着けていた浜に突き刺さる壊れたうさぎの耳。

ボールを再び顔面に受けたのか、一組の生徒に介抱される箒先生。爆撃されたかの様な浜辺と壊れたビーチバレーのコート

体力切れで気絶し、三組の変態共に介抱されながら愛でられる幼女三人。

アタックでビキニの紐を切られ胸を隠しながら宿に逃げ込んだ、ナターシャ先生と御手洗先生の二人。

そして、二人して荒い息をしながら睨み合う織斑先生と巻紙先生の二人。

こんな展開、生徒達や教師達は誰が予測出来ようか？

皆はこう思うだろう。

『こんなのビーチバレーじゃねえよ!!』

と誰もが思い、ツツコミどころ満載なビーチバレーだった。

臨海学校 Happy Birthday in  
the threepiece Angel  
es

「はっ!？」

千秋!!」

「お姉ちゃん…後、五分…」

「良かった…レナスちゃん!!」

「うにやああ…」

ビーチバレーで気絶した筈なのに旅館の自室に寝かされ覚めた私達三人。忘れていたけど、隅っこで布団に寝かされたテイナ先生も居たね…

「やあ、やあ目が覚めた？」

十夏ちゃんに千秋ちゃん、れーちゃん」

「あつ、ばば様♪」

「甘えん坊だなあ、れーちゃんは」

「何コレ!？」

レナスちゃんが東さんにあつ、甘えまくってる!？」

東さんが私達の様子を見に来たのだが、レナスは東さんの孫だったらしくて東さんの姿を見るなり抱き着き甘えまくっていた。

そう、私達姉妹でも初めて見るが、ラウラさんの前では見られないくらいドン引きする程、子猫のように頭を撫でられながら甘えまくるレナスと孫をとことん甘やかす東さん。レナスはラウラさんの愛娘だが完全に甘える姿は婆っ子だった。

まあ、ラウラさんはクロエさんと姉妹でもあり、東さんとは複雑な親子関係であるらしいから置いておこう。

正直に言えば子供には難しく説明出来ない。

「東さんも驚いたよ。」

まさか、三人とも7月16日で同じ誕生日だったとはね。それに、

いつくんと鈴ちゃんの娘なら東さんはれーちゃん並みにドンと来いだから十夏ちゃんと千秋ちゃんも東さんに甘えるのだ」

相変わらずのマシガントーク。

そして、東さんには私達姉妹は頭が上がらないし感謝している。

だって、アテナとアルテミスを造ってくれたのは東さんだし、パパとママが結婚する事に一番に喜んでくれたのも東さんだったらしい。

そして、私達の織斑家を陰ながら支えて居たのも知っていたし、私達姉妹をパパの時の様な誘拐事件の様に二度と危険が及ばない様にする為だけに、4歳の誕生日の時に私達の専用機を選ばせていや、正確には私にはアテナが千秋にはアルテミスのコアに選ばれて専用機としてプレゼントした。

そして、私達が産まれた時には、IS委員会に織斑家の安全を守る為だけに家族全員に専用機の個人所有を認めさせる替わりに、自分の自由を捨ててまでIS学園の教員として働くと政治的取引に応じた事も知っていた。

だから、レナスと同じく東さんは私達姉妹にしたら優しいお婆ちゃんであり、パパやママにマドカ叔母さんと同じくらいに甘えられる存在になっていた。

今の学園に入る事が決まった4歳の夏からは、入るまでの二年間はIS関連知識を勉強する時は教育ママ化して、飽きてサボれば『少し、頭を冷やそうか』と言われて怖かった記憶もある。ただ、大好きなのは変わらない。

「うん♪」

姉妹で東さんに抱き着いてパパ並みに甘えたのだ。

「早々、東さんからの誕生日プレゼントは明日の専用機持ちが集まる時に渡すから楽しみにするのだあ」

東さんから誕生日プレゼントと言われ、三人はとんでも無い事に気付いた。

「「えっ?.....誕生日.....あつ、今日は7歳の誕生日だった!」」

「あれ?」

もしかして忘れてた?」

「うん、ババ様。

メアリーさんとの剣術訓練ですっかり忘れてた…」

「えっ？」

あの脳筋と剣術訓練してたの？

剣術なら束さんが教えるよ？」

「だって、ババ様の剣術は日本刀主体の篠ノ之流剣術だし、私の剣術は西洋剣が主体で西洋の古代剣術だよ？」

「あっははは!!」

確かに西洋剣術じゃあ基礎が違うから、れーちゃんには教えられないや。

十夏ちゃんと千秋ちゃんはどうしたのだ？」

「私と千秋は生徒会の書類整理と決済を臨海学校の前日までに全部処理して、放課後はレナスちゃんと一緒にメアリーさんから西洋剣術の訓練かな」

「じゃあ、脳筋から西洋剣術学んでたんだだね。

じゃあ、束さんの孫をお世話してくれたお礼に脳筋改め、メーちゃんと呼ぶことにしようかな。

ついでに束さんはメーちゃんにも専用機をばつばんとあげちゃおう。

メーちゃん、確かI S適応値は…ええと…あつた…えっ？

Cーだったの!?

箒ちゃんの学生時代より酷いや…コアが反応するかな…

でも、あの機体なら近接特化だから順応性に賭けてみようかな？

いや、逆にベースにして身体にフィットする様に造り替えれば順応性はかなり高くなるかな…

でも、メーちゃんの得物って斬馬刀並みに大きい大剣なのか…

束さん並みのオーバースペックなのね…

専用武器まで考えたら…」

まさか、臨海学校中に誕生日が来ると忘れていたのだが、束さんはパソコンを開きメアリーさん専用の機体を造るべく思考モードになっていたのだった。

「東さん？」

私達に何か用が…」

「……あつ、そうだったのだ。

今日の夕飯は宴会場じゃなくて、大ホールに変更になったから、君たちを診るついでに、そこに寝てる乳牛（ティナ先生）を起こしに来たんだつた…」

おい、起きろ乳牛!!」

ゲツシイ

「イヤン…三人とも止めて…変な方に…」

ティナ先生は変な方に目覚め掛けて、夢の中では私達の様な幼女に襲われてる夢でも見ているのだろうか？

「東さん、私達だけでも移動しませんか？」

「だね…」

変な性癖に目覚めさせてしまった私達も悪いが、ティナ先生も千冬叔母さん同様に放置して大ホールへ移動したのだった。

大ホールでは急ピッチで料理を準備するあたしと一夏。

娘達も知っていたが、食堂での仕事は学園長の許しを得て早目の夏休みを貰っていた。無論、中国での特級厨师の試験があるからだ。

その前に、今日が娘達の誕生日を祝うつもりであったがまさか、レナスまで同じ誕生日だとは知らなかった。

だけど、夫である一夏は調理人だ。

大量の食材を仕入れて臨海学校で盛大に祝おうと言い出したのだ。

娘にバレないように送り出してからは、あたしと一夏は築地市場に向かい、いつの間にか取ったかは知らないが仲買人の許可証で野菜や肉を大量に仕入れ、更に銚子市場へ専用機を展開してステルスモードを使って飛び、新鮮な魚介類を仕入れたのだった。

そして、今は

ホールに並ぶテーブルには私達が仕上げた大量の料理が並び、更識の女中達が出来た料理を運び並べる。

一夏は中華料理では無く、バースデーケーキを作るべくケーキを焼き上げる作業中だった。

「あんたも相変わらずに女のプライドを押し折るわよね」

「そうか？」

「ケーキ位、レシピ見れば普通に焼けるだろう？」

確かに、あたしでもケーキは焼けるがセシリアの様なしつとりとしたガトーショコラを焼ける腕前はないけど、点心の分野なら負ける気は無い。

それでもだ。

目の前のケーキは普通だろうかと疑問が浮かぶ。

四重にそびえるケーキ。

高さだけでも軽く3メートル以上はあり、各層の中間を支える白い柱と柱とケーキの間に敷かれる白い皿は全て飴細工で作られていてプロのパティシエが作るケーキにすら見える。そして、白く高いケーキは、まるで…

「ウエディングケーキじゃない!!」

とあたしが一夏に全力で突っ込むが

「いや、バースデーケーキだ!!」

と言い張っていた。

「コレの何処にバースデーケーキの要素があるのよ!!」

あたし達の結婚式のウエディングケーキよりでかいじゃない!!」

「いや、新郎新婦の飴細工を着けてないだろ？」

「確かにそうね。」

でも、セシリアが観たら卒倒レベルよ。

そこは判ってるの？」

料理下手なセシリアだが、デザート関連なら腕前は下手なパティシエより腕がある。

だが、一夏が本気で作るこれを見てセシリアは逆に大丈夫だろうか心配になる

「ああ、セシリアには悪いが卒倒するな。

娘とレナスの誕生日為だけのバースデーケーキだ。

文句は言わせない」

とセシリアの卒倒は確定で、八尺ある脚立に跨りながら手に持ったのはボールに入ったカットされた果物や無病息災や学業成就を願う中国の寺院をモチーフに作った飴細工の飾りを段々に盛り付けて、娘達とレナスのバースデーケーキが完成したのだった。

「ねえ、コレはどうやって運ぶのよ…」

「あつ…」

完成したケーキの総重量は約300kgをどう運ぶかあたしは頭を抱えるのだった。

同じ頃、九十九里沖に10kmでは

「機関停止!!」

錨を降ろせ!!」

巨大な艦影。

錨を降ろし、九十九里沖に停泊したドイツ海軍の海軍旗を掲げる艦はドイツ海軍の最新鋭の戦艦であるビスマルクIIだった。太平洋で訓練を行う為、日本へ寄港したが別の理由として黒兎隊を乗せて九十九里まで送る事だった。

水兵達が停泊準備を進める中、艦橋では二人だけで黒兎隊副隊長のクラリツサ大佐とドイツ海軍の初の女性の艦隊司令のクラードイア・オルケスト元帥と話していた。

「元帥、久しぶりであります」

「大佐も人が悪いな。」

ただ、あの実験に私の受精卵を提供して成長したのが、娘のラウラとクロエだなんて…」

「ですが、元帥閣下と閣下のDNAは一致しています。」

また、閣下には我々黒兎隊は洋上訓練ではお世話になっておりません。

それに、レナスお嬢様ご自身は閣下の孫であると全く知りません」



「構わんよ。」

今はラウラとクロエは仲の良い姉妹になり、二人は篠ノ之博士の愛娘だ。

老骨である私の出番はもう無かろう？

それに、私はあの訓練の時に孫を見られたんだから十分に満足だよ。

これ以上、何を望む？」

「ですが!!」

「くどい!!」

クラリツサ大佐、この話は墓場まで持って行く事を固く命じる。

二度と私の前でこの話をするな!!

話は別だが、レナスを私の代わりに祝ってやっつけてくれ」

「ハッ、全力でレナスお嬢様を祝います!!」

「下がれ」

とクラリツサ大佐を艦橋から追い出して司令席に座る。

「試験管ベビーだった二人の娘は大人になり幸せを掴んだか…あの研究に無関係と言えども、私には娘と孫を抱きしめる資格は無いのだ…」

帽子を深く被り、夜の海を眺めたのだった。

自分の娘と孫が幸せにあらんと願って…

ホールを前に千冬叔母さんに止められた私達。

「待て、主賓は後から入場するものだ」

叔母さんまでがグルだった。

叔母さんと束さんに連れられて更衣室に行くと、ワンピースタイプのドレスを渡された。

「今日くらいは着飾っても構わんだろ？」

他の生徒達は制服でホールに行くようにと言ってあるから気にするな」

「まさか、学園長まで絡んで無いよね？」

「絡んでいるさ。」

あの祭好きは今も昔も変わらん。

それに、お前ら三人の誕生日だから余計だろうな」  
千冬叔母さんに言われて恥ずかしくなる私。

ドレスに着替え、ホール前に戻った。

『主賓入場です〜』

何とも締まらない御手洗先生のアナウンス。

目の前の扉が開くと同時に

パッパパン

とクラツカーが鳴り、一学年の同級生や先生が

『お誕生日、おめでとう!!』

と一斉に言ってきたのだ。

そして、沢山のテーブルには大量の料理が並んでいたのだ。

これには私でも感極まって泣いてしまう。

だって、レナスは

「あつ、ありがとう〜」

と泣いていた。

千秋も万編な笑みでありがとうと言いながら、同級生を『ああ、尊い』と眩かせ、鼻血を噴出させながら撃沈していた。

私達が壇上に着くと、臨海学校に居るはずのない人が居た。

「十夏、千秋にレナス。

お誕生日おめでとう」

とパパが居て

「お誕生日おめでとう」

ママが居て

「うむ、レナスお誕生日おめでとう」

ラウラさんが居たのだった。

そして、周りを見ればセシリアさんやメアリー師匠にクロエさんが『おめでとう』と言いながら私達を祝福してくれる。

そして、御手洗先生が

『では、バースデーケーキどうぞ!!』

巨大な扉に目を向ければ、余りにも巨大なバースデーケーキが入ってきたのだ。

それを見たセシリアさんは

「なっ、何ですの!？」

「デカ過ぎですわよ!!」

と驚きそのまま倒れて気絶し、メアリーさんは獰猛な眼でパパを見ていた。

多分、ママが居るのに諦めていないのだろうと思う。

だけど、ママと和解してもう一人のママになる様な予感がしたのは気のせいだと思いたい。もしかしたら、ママが三人か四人に増えるとは思いたくも無い。

そして、誕生日パーティーの余興では

『黒兎隊、参上!!』

レナスお嬢様、お誕生日おめでとうございます!!』

『マジで黒兎隊だ!?!』

「ねえ、眼がおかしく成ったのかな？」

クラリツサ大佐や黒兎隊のメンバーが居るんだけど？」

何故か、レナスは黒兎隊を見て涙目になっていた。

「気のせいじゃないよ?。」

「お姉ちゃん、何で疑問系なの?。」

ドイツにいる筈の黒兎隊の参上に騒ぎ出す同級生。  
しかし

スッパーン

と軽快な音に反応して見てみれば

「あんた達の登場に突っ込むあたしの身になりなさいよ!!」

「グッハア!？」

これが、日本文化のハリセンでのツッコミ…」

「はあ、本当にシャルに頼んで灰にして貰おうかしらね?」

「それだけは!?!」

「うっさいわよ!?!」

スッパーン

とママがクラリツサさんをハリセンでしばき倒して居たのだった。同級生から漫才だと思われ、笑いに包まれたが、しばかれたクラリツサさんは隊員に引き摺られ退場。

何故か、これが漫才として成り立つのはおかしいと思うが、キレのあるママのツッコミで成り立つのではと思っではイケないと思いきえるのを辞めたのだった。

私達の誕生日パーティーは皆が楽しく過ごしていて、私もママやパパに甘えながら過ごせた誕生日だった。

ただ、クラスメイトからは

『尊い…』

と眩き両親に甘える姿が可愛かったらしくて鼻血を出しながらパパとママが作った料理を楽しんだ。

そして、この宴は就寝時間ギリギリまで続いたのだ。

まるで、私と千秋にレナスの最後の晚餐かと。

ただ、私達は知らない。

臨海学校に悪意の手が迫っている事を…

## 臨海学校 落ちる女神と墜ちた女神

楽しい時間は長く続けば良いのだろと思うけど、私達の誕生日パーティーは消灯時間となり終わりを迎えた。

だけど、パパとママとの一緒に居る時間だけは千冬叔母さんが許してくれたが、マドカ叔母さんまで呼んだけどどうしてだろう。

私達とパパとママは千冬叔母さんの部屋に連れて行かれたのだった。

「ほれ、これをやろう」

「千冬叔母さん、ありがとう」

部屋に着き座るなり、千冬叔母さんは冷蔵庫から出した缶ジュースを私達に配ったのだ。ちょうど良く喉が渴いていたから、渡された缶ジュースのプルトップを開けてオレンジジュースを飲もうとしたがパパとママが気付き止めようとしたが遅かった。

「待て、千秋、十夏!!」

ゴックリ

「冷えてて、美味しい…」

パパとママ止めたが遅く、私達はオレンジジュースを飲んでしまったのだ。

「あっちゃー…遅かった」

「義姉さん、私達の時と同じ手を…」

「ほう、飲んだな？」

「えっ?」

「飲んだんだから黙ってとけよ?」

疑問にする事なくジュースを飲んでしまった私達は、千冬叔母さんの罠だと気付かなかった。叔母さんは部屋の備付けの冷蔵庫から黒い星マークの入ったビールを取り出して飲み始めたのだ。

「所で、千冬姉。」

「俺達を呼んだ理由は何だ?」

「ほう、一夏らしく無いな?」

一応だが、娘に関する事だから誕生日を祝うついでに呼んだんだがな？」

叔母さんに言われ、気付いたのはママだった。

「義姉さん？」

まさか、臨海学校の最中に襲って来るって事じゃないわよね？

ねえ、まさかそこまで日本政府が馬鹿なの？

お店の次は、あたしの大事な娘なの？

答えなさいよ!!」

「鈴、熱くなるな!!」

「二夏、判ってるわよ!!」

でも、熱くもなるわよ!!

あたしが、二人をお腹を痛めて産んだのよ!!

今度は娘を…」

そう、言っただままママが顔に手を覆いながら泣き出してしまった。

「待て、今から答えてやる。

私だって、可愛い姪が狙われてると知って腸が煮えくり返っているんだ。

飲まずにはやっていられるか。

いつもなら感付く鈴は教師達を見て何か気付かないか？

今回、専用機を持つ教師を全員とはいかないが臨海学校に数名を連れて来ているから大丈夫だが、念の為に前達を呼んだのだ」

「えっ?」

早とちりして泣いていたママは抜けた様な返事をしたが、パパは先生達とは顔見知りだったらしくて何かに気付いた。

無論、私達姉妹が狙われてると知って驚かない訳がない。

「顔見知りばかりだと思っただよ。

今回の教師陣は娘の担任のオータムに副担のティナ、スコールとダリル先輩にナターシャさん。千冬姉のクラスは箒に真耶先生辺りかな?」

「理解したか。

マドカはどうした？

呼んだ筈だが？」

確かに、マドカ叔母さんと東さんがいつの間にか居ないと言うより部屋に来ていない。

「マドカなら、東さんに返却した現役時代の専用機だった帰蝶が返されたらしいけど、サイレント・ゼフィルスのコアが初期化されたにも関わらずにマドカを覚えていたらしくてな、学生時代に捕まえた時の黒騎士にセカンドシフトして、帰蝶は知らないからって解体してパーツ取りしている。

ついでに、セシリアのブルーティアーズも東さんと一緒に解体した帰蝶のパーツで改修するって言ってたからな」

「何だと!？」

黒騎士だと!？」

私達姉妹はマドカ叔母さんの亡国機業時代最後の専用機、黒騎士を知らないし見た事が無い。ただ、千冬叔母さんの驚いた姿に察しが付く。

黒騎士は敵だったら、厄介この上ないと。

結局、マドカ叔母さんと東さんは私達が部屋に戻り寝るまで部屋に來なかつたのだ。

翌日、私達姉妹や学年の同級生が食べた朝食はパパとママが作ったらしく、厨房に見えるコックの落ち込み具合からプライドを押し折つたのだろう。

朝食を済ませて、一組から四組と私達を含めた専用機持ちは他の生徒とは別に集まり、各国または企業から送られたコンテナを開けて新しい武装をインストールしたり、新たに送られた専用機の調整に勤んでいた。

そして、私達もIS学園から送られたコンテナの前に千冬叔母さんや東さんと立っていたのだ。

「レナスちゃん、十夏ちゃんに千秋ちゃん。

お待ちせなのだ。

コンテナを開けるね」

東さんが胸の谷間から出した鍵でコンテナを開けると武装が入っていた。

「まずはレナスちゃんからね。

レナスちゃんの専用機、ヴァルキリーに追加武装として『神槍グングニール』を追加するよ。

本来なら、女神シリーズの最終タイプ、オーデイン専用の武器で北欧神話に因んで投げれば必中、投げたあとは必ず手元に戻るよ。ヴァルキリー専用機に改修したから使ってみてね」

「ばば様くありがとう」

「次は、十夏ちゃんだね。

追加武装は神盾アイギスの完成版と神剣パラスだよ。

十夏ちゃん、アイギスの盾はギリシヤ神話の伝説に因んでメデューサの首が飾られているけど、絶対にリミッターを切っちゃ駄目だぞ。東さんでも原因が判らないけど、通常なら全体拘束だけどリミッター無しだとメデューサの眼で本当に石化するから、大事な事だから本当に切っちゃ駄目だからね。

もう一つの装備、神剣パラスはギリシヤ神話のアテナが装備していたと言われる片手直剣で炎を纏い全てを切り裂くと伝承が在るよ。これも伝承に因んだ作りだからリミッター付きなのは同じだよ」

「東さん、ありがとう」

「最後は千秋ちゃんだね。

アルテミスの追加武装は『神弓ユグドラシル』と『零百の矢』だよ。神弓ユグドラシルは北欧神話の武器だけど、神樹ユグドラシルの強い生命力で壊されても直ぐに元通りになる弓だよ。それに、セカンドアビリティ『女神の狩場』の効果強化する働きもあるからね。

次は、零百の矢はちーちゃんやいっくんの零落白夜を何のコスト無く撃てる矢だよ。零落白夜はいっくんかちーちゃんから聴いてね」

説明を聞いたがトンデモ装備だと判る。

「東、なにとんでも無い物を渡しているんだ!!」

案の定、千冬叔母さんが危険な装備だと言いながらキレて東さんをお説教していた。



同じ頃、九十九里沖ではレナスの誕生日を祝い終えた黒兎隊の隊員と隊長のラウラを回収したドイツ海軍の戦艦ビスマルクIIは訓練地であるトラック諸島へ向けて準備中だった。

「休暇も終わりか…」

レナスとの日々の幸せを懐かしみながら、長期休暇で溜まった書類を用意された士官室で処理していた時だった。

艦内で鳴り響く警報。

「何事だ!!」

と叫びながら艦橋へ走り、指令所へ入り込んだ。

「司令!!」

対空レーダーに多数の反応あり!!

レーダーからレナスお嬢様がいる旅館を中心に三方から大編隊が

接近中。数は百以上!!

なお、一つの編隊は我が艦を通過する模様!!」

「判ってるわ。」

機関始動し抜錨!!

微速前進!!

全艦対空戦闘を用意!!

これは、訓練ではない!!

実戦である」

艦隊司令のオルケスト元帥が司令席から立ち上がり艦橋クルーに激を飛ばす。

「ボーデヴィツヒ中将、貴様等の黒兎隊にも出撃を命じる。ただし、まだ攻撃はするな。攻撃をして来た場合のみ、自衛処置として攻撃を許すが絶対に殺すなよ?」

と下命をした時だった。

ビスマルクが爆発音と共に揺れたのだ。

「所属不明機から発砲!」

右舷対空指揮所付近に被弾!!」

「ちい、黒兎隊はスクランブル発進!!」

「敵機と断定し対空射撃を始め!!」

「それと、ダメコンと消火活動はどうした!!」

「寝てるコックのケツを蹴っ飛ばしてでも消火に当たらせろ!!」

「私は艦内を走り、黒兎隊が待機する待機所へと向かったのだ。」

専用機持ちの装備のインストールや新しい専用機の調整が終わる頃、上空にはイギリス国家代表の専用機ティターニアと『血塗れの白百合の王国旗』を掲げたティアーズナイトの4機に黒い騎士の様なISとブルーティアーズだと思ふ機体の2機に守護される様に姫騎士を思わせる白銀のISの合計8機の編隊が木更津方面へと飛んで行く。

そんな時、旅館の方からシルバリオ・ゴスペルを展開して飛んできたナターシャ先生が私達の前に降り立った。

「織斑先生!!」

「襲撃です!!」

既に、ドイツ海軍の戦艦ビスマルクIIが襲撃され交戦中よ!!」

「まさか、本当に来るとはな。」

専用機持ちは直ぐにコンテナに片付けて旅館の地下シェルターに避難しろ!!

十夏、千秋にレナスも避難だ。

「良いな?」

「避難しろと言われても避難する気は無かった。」

「だって、私は」

「織斑先生、私達姉妹の避難は断ります。私は学園の生徒会長、織斑十夏だから!!」

「お姉ちゃんが行くなら、私も行く」

「私もママが襲撃されているなら行く!!」

「駄目だ!!」

「いくら、生徒会長の権限でも許さん!!」

と千冬叔母さんは許可を出さない。

しかし、レナスは行くと言い張っていた。

「私は行く!!」

パパが死んだ時みたいになるのは嫌だ!!」

「レナス、我が儘を言うな!!」

母親のラウラをお前は悲しませる気か!!」

「織斑先生には判らないよ!!」

ママには黙っていたけど、パパが死んだ瞬間をテレビで見てたから

!!

今度はママを失うの？

そんなの絶対に嫌だアアアア!!」

泣きながら、ヴァルキリーを展開して九十九里沖へ飛んで行くレナスだった。

私達が千冬叔母さんと言い争う間に、遠目から見える百里基地方面から来た米粒が浮かぶような小さな編隊。

「ちっ、来たか!」

お前達は避難だ!!」

「織斑先生、既に遅いかと?」

「何だと?」

「二人は専用機を展開して行きましたが…」

「この、馬鹿どもがああああ!!」

ナターシャ、馬鹿双子を追え!!」

「はっ、はいいい!!?」

私達は生徒会長としての責務を果たす為、いやクラスメイトや同級生を守る為にアテナとアルテミスを展開して、ペガサスに牽かれた戦車(チャリオット)に乗り百里基地方面から来る敵機がいる戦場へと繰り出したのだ。

一方、対空戦闘が続くビスマルクでは

「主砲用意!!」

弾種、対IS用対空散弾の装填急げ!!」

「了解!!」

艦隊司令のオルケスト元帥自ら対空指揮所に立ち、陣頭指揮を取り対空戦闘をしていた。ビスマルクⅡの主砲である60口径406ミリ連装砲の主砲塔が可動して編隊へ照準を合わせる。

「照準よし!!」

「撃てええ!!」

主砲が火を吹き、主砲弾を放つ。

ズッバアアアアアン

と空中で対空散弾が巨大な花火となって敵編隊中央で炸裂し、大量に内蔵された散弾と主砲弾の破片をばら撒きながら敵機に襲い、絶対防御を強制的に発動させてシールドエネルギーを瞬時に奪い去る。

やられた打鉄参式は解除され海に落ちるパイロット達。

しかし、数は暴力だった。

ビスマルクⅡを護るべく黒兎隊も出撃して善戦するが同世代型同士では苦戦からは逃げられない。

それでも、ビスマルクⅡからの対空射撃で撃たれる大中小の砲弾が空中で炸裂しながら数を減らして行ったのだ。

「チッ!」

ビスマルクⅡに近づけさせるな!!

必ず3機一組で1機に当たれ!!」

ラウラは3個小隊の指揮を取りながら、シユバルツァ・レーゲンを展開してビスマルクⅡを護衛する。

「クラリツサ大佐!!」

我が隊の被害は?」

「戦死者は今の所なし。

ですが、被弾して退却したのは4機です」

「やはり、数の暴力は流石にキツイか…」

クラリツサの指摘通り、黒兎隊のメンバーは元々レナスを祝う為に来ている為に隊員は選抜された9人しか居ない。そして、被弾して撤退した者を抜けば5人しかいないから苦戦は必須だった。

夫のかつての戦闘機のナンバーだった14をお守りとして肩の

アーマーに入れていた。

それを撫でながら死を覚悟して突撃をしようとした、そんな時だった。

「マママアアア!!」

レナスが泣き叫びながら、単一仕様『英霊召喚』を発動させて、ヴァルキリーの兵装であるBT兵器のモビルドールビットを拡張領域にある全てを展開しながら私の所に来たのだ。

しかし、4機が限界なの筈なのに8機の同時操作は完全に無謀とも言える。

それでも、限界以上の最大数である8機を同時に動かして打鉄参式を数機を撃墜する。

「ママも黒兎隊の皆も、私の大切な物は奪わせない!!」

行け、ビット達!!」

ラウラは娘の正気を疑った。

8機の同時操作なんてしたら、凄まじい脳への負担から脳が焼き切れる可能性だってある。

だから、『娘を失いたく無い』と強い思いで、戦場であっても娘の無茶を止めさせなければならぬ。

「レナス、ビット8機の同時操作を辞めるんだ!!」

ラウラの叫びも虚しく、8機同時に瞬時加速させながらビスマルクに取り付く敵機達を殺さない様にスラストユニットだけを斬り裂きながら瞬く間に全て海へ撃墜していた。

「ハア、ハア…もう、何も奪わせない…ぐっ!?

ヴァルキリー、動いて!?

アイツ等を…落さなきや…

お願いだから、動けえええ!!」

だけど、レナスは私達を守る為にビットの操作で無茶をやり過ぎた。

無茶な操作から脳に掛かる負担で精神的に疲弊してしまいレナスのヴァルキリーの動きが止まる。

そこを襲撃者に狙われたのだ。

「動きが止まっている今がチャンスよ!!」

ドイツの最新鋭機を落して奪うわよ!!

パイロットは殺しても構わない、掛かれええ!!」

打鉄参式数機がISを撃墜して奪おうと数機が構えたバズーカランチャーでレナスを狙う。

「貰ったああ!!」

「あつ…動けない…」

「レナスウウウ!!」

ラウラが叫び、シユバルツァ・レーゲンで庇おうと二重瞬時加速で加速して間に入ろうとするが間に合わないのは明確だった。

「私の孫娘をやるかアアア!!」

全艦全速前進、敵機とヴァルキリーの間に突撃せよ!!

我が艦でヴァルキリーを何としても盾になるのだ!!」

海面ギリギリの高さで戦っていたレナスのヴァルキリーと数機の打鉄参式の放つバズーカの弾丸は戦艦ビスマルクIIが割って入り盾となってレナスのヴァルキリーを守ったのだ。

ヴァルキリーを守ったビスマルクIIの被害は甚大で艦橋の最上部にある観測測定儀にある主砲射撃指揮所をバズーカで吹き飛ばされて主砲は射撃不能となり、射撃指揮所にいたクルー全員は爆発した衝撃で指揮所ごと消し飛び即死していた。

無論、指揮所の破片は対空指揮所にも落下し、対空指揮所にいたクルーや元帥を負傷させていた。

「元帥!?!」

「大艦巨砲主義の化石が邪魔よ!!」

ビスマルクIIを盾に守られたヴァルキリーを撃墜し奪うチャンスが邪魔された打鉄参式のパイロットは激昂するのだった。

パイロットはハイパーセンサーから砲撃指揮所をやられた煽りで頭から血を流す元帥を階級章から見付けると対空指揮所に向かってバズーカを放ったのだ。

撃たれる瞬間、元帥は私とレナスを見つめて優しい笑みを浮かべ、母親が娘を見る様な優しい眼差しの顔になりながら最上位敬礼をし

て部下に発光信号で送らせた。

『我、孫ト娘ノ幸福ヲ願ウ』

これが、老将にして女元帥のクラードイア・オルケスト元帥の最後だった。

彼女は娘と孫を守る事が出来た事に安堵しながらバズーカの弾頭が対空指揮所内で爆発し、爆炎と共に身体は焼かれ燃え尽きるとビスマルクⅡの艦橋に居た多数のクルーを飲み込みながら爆炎を上げて吹き飛んだのだった。

バズーカにより艦橋が吹き飛ばされたビスマルクⅡは黒煙を上げながら操舵不能となって大破漂流状態となったのだった。

私は元帥から送られた発光信号の意味を理解しなければ良かったと思う。

本当の母親を知らなければどれだけ良かったと思うし、どれだけ幸せだったかと思えば思うほど、母親と知り元帥を守れなかった私に対する怒りが湧いてくる。

何故、名乗り出なかつた事を知りたかつたのにと…

「クラードイア元帥が私とクロエ姉様の母上だと!？」

貴様等が、貴様等がやったのか!!

許さんぞ!!

貴様アアア!？」

ビスマルクがやられた事と本当の母親を殺された怒りが爆発して、打鉄参式のパイロットを睨みつけて弾切れとなったパンツァカノーネをパージしながら手刀で斬り掛かる私だった。

東さんがばば様だと産まれた時からずっと思っていた。

だけど、ビスマルクの艦橋が吹き飛ぶ瞬間、ヴァルキリーが全て見せてくれた元帥の過去。

白い壁の部屋の中でクラードイア元帥が研究員に冷凍された受精卵を入れた試験管を渡す光景。

そして、二つの育成カプセルの中で双子の赤ちゃんを見ながら

「ああ、愛しい娘よ…」

眩き愛しそうな顔をするクラードイア元帥。

そうだったんだ。

クラードイア元帥が私の本当のお婆ちゃん…

あいつが、奪ったんだ。

あいつが、あいつが、あいつが…

ワタシノタカラモノヲウバツタンダ…

意識が戻ると、バズーカを構えたままのアイツ等が居た。

「お前等がお婆ちゃんを!!」

許さない、許さない、ユルサナイ、ユルサナイ、ユルサナイ、ユル

サナイ、ユルサナイ…

うわアアアアアアアアアア!?!」

怒りと悲しみと憎しみが全て混ざり合い、私の頭の中が真っ白になつた。

そして、ヴァルキリーが私の意思を汲む様に光り輝き光の繭を形成したのだ。

その、光り輝く光に包まれた私は意識を失ったのだ。

同じくして、私達はチャリオットに乗りながら戦場を駆け回り襲撃者達を文字通りに蹂躪していく。

無論、攻撃などさせない。

私のアテナの追加武装の神盾アイギスで広範囲拘束攻撃で拘束し、千秋のアルテミスが追加された零百の矢で確実に仕留めて海へ撃墜する。

私達姉妹のタッグでのコンビネーションアタックだ。

「神盾アイギス!!」

千秋、今よ!!」

「うん、お姉ちゃん!!」



零百の矢でも喰らえ!!」

千秋が放つ矢が相手のスラストユニットに突き刺さり爆発する。スラストユニットが爆発してバランスを取れなくなった敵機は黒煙を吐きながら海へ落ちたのだった。

「ウワアアアア!!」

墜ちる!?!」

「次、行くよ千秋!!」

「うん、お姉ちゃん!!」

「ちよつと、貴女達はまだやる気なの!?!」

ナターシャ先生がセカンドシフトした姿のシルバリオ・ゴスペルで私達に追い付き止める。

「教師部隊が着き次第、撤退しますよ」

「そう、それを聞いて安心したわ。

あと、数分で教師部隊の精鋭が来るから援護するわね。

あれだけ固まっていれば、広範囲殲滅型のシルバリオ・ゴスペルの独壇場よ!!

落ちなさい!!」

ナターシャ先生が叫ぶと広範囲攻撃のビームを一斉に放ち一気に十数機の打鉄参式を撃墜する。

学生時代のパパ達が苦戦した相手だと納得できる破壊力だった。

私達姉妹も教師部隊が来るまで奮闘したのだ。

教師部隊が来る直前に、これが日本政府の襲撃だとわかってしまう機体が私達の目の前に現れたのだ。

「えっ、嘘だよね?」

「どうして!!」

蘭お姉ちゃん!!」

目の前に現れたのはパパのかつての専用機の白式に似た機体は白式の後継機として倉持技研が開発した機体で名前は紅式改だった。

紅式改を専用機とするのは一人しかない。

日本の国家代表の五反田蘭だったのだ。

「つめや、こー!!」

母親を人質にされたのよ!!

だから、お母さんを助ける為に大人しく貴女達のアテナとアルテミスを渡しなさい!!」

何処までも腐っている日本政府だと怒りを覚えるが、私達はアテナもアルテミスも渡す気は無い。

「蘭お姉ちゃん、断る!!」

「やっぱり、鈴さんに似て生意気よ!!」

「褒め言葉、ありがとう♪」

「やっぱり、姉妹ね!!」

その盾、動きを止められてうざいわよ!!」

しかし、紅式改を駆る蘭お姉ちゃんはリボルバーイグニッションブーストで加速させながら無茶とも言える瞬時加速で一気に加速して姿を見失う。

「嘘?!

斬られた!」

「厄介物は斬り捨てる!!」

と急に目の前に表れて、私のアテナの神盾アイギスを斬り捨てたのだ。

「やったな!!」

パパと同じく戦えると思うな!!」

アテナの神剣。パラスを構えて居合抜きで、零落白夜を使わせない為に雪片式型を切り裂く。切り裂かれた事に驚愕しているが、私に言われた事に激昂して掴み掛かる。

「娘だからって、憧れた一夏さんの何がわかるのよ!!」

「パパの事が判るから、言ってるんだ!!」

何度でも言ってる!!」

蘭お姉ちゃんじゃ、パパなんかになれない!!

私達姉妹はパパ達の七光りと言われない為に日々、努力してるんだ

!!

憧れだからって、パパの真似すんな!!」

「うんやう!!」

ドツカア

「グツエエ!？」

「十夏なんか言われたくないわよ!!」

「グツエエ!？」

蘭お姉ちゃんにお腹を殴られて潰れた蛙の様な声を出す。

蘭お姉ちゃんに掴まれたまま、私は地面に叩き着けられたりしたが、千秋が零百の矢を使い、セカンドアビリティー『アルテミス矢』を発動させて蘭お姉ちゃんの肩を射抜く。

「お姉ちゃんをやらせない!!」

セカンドアビリティー『アルテミスの矢』を発動!!

喰らえ!!」

「ぎゃあ!？」

絶対防御が!？」

絶対防御を貫き肩を射抜かれた蘭お姉ちゃんは肩から血を流しながら反転して逃走する。

「逃さない!!」

パパとママの前に突き出して言ってる!!」

「何て言うのよ?」

ママと性格が似ている為に怪我して流血する肩を押さえながら何て言われるか冷や汗を流し聞き返す蘭お姉ちゃん。

「蘭お姉ちゃんがいじめたって言ってやる!!」

「辞めて!!」

鈴さんと一夏さんに殺されるから本当に辞めて!!」

「嫌だったら、落ちろおお!!」

「キャアアアア!？」

私と千秋は剣を構えると瞬時加速して、蘭お姉ちゃんの紅式改のウイング型のスラスタユニットを剣で斬り裂き海へ落としたのだ。

「国家代表が落とされた!？」

伊達に自由国籍からタッグトーナメントの世界大会に出る為の努力はしていない。

いつか、本気のパパとママに試合をしたいから…

蘭お姉ちゃんとの戦いで疲弊した私。

まだまだ、敵機はいる。

疲弊からの油断から、千秋が打鉄参式の対物ライフルから狙われた事に気付く。

「千秋!?!」

「あつ、やられる!?!」

「千秋いいいい!!」

ドン

「えっ?」

お姉ちゃん?」

大好きで大切な妹の千秋はやらせない。

構えた対物ライフルが罨だと気付かず、瞬時加速から加速して千秋のアルテミスを槍の石突で突き飛ばす。

そして、突き飛ばした勢いまま止まらない私の目の前に光る網はI S鎮圧用ネットだった。

ネットに絡まる私とアテナ。

しかし、剣で斬り裂こうとするが斬れない。

「今だ!!」

電流を流せ!!」

電流と聞いて、見える未来は…

「しまった!?!」

アツガガガガガガガガ!?!」

電流で痺れる身体と人肉が焼ける匂い…

ああ、私死ぬんだ…

お姉ちゃんに庇われた私が見た光景。

目の前では対IS用鎮圧ネットに絡まり電流を流され感電しながら苦しむお姉ちゃんの姿。

ユルサナイ…

そして、ネットも電流に耐え切れなくなつて焼き切れてアテナは解除され黒焦げとなつたお姉ちゃんだった物が海へと落下して行く。

ユルサナイ：ユルサナイ

私の心が何かどす黒い何かに支配されて行く。

だけど、落下するお姉ちゃんを

「お姉ちゃああああああん!!」

空中でキャッチして抱きしめる。

「今だ!!」

落とせええ!!」

私の背中に色んな弾丸が襲いかかる。

だけど、お姉ちゃんだけは守りたいと背中を盾にするが、余りの衝撃から手を離してしましてお姉ちゃんは海へと落下したのだ。

「あつ、お姉ちゃん!」

あつ、あああああああ!?

許さない、許さない、許さない、許さない、ユルサナイ、ユルサナイ、ユルサナイ：スベテ、キエテシマエ：」

そして、私の心は完全にどす黒い物に支配されたのだ。

禍々しい黒い光りは私を包み込んだのだった。

海へと落下しながら私が見たのは、どす黒い光りに包まれたまま千秋とアルテミス。

私の全身は酷い火傷で腕なんかは炭化していた。

「ごめんね…」

ザツバアアアアン

私の意識はここで途切れたのだ。

「えっ、嘘だよね?」

アテナの反応が消えた?

アルテミスとヴァルキリーに異常エネルギー反応?」

「どうした、束？」

「ちーちゃん、十夏ちゃんが!!」

「落ち着け!!」

「十夏ちゃんのアテナの反応が消えちゃったよ!!」

「うわあああ」

「なっ、何だと!?!」

泣き崩れる束を見ながら、指揮所から出る事を許されない私の怒りは誰にぶつければ良いのだろう。

## 臨海学校 女神アテナに導かれし者

何故か雲海の上に倒れていた私。

目の前に見えるのは、雲海に囲まれた山頂には大理石で出来たギリシヤ神話の宮殿を思わせる巨大な神殿だった。

『さあ、此処に来なさい』

私は、頭の中に聞こえる女性の声に導かれて神殿の中に入る。

「此処は？」

私、死んだのかな？」

『人の子よ、よくぞ我の神殿に来られた』

頭に直接語られるな様な感覚に振り向くとギリシヤ神話に出て来る女神が着ているドレスの様な服装とドレス上に装飾された革製の鎧を着ている金髪碧眼の美しい女性が槍を持ち玉座に座っていた。

「此処は？」

『人の子が無礼である。跪け、人の子よ』

目の前に居る女性の前では、抗うことは勿論の事だが立つ事さえ許されず跪かなければいけない威厳のある言葉。

女性は何時までも立ち続ける私に対して、手を下に払っただけで私の身体は言う事が聞かずに強制的に跪かせられる。

「何するのよ!!」

『子供故に許すが、我の名はアテナ。知性と戦を司る女神である』

「えっ？」

本物の女神様……」

『如何にも』

私は本物の女神様を目の当たりにして言葉を失った。

アテナは玉座から立ち上がると、私に向けてアテナ自身が持つ槍を投げつけ、目の前の床に槍が突き刺さる。

「ちよっ、危ない!」

『人の子よ、その槍を持ち、我と歩むに相応しいか力を示せ。何故、力を求めるのか我に見せよ』

「前置きなしで、戦えってねえ!!」

『そうなのか?』

なら、人の子いや織斑十夏。

我の名を冠する者（IS）に如何に力を求め、如何に欲する』

一瞬、ボケまくるアテナに反応して全力でツツコミを入れようと考  
えてしまったが、力を求める答えは一つだった。

「決まってるじゃない!!」

私は大切な物を守る為に力が欲しい!!

そして、大好きな家族を守りたい!!」

そう、私が叫ぶと無表情だったアテナの表情はニヤリと口角を上げ  
て獰猛な笑みで笑う。

まるで、最高の玩具を手に入れたかのように…

そして、腕を払うと風景が瞬時に一変して神殿が消えて雲海の上に  
立ち戦闘モードの女神アテナと槍を構えた私。

『ならば、力を示せ人の子!』

槍を構えたアテナに寸分の空きはない。

「やってやろうじゃない!!」

私も槍を構えて突進しながらアテナに槍での高速の連続突きを入  
れるが、アテナはただ槍を払うだけで私の槍が簡単に弾かれる。

「嘘?」

私の槍の技が全く通じない!」

『ん、如何様した?』

我に齒向かう心意気をしかと見せよ』

「上等よ!!」

何十、何百と突いたり払ったりと繰り返してアテナを攻め続ける。

『どうした人の子よ。汝は守りたいから力を欲するのではないか?』

口だけなら、神罰を与えようぞ!!」

しかし、アテナには槍の刃が一切掠らないし、腕に装備した神盾ア  
イギスを使う事なく全ての攻撃は槍を軽く振るうだけで簡単に弾か  
れる。

戦を司る女神だけに槍術は達人以上の腕前であり、アテナとの力



をの差を見せ付けられたのだ。

体力を使い果たして朦朧としていたが、私は諦めない。

「私はパパやママの様に家族を守る様に成りたいんだ!!」

だから、負けるかああああ!!」

朦朧としていて判らないが無我の境地だったのだろう。

それとも会心の一撃とも言うのしろ。

アテナからの一撃を躲して、朦朧とした中での私の一撃がアテナの革製の肩当てに槍が掠る。

『うぬ?!』

遂に当てて来たか。

我も本気で行くでしょう!』

「げっ、まだ、強くなるの!?!」

『さあ、我を愉しませろよ?!』

アテナから神々しい光りが輝き始めると、私の動きが悪く…いや、アテナが遂に本気になって動きが早くなったと言える。

アテナからの振るわれる槍の突きや斬撃が全て私の衣服だけを正確に斬り捨てて行く。

『このままでは汝は裸ぞよ?!』

今の時代の下界では、その姿は痴女と…!』

確かに私の制服はズタボロに斬り捨てられてパンツ丸出した。

まだ、ギリギリ幼女な私を痴女と言い捨てる糞女神を絶対にぶっ飛ばす。

『ほう、我を糞女神とな。うむ、ぶっ飛ばすか?!』

「思考まで読むな!!」

『フツベエ!?!』

思考を読まれた私は恥ずかしくなり、槍を雲海の上に投げ捨ててまで、全力で突進してアテナの前まで行くと、ツツコミながら放ったアッパーがアテナの顎を捉えて殴り飛ばしたのだ。

『汝は良い拳を持つ。』

その拳で世界を狙わぬか?!』

「誰がボクシングのチャンピオンにならなきゃ成らないのよ!!」

『ギャフン!?』

良い、拳だった…』

ドツサア

「もう、嫌…」

私は結局、アテナに思考を読まれながらボケられたりおちよくられたりと完全に遊ばれていたのだった。

それから、数時間後にはアテナが振るう槍を何とか受け止められる様になる頃にはパンツ以外は槍で斬り捨てられて裸にされたのだった。

『ふむ、やはり汝は痴女よな』

「あんたが斬り捨てたからでしょうが!!」

『ゲツフン!?』

私に慣れたのか、元からそうなのかは判らない。しかし、子供の様に無邪気に笑うアテナと彼女の掴みどころの無い性格。そして、更にボケをかますアテナに鉄拳制裁と言う名のツツコミを入れるが更に本人が笑うだけで諦めて肩を落す。

『うむ、槍は飽きたのう…これで、遊ぶか』

「ねえ、今遊ぶって言わなかった!」

『気のせいだ。行くぞ!!』

アテナが具現化し取り出したのは片手直剣だった。

私の槍もいつの間にかアテナが持つ同じ剣へと変わり、アテナが踏み込むなり私の視界から消えた。

スッパン

「へっ?」

間拔けな声を出して剣先を見れば、いつの間にか表れたアテナの斬撃で私の剣が根元から先が斬られて無くなっていた。

『さあ、十夏!!』

我と遊び（戦い）我を愉しませて見せよ!!』

どうやら、力を示す以前にアテナの玩具となる定めになった様だと泣きたくなったのだった。

あれから、日々の時間と年月の流れが早い物でいつの間にか十年が経っていた。

「せついい!!」

『うぬ!』

「はああああ!?!」

『ギャフン』

神殿前での訓練での光景はアテナの剣から放つ斬撃を躲して上段切りでアテナを吹き飛ばすがアテナに一撃をツツコミ以外で未だに入られなかった。

あれから十年の修行は正直言って長かったし辛かった。

毎日、槍術や剣術などの様々な武術の訓練ではアテナに玩具の様に遊ばれながら、ぶつ飛ばされる日々だった。

私の身体も十年の歳月が成長させ、未熟なロリ体型から大人の身体へと成長して今では千冬叔母さんの様な鍛え抜かれた美しい身体へと成っていた。他に変わったと言えば、髪の色が艶のある黒色から綺麗なプラチナシルバーに変わってしまったのは何故だろうか。

修行の成果は、今では槍や剣でもアテナと対等に戦えるだけの腕前になっていた。

ただ、不便な事がある。

まさか、千冬叔母さんの様に余りにも育ち過ぎた胸が邪魔だとは全く思わなかった。幼き日に、この今くらいの胸の大きさに羨ましく思ったのが懐かしく思う。

だけど、剣や槍を振るう度にぶるんと揺れる胸に邪魔だと思っし、弓術訓練では引いた弓の弦が胸の先に当たり痛がったりした。

そして、服装もだが私自身もアテナが着る同じ服で神殿の中で過ごす、下着の概念すらない為にパンツは手作りの紐パンでブラは作れずノーブラでる為に余計に胸が揺れる。

「本当、邪魔ね…」

と思いつながら、竈で今日の夕飯を作る。

『とくおくか、ご飯まだか』

腹を空かせた駄女神が手に持つナイフとフォークをテーブルに打

ち付けながら鳴らして催促して来る。

「もう少しだから、待ちなさい」

母親の様に嗜め、アテナに出す料理を仕上げて行く。

そう、訓練ではボコボコにされるが、タダでやられる私では無い。食材選びにはかなり苦労したが、十年掛けてアテナの胃袋を掴み、私の手料理の虜にしてやったのだ。

そして、今日は修行で魔界に行かされた時の休憩で暗黒海で海水浴を楽しもうとしたら、海から飛び跳ねたジェノサイドキングサーモンと遭遇した。

浜に居た私を食べようと襲うが、逆に私の身長以上に大きい重量級の戦斧を具現化して振り下ろし、ジェノサイドキングサーモンの頭を叩き割って倒して夕飯の材料としたのだ。

「はい、今日は魔界で狩ったジェノサイドキングサーモンの石狩焼きよ!!」

『あら、魔界の暗黒海の最強の鮭ね。

良く勝てたわね。

普通ならレッサーデーモンがジェノサイドキングサーモンに襲われて、美味しく食べられてる巨大な鮭よ。

でも、折角だから頂きます。

うむ：おいひいー』

美味しそうに石狩焼きを食べるアテナ。

私はジェノサイドキングサーモンから採ったイクラを塩漬けにしたりイクラを解したりして、白いご飯と一緒にイクラ丼にして楽しんだのだ。

今でも食材を取りに行くときは、アテナに色々な場所に飛ばしてもらいながら、こうして朝昼晩の他に訓練後には料理を作り振る舞う。何故か、アテナの休息は神酒を飲み、私が作る料理を着にする光景は学園での千冬叔母さんを思い出す。

そして、私にも身体を強くする為に神酒を飲まされ、酔って眠くなればアテナを抱きまくらに私は眠る。

私はアテナとこんな生活をして訓練しながら、そんな日々を送ったのだ。

そして、今日はアテナからの試練が待っていた。

十年前と同じ、雲海の上では最初から本気で来るアテナが待ち構えており、神々しいアテナに思わず跪かなければ、私の首が飛ぶ光景しか見えない。

それほどにアテナが本気だと判る。

雲海の上では神盾アイギスと長槍を持ち構えるアテナ。しかし、長槍は雲海に突き刺して片手直剣を具現化する。

『十夏、来たか』

「今日こそ、ぶっ飛ばす!!」

私は剣を抜き構えた瞬間、お互いに踏み込み姿が消えるとお互いに斬撃を繰り出し何合も斬り合う。

真夜中に咲く花火の様に剣がぶつかり合う度に火花が飛び散る。

『ほう、やる様になった』

「当然じゃない!!」

アテナから私に与えた権能は武器の具現化とアテナによって治された神に近い肉体だった。

理由は、この世界に呼ばれた時には流された高圧電流による感電により全身が黒焦げで腕や足もだが顔の半分までが炭化していた。この状態でよく生きていたと思う程に瀕死状態だったらしくて人間界の治療では完全に手遅れだったらしい。

私の専用機アテナのコアに懇願された女神アテナは瀕死状態だった私を神界へ召喚し治療する為に自身の肉体の一部を与えて肉体再生をしたと食事の時にアテナに言われた。

しかし問題もあつた。

神の肉体は普通の人間には猛毒で、神の肉体は普通の人間が耐えられる訳では無く崩壊してしまうらしく、対応策として最初は薄めた神酒を飲ませて慣らし、次第に濃度を調整した神酒を飲ませて肉体が合うように造り替えたのだった。

そして、アテナ自身が助けた事を恥ずかしがり、意識が戻る前に制服まで直して冒頭のように雲海の上に放置して、目覚めた私を神殿に呼んだらしい。

アテナは刃こぼれで使えなくなった剣を捨てて、新たに戦斧を具現化してから踏み込み消える

『はアアアア!!』

私の上空に表れてアテナは戦斧を振りかぶり、私へ振り下ろす所なのだろ。

「甘いわよ!!」

私は逆に剣を投げ捨てて、戦槌を具現化して打ち上げる様にフルスイングして、振り下ろされた戦斧の刃を叩いて反発する力を利用して逆にアテナごと吹き飛ばす。

『あつ、読まれた!』

「おりやアアア!!」

『ちよっ!?!我は野球ボールじ…フツギャン!』

「ホームラン!!」

『我を野球ボールにしよって!!』

まだまだ、行くぞ!!』

「ちよっ!?!せっい、せっい、せっい、せっい!?!」

戦斧を手放して雲海の上をバウンドしながら吹き飛ばすアテナだが、吹き飛んだ先で槍を多数具現化して投げつけるが、剣を二本具現化して全て叩き斬ったのだった。

そして、アテナに一撃を入れる瞬間が来たのだ。

槍を叩き斬った時にアテナは槍を構えて突進。

『はあアアア!!』

私も、カウンターを入れるべく具現化した短槍と盾を構え、アテナの槍の突きを盾で受け流しながら短槍でアテナの肩に突き刺したのだ。

「やああああ!!」

『うっぐう!?!』

肩を槍で突き刺されたアテナは膝を付き、刺された肩を抑えて苦悶

の表情となる。

「これで、止めえええ!!」

『ヘッブラア!』

私は槍も盾も投げ捨てて拳で殴るべく、アテナの顔面に拳を打ち込み勝ったのだった。

『いたたた：流石だ。』

我の負けだ。

我に勝った褒美にこれをやろう』

「これ、ギリシヤ神話の本で見た事が：」

気絶はしなかったがアテナは自身の負けを潔く認め、私に玉座の裏に立て掛けてあった三叉の槍を渡して来たのだが嫌な予感しかしない。

『うむ、我が処女神だと知りながらポセイドンの奴に襲われた時に抵抗して奴の金的を蹴り飛ばして奪った槍が神槍ネプチューヌだ。奴は未だに無くしたと思うとるし構わんだろ?』

案の定、他の神から奪った神槍だった。

ただ、一つだけ文句は言いたい。

「何、私に厄介物を押し付けてるのよ!!」

これって、ポセイドンに狙われるじゃない!!」

『うぬ、そうか?』

「当たり前よ!!」

全力で突っ込み、アテナの顔面を再び殴る。

バッキイ

『ヘッブラア!』

やはり、良いパンチよ。

このまま、世界を狙わぬか?』

「なんで、ボクシングのチャンピオンを狙わなきゃいけないのよ!!」  
と最後までボケをかますアテナだったが、私を送る際真面目な顔になった。

『十夏よ、済まぬが我が従姉妹のアルテミスを止めてやってくれ。  
あ奴は、主が汝を失ったと思いい泣き続ける主に怒り狂い、アルテミス

は闇と病を司るヘカーテとなり権能を使いながら暴走するだろう。もし、権能を使われたら病魔が人々を襲い病気に侵して殺めるだろう。私の可愛いアルテミスを…』

「千秋だって、私の可愛い妹よ。」

ぶつ飛ばしてまで、二人を助けるわよ」

私はアテナにアルテミスの事を託され、あの世界に戻ったのだ。

しかし、アテナが駄女神だと忘れていた私。

『あつ、十夏を元の幼い姿に戻すのを忘れてた…』

まあ、楽しそうだから良いよね?』

と下界を見ながら私は更に楽しくなるだろうと降臨する為に神殿へと戻ったのだった。

『うふふ…織斑十夏。』

我の至高の玩具。

また、我を愉しませてくれるだろう』



臨海学校 三つの顔を持つ女神と降臨する闇の女神  
ヘカーテ

「憎い、憎い、憎い、ニクイ、ニクイ、ニクイ…」

「ダイスキナオネエちゃんヲウバッタアイツラガニクイ…」

黒い空間の中、蹲りながら呪詛を唱え続ける千秋に対して見る事しか出来ない私だが、千秋の心と肉体を壊さない為に如何なる攻撃を防ぐ闇の繭をつくり千秋の肉体を守り闇の空間に閉じ込めた。

私は千秋の専用機のアルテミスだが、私の基となったギリシヤ神話の女神、アルテミスを知っているだろうか？

そして、私には三つの女神としての顔がある事でも有名な女神だった。

一つは千秋の専用機の基となった狩猟と純潔を司る女神アルテミスとしての私。

自然を操り狩人達に加護を授け、乙女達の純潔を守護する存在。それが、女神アルテミス。

そして、双子の兄のアポロンは太陽を司り、双子の妹で月を司る女神ルナとしての私。

月の女神である女神ルナは月に関係する海の満ち引きや重力などを守護する存在。それが、女神ルナ。

最後は闇と病を司る女神ヘカーテとしての私。

全ての闇を守護とし如何なる病を操る存在で、私である女神の中では男嫌いで嫉妬深い最も残忍な女神である。それが、女神ヘカーテ。全ては同じ女神であり処女神である私である。

千秋がいる闇の中は闇と病を司るヘカーテの領域であり、私自身は闇と病を司る為に漆黒のドレスを纏い支配する女神ヘカーテへと変貌する。

「ひつぐう…お姉ちゃああああああん!!」

ショックから気絶しては大人しくなる千秋だが、再び覚醒してはあのように泣き出す。涙が枯れれば再び呪詛を言い続け、ループする様に繰り返す。

「殺す、殺す、殺す、殺す、コロシテヤル…」

見ていられないほど、姉を奪われた怒りで私の闇に染まる千秋と千秋の心と同調してしまった私。

『私の千秋を許さない。』

許さない、許さない、許さない、許さない、ユルサナイ……………あつ、あははははははははは!?!』

そうだ、千秋の障害となる全てを私の生贄となって貰おう。

私を怒らせた代償と生贄はあの連中の命だ!!

ああ、人の子の生贄は何千年ぶりだろう。

我の秘蔵の病で皆殺しにしてやる。

全ては神罰として…だから

『千秋、そなたの肉体は借り受ける』

「うん、良いよ。」

アルテミスがお姉ちゃんの仇を取るんだよね？

なら、良いや。

アルテミス、私の身体を好きに使って……………オネエチャンヲコロシタヤツヲヲコロシテ…」

そうした連中に凄まじい怒りを覚える私は神罰を落とそうと結論した。千秋から肉体を奪おうとしたが逆に千秋から身体を差し出され、私は千秋に女神ヘカーテとして憑依したのだった。

私は権能を使い、千秋の肉体を私の肉体に合う様に大人の女性へと成長させた。

私が千秋の肉体で権能を使うと、未熟な身体の肉体では千秋を殺してしまう。だから、千秋を失いたく無い私は肉体のピークである17歳の肉体へと成長させたのだ。

女神ヘカーテは千秋の肉体へと入り憑依すると専用機だったアルテミスのコアも私達と同調して女神ヘカーテである私と同じ姿になるべくセカンドシフトをしてヘカーテへと変貌を果たしたのだった。

そして、トロイアの戦い以降は神や女神達の干渉は無かったとギリシャ神話では記載されている。しかし、女神に恐れを抱いた人々が敬い奉って女神達を宥めていたに他ならないからだ。

しかし、女神達は干渉する事を選んだ。何故なら、二人の女神の名を冠する専用機を使う二人の双子姉妹を気に入り、襲撃者達が双子姉妹を傷付けた事に一人の女神の逆鱗に触れてしまったのだ。

そう、女神の中では最も残忍で残酷な女神の逆鱗に触れてしまったのだ。

それを知らない百里基地方面から来た襲撃達は自分達に起こる、最も残忍で最悪な悲劇が起こるのは誰も知らない。

旅館を護るべく奮闘する教師部隊。

その中の一人、ナターシャ・ファルスは十夏の専用機アテナが落とされる瞬間と妹の千秋が黒い光に包まれ繭を形成する瞬間を見た。

「嘘よね？」

十夏ちゃん…」

「ナタルてめえ!!」

ボヤツとしてると落とされるぞ!!

オラオラツ!!

十夏を殺ったお礼は、まだ渡してねえぞ!!」

旧式のアラクネ改を駆り、奮闘を見せる巻紙先生はいつも以上にキレていた。私にも激を飛ばし味方を鼓舞する。アラクネ改の蜘蛛の糸で打鉄参式を捌め捕りながらブレードでスラスターだけを斬り裂き撃墜する。

雨宮先生も完全にキレている様で、無言で無表情のままゴールデン・ドーンを駆り火球を飛ばしながら、何機も業火に焼きながら落として行く。

しかし、多勢に無勢。

更に増える打鉄参式。

そして、最前線では指揮所から飛び出し暮桜の後継機である暮椿を纏い、姪を落とされ殺された事に怒り狂い鬼神の様に暴れる織斑先生は容赦なく零落白夜を発動して襲撃者達を瞬殺していた。

最前線で暴れる織斑先生の後ろには、暮椿の援護とエネルギー補給を観点に箒先生の紅椿が展開して、暮椿と紅椿を護る様に御手洗先生の新しい専用機サーペントカスタム御手洗仕様は全身に至る所にミサイルポッドやキャノン砲に重火器であるツインビームガトリングを装備したフルウエボンタイプ（FAタイプ）が陣取りミサイルやキャノン砲、終いにはガトリング砲まで乱射して打鉄参式を蜂の巣に変えていた。

「御手洗先生…相変わらず歩く弾薬庫ね…」

と私が呆れる程に装備していた。

逆に被害は、ティナ先生のテンペスターMk-IIIと他の担任や副担任が駆るサーペントカスタムAタイプは被弾して簪博士の駆る専用機の打鉄式改により回収されていた。

そう、既に残る教師部隊は私を入れた六人だけだった。

精銳の教師部隊が十夏ちゃんが落とされて増援に駆け付けてから30分もしないで壊滅状態となったのだ。

そんな時だった。

黒い繭がピツキイと罅割れたのだ。

落とされたティナ先生が作戦室からモニターしていて異変に気付いたのだ。そして、黒い繭から観測された異常エネルギーに撤退命令を出す束先生。

「ちーちゃん、皆!!」

あの黒い繭から異常エネルギーが…

って、鈴ちゃん?」

しかし、束先生が撤退を言う前に黒い繭が割れた。

そして、中から出て来たのは空中に浮かび漆黒のドレスを纏う女性。

私が見る限り、逆らってはいけない存在だと第六感が警鐘を鳴らす。

「鈴、何故そんな所に居る!!」

織斑先生が見た女性は余りにも容姿が似ていた為に鈴音さんと勘違いしたのである。叫ぶが、女性は一切反応しない。しかし、女性は私達を見ると手を払う。

『人の子達よ、我の邪魔である。』

下がれ!!」

「何だと!?!」

暮椿が言う事を聞かないだと!?!」

「何だんだ!?!」

畜生!!」

アラクネ動きやがれ!!」

女性の手を払い、たった一言で私達の教師部隊の I S が全く動かなくなり、透明な球体に包まれ操られる様に旅館入口の前まで強制的に戻されてしまったのだ。

そして、旅館の入口が勝手に開き、開いた旅館の入口へ戻されるなり I S を強制解除され旅館の中に強制的に押し込まれたのだ。

そして、女性は腕を払うと旅館は半球体の膜に包まれ、教師部隊を追撃した来た打鉄参式の数機が旅館へ対地攻撃をするが通じる気配はない。

膜によって安全だとわかり、旅館に閉じ込められ罅が明かない状況に情報を知る為、私達教師部隊のメンバーは地下の作戦指揮所へと向かう。

部屋に入った所で織斑先生が束先生の胸ぐらを掴み尋問する。

「束、貴様!!」

千秋に何を渡した!!」

「「織斑先生!?!」」

「担任としてオレも聞きてえな?」

白状しやがれ!!」

巻紙先生までもが束先生を殴り飛ばそうとするが雨宮先生が嗜め

た。しかし、一番に可愛がっていた十夏の事で救援に間に合わなかった事を嘆き泣いていた事をISネットワークを通じて、私のシルバリオ・ゴスペルがアラクネのコアを通じて映像付きで教えて来たことは記憶に新しい。

「「巻紙先生まで!?!」」

「オータム、落ち着きなさい」

「スクール、だがよ、だがよ…オレの大事な教え子だぜ? 知る権利が在るだろうが!!」

「落ち着きなさいと言っているでようが!!」

バツチーン

キレた巻紙先生を止めるべく、雨宮先生の平手打ちが巻紙先生の頬に炸裂する。

「ちっ、悪かった」

「判れば、良いのよ。織斑先生、貴女も落ち着きなさい」

「済まなかった。

十夏の事で……

うつぐう…あああ…」

初めて見る織斑先生の涙を流す光景は、十夏に叱られ罵倒されながらも姪として可愛がっていたから尚更だろう。

「ちーちゃん、あの繭から出た女性は多分千秋ちゃんだよ。女性の身体からアルテミスのコアのIS反応もあるから間違いないと思う」

「何だ?!」

「じゃあ、鈴に見間違えたのは…」

「うん、千秋ちゃんは親子だけに鈴ちゃんにそっくりだもんね。ただ、まさかだと思うけど…」

「織斑先生、東先生違います。あれは、ギリシャ神話の女神ヘカーテだと思う」

元ギリシャ国家代表のフォルテ先生の一言で騒然とする作戦室。何かを察したのか

「もしかして、東さんのせいなのかな?」

東さんが十夏ちゃんと千秋ちゃん、レナスちゃんの専用機のコアは

新しく束さんが作ったコアだから：

いや、女神シリーズに使われてるコアとも言うのかな。あれには、各神話の女神や神に纏る神々の遺物をコアに入れたせい？」

「束、貴様!!」

「ウツグウ!？」

三人の専用機のコアに神の遺物を使っていた事を白状したが、それを聞いた事に完全にキレた織斑先生は遂に束先生の胸倉を掴み顔を殴ってしまった。

「ちーちゃん、気が晴れるなら束さんをもっと殴っても構わない。でも、束さんも十夏ちゃんの事で泣きたいんだよ。だから、束さんが出来る事をしなくちやいけないんだよ」

「束えええ、貴様アアアア!!」

殴られた束先生は壁に激突するが血を流したまま、分析する為に椅子に戻って座り続きをやるうとするが、それすら気に喰わない織斑先生が胸倉を掴み殴り掛かるが、宮先生と巻紙先生の二人掛かりで止めに入る。

「二人とも止めなさい!!」

「オータム、馬鹿二人を止めるわよ」

「ちい、仕方ねえな。」

争ってる場合じゃねえだろが!!」

二人のことより、私が見ていたモニターには映し出されていた女性が死神をも連想させる巨大な鎌を構えていたのだった。

『これで良いのか?』

「うん、先生達には非はないから」

やはり、優しいな千秋は：

千秋の願いで教師部隊を巻き込まない様にと、私は教師部隊の全員を言魂でISを動かなくして操り、強制的に旅館へと押し込んだ。

そして、教師部隊が旅館へ押し込んだ後はアルテミスの神技アルテミス盾により旅館を囲むが、馬鹿共は追撃して旅館へと攻撃を始め

る。

『人はやはり愚か者でしかないわね』

『どうする?』

『こうするわ』

私は神斧デスサイスを具現化し、旅館を囲み攻撃する襲撃者達をデスサイスで斬り裂いた。

「「へっ? 斬られてない?」」

斬り裂かれた襲撃者達は自身が斬られたが、何もない事に抜けた声を出す。

しかし、身に何もない事に安堵して、私を落とそうと襲い掛かろうとするが寸前で異変が起きたのだ。

「ぎやアアアアア!」

「嫌アアア!?! 腕がアアア!」

「ゴツフウ!」

神斧デスサイスに斬られた三人はヘカーテの権能によって病を強制的に発病をさせられて、一人は全身に関節炎を発症させられ全身に激しい痛みが走り激痛から気絶して落下し、一人は昔受けた腕の傷口から破傷風を発症させられ腕の傷口が一気に悪化して瞬時に腐り落ちて悲鳴をあげ、もう一人はヘカーテの秘蔵の病で発病させられ口から大量の吐血して落下しながら亡くなったのだった。

それは、激怒した女神ヘカーテの蹂躞劇の序章にしかならない。

神斧デスサイスを片手にダンスを踊る様に襲撃者達を巨大な鎌で斬りまくる漆黒のドレス姿の闇の女神ヘカーテ。

それは美しく儂い花達の命が散る光景。見る者を魅了し、引き込まれるように巨大な鎌に刈り取られる。

そして、斬られた襲撃者達は様々な病を瞬時に発病させられ襲撃するどころではない程に病に侵されて命を落す者があとを絶たない被害を出したのだ。

「気色の悪い女を囲え!!」

襲撃者達がヘカーテを囲むが全く動じないどころか、ヘカーテが女神として神々しくなっている事に気付かない。



『我を前に不敬である。跪け!!』

一瞬でISを解除され跪かされる襲撃者達だが、それ等を許すへカーテでは無い。

強いては、千秋が願う姉への仇を取る為に…

『さあ、罪人共よ、我にその首を捧げるがいい!!』

「いやああアア!？」

死にたく無い!!」

「おかああさああん!!」

へカーテはデスサイズを構え、十数名に渡る襲撃者達の首を刎ねるべく振りかぶる。襲撃者達は逃げようにもへカーテにより跪かされ、女神の言魂で動けず逃げられない。泣き叫ぶが女神の逆鱗に触れた彼女達の未来は決まっていたのだった。

ザツバンと振り切りられたデスサイズは襲撃者達の首を一斉に刈り取り刎ねたのだった。

そして、シャワーの様に降り注ぐ血の雨は漆黒のドレスを真っ赤に染め上げたのだ。

海に落とされた五反田蘭は浜辺へと上がった時に見た光景は一人の女性に大鎌を振るわれ仲間達の首が跳ぶ光景だった。

「嫌アアアア!？」

ジャリ、ジャリ…

叫び、恐怖に駆られながら四つん這いとなって逃げようとするが、砂を踏む音に振り向けば返り血で真っ赤に染め上げた漆黒のドレスを着て大鎌を持つ女性が立っていた。

『仲間がまだ居たか?』

「ヒツイ!？」

『そうか、仲間なのだな。汝にも相応しい死を与えようぞ』  
心と思考を読まれたのか仲間だとバレ、女性が大鎌を構える。

そして、恐怖から股から温かい物が出ている事に気付くが、なり振りお構い無しに逃げようとするが身体が言う事を聞かない事に絶望する。

「あつ、ああああ…」

『さあ、私の生贄となるが良い!!』

(ああ…私、死ぬんだ…せめて、一夏さんに謝りたかったな…)

「蘭お姉ちゃんは殺らせない!!」

大鎌を振り降ろされた瞬間、目を閉じて死を感じたが大鎌が一行にやって来ない。

「えっ?…」

眼を開けば、大鎌の柄を捉えるように三叉の槍が大鎌を吹き飛ばし一緒に浜に突き刺さっていたのだ。

そして、私を庇う様に白い古代ギリシヤのドレスの上に真っ赤な鎧を纏い白銀の髪をした美しい大人の女性が立っていたのだった。

## 臨海学校 戦乙女三姉妹の宴

光に包まれ気絶した私は、目を開ければ何も無い草原に寝かされて居たらしく、群青色のヴァルキリーメールを纏う金髪の女性に膝枕をされていた。

「ん？」

「やつと、目覚めましたね。レナス姉様」

「へっ？」

急に姉と言われても困るが、私より遥かに育つ胸と身長。何より、弓を膝下に置き群青色のヴァルキリーメールを纏う金髪の女性が微笑むが、私には色んな意味でこんなにも出来が良すぎた妹などいない。

「ふん。闇落ちした愚かな妹など、妹と認めん」

ハルバードを握り、漆黒のヴァルキリーメールを纏う黒髪の女性が立っていたが、目付きの怖い姉どいなくとも、織斑先生を連想するみたいでお断りだ。

そもそも、私は一人っ子だ。

それでも、私は二人の女性に介抱されて居たらしい。

そして、私も制服だったがいづの間にか蒼穹のヴァルキリーメールを纏っていたのだった。

「どうやら、レナス姉様は私達が判らないみたいですね。まずは、私は三姉妹では三女のシルメリアでレナス姉様の妹です。そして、あちらでいじけているのが長女のアーリィ姉様です」

「シルメリア、私はいじけておらんぞ!!  
ただ、ただな。」

レナスを探すのに苦労しただけだ!!」

顔を真っ赤して、そっぽを向くアーリィさん。

確か、アーリィさん見たいな女性はママの聞いた話ではツンデレだと聞いた事がある。

そして、アーリィさんとシルメリアさんが私を探してた？

「どうして、私を探してたの?」

「えっ?」

私の質問に驚く二人。

「まさか、本当に記憶がないのだな…」

アーリーさんに限っては手を額に当てて首を振りながら呆れていた。呆れられても、私には意味が判らない。

「レナス姉様、私達三姉妹は運命を司る三姉妹の女神なの。本来の世界で転生する筈が、レナス姉様だけが他の世界に人として転生してしまったの」

えっ?

私が女神?

そんなの、信じたくない!!

だって、私は…

そう。

「違う!!私にはラウラ・ボーデヴィツヒの娘、レナス・ボーデヴィツヒだ!!そして、私には姉妹など居ない!!」

他でもない、ママの自慢の一人娘だから。

例え、そうだったとしても認めない。

決定事項である。

もし、認めてしまったら大好きなババ様やママを否定する事になる。

「ほう、強情ぶりだけはレナスと同じか…」

確かに、私はママに似て強情だ。だけど、貴女が言うレナスじゃな

い。ママにだ。

「ちよつと、アーリー姉様!」

「シルメリアは黙っている。」

少し痛い目に遭ってもらうだけだ」

アーリーさんはハルバードを構える。

「拡張領域は…使える!!」

来て、グングニール!!」

私はババ様からの誕生日プレゼントで貰ったグングニールをコー

ルして手に取ると構える。

「グングニールだど!？」

ふん、なんだ紛い物で偽物の槍か。

聞いて呆れる!!」

アーレイさんの一言にババ様を否定された様に思ってしまった。

偽物でも構わない。

だって、あれにはババ様の強い思いがあるから。

だから、私は言われた事に瞬間湯沸かし器の様に激昂する。

「これは、ババ様からの誕生日プレゼント。だから、アーレイさんな  
んかに紛い物だって言われたくない!!

行け!!グングニール!!」

アーレイさんに向けてグングニールを投げ付ける。

「ほう、私が避けても正確に追ってくるまでもがオリジナルと一緒に  
か。なら、対処は簡単だな。

はあアアア!!

神技、ニーベルンヴァルステイ!!」

投げ付けたグングニールが、ハルバードによる連続の斬撃と止めと  
言わないばかりに投擲する巨大な槍。

グングニールが耐え切れる訳が無く

砕けてしまったのだ。

「あつ、あああああ…」

砕けたショックで言葉に出来ない。

「呆けてないで構えろ!!」

はああああ!!」

ハルバードの斧の部分に服を引っ掛けられ、アーレイさんの側まで  
引き寄せられると、私の腹部にアーレイさんが零距离で放った拳が引  
き寄せられたスピードと合わさり鎧を砕きながらめり込む。

バキバキバキ

「ゴッベェ!!」

今まで、受けた事の無い衝撃と痛み。

蒼穹のヴァルキリーメールの腹部が砕け散り、めり込んだ拳の衝撃が直接来て胃から口へと込み上げる胃液。

何より、アーレイさんの鎧すら砕く重い拳に私はつの字に体が曲がり草原に墜ちたのだ。

「ちよつと、アーレイ姉様!?!」

「闇落ちした愚妹を叩き直すには良い薬だ。

それに、主神の命で散々汚い役をやって来たんだ、汚れ役は私で十分だろ?」

私の可愛い妹であるシルメリアとレナスには綺麗なままできて欲しいからな」

気絶する瞬間、アーレイさんとシルメリアさんの会話を聴きながら落ちたのだ。そして、私はアーレイさんから伝わって来る人を恨み憎しむ愚かさに気付き後悔したのだ。

そして、アーレイさんの心は見た目が怖い顔なのに優しい人だと判ったのだ。

「だからって、アレはやり過ぎです!!」

草原の上で気絶する愚妹を後目に凄い剣幕で私に詰め寄る妹のシルメリアに私はタジタジだった。

私だって、妹を殴る事なんてやりたくない。

だけど、私達がレナスを見つけた時に見た光景は巨大な船がレナスを庇い、機械を纏う女性によってレナスと母親だろう女性に敬礼しながら業火に焼かれ殺される瞬間だった。

そして、叫びながら祖母が目の前で殺され怒り狂うレナスの心の痛み。私達、姉妹故に心に伝わってくる憎しみや悲しみは余りにも悲しかった。

そして、幼いレナスにとって、余りにも残酷で受け入れ難い事実だ。祖母の死が余りにも理不尽極まりない。

我らが、運命を司る女神であっても覆せない、運命(さだめ)によって決められた不幸。

そして、人して生を謳歌する間の決められた運命神故の私達姉妹の性でもある。またもや、前世と同じく不幸に塗れた生を生きなければならぬのは幸福を願う姉として悲しい。

「それにしてもな？」

「アーリイ姉様、確かに…ぐつと来ますね…」

「レナス（姉様）の寝顔が可愛い過ぎる!!」

姉妹が揃も揃って、気絶してぐっすり眠る幼いレナスの寝顔に可愛い物を愛でる時のケダモノの眼をしているのは姉妹所以だろうかと思ってしまうのは気のせいだろうか？

「なあ、シルメリア？」

私はレナスが気絶して寝ている事を良い事に独り占めしながら愛でており、綺麗でサラサラなプラチナシルバーの髪を弄りながらシルメリアに聞く。

「アーリイ姉様？」

ロングヘアを三つ編みにしてシルメリアに見せる。

「これなんか、完全にレナスじゃないか？」

「うっぐう…卑怯ですよ…小さいレナス姉様なんか可愛い過ぎるじゃないですかあ…ああ、鼻から熱いものが…」

自分の首をとんとんと叩きながら睨み付けるシルメリア。

更に、レナスが気絶している事を良い事に色々な髪型にして遊ぶ私。そして、色々な髪型に反応しては目をハートマークに変えて鼻血を流すシルメリア。

「変態姉妹現るって、誰が言った!!」

「アーリイお姉様？」

と誰かに言われ叫びながら反応してしまった私。

さておき、気絶しているうちにレナスの持ち物を調べるが、首にしているネックレスから機械的な物を感じて神力で調べる。そして、何かレナスのネックレスが反応してしまい、拡張領域となる物の操作が出来てしまい、中から吐き出された衣服のセットは透明な袋に入っていたのだ。

「うむ？」

これは…可愛いかもしれない」

早速、その衣服セットを袋から取り出してレナスに着せ替えてシルメリアに見せる。

「シルメリア、この格好はどうだ？」

私がレナスを抱っこしながら、取り出した衣服を着せ替えてシルメリアに見せた姿は、猫耳のカチューシャを被らせ髪型をツインテールに替える。そして、手には猫の手を模範したグローブ。更に、上着には胸の所だけを腹巻きの様な物を着せ、下は白い尻尾付きの短パンだった。

そう、白猫をモチーフにした獣人姿のレナスのコスプレの出来上がりだった。

ドイツにいた頃、レナスは部屋中を逃げ回るが捕まり、クロエが手に持ちぶら下げる衣服セットを見て余りの恥ずかしい格好だと判り赤面する。そして、クロエ叔母さんに着せ替えられる瞬間を狙い、衣服を奪い取って拡張領域に封印した代物だったのだ。

それをアーリイは神力で待機状態のネックレスを反応させて拡張領域から間違って出してしまい、これみよがしとレナスに着せたのだ。

ただ、後に衣服を着替えさせられず見られなかったクロエ本人が知り泣きながら悔しがる事は伏せて置く。

それを見てしまったシルメリアは

「ゴッフツ!?!」

レナスの白猫の獣人姿のコスプレが余りの可愛さに大量の鼻血を吹き出して、親指を立てながら気絶したのだった。

そして、アーリイは鼻血を流しながら気絶したシルメリアを見て気付いた。

「私って扱い酷いわよね？」

VP本編では悪役で登場して散々なまでにレナスやシルメリアに負けたのに、こうも簡単にシルメリアが気絶するなんて…」

と違う意味（メタ発言）で落ち込んだのだったのだ。



やるなせない気持ちをも、近くに居た食事中の野生の猪を狩ることで発散して食べられる様に処理して、猪を焼くためにレナスの砕けた槍の柄を頭からお尻へと貫く様に猪に突き刺して丸焼きにしたのだ。

脂が乗り、美味しそうにこんがり焼けた臭いと香草や香辛料の臭いに釣られ、起き上がる二人はやっぱり姉妹だと実感する。

「アーリイお姉様の手料理、美味しいですね」  
とシルメリアが笑いながら猪肉を頬張り。

「クセがあるけど美味しい」  
とレナスが黙々と美味しそうに食べる。

「こういうのも悪くは無いな…」

そして、焼けた猪を凄いい勢いで美味しそうに食べるレナスとシルメリアの二人の妹を見ながら秘蔵の葡萄酒を嗜む。

あの世界では叶わず、こうして一緒に居られる姉としての特権だと言える。

あの世界では輪廻転生の関係から三姉妹が揃うことは一切無く、こうして三姉妹が揃っての食事は初めてだったのだ。

もし、主神（オーデイン）が許して女神の三姉妹としてではなく、本当の人となり三姉妹としての人生を謳歌を出来たなら、さぞ素晴らしい人生だろうかと思う。

「汚れた私などに許される訳は無いか…」

「その通りだ!!」

「誰だ!!」

「やっと、見つけたわよ!!」

「貴女達!!」

聞いた事のある女性の声に、私は瞬時に危険だと感が警鐘を鳴らす。

シルメリアは気配から判り、食べ掛けの猪の骨付き肉を投げ捨てて、幼いレナスを背に隠す様に護りながら弓を構えて警戒する。

そして、私達の前に現れて空中に浮かぶ女性は金髪にベレー帽を被り緑色のワンピースを着ている女性は豊穣を司る女神フレイだった。

運命を司る女神である三姉妹の直属の上級神であり、私に消えたレナスの魂の探索を命じた張本人。

探索命令を受けた私は、下界などを探索しながら偶然にもブラムスの居城で巨大なクリスタルの中には『下界の人に採取するばかりではなく手を差し伸べるべし』と主神へと意見しただけで反逆の罪でフレイの手によって封印された妹のシルメリアだった。

そして、封印された時にシルメリアを護ろうとブラムスにクリスタルを奪われ行方不明だったが、こうして妹のシルメリアを見つけて封印を解き、二人で共にレナスの魂の探索をしたのだ。

しかし、シルメリアの封印解除の件もだが、レナスを見つけても一切報告をしなかった。

いや、したくも無かった。

転生し、人として生きるレナスと封印から解かれたばかりで力を出し切れないシルメリア、愛しく可愛い妹達をフレイに渡せばどうなるか位は分かる。

「やはり、フレイ様…」

「さあ、大人しくレナスとシルメリアを渡しなさい」

「レナスは人として人生を生きている最中だ!!」

「そうね。」

人として謳歌中だわ。

人としてのレナスを殺したら、レナス・ヴァルキュリアが出て来るわ。

だから、シルメリアも貴女も用済み。

予知夢が現実となる前に女神となったレナスを抹殺する。それが、オーデイン様に仇なす者の抹殺が私の使命」

聞いた二人はそれぞれの得物を構え、私を背に隠して構える。

「レナスを殺らせるとでも?」

「アーリイ姉様、前は敵同士でしたがレナス姉様を殺すと言うのなら私も共に戦います」

「姉妹共に反逆するのね。」

いいわ!!

「浄化して上げる!!」

フレイと姉妹二人の戦いは激しいものだった。

アーレイさんがハルバードでフレイを叩きつけるが腕でいなされ回し蹴りを喰らうがハルバードで引つ掛けてフレイを投げ飛ばす。シルメリアさんも弓を放ちながらアーレイさんを援護する。そして、フレイに接近を許せば神剣グラムで斬り掛かるが、斬る瞬間のスキを狙われて腕を掴まれて引き寄せられて顔に膝蹴りを入れられて鼻から血を流す。

それでも、二人掛かりでもフレイに勝てる気がしない。

私でもアーレイさんに勝てなかったのに、フレイはアーレイさんとシルメリアさんをあしらうかのように強く対等とは言えなかった。

誰かに護られてばかりの私。

『さあ、目覚めなさい』

時々、頭に響き聴こえてくる女性の声。

「グッハア!？」

そして、目の前ではフレイによって、延髄を蹴り飛ばされるアーレイさん。

『さあ、目覚めなさい』

矢を射るが手で矢を掴まれ、消えたと思えばシルメリアさんの頭上に現れて踵落としてシルメリアさんの頭上に落として私の前にシルメリアさんが落下する。

「いい加減に諦めなさい!!」

「ぐっ!？」

私は諦めない!!」

そして、叫び立ち上がるシルメリアさんを見無視して、私の前にフレイが瞬間移動する。

「浄化して上げるわ!!」

エーテルストライク!!」

オーブを構え、私に超エネルギー体をぶつけようとするフレイ。

「あつ、あああああ!？」

死が迫り、余りの恐怖から私は失禁していた。

「レナス（姉様）をやらせない!!」  
死を覚悟して目を閉じた瞬間、アーリースさんとシルメリアさんに抱き締められる。

ズツガアアアアン

「うっ、うがああああ!!?」

爆炎が襲うが二人が庇い私に來ない。

目を開けば、背中を盾に私を抱きしめたままぐったりするアーリースさんとシルメリアさんだった。

二人のヴァルキリーメイルは全て碎け散り乳房と背中を露わにしていた。

「レナス、姉として護るって言っただろ?」

「アーリースさん!?!」

ドサリ

アーリースさんは私に優しく微笑み、力無く倒れた。

「レナス姉様、ご無事で…」

「シルメリアさん!?!」

ドサリ

シルメリアさんまでも倒れたのだ。

『さあ、私の手を取り目覚めなさい』

再び、聴こえてくる女性の声。

「馬鹿な二人ね…」

身を挺してレナスを護ったのね。

どうせ、三人とも浄化するから無駄なのに…

さあ、貴女だけよ!!」

再び、エーテルストライクを構えるフレイ。

既に護ってくれる存在は居ない。

フレイに睨まれ、恐怖が支配して動けない。

再び、恐怖で失禁するが逃げられない。

「あつ、あああああ…」

『さあ、レナス。』

目覚めの時よ』

エーテルストライクを放たれた瞬間、私は光の翼に包まれ頭に流れて来る記憶。

かつて、彼らと旅をして様々な人と出会い別れる記憶だったり、ブラムスの居城ではブラムスと戦いブラムスが仲間になり玉座の間には妹のシルメリアが封印された姿を見て泣き仲間に慰められた記憶。

そして、神界の神樹ユグドラシルの上で姉のアーリイ姉様と戦い、最後はオーデインの居城ではオーデインと激しく戦い死闘の末にオーデインを討ち、創造神レナスになった記憶だったのだ。

全てを思い出した私。

そして、心の奥深くに眠っていたもう一人のレナスの手を握り抱きしめると二人のレナスが一つとなって、私はレナス・ヴァルキュリアいや、創造神レナスとして目覚めたのだ。

「バカな!？」

れっ、レナスがこんな時に目覚めたですって!？」

蒼穹の鎧を纏い美しい銀髪の大人の姿に成った私。

その姿を見て驚愕するフレイ。

私の足元には、私を庇い傷だらけで気絶して倒れているアーリイ姉様とシルメリアに手をかざして二人を神力を使い回復させる。

「ごめんなさい。

やっと、受け入れられた。

だから、休んでいてね。

アーリイ姉様、シルメリア」

大切な物は二度と奪わせない。

だから…

「フレイ、私は貴女を許さない」

私は睨み、神剣グラムを抜き背中の中白く美しく輝く翼を広げて飛び立ちフレイに迫る。

「舐めるな!!」

目覚めたばかりで何ができるの!!  
消えなさい!!

エーテルストライク!!」

フレイは私の言葉を否定して激昂し、エーテルストライクを放つが、もはや私の敵では無い。

「なっ!？」

エーテルストライクが!？」

エーテルストライクのエネルギー体をグラムで斬り裂き消滅させ、フレイに更に迫る。

そして、全ての想いを乗せて放つ。

その神技は私の象徴たる神技。

そして、オーディンすら斬り裂いた神たる技。

「はあああ!!」

神技、ニーベルンヴァルステイ!!」

スライディングからフレイを上空に蹴り上げながら、グラムで連続してひたすらに斬る斬る斬る。

斬られたフレイは斬り口から神力が粒子となって漏れるが、私の神力と神技により拘束されたフレイは逃げる事は出来ずに空中に固定される。

そして、翼を広げ天空に飛び立つと巨大な槍を4本を呼び出して投擲する。

「はあああああ!!」

「馬鹿なアアア!？」

1本は頭上から突き刺さり、2本はバツテンを描く様に突き刺さる。最後の槍は更に巨大な槍で投げ付けた槍はフレイを正面から突き刺さり、フレイは消滅していたのだった。

「アーリイ姉様、シルメリア。

貴女達の願い、叶えるわ。

そして、私もこんな力は要らない。

三姉妹として生きましょう。

そして、ママを驚かせよう。

アーリイ姉様、シルメリア」

「レナス、お前って奴は…」

「レナス姉様らしいですね…」

そして、二人に女神から人となる事の承諾を貰うと、私はフレイとの戦いで消耗していたが創造神として残る最後の神力を使って因果律を弄り、私を入れたアーリイ姉様とシルメリアを女神から普通の人に変え、私達は三姉妹として生を歩む事にしたのだった。

レナスが光に包まれてから約五分が経過していたが、依然として敵が減る訳でもない。しかし、横須賀方面から来る数はレーダーを見る限り増える事はないが二、三十機は居る。

私は本当の母親を殺された怒りにシュバルツァ・レーゲンが私の意思に答えてサードシフトしたシュバルツァ・レーゲン・ツヴァイへと進化した。

そして、超重装型長距離砲撃特化となり新たな武装であり両肩に装備された56口径128ミリリボルバー装填式ショックカノンで母親を殺した連中を落として、漂流状態のビスマルクIIへ連行し艦内の檻に監禁中だ。

新たな私の相棒シュバルツァ・レーゲン・ツヴァイがエネルギーを補給して破壊された主砲塔の上に陣取り、固定砲台のようにショックカノンを乱射し、襲撃者達を落として行く。

「各機、固定砲台としビスマルクを守れ!!」

まだ、主砲が駄目でも対空砲撃指揮所と対空火器は生きている。

何としても守れ!!」

「了解!」

凄まじい対空砲火で数機を葬るが、襲撃者達に指揮官機で在ると判ると私を集中して攻撃を始めたのだ。

「あれが、指揮官機よ!!」

攻撃を集中させなさい!!

鎮圧用ネットを使っても構わない!!

必ず落とせ!!」

「舐めるなアアア!!」

そして、三機が一気に瞬時加速で加速し、ランチャーを構えると放たれたのは鎮圧用ネットだった。

「マズイ!？」

手で斬り裂こうとするが、鎮圧用だけに斬れないのだ。

「ママを殺らせない!!」

と聞き慣れた声。

そして、三機を一瞬で葬り撃墜して私の前に現れた三機ヴァルキリーは元の白銀では無く、蒼穹、群青色、漆黒の色のヴァルキリーだった。

そして、私が見た三機のヴァルキリーのパイロットは全てが美しい女性であり、ヴァルキリー自体も変わっていて機械的だったデザインは機能的で鎧の様に身体にフィットする作りへとなっていたのだ。

「ママ!!」

と叫び、戦闘中にも関わらず私に抱き着く蒼穹のヴァルキリーを駆る女性は白銀の髪をした美しい女性だった。

だが、識別信号は娘のレナスを示していた。

「誰だ？」

と聞くと思い掛けない答えだった。

「ママ、判らないかな？」

レナスだよ？

セカンドシフトした次いでに成長しちやった」

「なっ、何だと!？」

「そうだった。」

私にお姉ちゃんと妹が出来たんだよ!!」

「へっ?？」

ママが驚き固まるが、漆黒のヴァルキリーが近付き挨拶する。

「レナスの姉のアーリー・ボーデビッツヒだ」

「なっ!？」

更に固まるママ。

そして、止めと群青色のヴァルキリーが近づくと挨拶する。

「お母様、レナス姉様の妹のシルメリア・ボーデビッツヒです。三姉



妹共々お願いします」

「なっ、何だとおおおお!？」

もう、いやああ!!」

「ママ!？」

「母上!？」

「お母様!？」

ママは驚き過ぎて気絶してしまった。

ママの専用機は解除されたけど、甲板作業員に引き渡したのだ。

そして、三姉妹揃った私達はセカンドシフトしたヴァルキュリア（ヴァルキュリー一号機と二号機は人となった際にレナスの力により召喚している）を駆り、成長した事で脳への負担が無くなり、セカンドシフトの影響で機能的になったモビルドールビット3機分併せた24機を展開して襲撃者達を文字通り殲滅したのだが、私達三姉妹の戦い方が戦乙女を彷彿させたらしくてクラリツサ大佐が戦闘中にワグナーのワルキュレ騎行をスピーカー越しに流していたらしい。

臨海学校 神々の黄昏ですか？違います姉妹喧嘩です!!

海に落ち、召喚されたアテナの世界でアテナにぶっ飛ばされながらの修行の日々。

そして、今は…

「ぶっはあ!!」

戻ったと思ったら海の中。

せつかく、復活したのに溺死になりかけていたのだ。

海面に上がれば、私の今の服装は修行した日々に着ていた古代ギリシヤの白いドレスで、胸元は海水でドレスが開けて豊満な胸が晒され海水に浮いていたのだ。

「夢では無いの?」

絶壁だったはずの胸が大きくなって海面に胸が浮いている疑問と海面に浮かぶ濡れた白銀の髪。

考えなくとも解る答えは一つだった。

「なっ、何で成長した姿のまんまなのよ!!」

駄女神、私を元に戻すのを忘れたなあ!!」

海面に木霊する私の叫び。

仕方なく諦め、腕に着けていたアテナの待機状態の銀の籠手が無いに気付くが、代わりに古代ギリシヤの装飾品の様に金で作られた腕輪に綺麗な宝石を散りばめられ細かい装飾が施された腕輪は、新たに変わった待機状態のアテナだと気付く。

そして、これをやった人物いや女神はアテナ本人しか居ない。

『我からのプレゼントだ』

とこれみよがしに脳内に響く、駄女神アテナの声。

しかし、アテナを展開して見れば、形態が違う事に気付いた。

「えっ?」

アテナの姿が違う!？」

全体的にフィット感があり、本来なら腕の中に在るはずのマニユアル操作する為の装置が全く無い。代わりに、脳波による思考操作式になっており腕は指先まで装甲が施され柔軟な動きが出来る籠手に代わり、脚も身体にも女性らしい装飾の鎧と鎧の中は古代ギリシヤの白いドレスの様な特殊金属製のドレス。

そして、鎧の色は私のシンボルカラーである真紅の色をした鎧が装備されていたのだ。

他にも、ハイパーセンサーがある頭部はアテナが身に付けていた古代ギリシヤの兜をモチーフに額部分はアテナを象徴する金の細工が施された梟が飾られていた。

そう、色は違うが女神アテナの姿だったのだ。

今気付いた事だが、名前はそのままアテナがセカンドシフトしていたらしい。

そして、レーダーには旅館にまで迫る襲撃者達が映り

旅館に向けて飛んだのだが、背中のスラストユニットが無いのに飛んでいる事に不思議になり、背中を見れば背中には光の翼が出ていたのだ。

そして、光の翼をはたかせ旅館方面へ飛ぶと二重加速並みの加速に驚かされたが、旅館の側にあるプライベートビーチに目が行くと漆黒のドレスを纏い巨大な鎌で一人の女性を斬り裂こうとする女性と逆に四つん這いとなり漆黒のドレスを纏う女性から逃げようとする女性に気付いたのだ。

逃げようとする女性は、ハイパーセンサーの望遠モードで観ると蘭お姉ちゃんだと分かり、そのままだと蘭お姉ちゃんが殺される事も明白だったのだ。

「蘭お姉ちゃんが危ない!!」

更に加速させ、アテナから渡された神槍ネプチューヌをコールする。

「蘭お姉ちゃんを殺らせない!!」

と叫び、ネプチューヌを投擲したのだ。

ネプチューヌは蘭お姉ちゃんを斬り裂こう振り降ろされた大鎌の

柄を絡め取りながら吹き飛び大鎌も槍が一緒に浜へと刺さるが、私の存在に気付いた漆黒のドレスを纏う女性は神威を剥き出しに睨み叫ぶ。

『私の邪魔をするのは誰ぞ!!』

そして、凄まじい神としての重圧を受けながらも近付き、漆黒のドレスを纏う女性の顔が見えると成長した姿である妹の千秋だと分かり驚く。

「う、嘘でしょ!?!」

『我に対し不敬で在るぞ!!』

千秋なのに千秋じゃない。

それが、漆黒のドレスを纏う女性への感想。

そして、私に対して神々しく凄まじい重圧を剥き出しにて跪かさせようとするが、修行しながらアテナの神々しい重圧を毎日浴びてきた私には慣れているために効かない。

『ぬっ!?!』

効かぬだと!?!

そなたは何者ぞ!!』

跪かない事に驚愕しながら、私に誰だと聞いてくる。

「私?」

私は織斑十夏よ!!

私の妹、千秋を返しなさい!!」

私の名前を聴いて、更に驚く女性。

『そんな筈はない!!十夏とやらは大量の電流を浴びて死んだ筈!!』

「確かに、電流を流されたけど瀕死だっただけよ!!」

『戯言を抜かすな!!』

この世から消えたではないか!!』

「消えたか…瀕死のまま召喚されて女神アテナの所で治療され修行してたものねえ…」

辛い修行の日々を思い出し、死んだ魚の目になる私。

『なっ!?!』

今、何と!?!

それに、そなたの肉体から感じる力はもしや!？」

「女神アテナよ。」

治療する時に重症で治療が手遅れな私に肉体の一部を私に与えたみたいね」

『アテナ姉様だと!？」

しかも、肉体の一部だと!？」

処女神であるアテナ姉様を……汚したな……』

「女性はアテナの名前と一緒に修行していたと聞き驚き、威厳ある口調から少女らしい口調に成りながら、女性は表情が段々と険しくなつて行く。

『それに、アテナ姉様と一緒に修行……(あ奴の脳内の思い出を覗いてやる……なつ、なぬ!?!…手料理をぐ馳走しながら、あんな事や……こんな事まで!?!……ぬっ!?!……一緒に裸で海で水浴び!?!……私すら、したこと無いのに!!……千秋、お前の姉を殺さねばならぬ……「だっ、駄目だよ!?!」……尊敬する姉様を汚した!!……いや、狡い!!)』  
大鎌を手に引き寄せた女性は急に物騒な言葉を言い、私に大鎌で斬り掛かる。

「ちよつと!?!」

『消す』

「物騒なんですけど!?!」

『安心して斬られて!!』

斬られたら、病気を発病させて上げるから!!』

「更に物騒!?!」

大鎌が何度も私に斬り掛かって来て片手直剣や腕に装備した盾で受け止めたが、大鎌を受け止めた凄まじい衝撃で足元にクレータが出来る上がり、砂浜の全体が斬撃を何度も受け止めるたびに爆撃された様に多数のクレーターが出来上がって行く。

最早、二人による自然破壊とも言える。

私自身も千秋らしき漆黒のドレスを纏う女性から斬撃を受ければ、どんな病を発病されるか判らず剣で受け流すしか盾で受けるしかない。

だが、シールドエネルギーも無限では無く、どうにかして千秋の意識を戻さなければならぬ焦りが私の思考を邪魔していた。

『貰ったぞ!!』

『きやあ!?!』

『さあ、発病して死ねえい!!』

「うっぐう……千秋を取り戻すまでは死ねない!!」

フォースアビリティー、『戦場の焰火』を発動!!

炎よ!!私の体に巣を食う病をを燃やし尽くせ!!」

私の判断が鈍った所で大鎌がアテナの脇腹に掠り、漆黒のドレスを纏う女性にウィルス性の病を発病されたが、アテナの新たなフォースアビリティー『戦場の焰火』を発動させて人体発火の様に身体が炎に包まれる。

『なっ、なぬっ!?!』

しよ、正気か!?!

自身を燃やすなど、正気の沙汰ではない!!』

「細菌またはウィルスなら炎で焼くのが一番でしょ?」

『私の時代には無かった、現代科学の知識か…』

体内のウィルスはアテナのフォースアビリティー『戦場の焰火』で焼き去り、私は神槍ネプチューヌで逆襲する。

「いい加減、私の妹を返せええ!!」

パツキン

『なっ、我の神斧デスサイズが!?!』

三叉の槍、神槍ネプチューヌがデスサイズの刃を絡め取り、槍を半回転すればデスサイズの刃は簡単に折れたのだ。

武器を失った漆黒のドレスを纏う女性を傷を付ける訳には行かないために自身の槍を投げ捨てて、瞬時加速で懐に入り女性の顎にアツパーカット入れたのだ。

「アテナにも入れた拳でも喰らいなさい!!」

『ヘッブラア!?!』

アツパーは見事に顎に入り、女性は吹き飛び頭から砂浜へと落ち、漆黒のドレスは私が着ていたのと同じ純白の古代ギリシャのドレスへ

と変わる。しかし、意識が千秋へと戻った事が気付かない私は起き上がった瞬間に再び、拳を顔面に全力で入れたのだ。

「痛たた…あれ？」

「まだ、起き上がるの!？」

「これで止めよ!!」

「へっ？」

お姉ちゃん？

ちよ…へっブラア!？」

顔面に拳を受けた千秋は砂浜を数回バウンドしながら吹き飛び、浜に生えていたヤシの木をへし折りながら止まりへカーテが解除される。

「お姉ちゃん!!」

殴る事はないでしょ!!」

だが、へカーテから意識を取り戻した瞬間がアレとはいえ、急に殴られた事にキレた千秋は鼻骨が折れ鼻から血を流しながら弓を構えて私へと矢を射つたのだ。

しかし、反対に千秋が解除したのを確認してアテナを解除した所に妹が放った矢が飛んで来た事に私自身もキレたのだった。

「千秋が元…って、危ないじゃない!!」

「急に私を殴った、お姉ちゃんが悪いんでしょ!!」

そして、どこかかと歩き、お互いに歩み寄りながら取っ組み合いの姉妹での大喧嘩が始まったのだ。

ビスマルクに群がった襲撃者達を撃退し救助しながら艦内の檻へと連行が終わり、私達三姉妹は襲撃者達が残る旅館へと急行したが、見違いと気付かず浜辺では二人の女神同士の激しい戦いに息を飲んだのだ。

「あれは、ギリシャの女神、アテナとへカーテだと!？」

とアーリイ姉さんが驚愕する。

「なら、代わりにロキとフレイヤも呼んで混ぜる?」

「れっ、レナス姉様!？」

神々の黄昏を起こす気ですか!!」

「じよ、冗談だよ…」

「全くだ!!」

ギリシヤの女神に北欧の女神を混ぜたら神々の黄昏どころでは済まないぞ!!」

冗談で言っただつもりが姉と妹に叱られる私。

理不尽である。

そんな時、旅館の作戦指揮所からだろう通信が入る。

『やっど、繋がった。って、誰だよお前?』

ババ様からの通信だった。

「えっ、ババ様酷い!!」

レナスです!!」

『れーちゃんな訳が無い!!』

れーちゃんはな、可愛い顔した幼女なんだぞ!!

お前見たいな大人じゃない!!』

予想はしていたが、ババ様は私がレナスだと認めない。

「セカンドシフトした次いでに成長しちゃったんです!!識別信号でヴァルキリーだってわかるでしょ!!」

『あっ…本当だった…』

『東、ちよつと代われ』

『ちーちゃん!?!』

『東では罫が明かない』

ゴツチン

『キャッイン!』

愛のあるゲンコツ…』

『ほう、もう一発欲しいか…』

ゴツチン

『ちよつと!!代わるから辞めて!!』

って、キャッイン!』

「「……」」



どうやら、モニターからの私のバイタイルや識別信号で理解したようだったが、ババ様では埒が明かないと織斑先生がゲンコツを落とし代わろうとする。しかし、モニター越しに見えるババ様の頭にさらに出来上がるタンコブ。モニター越しに見える、ババ様と織斑先生のやり取りに絶句する私達だった。

未だに続く、姉妹の喧嘩は何処その戦闘民族宜しくと言わないばかりに殴り合いが続く。

千秋が放つ拳は姉の十夏の腹部に入りつの字に曲がり、逆に姉の十夏が全力で振り上げる拳は妹の千秋の顎に入りアッパーが決まる

そして、殴り合う事で生じる衝撃で根元から折れる樹木に荒れ地へと変わる砂浜。

普通の人なら、こんな被害は出ないだろ。

しかし、十夏は肉体の一部をアテナから貰い体を治し、逆に千秋はヘカーテを神降ろしでの代償で肉体を強化されている。

そんな二人だからこそその被害である。

「お姉ちゃん!!」

「千秋!!」

叫びながら殴り合う二人。

ボーデビイツヒ三姉妹は死にたくない為に二人を止めに入る事を拒否。

そして、喧嘩中の二人の最中に怒りの形相をした一人の鬼が現れた。

「馬鹿姉妹が、いい加減にしろおおお!!」

「千冬叔母さん!!」

キャウン!?!」

ゴツチン、ゴツチン

二人に全力で振り降ろされたゲンコツは常人なら頭が吹き飛ぶだろう一撃だった。

そして、それを受けた双子姉妹は砂浜に頭を埋めながら気絶したの

だった。

「ふん!!」

馬鹿姉妹には一夏と鈴を交えて説教だ!!」

と千冬叔母さんに足を掴まれ、双子姉妹は旅館へと引き摺られ連行されたのだった。

そして、姉妹喧嘩は何とも締まらない呆気ない幕を閉じたのだった。

## 臨海学校 日本落日とメアリーの恋の行方

首相官邸ではイギリス外務次官であるウイズリイ外務次官が本来なら公式文書を外務省に渡す筈だが、首相に直接とある公式文書を渡していた。

外務次官から渡されたイギリス王家の紋章入りの公式文書を読み、顔を真っ青にしながら皇族とも深い繋がりがあり、普通ならあり得ないだけに驚き叫んだのだ。

「イギリスはこれは本気か!」

「はい、イギリスは前回は前回は加えてですが、今回の分も併せて謝罪と賠償が無き場合、日本に対して宣戦布告致します。無論、イギリス王家は既にロイヤルガードを送り、横須賀、木更津、厚木、百里基地への攻撃並びに破壊による報復処置をする様にエリザベス四世陛下より勅命が下りましたが?」

総理は事の重大さが理解出来ず、宣戦布告とも同じ報復処置の執行宣告に絶望した様に椅子に落ちる様に座る。

総理は何故、イギリスから最後通牒を突き付けられなければいけないのか未だに理解出来ない。

判らないのは当然である。

事の発端は国家代表や代表候補生を束ねる防衛省が四世代機が開発出来ず、当時学生であり亡国機業の事件の解決の立役者だった織斑一夏に対して専用機である白椿を国家代表に使わせる為に渡す様に強要したり、卒業後に鈴音とタッグを組んでからは、鈴音の専用機にまで渡す様に強要を繰り返したのだ。他にも大会中の拠点として滞在していたホテルへ特殊部隊を使つての襲撃や大会参加中にも鈴音を襲撃したりと布団を叩けば埃が出るように完全な防衛省と隠蔽工作をする外務省の暴走であり、イギリスやドイツ更にはIS学園、更識家からの抗議などは外務省と結託して止めていたのだから判る筈も無い。

しかし、今回の織斑邸襲撃事件は防衛省と外務省は証拠隠滅が出来

る訳が無く、メディアがへりによるTV放送による緊急中継や更識に捕らわれた襲撃者達が自白などで更識家はメディアに全て公表し、今までの事が公表された事に防衛省と外務省は風当たりが強くなっていった。

今回の臨海学校中のIS学園への襲撃はイギリスとドイツに火に油を注いだに過ぎない。

そして、イギリスの外務次官と示し合わせた様に首相官邸に首相の秘書官がイギリス外務次官がいるのにも関わらず室内へと慌てて入って来たのだ。

「総理!!」

「外務次官が居るのだぞ!!」

「すいません!!」

ですが、百里基地並びに横須賀基地、厚木基地の航空自衛隊所属のIS部隊約123機が防衛省の命により九十九里で臨海学校中のIS学園と訓練航海中のドイツ海軍の戦艦ビスマルクIIを襲撃して来たどイギリス並びにドイツもですが、IS学園までもが抗議が殺到しています!!」

「なっ!!」

ウイズリイ外務次官!!

まさか、最後通牒の理由は…」

「イギリス王家からの警告の無視に加え、今回の織斑邸を加えた襲撃はイギリス王家に対する宣戦布告と同じですか?」

「織斑邸を加えた?(まさか、TVで放送された半壊していたのは二代目ブリュンヒルデの織斑一夏の自宅だと!?!私は、委員会からの忠告は厳守したが…まさか!?!:~)」

「それに、前もって首相官邸には今回の臨海学校には前女王のメアリー様も同行し視察する旨を公式文書で伝えましたが?」

「はっ、早過ぎる!!」

「いえ、いえ。」

前回の織斑邸襲撃事件の際には織斑邸には下宿中のメアリー様がいらしたんですよ?」

再度の襲撃くらい警戒します。

馬鹿な事を言つては行けませんよ」

涼しい顔で答えるウイズリイ外務次官。

そして、更に血相を変えた秘書官がバタバタと室内へ入り込み、イギリス並びにドイツや学園、更識家からの抗議内容とそれに対しての謝罪と賠償についても来たのだ。

「続いてですが、ドイツからは襲撃によりドイツ海軍の戦艦ビスマルクIIは艦橋を破壊され大破漂流、司令以下艦橋に居た者は全員戦死した事に対する謝罪と賠償。それ等が無い場合は英独を主力とするEU連合軍による報復処置を発表。そして、学園からは生徒二人が重症を負った事に対して賠償と謝罪。更識家からは日本から撤退し、イギリスの傘下に入ると…」

「で、総理はこの様にイギリスとドイツ並びに学園を敵に回して如何様にしますかな？」

おっと、忘れてましたがIS委員会も今回の襲撃に対して監察官の派遣もあり得ますな？」

ウイズリイ外務次官のわざとらしい発言に真っ白になる首相。

（ああ、建造中の紀伊と尾張いや、柱島で浮揚して修理改装した陸奥をドイツに引き渡すしかないな…そして、委員会の監察官の受け入れて奴等を逮捕するしか道は無い…）

首相自身、既に手遅れだと気付き膝をついたのだった。

ウイズリイ外務次官が官邸から出て直ぐだが、総理は国会に緊急招致を発令し、イギリスからの最後通牒に対して宣戦布告された場合の防衛出動をしようとしたが、逆に内閣不信任案を与党と野党からも出されるとは知らない。

ウイズリイ外務次官が官邸に最後通牒の文書を渡した頃、メアリー達は木更津基地の近くの森林地帯で大使館からの合図を待ち待機していた。

無論、今回の襲撃は予想しており本国にいる妹でもあり女王のエリザベス四世から日英戦争になる可能性の事は既に知っていた。しか

し、勅命が来たのは報復処置による基地の破壊と制圧で流石のメアリーもエリザベス四世の優しさに苦笑するしかない。

「セツシー、基地の破壊とはね…」

「仕方ありませんわ。ですが、陛下もイギリス海軍の極東方面艦隊の本拠地に行っていますシンガポールの海軍基地からの連絡ですが、私達を心配してイギリスに待機中のロイヤルガードナイトを全部隊をシンガポールに送り、シンガポールから乗船させて潜水艦で送り届ける辺りはメアリーにそっくりですわね」

「流石に全部隊は過剰戦力だわ。」

先程の二人は流石に…いえ。

私だって、あの一夏さんと鈴音さんのブチ切れた顔なんか怖くて見れなかったですよ?」

「私は遠慮致しますわ…」

無理もない。

学園からの連絡だったが、自分の娘である十夏が撃墜され殺されたと聞いた父親である一夏は真つ先にキレて近くにあつた直径5mはある樹木を一撃で殴り倒し、鈴音に至つては一夏と同様に鉄塔の鉄骨に蹴りを入れて鉄塔を蹴り倒してしまつたのだ。

卒業生でありロイヤルガードの副団長であるサラ・ウィルソンはメアリーから織斑夫妻の世話役を頼まれたが、電話を取り次いだ後に急に豹変し、携帯を握り潰して樹木を殴り倒した一夏と一夏から話を聞いた鈴音は泣きながら鉄塔を蹴り倒した姿を見て、後輩だつたセシリアにキレた二人が余りにも怖いと泣きながら抱き着いて大泣きしたらしい。

娘を殺された怒りにより、復讐に燃えてしまつた織斑夫妻は、木更津基地はメアリー達に任せるからと言い、リミッターを解除して本来の姿になつた白椿と黒椿を展開して永田町に向かい、緊急招致で集まるだろう国会議事堂を襲撃し内閣をぶつ飛ばす算段で行つてしまつたのだ。

私達の側にいるロイヤルガードの精鋭でも二人を見て止めようとしたが、キレた二人に恐怖して大泣きした副団長のサラを見て躊躇つ

てしまい、昔キレた鈴音を相手にした経験から、完全にキレた元世界最強の織斑夫妻を止めるのは自殺行為に等しいとセシリアとマドカは経験談を交えて諦めたのだった。

そして、イギリス海軍の潜水型空母であるユニコーンが東京湾内に浮上して発光弾を打ち上げたのだ。

「メアリー!!」

「来ましたわね!!」

総員、報復処置を執行する!!

木更津基地を奇襲し制圧。

木更津基地は九十九里への第二波の部隊が居る事は事実である。上がる前に落とせ!!」

だが、奇襲には成功するのだが、メアリーが持ち掲げる『血塗れの白百合の王国旗』を見た木更津基地の海上自衛隊と航空自衛隊の隊員達が白旗を掲げて全員が降伏して来たのだ。

旗の意味を知っていたのたろう。

意味が死か降伏の何方かを選べである為に降伏を選んだらしい。

永田町

日本の政治の中枢である国会議事堂があり、近くには様々な省庁が建ち並ぶ場所であり、横田基地所属の部隊が護衛していた。

以前の横田基地は米軍基地だが亡国機業の事件により日本へ返還され、航空自衛隊でも猛者ばかりの部隊が集まる基地でもある。そして、I S 部隊も優秀な選りすぐりのパイロットばかりが集まる事有名だった。

しかし、現実は…

「邪魔だ!!」

バツキイ

「グッハア!？」

なっ、生身で、我々をだど!？」

専用機すら展開しないで横田基地所属の I S 部隊の打鉄参式改を相手にしても、普通にお玉で殴り倒す一夏。

「余所見してると、喰らうわよ!!」

鈴音は夫の一撃に呆ける他の打鉄参式改のパイロットの頭に回し蹴りを入れて沈黙させていた。

そして、打鉄参式改が解除され山のように倒れ込む横田基地所属のパイロット達と二人の夫婦に恐れを成すが任務からは逃げられないパイロット達。

そう、修羅の如くに張り倒していく最強夫婦により戦意喪失していたのだ。

しかし、殴り蹴り飛ばれても死者が居ないのは夫婦からの温情だろう。

だが、それでも張り倒されてやられたパイロット達の山が出来上がって行く悪夢は覚めないだろう。

国会へと続く道は一夏と鈴音に張り倒され、樹木に打ち付けられ気絶した者や蹴り飛ばれ商店や雑居ビルに突っ込み、コンクリートの瓦礫類に下敷きに成りながら気絶した者など被害が絶えない。

そして、議員に緊急招集で集まっている国会では、イギリスからの最後通牒に議会は紛糾し、内閣総辞職すべしと騒ぎとなっていた。

だが、ここに涼しい顔でいる大臣。

防衛大臣の大田原防衛大臣と外務大臣の久方外務大臣だった。

二人は学生時代から織斑一夏の専用機である白椿を狙って来た黒幕であり、今回の襲撃も文書偽装によるものだった。

防衛大臣、大田原大臣はイギリスが宣戦布告する事を望み、宣戦布告すれば航空自衛隊が試作作製造した核無き国の擬似核弾頭であり、周囲400mを超高温の摂氏4000度で焼き尽くすサーモグラフィ爆弾の実験場にする腹積もりだった。

しかし、彼等の野望は届く事は無かった。

議事堂の議会議室の扉が吹き飛び、二人の男女が乱入して来たのだ。



無論、国会中継で全国放送中である。

放送中にも関わらず、SPや警備員は二人に殴り蹴られて吹き飛び、一人の警備員は総理の真横を吹き飛びながら通過して壁へと激突したのだ。

突然の乱入に議員達は騒然となるが、二人は防衛大臣と外務大臣を見つめるなり

「束さんの言う通りだった!!」

「テメエが十夏を!!」

「ひっつい!」

「金なら幾らでも出す!!」

「だから、命だけは!!」

「うっせえ!!」

「娘の仇だああああ!!」

一夏は防衛大臣大田原大臣の顔面を殴り飛ばし、鈴音は

「娘の恨み、喰らいなさい!!」

と外務大臣久方大臣を股間を蹴り上げ金的を潰し、頭を掴むと大理石の床にめり込む威力で叩き付けたのだ。

そして、次の二人の獲物は総理だった。

総理は逃げようとするが、二人に捕まり座席に座らされ

「さて、皆さんにはこの法案を出して貰いましょうか?」

鈴音が総理に出した二つ法案

野党と与党には内閣不信任案を出し、総理には皇族の政治への参加（イギリスの女王エリザベス四世の強い要望）に関する法案に多重結婚に関する法案だった。

「なあ、鈴。

「それ、どうしたんだ?」

「あつ、コレ?」

「メアリーがあたしに渡したヤツ」

「ああ、だからか…」

納得出来ないが、なぜ多重結婚に関する法案なのかとメアリーに問い質しかつたのだ。

そして、一時間もしないで永田町は3つの基地を制圧したイギリスのロイヤルガードにより報復ついでに制圧され、議会は内閣総辞職と外務省並びに防衛省は突入したイギリスのM16により、大臣以外のそれ等に加担した役人達が全員逮捕となった。

結果、日本政府はドイツに対しては建造中の紀伊型戦艦二隻を就航次第引き渡しと30兆円の賠償支払いとなり、イギリスからの要求すんなり通り、皇族を政治への参加を認め並びに多重結婚を認め、賠償金5000億円の支払いとなったのだった。

修理が粗方終わった中華料理店織斑の厨房では、久しぶりに一夏が蒸し器を使い調理をしていた。

「そろそろだな」

ガツタン

「誰だ!!」

物陰から出て来たのは匂いに釣られたメアリーだった。

「メアリーですの…」

「とうしたんだ?」

「初めてのISを乗りまして、お腹が空きましたの。」

何かありました?」

「少し待ってな」

椅子を出してメアリーを座らせる。

そして、蒸し器から取り出したのは蒸し上がった桃饅頭だった。

「これは…ナイフ使います?」

見た目も桃に見えるがれっきとした饅頭である。

手に取り食べるメアリーは涙を流す。

ああ、この恋は実らないのだと。

しかし、諦めるメアリーではない。

だから

メアリーは立ち上がり、一夏の背中に抱き付き抱きしめる。

「めっ、メアリー!?!」

「私、一夏様をお慕いしています…だから…」

何も答える事の出来ない一夏に抱きしめる力を強めるメアリー。だが、メアリーが抱きしめるのを急に辞める。

それは

「メアリー!!」

あんた、あたしが居ながら夫に!!」

「鈴音さん!?!」

凄い剣幕の鈴音と泣きそうになるメアリー。

「メアリーが一夏が好きだって解るわよ!!」

でもね、あんたはあたしの家庭を壊す気なの?

答えなさい!!」

「辞めろ、鈴!!」

「一夏は黙ってなさい!!」

これは、あたしとメアリーの問題。

メアリー、一夏と意思を押し通そうと思うならあたしと戦いなさい

!!

そして、一夏の向上心と共に歩いて行くのかが、如何に大変なのか身を持って知りなさい!!」

メアリーに試練を与えるあたし。

多分、セシリアも加わる事も判っていた。

共に歩む。

あたしにしたら毎日が修行だった。

一夏は歩み続ける事を辞めない。

だから、メアリーだけは認めたく無かった。

むしろ嫌いだ。

でも、メアリーは一夏をあたしの様に愛している。

「ええ、私は鈴音さんと戦いますわ!!」

やはり、愛は本物だった。

だけど、あたしは負ける気は無い。

メアリーを、獯猛な鷹のような目で睨むのだった。

## 臨海学校 学園への帰還

旅館の一室、重く何とも言い難い空気の中で、私達姉妹は千冬叔母さんの部屋で一家全員に囲まれ正座中だった。

一切無言で座るパパに怒り気味のママ。

そして、同じ顔に同じ目付きで怒る、マドカ叔母さんと千冬叔母さん。

「十夏、千秋。

さて、約束通りに一夏と鈴にサプライズでマドカも一緒に説教だ。

ん、どうだ？

嬉しいだろ？」

千冬叔母さんからプレゼントで、全く嬉しくないとも言える一家全員からの説教。

だけど、昨日はそれだけの事をしたのだと理解しているから、私達姉妹は何も言えなかった。

遡る事、今朝の出来事だった。

私が撃墜されて瀕死となつてアテナと修行していた頃、千秋は私が死んだと想い込み女神アルテミスのもう一つの顔である女神ヘカテを自分の身体に神降ろしをしてしまった。

そして、女神ヘカテ化して暴走し旅館を襲った襲撃者達を皆殺しにしてしまった。私が復活してから、旅館へ急行して千秋を神降ろしから救ったが、意識が戻っていた事に気付かず千秋をぶん殴ったのが原因で殴り合いの大喧嘩に発展して旅館付近のプライベートビーチや森林を破壊して更地化してしまった。

千冬叔母さんから殴り合いの喧嘩の最中にゲンコツを貰って気絶した。そして、目覚めたのが今朝であり、目覚めて着替えが終わって自由時間に部屋に来たのが自宅から来たママとパパだったのだ。

因みに、千秋とは未だに喧嘩中で、千秋は巻紙先生の部屋で謹慎中で私は千冬叔母さんの部屋で謹慎中だった。

そして、私を見付けたママは私へどかどかと歩み寄り

「この、バカタレがあああ!!」

ベツチイイイイイ

ママからの突然、鳴り響く怒声と部屋に鳴り響く程の全力のビンタを貰い、私は本当に心配させたのだとママに謝るしか無かった。

「ママ、ごめんなさい…」

「本当、馬鹿なんだから…」

でも、無事で良かったわよ…」

私はビンタを貰ったが、ママに泣かれながら抱き締められたが、身も心も痛いのが感じながら強く抱き返して声を押し込み泣いてしまったのだ。

ママが泣いたのも理由は判る。

私は今回の襲撃で電流を流され両腕両足と顔半分が炭化する瀕死の重症を負い、海に落ちて死んだと思われた。女神アテナに召喚されなければ死んでいたのも事実だったし、私はアテナからの施された治療で既に人間ではなく半神状態だった事も原因だった。

だけど、ママが泣き止んだ後が大変だった。

「そう言えば、千秋も見ただけど十夏も成長してるじゃない!!」

「うん、女神アテナの所で十年ほど修行をしてたし、アテナが言っていたけど時間軸が違うらしくて、此方は30分程度でも向こうは十年も流れるらしいよ?」

ママとパパには撃墜されてから、アテナの下で十年ほど修行した事や魔界に行かされて狩りをした事など向こうで過ごした日々をママとパパに話したのだ。

「えっ!?

十年もなのか!?

千秋は神降ろしの影響らしいが…」

とパパに驚かれ。

「でっ、そのデカイ胸なのね…」

ママには胸を睨まれながら納得され。

(口では言えないが、ママは千秋と同じ胸のサイズはDカップで私

はFカップだった)

「元が黒髪だから、千冬叔母さんに似たのかも？」

「えっ、千冬姉に？」

「義姉さんか…言えて納得ね…」

「あつ、ママ。私と千秋の分も入れて下着買って来て欲しいかも!!」

「何故よ？」

「下着履いてるじゃない？」

「急に成長したせいで、下着が壊滅してて代わりに修行時代に作った紐パンを代わりに履いているし、今は合うブラが無いからノーブラで…」

朝起きて着替えようとしたら、持って来た下着類のサイズが全て子供用サイズで壊滅だった。

仕方なく、履いていた麻製の紐パンは直ぐに洗って乾かしたがブラだけが無く先生方から借りようとしたが、巻紙先生のはCカップで小さ過ぎて入らず、雨宮先生はノーブラ主義でブラを持たず、ティナ先生と御手洗先生のブラは少しブカブカだった。

正直、ゴアゴアした麻製よりシルクの下着を履きたかった。

そして、千冬叔母さんのは残念ながら少しだけ小さくて、出来ない事はないがブラがピチピチでワイヤーが当たって痛くて外してしまった。

「十夏が紐だと…」

パパからノーブラでたゆんと揺れる私の胸に視線を感じ、更に私が紐パンだと反応している辺りで殴りたかった。

「二夏があたしと一緒になつて、さり気無く娘の下着の話をお聴いてんのよ!!」

「りっ、理不尽だあああ!？」

ガッ、ガッシヤアアアアン

私より先にママに部屋から蹴り飛ばされ、庭にある燈籠に激突していた。

そして、パパを追い出してママが懐から出したメジャーでバストを測り、ブラと下着のセットを買ってもらい着替えたのだった。

そして、今に至る…

「まず、十夏と千秋は無断出撃の罰として、一週間の部屋での謹慎と反省文50枚の提出だ。」

「いいな？」

「はい…」

学園からの沙汰は一週間の自室での謹慎と反省文50枚の提出だった。しかし、パパとママからの罰は納得出来なかった。

「あんた達は、本来なら中国へ一緒に行く予定だったが、夏休み中は学園で過ごす事。だから、あんた達は

い・の・こ・り。

判ったわね？」

「そつ、そんな!？」

「横暴だ!!」

「妥当だな。」

無断出撃に加え十夏は死にかけ、千秋は暴れ過ぎだ。

夏休み中は学園で残って反省しろ。

それに、中国に行くのは俺が資格を取る為だ。

遊びじゃ無いんだ。

良いな？」

「うん、お兄ちゃんの言う通りだね。」

セシリアが娘の編入の関係で日本に残るから、訓練内容を渡して置くから訓練しろよ」

「ああ、中国の屋台での食べ歩きが…」

「うん、屋台が…上海蟹が…」

マドカ叔母さんまでもだった。

そして、私達姉妹の夏休み中での中国の屋台の食べ歩きライフは頓挫したのだった。



レナスも同様に、ラウラさんを交えて巻紙先生に説教を受けていて、レナスも無断出撃で一週間の自室での謹慎と50枚の反省文の提出を言われたのだ。

そして、唯一無関係だった、ボーデビッツヒ姉妹の長女と三女は夏休み明けから学園に編入となったが、専用機（封印処理とレナスの八号機用の修理用のパーツ取り中の一号機から七号機の内、ヴァルキリー一号機と二号機がドイツの研究所から消えて騒ぎになった）の関係でラウラさんとドイツに一度帰り、レナスと同じテストパイロット及び軍属として登録する必要があるらしい。

そして、学園へ戻るバスでは…

「凄い美人さんがバスに…」

「転入生かな?」

私達、五人がバスに乗り込むと騒ぎ出す生徒達。

「オメエ等、早く座りやがれ!!」

織斑姉妹とボーデビッツヒ三姉妹てめえ等もだ!!」

「……はい……」

謹慎中なので一番前に座らせられた私達と巻紙先生の私達の名前を呼ぶ一言に固まり、クラスメイトの一人が巻紙先生が呼んだ名前から私達が成長した姿である事に気づき驚き叫んだ事で騒ぎ出したのだ。

「えっ、あれが私達のエンジェルズだと!」

「……なっ、何だとおお!」

「よっ、幼女が…びっ、美女に…」

「幼女のお持ち帰りの計画がああああ!」

「十夏ちゃんのお胸がメロンに育って……ジュルリ…」

「私より、大きいだと…」

「騒がしいぞ、てめえ等!!」

やはり、想像通りに変態共は騒ぎながら絶叫していたのだ。中には隠し撮りした幼き日の私達の写真を抱き締めながら気絶したり、私達の胸が巨乳化している事に気付き胸を鷲掴みしようとする変態など、

バスの中は混沌としたが青筋を浮かべた巻紙先生のが投げた必殺の出席簿ブーメランにより意識を刈り取られて強制着席となり沈静化したのだ。

私達の座席は巻紙先生は私達が謹慎中だと考慮し、千秋と喧嘩中だと言う事を知っている為に別になり、千秋はレナスと座らせ、私はレナスの姉であるアーリイさんと同席となった。残ったシルメリアさんは巻紙先生と座る事になり、ティア先生はナターシャ先生と座る事になった。

同席となったアーリイさんは初めて会う私に挨拶しながら話し掛けて来たのだ。ただ、アーリイさんの顔が怖いと思うのはマドカ叔母さんの様に強面であり、私は慣れていたのか全く気にならなかった。

「レナスの姉、アーリイだ。」

編入後は二年生となるが、レナスをよろしく頼む」

「私は織斑十夏よ。」

学園の生徒会長をしています」

「ほう、確か学園の生徒で最強だと母上から聞いたな」

「まさか、生徒会長狙って私に挑みますか?」

「フッフ…まさか、やらんよ。」

だが、戦闘狂である事は認めるが、昨日のアレを見ては負けるのが明白だな。だが、負けるのが判っていても挑みながら戦いを楽しみたいとは思うがな」

私を見ながら獰猛な笑みを浮かべ、挑戦者の様に私を睨む。レナスも強かったけど、アーリイさんも只者ではない雰囲気を出す事に私は更に警戒する。

「私も半神化してるから感じるけど、アーリイさんまさか?」

「ふふふ…確かに、私は元女神だ。」

第六級神で運命を司る女神三姉妹の長女のアーリイ・ヴァルキュリアだったよ。

散々、汚い事を妹達にやって来たがな…

レナスが前世の記憶を取り戻して創造神レナスとして目覚めたおかげで、私達三姉妹は人となって生を生きる事が出来た。

アテナに導かれし者よ、違うかな。

アテナに愛されしアテナの愛娘、十夏と言うのかな？」

「やっぱり、元女神でしたか…って、レナス…」

「どうした？」

アーリイさんが元女神だと驚くが、レナスが元創造神だったとは私だつて驚く。確か、六級神で運命を司る女神は戦乙女のヴァルキュリアだと、アテナから修行の合間に北欧神話について学んだ記憶があった。

「いえ、少し驚いただけです。アーリイさんはアテナをご存知なんですか？」

「知っている何も、奴とは女神時代にポセイドンが妻が居るのにアテナに『抱かせる』と叫び、アテナが『不潔が断る!!』と叫びながら殺り合つて居たのを呆れながら見ていただけさ。

それに、ポセイドンは諦めずにアテナの寝込みを襲おうとしたがアテナに金的を蹴られて逆襲されて神槍を奪われ、神槍ネプチューヌを失つた間抜けだと同じ海を司る女神いや、北欧神話では水の大精霊ウエンディーネが腹を抱えて笑つて居たのを思い出しただけさ」

ああ、アテナがポセイドンを彼処まで嫌うのかと納得し呆れる私。

「もしかして、神槍ネプチューヌってこれですか？」

アーリイさんに神槍ネプチューヌを見せる。

「確かに、神槍ネプチューヌだ。アテナから授かったか？」

「はい、試練でアテナに一撃入れましたので…」

「一撃か…大変だったな…」

何故か、アーリイさんは遠い目をしながらアテナとの日々を同情していたのだった。

そして、私達二人は武器談義を楽しみアーリイさんの得物だった、地獄の業火を宿すと言う伝承がある魔剣レヴァティンを見せて貰つたが、神剣プラムと神槍ブリューナクが在るからと姉同士の友の証にと魔剣レヴァティンをくれたのだった。

巻紙先生と同席するボーデビイツヒ三姉妹の三女のシルメリアは

拡張領域から出したティーポットでティーカップに手慣れた手付きで紅茶を注ぎ、王侯貴族の振る舞いの様に優雅に飲んでいた。

「なあ、ボーデビイツヒ妹。優雅過ぎないか？」

様になり過ぎたが？」

カチャリとティーカップ皿にティーカップを置き、巻紙先生を見ながらシルメリアは可笑しそうに笑う。それも、王族の様に立ち振舞いの姿が様になるのだから巻紙先生は更にバツを悪そうにする。

「そうでしょうか？」

こうして、見たことない風景を観ながら紅茶を嗜むのも良いものです。巻紙先生も一緒に紅茶でもどうですか？」

「柄じゃねえから、オレは遠慮するわ」

粗暴、乱暴が名前にまで付いて回る流石の巻紙先生でも、このシルメリアから漂う気品あふれる雰囲気には居心地が悪い。

それに、シルメリアがヴァルキュリアとして目覚める前の前世が神の怒りを買って神罰で国が滅び、運良く国王から悪戯のやり過ぎで城の地下牢に幽閉されて落ちて延びたお転婆王女のアリーシャ王女だったのだから様になって当然である。

そして、どうして自分とは真逆のシルメリアを相席させたのかを後悔しながら愛読中の週間ストラトスをアイマスクに眠ったのだった。

一方、千秋とレナスの二人はクラスメイトがカンパしたお菓子を食べながら座っていた。

ただ、千秋がかなり不機嫌なのは私が原因だろう。

「お姉ちゃんに助けられたのは事実だけど殴ること無いじゃん!!」  
バリバリムシャムシャとカンパされ渡されたお菓子をヤケ食いしながら愚痴っていた。

「千秋、仕方ないと思うよ?」

レナスの一言に、どうしてと思う。

「レナスもお姉ちゃんの味方なの?」

「違うとも違わないとも言い切れなかな。

だって、私は姉でもあり妹でもあるから」

レナスには妹にシルメリアさんがいるし、姉にはアーリイさんが居た。

「だったら、私がお姉ちゃんに怒る理由だって!!」

「判るよ。」

でも、経緯を知ろうとしないのはどうかと思う」

「うっぐう…」

見事なカウンターに黙ってしまったのだ。

「ねえ、千秋ちゃん」

「なっ、何かな?」

「千秋ちゃんは前世を信じる?」

「急に何を?」

レナスの前世を信じるかと言えば信じるしか無い。現にレナスにはアーリイさんとシルメリアの二人の姉妹が居るし、お姉ちゃんに至ってはアーリイさんと談笑しながら魔剣らしき物を貰っている所が見えた。

「うん、じゃあ…とある少女の昔話しをしようかな。

昔、死が近付き病弱でいる一人の少女が居ました。

少女は幼馴染の少年に願いました。

大好きな鈴蘭の花畑に連れて行って欲しいと。

そして、願いは叶い鈴蘭の花畑に行けました。

ですが、鈴蘭には毒がありました。

少女は病気では無く、鈴蘭の毒を吸い込み鈴蘭の花畑で亡くなりました。

そして、少女は女神に目覚めました。

蒼穹の鎧を纏いし銀髪の美しい少女、戦乙女であるヴァルキュリアとして…

ヴァルキュリアは人だった頃の記憶を全て失い、女神としての責務として世界を回りながら来たるべくラグナロクに向けて英雄達の魂を集める旅をしました。

少女はとある城で不死王ブラムスと出会い、戦いながら主神の真の目的を知りました。ですが、不死王が言っている事を信じられなかった少女は不死王から証拠として見せられたのが、主神に人々に手を差し伸べるべきだと意見しただけでクリスタルの中に封印された女神である少女の妹でした。

少女はクリスタルの中に封印された妹の変わり果てた姿に涙を浮かべて泣きました。

その時、少女は決心しました。

主神に叛逆すると：

そして、仲間を集めて主神と戦う道を選び、旅を続けました。

戦いは佳境を迎え、神樹ユグドラシルに向かい主神の力封印して倒す為の宝珠を取りに行きましたが、少女の前に現れたのは少女が女神としての姉が敵として現れました。

二人の姉妹の戦いは、激戦の末に姉を倒しましたが姉は最後の止めと少女に刺された槍で亡くなりました」

「…」

レナスが語る昔話し。

まるで、レナスの前世の記憶なのだろうか？

判らない。

だけど、涙を流しながら語るレナスを見て、私を見る目は昔話しの様に何かを願う少女の様に見えた。

「だから、千秋ちゃんには少女の様になって欲しくない。だから、十夏ちゃんと話して仲直りしよ？」

そして、レナスの願いは私とお姉ちゃんの仲直りを願っていたのだった。

お姉ちゃんとの仲直りの事を考えながらバスに揺られて見る蒼穹の空は、私には何も教えてくれなかった。

## 閑話 鈴音とメアリーとの決闘 前編

臨海学校から学園へと戻った3日後、第三アリーナでは学園の生徒が殆んど集まっていた。

理由は勿論、現役時代に瞬殺の女王と言われた織斑鈴音と鮮血姫と云われ怖れられたイギリスの元女王のメアリーとの決闘だった。

アリーナの客席は満員で入りきれなかった生徒は他のアリーナで中継を見る事になるのだが、各国関係者は最強夫妻の片割れとも言える織斑鈴音の実に七年振りの勇姿を焼き付けようと挙って学園へと足を運んだのだ。

そして、メアリーの専用機はIS適正が低い彼女の為に身体にフィットしやすい鎧型の機体で特殊金属製の純白のドレスの上に白銀のドレスアーマーを纏う専用機の名前は白騎士を彷彿させる姫騎士だった。

姫騎士の武装は二つだけだ。

ナイツシールドは標準装備だが、斬馬刀の様な巨大な大剣クレイモアと腰の鞘にある剣はメアリーの国イギリスに相応しい片手直剣のエクスカリバーのみだった。

姫騎士の製作者は篠ノ之束だった。

束博士は臨海学校の直前まで孫や織斑姉妹の剣術指南をしていた脳筋思考で解決する彼女をかなり嫌っていたが、三人の専用機に装備された片手直剣は西洋剣術だと孫のレナスに言われて漸く判り和解する。

そして、お詫びと孫娘に織斑姉妹を観てくれたお礼として作ったのが姫騎士だったのだ。

しかし、姫騎士の世代区分は2世代型のISに区分されているが、装備や装甲などはアテナからの可動データを元に製作している為に最低でも5世代もしくは4世代型に区分される筈が、彼女の余りにも低過ぎるIS適正（ギリギリ反応する適正値D―）が要因で2世代型の性能しか出ないのだが、開発者である束は第一世代では主流だった

身体にフィットする鎧タイプで低い適正をカバーし、アテナとアルテミスを開発した際の技術を使い機動性能だけは5世代級とアンバランスな機体となったのだ。

まさかの話だが、セカンドシフトしたアテナとアルテミスがコアネットワークを通じて十夏と千夏の二人が動き易い様に姫騎士と同じ鎧型に原点回帰した事は言うまでもない。

そして、ピットではISスーツ姿の二人。

メアリーとセシリアが居た。

二人の対決に何故、セシリアまで参加と言うと鈴音が助っ人を許していたのも在るがメアリー自身がIS戦闘が初心者である。それで、セシリアが助っ人として許されたらしい。

だが、セシリア本人は学生時代からの想いを成就させる事が最大の目的とはメアリーですら予想していない。

それに、現役時代のタッグトーナメントの雪辱を晴らす事もそうだが、セシリアの専用機は現役時代に使用した専用機はブルーティーズの後継機のティーターニアだった。

ただの現役時代のティーターニアでは無く、本来なら木更津基地攻略を目的を隠れ蓑にイギリスの研究所から研究用に保管されていたティーターニアの試作零号機の先行試作機を取り寄せていたらしく、マドカの願いから東博士の協力の下にセシリアのブルーティーズのコアをティーターニアと交換。マドカの現役選手時代の専用機だった帰蝶を解体して、解体したパーツで強化改修したティーターニア改だったのだ。

しかし、姿はティーターニア改では無くブルーティーズに似ているのは、コアを交換して強化改修したティーターニア改をセシリアが展開しながら東博士と調整の最中に急に光り出して、ティーターニア改とコアを抜かれハンガーに展開してあったブルーティーズまでも巻き込んでセカンドシフトしてしまいティーターニア改から6世代型全距離対応射撃タイプのクイーン・ティーターニアとなったのだ。

作業していた東博士はこの光景を観て

「もう、意味が解かないよ!?!」



と叫んだらしい。

そして、その姿は臨海学校中の織斑姉妹も木更津方面に飛ぶ姿を觀ており、ブルーティーアーズと見間違えたほどに酷似しており当然だった。

「メアリー、私も援護いたしますが絶対に深入りし過ぎないくださいいな。あの方には武器のリーチの差なんて存在いたしませんわ。それに、恐ろしいのは武器を弾かれたら最後、カウンターがきますわ。タッグトーナメントで酷い目に遭った私とマドカさんの経験ですわ」  
「カタログスペックよると武装が少ないのね？」

「とんでもありませんわ!!」

確かに、黒椿には武装と言えるのはビームサーベルだけでしょう。ですが拳法の技が彼女の武器。

ですから、黒椿は格闘特化の機体ですわ」

「じゃあ、クレイモアよりエクスカリバーの方が良いわね…」

ピットではセシリアから鈴音の専用機、黒椿の注意事項をメアリーに説明していたのだった。

そして、時間となりピットから大歓声の下にアリーナへ出れば、腕を組みながら睨み六対のスラスタユニットを広げた黒椿が空中に待機していた。

「なっ!?!」

「黒椿は四対のウィングではなくって!?!」

セシリアが驚愕するのも当然だろう。

鈴音は最初から二人を叩き潰す積りで、本来の姿の黒椿のサードシフトした黒椿・神龍で挑むのだから。

つまり、セシリアがタッグトーナメントで戦ったのはセカンドシフトした黒椿・日輪だったに過ぎない。

この時、セシリアは思った。

セカンドシフトしたクイーン・ティターニアでも勝てないと。

そして、メアリーも悟っていた。

一夏の隣に並び歩む為に如何に鈴音は努力して来たかと。だけど、二人の心は一つだった。

一夏と鈴音が歩む高みに行けたら、こんなにも素晴らしい事は無いと。

そして、負けられないと：

それとは逆に、モニタールームで記録をしながらモニターを見る篠ノ之箒は思う。

一夏と歩む事を何故、諦めてしまったのだろうか。

何故、私は鈴音とは違い従っていく事を止めてしまったのだろうか。

想いながら、最初は無理矢理に着いて行った鈴音の決断力と行動力に羨ましく思った。

私では到底出来ないだろう。

だけど、逆に得た物もある。

姉さんとの和解だった。

VIP席に座る、デュノア社社長であるシャルロットは思う。

一夏と鈴音の居る場所は僕には眩し過ぎると。

だから諦めて、パパの遺したデュノア社に全てを捧げて立て直した。そして、ドイツには遅れを取ったけど5世代機の設計まで終わリ試作段階だった。

だから、僕もセシリアに負けられない様にと思う。

生徒会室ではモニターに釘付けになる双子姉妹とボーデビイツヒ三姉妹。

双子姉妹には母親の勇姿を生で見るのは初めてだったし、観たのは記録映像だけだった。

二人は思う。

母親がこんなにも遠い存在だったと。

母親とは自宅の地下アリーナで何度も戦ったが全て、瞬殺されて気

付けばアリーナの地面に倒れて居た記憶しか無い。

だけど、いつかはママとパパに挑み勝ちたいと二人は思ったのだ。

そして、試合開始のブザーがなりママとメアリーさんが激突したのだった。

閑話 鈴音とメアリーとの決闘 中編

試合開始のブザー。

鈴音は真っ先にメアリーとの戦いに邪魔になるだろセシリアを潰すべく狙いをつけ、現役時代では一度も使うことの無かった三重瞬時加速で加速する。

そして、セシリアの額にあるハイパーセンサーを狙い肘鉄を入れようとする。

「腕の鈍ったアンタなんか!!」

「きつ、消えたですの!?!」

はっ!?

「やっ、やられますわ!?!」

セシリアのハイパーセンサーでも三重瞬時加速した鈴音を捉えるのは不可能に近い。そして、サードシフトの黒椿・神龍を操る鈴音の三重瞬時加速はアテナがセカンドシフトした二重加速よりも何倍も早いとも言える。

肘鉄がセシリアの額に入る瞬間。

ガツキイイイイン

メアリーの野生の感は恐ろしい。

「セツシーはやらせないわよ!!」

「チッ!?!」

「やっぱり、あんたの野生の勘は恐ろしいわ」

「最高の褒め言葉ですわ!!」

セシリアの額にあるハイパーセンサーの破壊と衝撃からの脳震盪による気絶を狙った肘鉄は入る事なく、メアリーのクレイモアとぶつかり甲高い音を奏でる。

アリーナの客席を守るバリアは二人のぶつかり合った衝撃波によりガタガタと揺れて客席から悲鳴が上がるが、モンドグロツソの決勝戦を最初から意識した最大出力のバリアではビクともしない。

「嘘でしょ!?!」

三重瞬時加速なんて…」

鈴音がいきなり使用した三重瞬時加速に驚愕するセシリアは、現役時代を思い出すが一度も使われなかった事に自身の力の無さに落胆する。

そう。

今までは二重瞬時加速して、そのスピードのまま相手の額に肘鉄を入れて瞬殺して来たが、逆に三重瞬時加速まで使い受け止められた事自体が鈴音にしたら驚愕だった。

それでも、セシリアは元国家代表。

最初から全力全開の攻撃を繰り出す。

それは…

「さあ、お行きなさい!!」

薔薇の花園に迷い込んだ愚か者に青い雫をぶつけなさい!!」

セシリアは既にリボルバーや瞬時加速を混ぜ込み加速して離脱しながら、TB兵器の薔薇の蕾（ローズビット）と硝子の薔薇（ミラージユビット）をスカートアーマーの下から大量の30機をばら撒き鈴音を包囲する。

これが、現役時代のセシリアとマドカが考案した大量のTB兵器を用いた真骨頂の茨の園と云われた大量のビットによる包囲戦術だった。

只のビットによる包囲戦術では無く、セシリアのビットからのレーザー射撃とマドカのリフレクタービットによるレーザー反射による三次元の攻撃はセシリアのセカンドシフトしたクイーン・ティーターニアは単体でも出来るのだ。

鈴音に襲いかかるローズビットからレーザーによる偏向射撃やスターゲイザーMk-IIIやローズビットの逸れたレーザーをミラージユビットが反射させる反射射撃。それ等に加えて、メアリーもレーザーの雨を掻い潜りクレイモアで鈴音を斬り捨てようと襲いかかる。

無論、鈴音はローリングしながら躲し、脇差しタイプのビームサーベルを抜いて致命傷を受けそうなレーザーの攻撃を斬り捨てる。

「ちっ、厄介ね!!」

なら、東方不敗流奥義!!

クラツシユオブタイフーン!!

はあアアアア!!」

「グツヘエ!」

キヤアアアアア!」

「なっ、こんなのアリですか!」

セシリアの茨の園に閉じ込められた事に舌打ちしながらも、黒椿自身を凄まじいスピードで回転させながら竜巻を作り、ビットと接近して来ていたメアリーまでも巻き込みながら回し蹴りを入れて全てのビットを破壊し、メアリーの脇腹を蹴り飛ばしてセシリアへと弾き飛ばす。

同時に客席の生徒や来賓達もアリーナに現れた巨大な竜巻に恐怖し驚愕するが、同時に客席を守るバリアがスパークした事にも驚いていた。

鈴音に回し蹴りで弾き飛ばされたメアリーはセシリアと衝突し、セシリア自身は学生時代の鈴音とタッグを組みながら旧姓山田先生に同じ様に衝突させられた事にデジャヴを感じていた。

「痛たた…デタラメ過ぎますわよ!!」

「セシリア、覚えて置きなさい!!」

「これが、一夏と並び歩む難しさよ!!」

「それでも、私は想いを添い遂げたいですわ!!」

「そう、なら最高の奥義で沈めるわ!!」

ワンオフアビリティー『獅子奮迅』を発動!!

我流最終奥義、デッドリーアサルトオオオ!!

喰らえええええ、セエエシイイイイアアアア!!」

「黒椿が黄金色に輝きますの!」

ハッ!」

まさか、ハイパーモードですか!」

黒椿は単一仕様『獅子奮迅』より黄金色に輝き、六対の翼は左右対称の扇状に広がる。セシリアが驚愕し叫んだように、獅子奮迅の効果は機体性能の400%のアップである。従って、効果中の加速力とパ

ワーは世界中の I S の中ではダントツであり、そこから繰り出されるデッドリーアサルトの破壊力は白椿の零落白夜ですら及ばない。

無意識だろうか？

セシリアはメアリーを突き飛ばした。

「え？セツシー？」

「はアアアアアア!？」

「キャアアアアアアア!？」

黒椿・神龍のハイパーモードから繰り出された超連撃である45連打。

鈴音から繰り出される拳や蹴りにセシリアのクイーン・ティーターニアの碎ける装甲。

セシリアの専用機、クイーン・ティーターニアの装甲や武装をズタボロに破壊しながら空中で時間が止まったように拳や蹴りが入りまくる。

だが、諦めないのがセシリアの性格だった。

「まだ、終わりませんわよ!!」

スターゲイザー、ソードモード!!」

「あたしのコレを止められると思うなアアアア!!」

「あつ、諦めませんわよ!!」

鈴音からの連撃を受けながらも、半壊しながらも機能を失わなかったスターゲイザーを握りしめてソードモードにして黒椿に向かって振り下ろし斬り付けたのだ。

「なっ!？」

「やつ、やりましたわよ…」

「セツ、セツシイイイイ!!」

セシリアのクイーン・ティーターニアはシールドエネルギーがゼロとなる前に黒椿・神龍の肩のアーマーを斬り付けたのだ。

正に、セシリアの執念の一撃だと言える。

だが、鈴音のデッドリーアサルトも最後まで拳と蹴りの連撃がクイーン・ティーターニアに入り、大破しながらも黒椿を斬り付けたと同時に終わり、セシリアは運良く専用機を纏ったままアリーナの壁へ

と叩き着けられて地面に落ちると同時に解除され気絶したのだ。

そして、自分が鈴音を見失った瞬間、セシリアが鈴音に落とされセシリアの名前を叫ぶメアリー。

「次はアンタの番よ!!」

メアリー!!」

未だに黄金色に輝くハイパーモードの黒椿。

自分には既にセシリアは居ない。

そして、自分には空中で構えクイクイと手を曲げて掛って来いとメアリーに挑発する。

メアリーでも、自分がIS戦闘は初心者に近いと判る。

元とは言え、セシリアはイギリスが誇る国家代表なのに開始して五分でセシリアはやられて気絶。

こんな事、私自身でも理解出来ない。いや、解つていたいたとして、これが世界最強の片割れだと認めてしまったら、私は一夏さんと添い遂げる夢は夢でしかないと言いたいのかも知れない。

だけど、本当に一夏を愛したい。

いや、愛するのなら彼女に勝たなくては行けない。

私がイギリス最強と名乗るなら本気で…

手に持つクレイモアを投げ捨て、エクスカリバーを抜き正眼に構える。瞬時加速から黒椿に向けて斬り込んだのだ。

「はぁアアア!!」

「特攻だけで、勝てると思うな!!」

やはり、拳で剣を受け止められた。

しかし、私は回し蹴りを入れようとするが

「アンタの実直な考えなんてお見通しよ!!」

「くっ!?!」

膝を曲げて回し蹴りは簡単に否され、剣撃は裏拳であしらわれ、そんな事が何度も何度も起こる。

昔、観た映像とは思えない強さ。

何故、鈴音はこんなにも強いのか？

いくら、引退してても異常な程に強い。



私は思わず叫ぶ。

「何故、こんなにも強いよ!!」

最速の突きを入れるが裏拳で否され、鈴音が叫ぶ。

「二夏と共に並び歩むなら、立ち止まってなんか居られないわよ!!  
それに、あたしは娘を抱える母親よ!!

だから、強く無くてはならないのよ!!

あんな、悲しい思いなんか二度と経験したくないわよ!!」

鈴音は十夏が臨海学校で死に掛けた事を悔やんでいた。

何故、護れなかったのだろうか。

何故、自分は娘達を囿にする作戦を承諾してしまったのだろうか  
と。

悔やんでも悔やみ切れない思い。

私は鈴音の強いの意味を知ってしまった。

二人の娘と夫を愛する為の強さ。

それが、鈴音の強さの根本。

私もその頂に届きたい。

何故なら、私も一夏を愛しているから。

そんな時、モニターに単一仕様が映し出される。

そう、エクスカリバーを持つ者なら現れるだろう。

「ワンオフアビリティー、『約束された勝利』を発動!!」

私が握るエクスカリバーがエネルギーを纏い強く光り輝く。

私か単一仕様を使うなら、彼女も単一仕様を使う筈だった。

そう、鈴音も…

「あたしも単一仕様を使用中にしか使えない必殺技を使うわよ!!

(BGMキングオブハート)

流派東方不敗が最終奥義!!

石破天驚拳!!」

鈴音が構えた両手の中に集まりだす超エネルギー体。

そんな物を食らったら只では済まない。

だけど、私も負けない。

「はあああああああ!!」

同じく、超エネルギー体を纏うエクスカリバーを振り下げ、全てを斬り捨てんと力の限り叫ぶ。

そして、二つの超エネルギー体ぶつかり合いアリーナは光に包まれたのだった。

## 閑話 鈴音とメアリーとの決闘 後編

アリーナ全体を閃光と爆風が覆い、ぶつかり合った二人はエネルギーの反発により弾け飛ぶ。

黒椿はアリーナの客席の閉じたシャッターに吹き飛ばされ激突し、重装甲とも言える装甲は全体が罅割れてボロボロで、六基あるウイングバインダーは無惨にも消し飛んでいて存在はしていない。黒椿の状態を見ても明らかに大破しており、単一仕様『獅子奮迅』の効果は切れてパーソナルカラーである朱色の装甲に戻っていた。

「重装甲のお陰で助かったわね…」

とボヤキ、飛ぶ事が不可能と判断して生き残った右脚のスラストでバランスを取りながらアリーナの地面に降りる鈴音。しかし、軽い脳震盪を起こしフラフラだった。

それとは反対側に吹き飛ばされアリーナの壁へと激突したメアリーの姫騎士は武装だったエクスカリバーは持ち手から先が砕けて無くなり、腕と脚部は装甲が消し飛んで配線やらフレームが剥き出しで壊れ、ウイングバインダーは激突した衝撃で動作不良を起こして使用が出来なく成っていた。唯一の救いは激突しても気絶しなかった事だろうが、全身打撲で立つのがやっとだと言える。

「姫騎士、まだ戦えるわね？」

メアリーは姫騎士に呟き、未だに闘志を剥き出しに持ち手だけとなったエクスカリバーを投げ捨てて生き残ったエクスカリバーの鞘を杖に立ち上がり鈴音を睨む。

両者共に専用機は大破し、シールドエネルギーまでも残りが100を切っていたのだ。そして、次の一撃が勝敗を決めると過言ではない。

ただ、客席から見ると人々は思うだろう。

『人外同士のや生温い。怪獣大決戦だ』

だが、人々はメアリーを賞賛するだろう。

元世界最強の片割れである織斑鈴音を追い詰めた事に。

だが、メアリーは専用機の性能だけでは無いと思う。

今で、培われ磨き上げて来た古代王国流剣術や生身でISとも対等以上に闘えるまでに鍛えた身体能力。

東博士が開発し、メアリーのギリギリでコアに反応する低過ぎる適正値に悩み初めて技術の原点回帰したパウードスーツであり鎧型にした事で、メアリーの身体能力を余す事なく発揮出来る様に開発した姫騎士。

それ等が複雑に混ざり合い起きた奇跡と、モニタールームで静かに見守る織斑千冬は分析する。

飛ぶ事が不可能な二人は走りながらアリーナ中央付近で再び激突する。

「シャアアア!!」

「はああああ!!」

とメアリーが鞘で袈裟斬りで殴り掛かり、カウンターを狙いアツパーでメアリーの顎下を狙う鈴音。

「しまった!？」

「最後の武器が!？」

しかし、メアリーの全身打撲で蓄積されたダメージで姫騎士がふらつきタイミングを誤った事と、シャッターに激突した事で軽い脳震盪から復活できずにふらつき、鈴音のカウンターのアツパーは顎では無くメアリーが握る鞘を殴り砕く。

正に九死に一生を得たメアリーとカウンターで仕留め損ねた鈴音。

こんな事が起こるのは両者共に身体的にダメージが酷い事を示すのだが、これで辞める二人ではない事をモニタールームで見る夫の一夏は悟っていた。

「二人とも、無事に終わってくれ…」

と二人が無事に終わる事を願い呟く。

一方、セシリアは救護班の手により試合中の最中の救出によりアリーナから救護室へ搬送されていた。

そして、治療中の最中に目覚めたのだ。

「私、どれ程気絶を？」

「二分だな。下層ゲートの側だったから救出が出来たが正解だな」  
ドクターの受け答えに救護室のモニターに映る二人の激闘。

そして、メアリーの専用機の姫騎士に発現した単一仕様『約束された勝利』を発動しエクスカリバーを放つ瞬間と七年前には覚えていなかった流派東方不敗の最終奥義を放つ鈴音。

「高みが高過ぎですわね…」

「そう思うか、セシリア・オルコット？」

「えっ？」

織斑先生!？」

救護室に入ってきたのは書類袋を抱えた織斑先生だった。

「ふん、まあ良い。」

鈴音から試合前に預かった伝言と書類だ。

良く聴けよ、小娘？

重婚が認められたからには、セシリアは合格だとな。

認められた限りは、高みを驕ることなく歩めよ。

私の可愛い、義妹」

「えっ？」

これは…」

渡された書類袋には三通の書類。

一つはオーロラのIS学園への編入届け。

もう一つは新しい私の戸籍と娘の戸籍。

最後は丁寧折り畳まれた婚姻届だった。

私には戸籍謄本と婚姻届だけは解らなかった。

娘のオーロラが一夏さんと私の娘と成っていたのだ。

そう、戸籍謄本には

織斑オーロラ 2XXX年1月6日誕生 十歳

父親 織斑一夏

母親 セシリア・オルコット

長女（養女）

本籍地 イギリス ■■■地方■■■市■■■

備考欄 本籍地を2XXX年7月20日により、神奈川県湘南市湘南■■■■中華料理店織斑に変更。

と書かれて居たのだ。

そして、私には鈴音さんと織斑先生が後見人としてサイン入りの婚姻届だった。

言われなくても解る。

鈴音さんから許されたと。

「うっ、わあああ…」

ベッドのシーツを握りしめ、込み上がる涙と言葉に出来ない嬉しさ。

そして、救護室は私の泣き声が木霊していた。

再び、アリーナ。

専用機は大破しながらも激闘を繰り広げる二人。

姫騎士を殴れば、黒椿の右腕の装甲とフレームが罅割れていた為に耐え切れなくて砕け散り。

逆に姫騎士が黒椿を蹴り上げれば、姫騎士の足のフレームが曲がり機能停止する。

既に両者は満身創痍。

シールドエネルギーも二桁を切り、お互いに大破して機能不全を起してパワーが出ない。一撃一撃が既に軽い一撃しか出せない状況の最中、試合が動いた。

最初に投げ捨てた、大剣クレイモアをメアリーは拾い上げようとしたが、鈴音が許す訳がない。

「これで!!」

「拾わせると思ってるの!!」

「掛かった!!」

「もら……………」

左腕から繰り出される渾身の一撃は拾おうとした大剣を砕いたが、メアリーはチャンスだと思いきや鈴音に踵落としを入れようとするが入

れられなかった。

そう、メアリーは

「えっ、しまった!？」

やられ……えっ？

メツ、メアリー!？」

右脚を上げ踵落としを構えたままの体勢でメアリーは身体に蓄積され過ぎたダメージが原因で姫騎士を纏ったまま気絶していたのだ。

鈴音とメアリーの決闘はメアリーが片足立ちのまま踵落としを入れる構えをしたまま気絶し鈴音の勝利となった。

こんな試合、二度と観ることはないだろうと試合を観た人達は口を揃えて言っていた。そして、もし気絶しなかったら勝って居たのはメアリーだと学園の生徒は口を揃えて言っている。

それだけの激闘。

一人の男性を愛する故の女と女の意地の張り合い。

逆に、各国の現役の国家代表は口を揃えて言う。

織斑鈴音が引退してて良かったと。

あんな、化物に勝てる訳が無いと……

だが、黒椿と姫騎士は大破して東博士でも修理に半年以上は掛かるだろうと涙目となり、愛娘のクロエとラウラに泣き付いていたと助手の更識簪は語る。

簪自身も日本政府から頼まれていた専用機を全て、学園に居る元日本の代表候補生の生徒を学園の企業代表候補生の専用機として再登録して配布したらしい。

試合後、鈴音はメアリーが寝ているだろう病室へと足を運ぶ。

無論、娘二人を連れてだ。

「入るわよ」

ベッドの脇に腰掛けて居るメアリーは腕や脚は包帯で巻かれ痛々しい姿だった。あたしも人の事を言えないくらいに打撲と打ち身で包帯だらけだったが……

「鈴音様!?!」

メアリーは鈴音達を観て困惑する。  
無理も無い。

認めてくれないと思っっているのだから。

しかし、鈴音は十夏と千秋を前に出して言う。

「ほら、アンタ達。」

新しくママになるメアリーに挨拶しなさい」

「メアリーママ、末永くお願いします」

「へっ?」

メアリーは二人の双子姉妹からママとして挨拶されたのだ。困惑するなと言うより困惑する。

「メアリー、あたしがアンタを認めわよ。」

それと、あたしと千冬義姉さんのサイン入りの婚姻届よ。

早くしないと、セシリアに先を越されるわよ?」

トンデモ発言に目をパチクリするメアリー。

セシリア?

「セッシー!!」

抜け駆けしたなあああ!!」

メアリーはベッドから急ぎ立ち上がり、セシリアが居るだろう病室へと走って行ったのだ。

だが、セシリアは夫からサインを貰い役所へと提出していたとはメアリーは知らない。

そして、セシリアから遅れて提出したメアリーはイギリス王家から除名処分されたとも知らなかったのだ。

伝統を重んじる王家が妻が居る男性へと嫁ぐ事を良しとしない事をメアリーは浮かれたまま知らなかった。



## 夏休み 幼女再び

謹慎が明け、私達姉妹はマドカ叔母さんと一緒に修理が終えた実家へと帰省していた。

私達の実家、中華料理店織斑は日本政府からの襲撃で半壊して住めなくなつたが、日本政府が起こした織斑邸襲撃事件と臨海学校の最中に私達を狙つた織斑姉妹殺人未遂事件やビスマルクII襲撃事件が発覚して内閣は総辞職している。

そして、日本政府から何億円もの多額の賠償が払われて実家は綺麗に修理されたのだ。

マドカ叔母さんは一足先に帰省した姉が心配となり、学園での双子姉妹の監視と無慈悲な訓練を辞めて、自宅の地下アリーナで行う旨を中国で夫と居る義姉の鈴音にスマホ片手に報告していた。

『はあ!?!』

アンタ達よりも先に千冬義姉さんが帰つた!?!』

「ナターシャ先生の話だとそうなるね」

『まさか、30年物の白酒芽台酒が狙いじゃないでしょうね!!』

「えっ!?!」

それって、セシリア義姉さんとメアリー義姉さんとの結婚式用にお兄ちゃんが中国から空輸便で取り寄せた超高級酒だよね!?!」

『一本、20万円以上はするお酒よ!!』

マドカ、良い?』

絶対に飲ませるな!!』

只でさえ、今度の結婚式はメアリーとセシリアの親戚関係でイギリスの貴族が来るのよ!!』

飲まれて在りませんじゃ、いい恥さらしよ!!』

「頑張ってみるよ鈴姉さん……はあ……」

スマホの通話を切り、溜息を吐く。

十夏と千秋には丸聞こえだった様で、黒騎士を展開して先に行けと言わないばかりの視線を送って居たが、鈴姉さんとお兄ちゃんから頼

まれた双子姉妹の監視を投げ出すには行かなかった。

「十夏？」

「先に行っても…」

「それは無しだ。」

仕方ない。

SEだけ展開しろ。

お前等を抱えて飛んで行く」

「えっ、マジ!？」

「うるさい!!」

駄姉より、鈴姉さんの方が怖いんだ!!」

最早、ママの怖さに涙目で叫ぶマドカ叔母さん。

こないだの決闘を観た事で、現役時代よりも恐怖が身に染みただけ、私達姉妹もママには逆らわない様にする様になったのだ。

あんな、必殺技を食らったらと思うとマジで怖い。

マドカ叔母さんと同じくママが怖い。

SEだけを部分展開して、マドカ叔母さんの黒騎士に抱えられて急遽、自宅に帰省したのだ。

肝心のメアリーとセシリア親子は結婚式で着るウエディングドレスとオーロラのサニードレスの採寸中らしく、イギリスに帰っていたりする。

一方、新しく直った織斑邸では鈴音とマドカの予想を遥かに裏切り織斑千冬達数名は酒を煽り、厨房では三姉妹が半泣きしながら無理矢理に料理を作らされ酒宴状態だった。

もし、家主の一夏が見たらブチギレ案件であり、織斑千冬の運命は既に決まっていた。

そう、裁判無しの死刑だと言える。

中華料理店の新しく作られた宴会会場では

「美味しい酒だな」

帰って来た時に、搬送業者から受け取った木箱をこじ開けて中に入っていた高級酒を片手にラツパ飲みをする織斑千冬。

「そうだね。ちーちゃん」

酒の入ったグラスを片手にしながら、孫娘が作る料理を着にして酒を飲む篠ノ之束。

「下界の酒は美味いな…」

正体に気付いた三姉妹の長女を一睨みで黙らせて銀杯を片手に飲むのは、金髪のロングヘアの髪型に眼は碧眼で服装はジーパンにブラウスと男勝りの性格をしている美しい女性。

「お姉様、お替りのお酒です」

同じく、もう一人は銀髪で赤い眼をした女性は従姉妹の姉にベツタリしながら酌をしながら微笑む女性。

「……………」

ドイツに帰るからと挨拶に来たのに、お酒を無理矢理飲まされ、下戸な為に気絶したラウラとクロエの姉妹。

「きつ、貴様は!?!」

「黙れ…人に墜ちた女神などはな?」

「やはり、貴様は!?!」

レナス、シルメリア逃げるぞ!!」

「えつ、姉さん!?!」

「姉様!?!」

「我から逃げられるとでも?」

「ぬつ、わアアア!?!」

「「キヤアアア!?!」」

「ヒック…ボーデビイツヒ三姉妹。

悪いが、つまみでも作くれ…」

「怒られますが?」

「知らん…」

金髪の女性の正体に気付いて、ヴァルクユリアを展開して妹二人を抱えて咄嗟に逃げようとするが呆気なく捕まり、千冬により厨房に押し込められて彼女達が酒を飲む為の肴となる料理を作らされる長女

のアーリイと姉を手伝おうとする次女のレナスに三女のシルメリアの三姉妹。

カオスである。

自宅までマドカ叔母さんの黒騎士に抱えられて帰省した私達が見た光景は地獄だった。

修繕仕立ての綺麗だった中華料理店の宴席室は木箱が開けられて木片のゴミと飲んだだろう酒瓶が大量に散乱していると言う惨状。そして、飲んだだろう犯人達は泥酔して未だにどんちゃん騒ぎしており、厨房に閉じ込められた親友の三姉妹は大量の料理を作らされた為に体力を使い果たして蹲り屍のように果てていた。

先に、酔い潰れていた束先生を特殊ワイヤーでふん縛り、冷凍庫へ連行。

「まーちゃん!？」

れっ、冷凍庫は凍るからダメだよ!？」

「駄兔は凍ってる!!」

結婚式用の酒を飲みやがって!!

それと、駄姉!!」

「まっ、マドカ!？」

千冬叔母さんを見付けてキレイなマドカ叔母さん。

私と千秋も見覚えがある女性に近づき

「「駄女神!!」」

「げっ、十夏!？」

「ち、千秋!？」

とキレイな三人は首根っこを掴み地下アリーナへ連行。そして、怨み晴らすべくついて来たアーリイーさんとシルメリアにレナスの三姉妹。

私は得物である神槍ネプチューヌを持ち

「覚悟は良いわね?」

千秋は神弓アルテミスを構え

「頭を冷やそうか?」

アーリイーさんは漆黒のヴァルキリーメールを纏い神槍ブリューナクを構えて

「レナスが私達を再び、ヴァルキュリアに戻してくれた。覚悟は良いな?」

シルメリアさんも同じく群青色のヴァルキリーメールを纏い、神弓ユグドラシルを構えて

「お姉様を泣かした罰、受けて貰います」

レナスも蒼穹のヴァルキリーメールを纏い、神槍グングニールを構えて

「人に墜ちた訳じゃない。こんな力は要らないから封印しただけ。

さあ、神々の黄昏でも始めましょうか?」

と女神アテナと女神アルテミスを睨み対峙したのだ。

そして、マドカ叔母さんも黒騎士を展開して

「今日と言う今日は許さない!!」

駄姉、覚悟!!」

「待て!!」

そんなので撃たられたら死ぬ!!」

「死ねって言っている!!」

と酔って居ながらも走って逃げる千冬叔母さん。

そして、スターゲイザーを足元に狙い撃ち、追いかけるマドカ叔母さん。

「このままでは…来い、暮椿!!」

つて、何故展開が出来ない!?!」

「駄姉、暮椿は連行する途中で没収した!!」

大人しく、クタバレ!!」

「なっ、何だと!?!」

暮椿を没収されていた事に更にピンチになる千冬叔母さんは逃亡を選択するが、生身で逃げ切れる訳でも無くマドカ叔母さんにより瞬時加速からのラリアットを食らって半殺しにされ、千冬叔母さんは全身打撲と両足の骨折で全治2ヶ月の重傷を負うことになった。

そして、私達はアテナとアルテミスをぶっ飛ばす為に戦うが  
「我に刃向かう愚か者が!!」

とアテナは叫び、私達は光に包まれた。

「「「「きやあ!」「」」」」

光に包まれた私ダボダボが感じた違和感。

それは…

「うっええ…ふくがゆるゆる…」

「あてな、なにしゆるのだ!!」

「姉さん!」

「おねえしやま?」

「あるてみす、ゆるしやない!!」

そう、私達は幼女にされていたのだ。

臨海学校前よりも幼く、舌足らずな喋り方になる私達は、幼女にされた事で持っていた得物は重くて持てなくなり、レナスだけが何か違うBGMが流しながら女神二人を睨んでいた。

「「なっ!」」

「ふむ、お二人は私がOSでは隠れた裏ボスだったの忘れたか?」

凜々しくもあるが所詮、幼女レナスだと舐めていたアテナ。

「まさか…セラフィックゲートのレナス・ヴァルキュリア!」

漸く、正体に気付きたじろぐ駄女神。

「フッン!!」

「キャウン!」

「につ、逃げになくては!」

「逃さん!!」

「お尻を叩くのいやあああ!」

「悪い子にはお尻ペンペンだ!!」

「いやアアアア!!」

レナスはグングニールの石突で逃げるアテナのお尻を叩き躓かせて、コケた所を柄で頭を殴り意識を刈り取ったのだ。

そして、逃げるアルテミスにも同じ様にダツシユで近付き腰を抱えると、パンツを脱がしてお尻丸出しでお尻を叩いたのだ。

そして、レナスは再び私達を元に戻すと何も無かった様にアリーナの壁に寄り掛かり眠ってしまったのだ。

「お姉ちゃん、駄女神どうするの?」

「そうね……こうしましよ!!」

拡張領域から出した神社にある様な締め縄を出して、頭を叩かれ気絶しているアテナとお尻を叩かれてお尻を真っ赤に腫らしたアルテミスをふん縛り捕獲して、アアリーさんがアリーナの隅の床に穴を開けていたらしくて、二人を開けた穴に蹴り落とすと拡張領域から出した岩で蓋をして締め縄で縛ったのだ。

「日本古来の封印方法だが、奴等には良い薬だろう。後、お婆様達が散らかした後の片付けも私達姉妹もやるとするよ」

私達とマドカ叔母さんの六人で宴席室を片付けてからマドカ叔母さんの特製ラーメンをお昼に食べたのだった。

そして、忘れていたが冷凍庫に投げ込まれた東先生は細胞レベルでオーバースペックなだけに、白く霜が付いただけだったが、酔が覚めたクロエさんとラウラさんにコツテリ絞られて素巻きのまま、二階のベランダから逆さ吊りで一晩中放置されたらしい。

## 夏休み 広州での出会いと青梗菜炒め

娘二人が学園に残る最中、私と一夏は中国へと渡っていた。無論、一夏が特級厨师を取る為だ。

だが、私が現役選手引退して出産後に半年間だけだが修行の場としていた広東省の広州にある国営の老舗の中華飯店『陽泉酒家』へと向かっていった。

店内は昔も今も変わらずに熱気と客に溢れ、料理人達が必死な剣幕で鍋を振る姿は修行時代を思い出す。

厨房へ入ると、長い髪をポニーテールに纏めた鮮やかな赤髪の女性が巨大な中華鍋を振る、歌舞伎役者の様な目付きの鋭い女性は複数、大きな鱈鱈の姿煮を難無く鍋を振る、いひっくり返していた。

「ハアアアア!!」

チャポン

「大皿寄せ!!」

「はい!!」

そう、彼女はここの陽泉酒家のオーナーであり、総料理長の周鈴（シュウリン）だった。彼女は偉大なる料理人の曾祖父の娘の孫娘であり、マドカが修行した四川飯店の劉鮮花（リュウセンファ）とは同じ一族でもあり、その偉大なる曾祖父の娘と同じ孫娘に当たるのである。

そして、今の二人はあたしと同一年の34歳で、20年前の特級厨师試験を突破して曾祖父と同じ14歳にして特級厨师を取った天才厨师だった。

あたしも特級点心師を取る時に指導を受けたが、歌舞伎役者さながらの鋭い目付きと貫禄ある料理の腕前から同一年だとは全く思えず、年上扱いしたら彼女に泣かれた記憶は懐かしい。

「あら、来たのね」

あたしに気付き、声を掛ける師匠。



これで、あたしと同一年だとは詐欺に思う程に若く見える。あたしも人の事は言えないが学園の制服を着れば高校生と誤魔化せる自信はある。

一応、台湾で拳法の師匠から流派東方不敗を収めた為に氣の流れを調節出来るから余り老けないだけだ。

「師匠、久しぶりです」

中国式の挨拶で広げだ左手に右手の拳を当てて頭を下げる。一夏も私に習い同じ様に頭を下げて挨拶する。

だが、師匠はお辞儀する一夏を見定める様に見つめていた。ただ、猫の眼の様にしながら見る時は大抵はロクなことを言わない。

「へえ、隣に居るのが鈴音の旦那さんなんだ。良い男じゃない!!」

「どう?あたしの自慢の旦那よ」

「そうなんだ(確かに良い男ね)……ペロリ……」

目を細めて、一夏にロククオンしているのが丸わかりだが、馬鹿は気付かない。そして、女豹の如く夫の背後に瞬時に近寄り首筋をペロリと舐めて肩を抑えていた。流石のあたしでも師匠の瞬歩(瞬時加速並みの移動速度)に舌を巻くが、彼女は料理人で在りながらも古代中国拳法の達人だったとすっかり忘れていた。

もし、あたしが学生時代に彼女がIS適正が在ったら間違いない、あたしでは無く彼女が代表候補生になっていだろう。そして、一夏とも再開出来ずに居ただろ。

「なっ、何よ?」

「少し、味見しても良い?」

良い男……ペロリ……」

「なっ!」

「うっへえ!」

「大丈夫、痛くしないし天井の染みを数えてる間に終わるからね?ねっ?」

人格破綻者とまでは言えないが、師匠は夫(曾祖父の友人で曾孫の烏骨鶏を飼育している年下の人と結婚している)が居るのに今の女尊男卑の世の中では稀に見る男好きなのだ。だが、あたしはメアリーと

セシリアとの結婚式の準備の一件で頭が痛いのに流石にコレは無い。

「そんな訳あるかあああ!!」

一夏はあたしとのトラウマを思い出しての魂の叫び。師匠の拘束を一瞬で振り解き、パックスステップで下がり構える。

「一夏!?!」

やはり昔、試合で寝泊まりするホテルで今日こそは抱いて貰おうと、必殺の裸エプロン（下着無着用）を素で流した一夏をぶん殴り、ベッドに押し倒して一夏の着ている服を全て脱がせて馬乗りになりながら腰を振り搾るだけ搾り取ったのがトラウマなのだが、それ以後は箍が外れた一夏にあたしは毎晩の様に気絶するまで抱かれるのだから自業自得だと言える。（メアリーとセシリアには結婚後は、あたしは抱かれる事は嫌ではないが暫く夜は一夏の生け贄に成って貰う積りだ。正直、三十歳過ぎると身体が持たないとは一夏には言えないし、もう一人欲しい…）

「じよ、冗談よ。そんな事したら鈴音だけじゃなくて鈴音の娘二人にブリュンヒルデに殺されるから遠慮するわよ……そんなに拒否しなくても……ゴニヨゴニヨ……」

拘束を振り解かれ、構えられた一夏に敵意は無いと手の平を振りアピールしながら冗談だと笑う師匠。

だが、あたしは…

「冗談で済むかアアア!?!」

「キャウン!?!」

師匠にゲンコツを入れて意識を刈り取ったのだ。

本気だと思ったが途中で止めただけに、師匠の娘で長女の尚香が中国の代表候補生として学園に居るだけに実情を聴いていて、学園最強姉妹と義姉さんが怖いのだろ。

もし、あたしなら迫り来る、アテナを纏う十夏に千秋のセカンドシフトしたアルテミスのルナモード、暮椿を纏う義姉さんだったら、娘二人はセシリアの時の様に黒椿の単一仕様『獅子奮迅』のハイパーモードからの必殺の45連撃を繰り出す『アッドリーアサルト』（勿論、BGMはGガンダムのキングオブハート）竜巻の様に巻き込

みながら繰り出せば瞬殺出来るが、義姉さんだと相性が悪くて五分の勝率しか無いから逃げ出すだろう。

(逆に、一夏ならセカンドアビリティー『修羅の刹那』の効果で超加速して100分の一秒の刹那の最中に単一仕様『零落白夜』で、あたしも含めて刹那の最中に斬られていて気付いたら負けていると思うと使われたら絶対に勝てない。

だけど、機体と身体に負担が凄まじくて使ったのは、あたしがまだ現役選手で例の事件で大会後に妊娠が発覚した時だった。

一夏が(事件後、試合後の昂ぶりからお互いに興奮してやりまくったら出来た)責任を取る形で出来ちゃった結婚となって結婚報告したら、選手なのに何故避妊しなかったのかと揉めてしまい出産(この時妊娠3ヶ月)を反対し下ろせと言いつ張る義姉さんと出産を賛成するキレた一夏との決闘による一度だけで、義姉さんが纏う暮桜改をセカンドアビリティー『修羅の刹那』を発動させ、刹那の最中に『零落白夜』で瞬殺したのだった)

師匠が復活したのは、お店のピークが過ぎてからで、あたし達が立つ調理台の前には何故か大量の青梗菜が箆に入り置かれていた。

「さて、旦那さんには腕を見たいから青梗菜炒めでも作って貰おうかな？」

鈴音にはお昼の賄いで饅頭をお願いね」

「上等…」

陽泉酒家の伝統で新人料理人の腕前をみる青梗菜炒め。ただの青梗菜炒めとだと思おうと痛い目に遭う。

広州の土壌は肥沃な大地だが、黄砂が風に乗る畑や店の井戸に降り注ぐ為にもどうしても泥臭くなるので湯通しの際に気を使わないといけない。

普通の湯通しでは泥臭さは消えないのだ。

そして、この料理人達は兎に角鼻が効き、微量の泥臭さは嗅ぎ分けるからだ。

そして、もう一品はあたしの得意分野の饅頭。

あたしと一夏は二手に別れて調理をする。

あたしが無論の饅頭。

一夏が青梗菜炒めだ。

饅頭は手慣れているからと手は抜くつもりは無い。

気温や湿度に合わせて塩や水の量、膨らませる為の饅頭の破片などやる工程は山程ある。

あたしはいつも何処でも饅頭の破片だけは持ち歩く。

饅頭の破片は大量のイースト菌を持ち、粉末にして饅頭の種に混ぜる事で饅頭の種を膨らませてくれる。だから、作る度に種から少し切り取り乾燥させて次に使う為にとっておくのだ。

種を練りあげて暗所に10分程寝かせてから蒸し上げる。

一夏は娘の十夏がやった、鶏油と向日葵油の併せ油を数滴入れて青梗菜を素早く湯通しする。そして、一口大に切り香味野菜で香りを立てた中華鍋に切った青梗菜を投入し炒める。塩胡椒で味を整えて完成。

「へえ、曾祖父と同じ手でクリアしたのね…」

師匠は青梗菜炒めを見ただけで一夏の料理を見破り、箸で一口食べると唸りながら料理人達が座るテーブルへと出したのだ。

師匠が料理人達が居るテーブルへと出した一夏の青梗菜炒めは箸の乱舞だった。

「これ、素朴だが美味しい!」

「泥臭さなんか、感じないぞ!」

「うん、これなら合格だね。私が自ら鍛えて上げるわ。」

明日から来なさい!!」

師匠から合格を貰い、明日から試験まで修行する事となったが、ホテルに戻りシャワーを浴びた鈴がスマホのメールを見ると絶叫していた。

「なっ!」

あの、馬鹿タレがああああ!!」

「どうした!」

「マドカからのメールで、義姉の馬鹿タレが結婚式用の酒を全部飲んだのよ!!」

木箱の中身のお酒は壊滅よ!!」

「なっ!?!」

「仕方ないから、一夏は予定通りに陽泉酒家で修行しなさい。

あたしは広州の市でお酒を買い集めるから一緒に行くのは無理だわ」

「でも、どうすんだ?」

鈴も俺のアシストとして試験会場に行くんだろ?

なら、試験が終わってからでも…」

「一夏、広州は中国に転校した後のあたしの庭よ。なら、広州の土地勘があるあたしが適任だし、治安が悪いから試験前にアンタに怪我されるのはゴメンよ」

「治安が悪いなら尚更、鈴だけを行かせる訳には!!」

「黙らっしやい!!」

良い、あたしを舐めるな一夏。

治安が悪いと言っても、人さらい位までよ?

それに、広州であたしと敵対する意味は周鈴に敵対する意味と同じだわ。

逆に襲って来たら、ぬっ殺すまでよ!!」

反対する一夏を押し切り、あたしが市へとお酒の買い出しをする事になるのだが、ひよんな事から一人の青年を拾う事になるのはまだ知らなかったし、日本に連れて帰るのだが、パパ大好き娘の十夏と千秋の初恋の相手になるとは予想して無かった。

翌日、久しぶりの二人だけの時間が原因でベッドの中で燃え上がりベッドが色々と酷い有様になっていたが、あたしが眠っていた隣には一夏はぐっすり眠っていた。

あたしは一夏の寝顔を堪能しながらベッドを出て買い出し行く前に、夫に抱かれたままの裸でシャワー室に入りびっしりかいた汗と身体中に浴びた一夏の体液を流す為にシャワーを浴び、着替えて市へ向かう。

広州の朝市。

今も昔も食を支えてきた広州の市は無いものは無い程に品揃えは豊かだった。

朝早くから買い出しに走り回る料理人や行き交う人々に活気良く売るおばさんなど、活気に溢れて沢山のお店には採りたての新鮮な野菜や果物に広東の港から揚がった取りたての新鮮な魚介類などとはとこ狭しと棚に並ぶ。

そして、賑やかな露店には内地から仕入れて来た大量のお酒や装飾品に加え、檻に入って生きたままで売られる鶏に豚や牛などの大量の食材。

形は違えども、あたしと一夏が仕入れで使う築地と似ていて活気に溢れていた。

「全く、変わってないわね」

一人、あたしは結婚式用の中国の地酒を吟味すべく歩き回るが種類も豊富で正直悩む。

「おっ、鈴ちゃんじゃないか!!」

「黄おじさん!」

「どうして!?!」

声を掛けてきた、黄おじさんはあたしが中国に戻り移り住んでからの実家である中華飯店雪華楼で最員にしていた魚介類専門と国外へのスピーディーな搬送が専門のお店のおじさんだ。

私と一夏のお店、中華料理店織斑でも上海蟹やナマコなどは黄おじさんから空輸しているし、あたしは中国での買い付けは中国での仲買の資格と引退時に日本政府から海外食品輸入許可証を貰ったから心置きなく中国で食材の買い付けが出来るから黄おじさんの所に食材を送れば空輸してくれる。

「いや、港で大量の上海蟹を仕入れた帰りさ。

ほれ、鈴ちゃんの義理の妹だったか?」

「そうそう、マドカちゃん。」

新装開店の準備中のマドカちゃんから上海蟹とナマコを頼まれた

から仕入れたんだ。

まあ、名義は鈴ちゃんだがな」

「全く、あたしが現地に来てるんだから任せれば良いのに…」  
マドカの仕事の速さには感謝してしまう。

「うんじゃあ、俺に何か注文か？」

「黄おじさんには、マドカがしてくれたから大丈夫よ。」

今回は結婚式用のお酒の買い出しよ」

「あれ？」

お酒は鈴ちゃんの旦那がしてくれたんじゃない？」

「馬鹿な義姉が飲み干したのよ…」

「そりゃあ、ぐ愁傷様だな。」

じゃあ、俺はコレを日本へ空輸する準備があるからまたな」

「判ったわ。買い付けた食材も送るから手配も頼むわ」

「あいよ」

黄おじさんと別れ更に市を練り歩く。

途中、乾貨を取り扱う店に入り鱈鱈に乾燥鮑や乾燥帆立などの乾物を仕入れて、これも全ておじさんに送り日本へ空輸する。

そして、市で見付けたお酒はマンゴーの甘さが引き立つマンゴー酒や馬鹿義姉に飲まれた白酒茅台酒を樽で買い付けて買い出しは終了だった。

「お腹が減ったわね…」

大量買い付けで、お昼近くになり陽泉酒家でお昼か実家の雪華楼で食べるか悩んだが、話を聞いたら娘達がいじけるだろうから屋台を選んだ。

市の屋台は格安で美味しいから、沢山の人々でごった返していたがあたしには広州での生活の経験から慣れていたし、店で一人飯はあたしの性分じゃない。

「おっ、胡椒餅（フージャオピン） 見つけ♪」

目の前の屋台では瓶の中に炭を入れて、瓶の内壁に貼り付けて焼く胡椒餅は点心師であるあたしでも眼を引く逸品だった。

「おじさん、焼きたて頂戴!!」

「おっ、鈴ちゃんじゃないか。

あいよ」

胡椒餅を一つ買い、他に美味しそうな屋台が他に無いか食べ歩きながら食べる。

「今度は…あつ、懐かしいじゃない!？」

おじさん、肉そば頂戴!!」

「あいよ!!」

転校してからママと屋台で良く食べた肉そばだ。

あたしが好むのは麺の上に大量牛肉と野菜を煮込んだスープ掛けたコツテリした肉そばが好きだったりする。

「へい、お待ちどうぞ」

「さて、早速食べるわよ!!」

出来立ての肉そばに涎が出そうになるが割り箸を割、麺と牛肉を一緒にしながらいき良い良く啜る。懐かしい味だけに食べる勢いは止まらない。

「んっ!？」

おいひい!!」

「鈴ちゃんに喜んでくれて何よりだ」

屋台のおじさんもニコニコしながらあたしが食べて行くのを見守る。

ドツン

「ポッフツ!？」

だが、スープを飲み干そうとした時に背中に衝撃が走り、スープが入った器ごと顔面に被る。

「鈴ちゃん、大丈夫かい!？」

「大丈夫よつて、財布が無い!？」

あたしの財布がああああ!？」

そう、財布をスラれたのだ。

財布は去年に一夏との結婚記念日に買って貰ったグッチの財布。中身には現金で日本円にして100万相当の中国元の他に娘の写真や仲買の許可証が入っていたりする。



だから取られると非常に不味い。

特に仲買の許可証だけは…

「鈴ちゃん、いま走って逃げる子供が犯人だよ!!」

屋台のおじさんが指差す先には走って逃げる男の子が居た。あたしは走り出して餓鬼を追う。

「コラアアアア!!」

待てや糞餓鬼いいいい!!」

「あつ、ヤベエ…バレた!?!」

あたしの財布を持ち走って逃げる子供に追いかけるあたし。

子供はお店にある品物を投げ付けながら逃げるが、あたしは空中で軽く回し蹴りでお店に蹴り入れて戻す。

まるで、カンフー映画の様なアクションで追いかけて、投げられた品物を戻す光景。

路上で観る人々はアクションを観て歓喜する。

だが、元とは言え世界チャンプであるあたしの身体能力以上に早く逃げる子供に苛つきを覚え始めるが、所詮は子供だった。

「捕まえたわよ!!」

「あつ!?!」

そう、体力切れで走れなくなり、あたしに捕まったのだ。財布を取り戻そうとした瞬間、あたし達の前に数人の男達が現れたのだ。

「おい、四郎?」

今日の稼ぎを払う前に捕まるとはな?」

「稼ぎを払わねえとテメエが大事に守る店を壊すぞ?」

「畜生!!」

あれは、おじいちゃんが残した店だ!!」

「だったら、その財布を稼ぎとしてよこしな!!」

あたしはカチンと来た。

「アンタ達、子供を食い物にして楽しい?」

「ああん?」

誰だよテメエ!!」

「あら、広州に居るのにあたしを知らない?」

もぐりかしらね?」

財布は子供からさつさと取り戻してポケットに戻し、男達を睨む。一人のチンピラがあたしの正体に気付く。

「あつ、アイツはやべえよ!!」

元IISのタツグトーナメントの覇者の織斑鈴音だ!!」

「何だと!？」

だが、女だから何が出来る!!

殺っちまえ!!」

「ハア〜やっぱり、こうなるのね…」

子供を脇に抱えて、数人の男達を回し蹴りと蹴りだけで瞬殺する。

無論、男達のアジトを聞き出して壊滅させてから、広州にいるMI6に頼み捕縛させて警察へと引き渡したのだ。

ホテルへ戻りながら四郎に聞くとおじいちゃんが残した料理店の孫らしくて、15歳までは一緒に暮らして居たが去年に亡くなり一人暮らしだったらしい。

そして、生活が苦しくて借金からスリをして返しながら暮らして居たらしい。だが、おじいちゃんから料理の手ほどきを受けていたらしい。

「ねえ、アンタ。

うちに来て修行して料理人に成らない?

無論、おじいちゃんが残したお店は手放す事になるけど?」

「行くよ。

鈴音さんには助けて貰った恩があるから」

「そう。

あたしが日本行きを手配するから、ここに行きなさい。この店はあるしと夫の店だから、義理の妹が新装開店の準備してるわ。マドカに従事して習いなさい。おじいちゃんと同じ麵点師だから学ぶのね」

「ありがとうございます!!」

あたしは四郎を拾い、マドカの弟子として黄おじさんに頼み日本へ送ったのだ。

まさか、娘二人が初恋して数年後に義理の息子となるとは未だ知らなかつた。

## 夏休み 巻紙先生の自宅訪問

夏休みに入り、千冬叔母さんが一足先に帰り結婚式用の酒を殆ど飲んでしまった。

結婚式用のお酒を全て飲まれた事にキレたマドカ叔母さんは、千冬叔母さんを地下アリーナに連行して折檻した後にメールでママに報告したら向こうで買ったのを送ると言っていた。

そして、連絡から2日もしないで料理店の前に止まる4トントラック2台から降ろされたのはママが広州で買い付けて空輸便で届けられた木箱の量に困惑していた。

「マドカ叔母さん、買い過ぎじゃない？」

「頼んだのって、定食用に頼んだ上海蟹とナマコだけなんだが？」

鈴姉さんが買い付けた物も送るって…」

運送会社の人から渡されたリストを確認しながら困惑するマドカ叔母さん、確かに上海蟹とナマコは入っているが乾燥鮑や乾燥帆立などの乾貨や食の本場である広州でしか手に入らない様な食材ばかり。

そして、結婚式用に買ったと思われる酒樽に入った高級酒や別の酒樽からは甘い香りがするマンゴー酒など樽だけでも軽く40樽はある。

本当、この匂いだけで酔いそうになる。

私達はISを展開しながら、各食材を保存する店内の倉庫や冷蔵庫へ搬入しながらも大量の食材の使い道について議論していた。こんな時、重い木箱を運ぶにはセカンドシフトして小型化したアテナは非常に便利だと私は思う。

「多分、結婚式で出す料理用の食材だろうね…」

「うん、中国式の結婚式ってかなり派手だったよね…」

私も中国での結婚式を見た事が無いが、二組のクラス代表で中国の代表候補生の周尚香さんから聞いた事があった。

中国の結婚式は兎に角派手で日本の結婚式の比じゃないんだよ。そして、パパとメアリーさんにセシリアさんとの結婚式は中国式と

イギリス聖公会式の両方でやるとママが言っていた。

当たり前だが、ママが第一夫人らしいから結婚式は仕切るらしい。結婚式は一応だが、メアリーさんとセシリアさんの二人からの強い要望で神の前にて一夏の夫として誓いをする為にイギリス聖公会（神の前に誓う事で、誓い合った新郎新婦はイギリス聖公会の名の元に離婚を絶対的に許されない。これが、イギリス聖公会の絶対的ルールがある。もし、離婚した女性は二度と結婚を許されない）の教皇を呼び執り行い横浜にある大聖堂で誓いを建てた後に、横浜市港南区にある中国の寺院に移動して中国式の結婚式を行い、披露宴会場はうちの中華料理店織斑の大宴会場にて大々的にやる事はマドカ叔母さんから聞いていた。

そして、木箱の中にはメアリーさんとセシリアさん用が披露宴で着る派手なチャイナドレスが入っていた事からもママの本気が伺えたのだった。

さて、片付けている木箱を運ぶ最中、店の入口に立つ男性は背中に中華鍋を背負いリュックを片手に入れて来たのだ。

「ここが中華料理店織斑か？」

「そうだけど？」

日本人に見える短髪に切り揃えて後ろ髪は三つ編みした黒髪に黒い瞳をした中国人の男性は、私のたゆんとした胸に視線を感じるから理由を見付けて殴りたい。

マドカ叔母さんが男性に気付き

「お前が四郎だな？」

「四郎です。貴女は…」

「私か？」

私は中華料理店織斑の麵料理担当の特級麵点師、織斑マドカだ。

お前の事は鈴姉さんから聞いているから安心しろ。

今日から住み込みで私が鍛えてやる」

住み込みだと、聞いていない私達姉妹は嫌な顔をしながら荷物を倉庫に運び込むが、私だけは二人の会話を聞いていた。

「じゃあ、鈴音さんが言っていたマドカさんなんですな。ご指導を

お願いします」

マドカ叔母さんから後で聞いたが、四郎君は私達姉妹と同じ日本人と中国人とのクウオーターで広州の料理店雪華楼で住んでいたらしい。そして、四郎君の曾祖父はママが行っている陽泉酒家の偉大なる料理人の弟子だったらしくて、独立後に焼き物屋の娘と結婚して始めたのが麵料理専門店の雪華楼だったらしい。

（なんか、ママとパパのお店の始まりの様で親近感が湧いてくるし、生意気だと思ったら礼儀正しくて……／＼……あれ？顔が熱い……）  
経験した事がない戸惑いに、私は走って地下アリーナへと逃げたのだった。

そう、一目惚れだと私は知らない。  
だって、大好きなパパに似ているんだもん……

同じ頃、学園では織斑千冬が自宅から病院へと緊急搬送され入院したと職員室では大騒ぎだった。特に学年主任だっただけに後任がない事や学年副主任である巻紙先生は特に頭が痛くなっていた。

只でさえ、臨海学校での襲撃で六人の一学年担当の教師が撃墜された時の負傷が原因で入院中であり、二学年や三学年の教師を応援に来て貰っていただけに余計に痛い。

そして、入院先の病院からの電話を受けた御手洗先生が対応して、副主任の巻紙先生に報告していた。

「たっ、大変ですう!!」

織斑先生が重傷で入院だそうです!!」

「御手洗先生、それはマジか?」

飲んでいたコーヒを吹き出して、御手洗先生を睨む巻紙先生。

「はい、織斑先生が2ヶ月ほど入院と……」

オレには信じられなかった。

あの、ブリュンヒルデが重傷で入院したと。

ただ、やった犯人がエムだと聴いた時は流石に驚いたが、御手洗先生から理由を聞けば夏休み明けに行う一夏とポンコツ貴族に脳筋元

女王との結婚式用の酒を飲んだのが原因だったのは自業自得過ぎて笑える。

だから、慌てて千冬が帰った理由が納得出来る。

「二組の担任はどうすんだ？」

副担任を代理で昇格させてやらせるか？」

「それなんですけど、東先生までも一緒に飲んでいたみたいで娘さんのクロエさんとラウラさんに折檻されながら叱られたらしくて、姉妹でドイツでもお置きするからと連れて帰られてしまつて代理を頼めないんですよ…」

「二人揃つてバカが!!」

仕方ねえ、三組の副担任のティナ先生を、一時的に一組の担任にするから御手洗先生は流石に産休から復帰したてだからな流石に頼めねえしな。

オレのサポートには束の助手の更識妹を急遽、副担任にして2学期を乗り切るしかねええな。

幸い、更識妹は教員免許があるしな」

「それでは、学園長に報告して来ます」

「全く、二人揃つて何してやがる。オレが学年副主任の柄じゃあねえんだぞ」

報告に向かった御手洗先生とは入れ替わりで雨宮先生が書類を抱えて職員室に入ってきた。

「仕方ないわよ、オータム。」

学年副主任は産休が無ければ、御手洗先生の予定だったじゃない。でも、産休で駄目になつてオータムが選ばれただけよ」

「ちつ、スクールだって、いつの間にか3年生の学年主任じゃあねえか」

「あら、意外。」

最初はベテラン教師のナターシャ先生が成るかど、私は思っていたけど?」

「ナターシャより、馬鹿共を抑える意味じゃあスクールが適任だろうが」

3年生の馬鹿共を抑えられるのは雨宮先生かナターシャ先生ぐら  
いだった。

それでも、元亡国機業の実行部隊の隊長だった雨宮先生の方が一対  
多数でも対応できる事から学園長から学年主任を任されたのもある  
が、司法取引により更識家にマド力を含む三人が監視の下引き取られ  
た経緯があるから元楯無の更識刀奈には文句を言えない。

(マド力は後に更識家から一夏によって引き取られたが、姉の千冬  
並みの高い技量から学園を卒業後に日本の国家代表に選ばれて個人  
戦を出るようになった)。

しかし、二連覇を果たした一夏が鈴音とタッグを組んでからは、一  
夏と鈴音と戦い競えるタッグトーナメントを選んだが同じ日本の国  
家代表(後の大会のタッグトーナメントの試合で当り、シスコンモー  
ドを発動した一夏と鈴音に完膚無きにぶっ飛ばされる)に『この、犯  
罪者が大会なんかに出るな!!』と言われてからは、同じ国家代表選手  
から仲間外れにされる様になり国内の代表選手とは誰とも組め無  
かった。

同じくして、タッグトーナメントに出ようとしていた元クラスメイ  
トで親友のイギリスの国家代表のセシリアとタッグを組み大会に出  
場してからは準優勝で、二人と決勝で毎回争う程だったらしい)

「それもそうね…」

オータムからの正論にガツクリと肩を落とすスコール。これが、学  
園での二人の光景。

お昼時となり食堂へ行こうと思うが、学園に残るのは自炊する生徒  
ばかりで食堂がお盆でコックが帰省中でやっていないと知らない二  
人はそのまま食堂に向かい、気付かないで食堂に着いた時には閉まっ  
ていた事を知ることになった。

「まつ、マジかよ…」

「あら、まあ…」

本人を前に言えば絶対に殺されるが、巻紙先生は家事が壊滅的に出  
来ない。逆に雨宮先生は辛うじて簡単な調理ができるが食材を買っ  
てないので冷蔵庫には無いのだ。



まあ、隣町のレゾナンスで買えばいいのだが、そのために行くような二人ではない。

だから、毎回の様に食べ損ねるのだが、二人はそこに気付かない。

「なあ、今日も食いつぱぐれかよ…」

「流石に無いわね…」

因みに、ナターシャ先生の料理の腕は普通だが、食堂が閉まるのを知り食材の買い込みをしてあるが、二人を食べさせると来週に食堂が開くまで足りなくなるので二人には秘密にしている。

「仕方ねえ…行くか？」

「そうね…」

仕方なく外出申請を書き受理されると、駐輪場からハーレーダビッドソンの2000ccのバイクを出して跨がると巻紙先生が運転し雨宮先生が後ろに跨り一路、マドカ達がいる中華料理店織斑へと向かった。

国道1号線を痛快に走る二人乗りのバイク。

向かうのは湘南市。

新装開店の準備中だが、マドカか十夏に頼めば何かを食べさせてくれるだろうと巻紙先生は思っていたし、同様に雨宮先生も思っていた。

なぜなら、千冬と同じく馬鹿な事をしないし、常に大切な生徒して可愛がっていたからだろう。

なにせ、巻紙先生にしたら十夏と千秋は可愛い生徒で更識から依頼された護衛対象で、雨宮先生にしたらマドカは亡国機業時代から母娘の様な付き合いだったからだろう。

「なあ、スコール？」

「以前より大きいわね、これは…」

常連客である二人が啞然と眺めるのは、駐車場と駐輪場を完備して新装開店の準備中である中華料理店織斑は更に大きくなって建てられていた。橙色の屋根の瓦が眼を引き、三層四階の建物には複数の朱色の柱が重厚な建物を支える純木造建築ながら古代中国の建築様式

で再建された豪華絢爛の中華料理店に場違いな感想を漏らす二人。

「これは、完全に一夏の趣味じゃねえな…」

「そうね…まるで中国の皇帝が住む様な宮廷ね…多分、奥さんの鈴音の趣味ね…一体、いくら掛かったのかしら？」

「オレに聞くなよスコール…」

正直、三百億円はくだらい建築費用で再建されたとは、家主である一夏と妻の鈴音しか知らない。

何せ、当初は四億円で済ます計画が妻が二人も増えて妻達の居室が増えたりボーデビッツヒ三姉妹の部屋の確保など、店に無かった大宴会場まで追加して再設計してから再建した結果である。

そして、似た者夫婦は再建後に自宅を観て叫ぶ。

『やり過ぎたり?!』

そして、アリーナを二周り程の広大な土地が在るのは、お店の地下にIS用のアリーナがあり激闘を繰り広げても壊れない安全性と災害時の市民の避難所兼シェルターとしても考慮した堅固な造りである事と同時に、二人が稼いだ優勝賞金で一帯の土地代と建築費用を払い、この店に並々ならぬ二人の熱意を注ぎ込まれて造られたのである。

そして、建物を破壊した日本政府が莫大な賠償を支払ったのも領けるのだ。(ただ、地下施設と地下アリーナは全くの無傷で避難したお客は全員無事。そして、湘南市の市民の緊急避難先に指定される事はある)

言わば、織斑夫妻が世界大会を多数優勝して得た優勝賞金から得た資産を見れば、織斑姉妹は中華料理店織斑の令嬢であり、お嬢様だと言えると二人は思う。

「はっ、入りましようか？」

ねっ、オータム？」

「そうだな…」

こんな建物で高級料理店ではなく大衆食堂を謳っているのだから詐欺も良いところだが、店内は大衆食堂らしくて過ごしやすい。

店に入るなりマドカを呼ぶ。

「エム、居るかあ!!」

叫ぶが反応が無い。

多分、地下アリーナで双子姉妹の訓練をしているのだろうか？

確か、千冬から臨海学校での無断出撃で謹慎の他に訓練が追加されていたと聞いていたが、学園のアリーナでは千冬が帰省してからは訓練をしていない。

なら、マドカ達が居るのは地下アリーナだろうと思った矢先、一人の男性が野菜の入った箆を抱えて厨房に来たのだ。

「すみません、新装開店の準備中で休業中なんですが？」

「ああん!？」

誰だテメエは？」

「ちよつと、巻紙先生!？」

「雨宮先生は黙ってる!!」

何時もなら通されるのに、あの野郎の態度が気に食わねえだけだ!!」

「エムなんて方はいませんか？」

更に食い付く四郎に青筋を更に浮かべる巻紙先生は肝心な事を失念していた。

男性はマドカの亡国機業時代のコードネームを知らない事を。

キレそうになる巻紙先生と休業中だからと帰らせようとする四郎。

最早、一触即発の状態だった。

だが、大人な対応するのが雨宮先生だった。

「悪いわねえ。エムじゃなくてマドカを呼んでくれるかな？」

「雨宮が来たと言えば判るからね」

「マドカ師匠ですか？」

師匠でしたら、地下アリーナですが…

生憎、地下アリーナへの行き方が…」

「そう、なら私達が判るから行くわ」

四郎から地下アリーナにマドカ達が居ると聞き、店の奥にある地下へ行くエレベーターに乗り込み、アリーナがある最下層のボタンを押して降りたのだった。

地下アリーナでは、マドカが黒騎士を展開してスターゲイザー Mk-IVをソードモードで二人の猛攻を軽くいなし、十夏がアテナを展開してネプチューヌを振り回しながら突きまくり、千秋が展開するアルテミスの3つのモードで漆黒のヘカーテを展開してデスサイスで斬り付ける光景。

「てえやアアア!!」

「そんな、チグハグな連携で私を倒せると思うな!!」

やはり、未だに姉妹は仲直りしていない様子で連携すらバラバラだった。普通なら千秋が後衛でアルテミスで矢を射りながら援護するのだが全く援護する気すら無い。

「全く、駄目ね。あの程度ではマドカに敵わないわ」

「全くだな。空自が三機でやる『スパイダーネット』は有名な捕まえ方だって事をオレ達の時代では当たり前だったから、模擬戦しながら十夏の身体に危険だって叩き込んだが、千秋は見てるだけで理解出来なかったからな。

それが、臨海学校での姉妹の悲劇だな」

「オータムにしては優しいのね」

「いやな、臨海学校と聞いて一夏の時の様に嫌な予感がしたから、二人には模擬戦で教えたただけだ。まさか、実際に空自がスパイダーネットを使うとは予想してねえよ」

「理解出来なかった千秋を姉が庇った。

言うだけなら、正に悲劇ね。

あんなに私がキレたのは久しぶりだったわね。

私が救援に間に合わなかった事に対してね」

「だが、フリーランスでタッグトーナメントを出るって二人から聞いたが、あれじゃあな…」

「全くね…」

まだ、学年別タッグトーナメントの時の方が強く感じるのスコールも意見は同じだった。

てんでバラバラもいい所だ。

全く、噛み合わない二人。

「全く、強情な所だけは一夏と鈴音に似やがって、見てらんねえよ」  
そんな時だった。

「てえやアアア!!」

「ちよつと、千秋!？」

「ぬっ!？」

丁度、十夏とマドカが槍とソードによる鏝迫り合いが起きた時に千秋が瞬時加速をしながら近付き十夏を巻き込みながらマドカに斬りつけたのだ。マドカは殺気で気付き千秋のデスサイズを瞬時加速して難無く躲したが、十夏は反応が遅れて千秋からの斬撃を躲せず、天使の様な翼型のウイングバインダーを斬り落とされてバランスが取れ無くなり切り揉みしながらアリーナの地面へと落下するが、両脚のスラスターを吹かして地面との激突だけは避けたのだが、斬られた十夏は千秋に対して怒っており険悪なムードが支配する。

そう、臨海学校以来の姉妹喧嘩の勃発だった。

一夏と鈴音の両親に叱られて鳴りを潜めていたが、未だに仲直りしていない二人には、松明を投げ入れた火薬庫と同じ様にいつ爆発するか判らない状態だとは思ってもいなかった。

「千秋、何すんのよ!!」

「チャンスだから斬りつけただけやだよ?」

「チャンス!？」

「フザなけんな!!」

私が前衛で千秋が後衛でしようが!!

味方まで巻き込むな!!

って、私まで斬る事ないでしょ!!」

「だったら殺る?」

「上等よ!!」

千秋のアルテミスがマルチタイプになったからって、図に乗るな!!

あんたのアルテミスをスクラップにしてやるわよ!!」

「殺れるものなら、やって見なさいよ!!」

「何だと!!」

「二人共、そこまでだ!!」

「この、前衛馬鹿!!」

「何だとお!!」

マドカが怒鳴り、二人を止めるが喧嘩が収まる気配はない。それどころか、止めに入るマドカを無視してまでも口喧嘩はさらに激化するが、殴り合いにだけはならない理性だけは残っていた。

「いい加減にしろよ?」

十夏に千秋、私の目の前で喧嘩とは良い度胸だ!!」

このままでは、青筋を浮かべてキレたエムが何を仕出かすかは長い付き合いだから予想出来る。

経験上から確実にキレたエムは、十夏と千秋は半殺しにするだろう。

それだけは、オレもだが一夏に鈴音は望んでいない。

なら、オレは教師として二人を止めるか?

止めるだけでは駄目だ。

なら、エムの替わりにオレがやるのが二人には、一番判るだろう。

だから、キレたマドカにアリーナの管制室から、オレが叫ぶ。

『エム、オレがやるから代われ!!』

「オータム!?!」

「げっ、巻紙先生!?!」

管制室からの叫びに反応して驚く三人。

マドカは未だに口論中の二人を放置して、渋々ピットに戻るがピットに居た私とスコールを見て驚く。

「オータム、何しに来た?」

「マドカ、飯を食いに来たが正解だ。だが、此処に来て二人を観ていたが、あれじゃあな。二人を軽くシメて来るわ」

「何だ?!?」

「エム、あれじゃ駄目じゃない?」

「エムじゃない!!」

「マ・ド・カだ!!」

「別に、昔の呼び方でも構わねえじゃねえか?」

なあ？

じゃあ、行くぜ!!

来い!! 『アラクネ』!!」

「オータム待て!!」

マドカの静止を聞かずにピットから飛び出す。

久しぶりに、二人には一夏と戦った以来の本気でやってやろう。

まあ、バレたら学園長にどやされるだろうが構わねえ。

本来なら、人を殺し過ぎたオレやスコールにマドカは死刑は確かだった。しかし一夏はオレ達を許し、更識姉は司法取引を持ち掛けて受けたオレ達は更識家の暗部として働き罪を抹消された。

そして、オレとスコールの新しい任務は学園での教師として生徒に、今まで培った操縦技師を教えたりした。

今度は一夏と鈴音の娘の護衛。

死ぬ筈だったのに助けられ、新たな道をくれた一夏と更識姉には頭が上がりねえ。

だから、仮に死ぬとしてもこの姉妹喧嘩だけは、辞めさせて仲直りだけはさせたい。

一夏への恩返しだから…

「オラア!!

いつまで、やり合ってたんだ!!」

「えっ!？」

「キャアアア!？」

「ち、千秋!？」

ピットのカタパルトからの射出の加速と二重加速であり得ない加速力で千秋のヘカートを体当たりして吹き飛ばすが、蜘蛛の糸を射出して十夏のアテナに巻きつける。

「今度は十夏だ!!」

「いつ、糸が斬れない!？」

「キャアアア!？」

巻き付けた蜘蛛の糸をハンマー投げの要領でぶん回して、千秋に向けてぶん投げる。体当たりされ、壁に激突した千秋に更にぶん投げら

れた十夏が衝突する。

「ピツギヤア!?!」

「弱いぞ!!」

まだ、学園祭で襲った一夏の方が強えぞ!!」

「うっぐう」

叫びながら、リボルバーを掛けて加速して絡み合う二人にブレードで滅多斬りにする。

「そんなんで、タツグに出るだあ？

タツグを舐めんじゃねぞ!!」

あああん、一夏と鈴音に挑みてえだ？

寝言は寝て言えや!!」

今度は千秋を蜘蛛の糸で巻きつけてぶん回す。

「オラア、オラア、オラア!!」

喧嘩して、二人揃って謝りてえのに意地を張り合ってる馬鹿姉妹がオレに勝てるわけねえだろうが!!」

叫び、千秋を地面に引き摺りながら三重加速し、加速力と千秋の重量を生かして蜘蛛の糸を巻き付けられてまともに動けない十夏にすれ違いざまに千秋をぶつける。

「ギャフン!?!」

最早、十夏のアテナも千秋のヘカーテも蜘蛛の糸で巻き付けられ身動きすら出来ない。それでも、第2世代のアラクネでは第6世代のアテナとヘカーテにはダメージがまともに入らないのはスコールだつて判っていた。

「オラア、立てよ!!」

「うっぐぐぐ…」

「痛たた…」

オレは、最も意地を張る十夏と千秋に挑発する。

「ああ、折角ようテメエ等に教えたのに千秋を助ける為に自分を犠牲にするなんざ馬鹿だよな!!」

で、今度は馬鹿な妹に逆ギレか？

ザマアねえや



千秋は千秋で姉に助けられたのに気付かねえし、ありがどうの一言もねえ愚妹か？」

ブツツリ…

「わっ、私の…」

「ああん？」

聞こえねえよ!!」

ブツツリ…

「私の妹を馬鹿にするなあああ!!」

「お姉ちゃんを馬鹿にするなあああ!!」

十夏が魔剣レヴァティンをコールして蜘蛛の糸を切り裂く。そして、千秋のも自分のを切り裂いた後に二人は連携しながらオレに襲いかかる。

「やれば、出来るじゃねえか!!」

瞬時加速とりボルバーを混ぜ合わせながら、瞬時に離脱する。

「千秋、あの時はごめんなさい!!」

だから、前衛しか出来ない私を援護して!!」

「私もごめんなさい!!」

だから、援護は任せて!!」

学年別タッグトーナメントの時の様に、アルテミスに戻して絶え間なく援護する千秋とフランクスの様に守り攻める十夏。

「ちっ、やりにくい!!」

「はああああ!!」

遂に、アラクネに矢が刺さりスラストを破壊される。

「しまっ!?!」

「単一仕様『イージスの盾』を発動!!」

「単一仕様『アルテミスの矢』を発動!!」

「やっ、やべえ!?!」

「喰らええええ!!」

盾に埋められたメデューサに睨まれ、硬直し拘束されるオレにアルテミスから必中の矢アラクネを直撃してシールドエネルギーをゼロにされたのだ。

まあ、二人が仲直りしたから、やられた事は気にしない。  
シャワーを浴びた後は、迷惑をかけたお礼に手料理とキンキンに冷  
えたビールをご馳走となったのだった。

## 夏休み 開幕 特級厨师試験!!

娘達の夏休みも中盤にはいり、広州の夏が本格的になって来た。もうすぐ、年に一度に南陵の古城にて開かれる特級厨师試験は中国全土から特級厨师を取るべく料理人達が集まる。

俺は鈴の師匠に中華の真髄とも言える様々な技術を試験前日まで徹底的に扱かれて、漸く広州の老舗である陽泉酒家に推薦されて妻の鈴を助手に南陵の古城へとやって来たのだ。

「一夏、来たわね…」

鈴は試験会場である城門を背に胸を張る。

その姿は、再会した学生時代のあの日のSHR前と重なり、懐かしく思うし鈴を愛しく思う。

「そうだな鈴、絶対に合格しような」

「当たり前じゃない!!」

この、あたしが居るのよ。

絶対に合格するわよ!!」

この時ほど鈴が頼もしくもあるし、やはりタッグパートナーであると思う。

そんな時だった。

俺よりも背が高く、チェーンで柄を固定した中華包丁を肩に掛けたモヒカン頭の筋肉隆々な男が絡む。

だが、奴の目先は俺の妻である鈴をやらしい眼で観ながらだった。

「何だ？」

そんな優男が出るのか？

テメエはさつさと帰れ!!

ぐつ、へへへ…

だが、そっちの女は良い女だからな、夜にタツプリ楽しむから置いて行きな!!」

ガラの悪い筋肉隆々の男が妻をエロい眼で見ながら、俺に挑発する。

鈴は俺の大事な女であり、最愛の妻だ。  
置いて行ける訳もないし、渡す気も無い。

「……」

「一夏!？」

「はあっ!!」

バツサリ

白椿の拡張領域から、第四回モンドグロツソを優勝した時に、優勝祝いで千冬姉から貰った一振りの日本刀である長曾根虎徹を出して居合抜きで奴のモヒカンだけ斬り、パサリと斬られた男の髪が宙に舞う。

「へっ?」

「悪いな。」

鈴は俺の妻であり、大事な女だ。

お前なんかにはやらん!!

今は、モヒカンだけだ。

だが、次は貴様の首を斬る……」

「ひっ、ひいいいい!!」

日本刀が急に出た事に驚くが、それよりもモヒカンだけを正確に頭皮ギリギリに斬り落とされ、次は首を斬ると言うと言いと男は悲鳴を上げながら逃げ出したのだった。

ただ、鈴は『大事な女』と聴き、顔を手で覆いイヤンイヤンしながら嬉しそうな顔をしているが顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

昔なら、鈴はツンデレを発動していただろうが、久しぶりに観る可愛い鈴を思わず抱き締めそうになるが、逆に旦那に護られたのが嬉しいのだろう、俺の胸に頭を埋めて抱き締められてしまった。

「一夏、ありがとう……」

でも、恥ずかしいじゃない……」

二人の周囲はピンク色空間を形成しているが、一部始終を観ていた料理人達はざわめく。

「すっげえ剣術の腕前だな……」

「なあ、あの二人ってまさか?」

「ああ、間違いなくI Sの世界大会のダクトーナメントの覇者の織斑夫妻だ」

「えっ!？」

「じゃあ、隣にいる女は元中国の国家代表候補生の鳳鈴音か!？」

中国のお偉いさんと喧嘩して、代表候補生を辞めたって噂だが?」

「それもそうだが、奴は候補生を辞めてから台湾に渡り台湾の拳法の達人、東方不敗の愛弟子らしいし、一年もしないで流派東方不敗を極めた天才だって?」

「えっ、俺が聞いたのは引退してから特級点心師を取って料理人になっただって聞いたぞ?」

「じゃあ、あの男は…」

「二代目ブリュンヒルデにして、日本の凄腕の中華の料理人織斑一夏か!？」

「なんか、騒いでいるな?」

「まあ、あたし達は色んな意味で有名だもんね…」

俺達夫妻を見ながら色々騒ぐ料理人達にげっそりしたのだ。

門を潜ると沢山の調理台が立ち並び、ステンレス製のステージには様々な新鮮な食材が大量に鎮座していた。

そして、自分達の試験番号の調理台に行くと、床や調理台には包丁の跡が目立つ。

「色んな人が挑戦したんだな…」

「そうね…」

調理台の傷に感傷を浮かべながら、今まで受けた人達の想いを痛感する。

拡張領域から自分の鍋や調理器具などを出して並べる。鈴も修理中の黒椿の予備機であり中国から夏休みを前に返還された甲龍の拡張領域からは調理器具を出して準備する。

準備が終わる頃には、城壁の最上部にある建物から黒い被り物のマントを着る女性が降りてくる。

そして、女性は叫ぶ。

『これより、特級厨师試験を始める!!』

とうとう、始まった特級厨师試験。  
周りの料理人達も叫ぶ。

『おおおお!!』

『静まれ!!』

「第一次試験のお題を発表する!!」

同じ服装の男性が、2つの垂れ幕を下げる。

「二夏、マドカを連れて来れば良かったわね…」

鈴が2つのお題を見て後悔する。確かに、このお題はキツイ。

そう、一つ目のお題は『麺』だった。

そして、もう一枚の垂れ幕が下がる。

「まっ、マジ…」

「やるしかない…」

2つのお題は『非麺』

「二夏、麺に非すと来ているわね…」

鈴が漢文で書かれた意味を俺に教える。

だが、頭の中にはレシピが想い浮かぶ。

これなら、一次試験は突破出来る筈だと思い鈴に指示を出す。

「鈴、海鮮麺を作る。だから、鈴は鯛を三枚下ろしにして身は叉焼に

アラや背骨は帆立と一緒に煮て出汁にしてくれ!!」

「二夏はどうすんのよ?」

「俺は、鯰から麺を作る」

「はあ!？」

鯰じゃあ、麺のコシが無いじゃない!!」

「大丈夫だ。」

対策なら練ってあるから任せろ」

と言いつつ、俺は鯰が入っている水槽から生きがいい鯰を数匹を部分展開した腕で良し悪しを見極めながら捕まえる。そして、もう一つの水槽からは烏賊を掬いあげて調理台へと戻る。鈴も大きさも鮮度も良い最良な鯛を数匹を持って来ていて、叉焼にする為の下処理をしていた。

「よし、やるか!!」

気合を入れ、素早く鯰を捌き下処理をして行く。

下処理が終えた鯰をすり鉢に入れて練り状になるまで摺り潰し、少量の塩と卵白を混ぜて更に練る。

擦り潰し、練った鯰を冷所に寝かし烏賊を処理する。

烏賊は出刃包丁で細さ0.4ミリに斬り添えて行き麺の芯を作り練った鯰で麺状にして行き麺を作る。その頃には鈴が作業していた叉焼や糸状に刻んだ葱にスープが完全していた。

「鈴、出来たか?」

「出来たわよ。で、一夏は?」

「麺は完成した。後は麺を茹でて盛り付けるだけだ」

「なら、さっさとやるわよ!!」

一次試験を突破した奴等が出始めたから、急がないと二次試験の席が無くなるわよ」

確かに、ちらほら合格者が出始めているのは判るが、慌ててミスるのは良くない。慎重に海鮮麺を仕上げる最中、試験官が叫ぶ。

「番号1245、不合格!!」

「何故だアアアア!!」

隣の上海の海老館（かいろうかん）の料理人、韓は不合格になっていた。確かに、『麺に非ず』は難しいが簡単至極の様に麺の形をイタリアンパスタの様にリボン型に伸ばしただけでは当然だろう。

「麺の形を変えただけだからだ!!」

よって、不合格!!」

「糞!!」

また、来年受けてやる!!」

韓は調理台を片付けると、荷物を纏めて帰るのだった。

そして、俺達の海鮮麺が出来上がり、試験官を呼ぶ。

「番号、1003。」

海鮮麺か…」

「はい、鯰から麺をつくり、鯛のあらや骨を出汁に仕上げました」

「なっ、鯰だと!？」

ふん、鯰麺などにコシがあるまい…」

試験官が麺を食べると驚愕した表情になる。

「何だと!？」

鯰麺なのにコシがあるだと!？」

試験官は麺一本を掬い上げて一口噛り断面を見る。

「なる程…麺の芯に硬い物が…これは何だ?」

「烏賊を芯にしました」

「烏賊だと!？」

なる程、だから麺にコシが在るのか…烏賊を寸分狂わない細さに切る刀工技術に麺を一本一本と丁寧に仕上げる技量は…合格である!!」

「鈴、やったぜ!!」

「当然じゃない!!」

二人でハイタッチをして一次試験を喜んだのだった。

そして、一次試験を二千人が受けて突破したのはたったの十人にも満たなかったのだ。

そして、このまま二次試験へとなる。

二次試験のお題は鶏料理だった。

しかし、ここでとある料理人が料理人同士での採点になるのだが料理を冒流する事をするとは、俺も鈴も知らなかったのだった。



## 夏休み 特級厨师試験 激怒する一夏

二次試験のお題は『鶏料理』で俺と鈴は頭を抱える。定食の定番である唐揚げに娘の千秋の好物の油淋鶏などメニューやレシピの数を上げればキリがないのは当然だろう。

しかし、鈴は師匠からの選別の他に陽泉酒家の料理人から貰った餞別を思い出す。

「二夏、次の鶏料理に烏骨鶏を使わない？」

「烏骨鶏？」

ああ、確か陽泉酒家の皆から貰った餞別に在ったな」

「そうよ」

「じゃあ、烏骨鶏と来たら、あれだな？」

「判ってるじゃない!!」

メニューが決まり、すぐに食材集めを始める。

集めるのは数種の香辛料や米に香味野菜などを調理台へと運んで調理を開始する。まず、烏骨鶏の首を跳ねて血抜きをして、お腹を斬り内臓を出して水洗いをして下処理をする。無論、内臓も下処理して香味野菜と煮込み、灰汁を取りながら付け合わせのスープにする。

「俺が烏骨鶏の下処理をするから、鈴は香味野菜と香辛料のブレンドを頼む!!」

「任せなさい!!」

鈴は大量の塩と卵白を混ぜて、塩釜の準備しながら香味野菜を刻み香辛料をすり鉢で潰し混ぜながら準備する。

下処理を終えた、烏骨鶏の腹の中に米や刻んだ香味野菜と香辛料を入れて腹を閉じ、卵白を混ぜた塩で卵型を形成しながら烏骨鶏を包む。鈴は既にオーブンに火を入れて暖め終わっていて後は焼くだけだった。

オーブンに入れば、後は二時間待つだけだ。

周りを見渡せば、一次試験を突破した料理人達が真剣な表情で調理

する。

そんな中、一人の女性に目が行く。

「鈴、彼女って、まさか?」

「元国家代表の楊香蓮ね。あたしと同期の代表候補生で、セシリアとは第四大会の三回戦で当たったのが彼女ね。セシリアにギリギリのところまで負けてからは引退してからは、あたしと同じく料理人になったって聞いたわね」

彼女は遼寧省の大連の料理人で薬膳料理専門の大連飯店のお抱え料理人の楊香蓮（ヤン・カレン）で、俺達と同じIS乗りで元中国の国家代表だった。

「あら、鳳、久しぶりね」

彼女も気付き、挨拶する。

彼女の料理はオーブンで焼いている最中だが、俺達と同じく焼き上がりを待っている状況だった。

「久しぶりじゃない。でも、今は結婚したから織斑よ」

「楊さん、久しぶりです」

「あら、二代目ブリュンヒルデ様もいたのね。まさか、二人が結婚するなんて全く思わなかったわ。そう言えば、永遠のライバルのセシリアとも結婚する噂を聞いたけど?」

「ええ、娘の夏休み明けにセシリアとメアリーとも結婚式を挙げますよ」

「で、あたしが第一夫人ね」

「結婚、良いわね：私なんか、薬膳の魔女って言われて大連の自分が勤めるお店では嫌われ者よ：女尊男卑のせいで出会いも無いもの：」

楊と嘆くが、専門とする料理は薬膳料理。

元国家代表で在りながら、鋭い観察眼での診察と漢方薬の処方技術は中国では五本指に入る。そして、意外でもあるが日本の薬剤師と医師の資格持ちでもある。

あたし的には欲しい人材でもある。あたしも漢方薬の処方技術と薬剤師の資格はあるが、流石に医師免許が無い。新たに開拓した漢方

薬の入手したルートで買い入れても、調理しながら近所から買いに来る人に処方するのは正直言えば大変である。

「香蓮、うちで働かない?」

「えっ? 試験中なのに、こんな話しは良いの?」

「別に大丈夫よ。湘南市にあるあたしと一夏のお店は中華料理店織斑。とある事件でお店を壊されたついでに、少し大きくしたのは良いけど料理人が不足しているのよ」

「あのお店って、鈴音のお店!」

中国じゃあ、本格的で大衆向けの中華料理店だって有名よ!?

じゃあ、一夏さんがオーナーなの?」

「そうだな。俺がオーナーで総料理長をしている」

「でも、広州の陽泉酒家の名前で出ているじゃない」

「日本では有名だけど、こつちじゃあ無名に近いのよ。だから、あたしが師匠に頼んで推薦を貰った訳よ」

「なるほどね…私、試験が終わったら働かせて貰うわね。セシリアともモンドグロツソ以来だから模擬戦したいわ」

「一夏」

「ああ、宜しく頼む。月、これ位で良いか?」

一夏は拡張領域から雇用形態を示した契約書を出して彼女に渡す。彼女が働く大連飯店での給料は日本円に換算して約15万円程度と安月給だが、あたしなら35万円から40万円を出しても雇いたい。

優秀な人材だし、何よりも娘の護衛としても雇いたいのだ。

二度と臨海学校の時の様な、あんな思いはしたくない。例え、親馬鹿とか過保護だと言われても傷付く娘を見たくないから。

「えっ!」

何なの?…月給38万円で週休2日って…社会福祉が完全完備で…住み込みが可ですって!」

そして、彼女は書類を目を通すうちに固まっていた。

一応、マドカよりは給料は少なめだが、娘二人やボーデビイツヒ三姉妹にセシリアやメアリーもウエイターとして働いたりする為、社会

保険や社会年金はこの際だから加入していた。

「それとは別だが、娘の学園の外で外出時の護衛とI S学園への送迎をしてくれたら、月給の他に15万円を上乗せするぞ?」

「是非!!」

香蓮はすぐ様にサインしてあたしに渡す。書類は一夏を渡し、拡張領域へとしまっていた。

『光陰矢の如し』

日本の諺の様に三人との会話も時間が経つのも早く、他の料理人達が調理が終わり始めて、私達も盛り付けへと作業に入る。

どうやら、調理人同士で採点らしく一夏は人数分を用意して行く。あたしも仕上がった付け合わせの黄金色に澄んだ薬膳の臍物スープを器に入れて、漆塗りの膳に乗せて、炊き上がった烏骨鶏の蒸し飯を一夏が乗せて、あたしが調理人達が座る席へ運んだのだった。

一人目の料理は上海の上海飯店の料理人の張の料理、カラフルに彩られた揚げ鶏の餡掛けだった。

「確かに美味しいが……鈴、一口食べてみる」

「一夏、貰うわ」

小皿によそられた、揚げ鶏。

食べると確かに美味しいけど、ピンと来ない。

正直、ボヤケた味付け。

一夏は既にチェックシートに10点満点中、5点と書き込む。

次はあたし達の料理。

反応はと言えば。

「飯とスープだけだど!」

ふざけているのか!!」

一人の料理人が叫ぶが、香蓮が

「あら、これは列挙とした鶏料理よ。食べて判らない? 烏骨鶏の濃厚な脂や旨味に香辛料の調和の取れた辛味がお米に染み込んでいる。そんな、贅沢な烏骨鶏特有の旨味だけをお米に染み込ませる。見事

ね」

「確かに美味しい。確かに烏骨鶏は調理が難しい。俺も見事だと思うし、3次試験を挑むだろう俺達に滋養を付けさせてくれる一膳だ。見事だと思う」

北京の北京飯店の料理人が絶賛する。

点数は判らないが、一人を除き絶賛の嵐だった。

次は香蓮。

香蓮の料理は合鴨の香草焼き。

唯の香草焼きじゃない。

「鈴が思っている通りだ。

数種の香草や香辛料を巧みに合わせて、鴨特有の臭みを消しているだけじゃない。それに加えて、漢方を織り混ぜて疲れを吹き飛ばすかのような滋養強壮、それで持って味を壊さない腕。見事だと思う」

「ありがとうね」

香蓮の点数は満点の10点。

あたしでも入れるだろう。

流石は薬膳の魔女だと言わせる腕前だった。

数名の採点が終わり、最後は河南省から来た女料理人の蘭花（ランファ）の鶏肉とピーマンの炒め物だった。

しかし、普通の炒め物にしか見えない。

他の料理人は

「「「美味しい!」」」」

と高評価だったが、一夏と香蓮は食わずに額に青筋を浮かべている。何故かと思いい夏の皿に手を出すか

「鈴、捕まりたく無かったら食べるな…」

「えっ、どう言う事よ!」

「良いから食うなよ?」

巫山戯た料理を作りやがって!!」

始めて見る一夏の怒り。

余りにも、あたしにしたら今の一夏が怖い。

それはまるで、宇宙での亡国機業との最終決戦でエクスカリバーで白式ごと撃ち抜かれ瀕死の一夏を千冬義姉さんが抱えて見せた時の様な底冷えする様な冷たい怒り。

香蓮も匂いで判り、皿を床に投げ捨てていて叫ぶ。

「なんて物を入れてるのよ!!」

「香蓮も判ったか?」

「あら、薬膳の魔女を舐めないでね」

「東さん特製の解毒薬だ。香蓮、一応飲んでけ」

「ありがとう。流石にこれは中毒と依存性が怖いもの」

「聞くぞテメエ、何でけしの実を使った?」

「えっ、ケシの実ですって!?!」

ケシの実、麻薬の阿片の材料ともなる植物。

中毒に成れば、依存性が最も高いと言われ中国でもそうだが日本でも麻薬取締法で禁止されている麻薬だ。

「あら、残念。中毒にさせて高得点取ろうとしたのにね」

「腐ってやがる。」

料理はな、楽しく美味しく皆で食べる物だろうがああ!!そんな、理由で貶すんじゃねえよ!!」

一夏の怒り。

魂からの叫びに、他の料理人達は唾然として皿を落とす。騒ぎを聞いた黒い被り物を着た女性も来て

「何を騒いでいる!!」

ほう、貴様は禁止薬物を使ったな。よって、失格とする!!」

「チッ!?!」

禁止薬物を使った蘭花を捕まえようと試験官が囲む。

「捕まる訳には行かないわね!!」

来なさい神龍」

失格を言い渡すが、蘭花はISを展開して試験官達が吹き飛ばす。

それは、かつて中国の研究所から盗まれた甲龍の正式な後継機で四世代型の神龍だった。

「亡国機業を復活させるまでは捕まる訳には行かないのよ!!」  
彼女が逃亡を図るが、一夏は完全にキレていた。

「来い、白椿!!」

一夏は白椿を展開して神龍を掴み、古城の外の荒野へと連れ出す。  
そして、千冬義姉さん以来使わなかった単一仕様『修羅の刹那』を  
使ったのだ。

「亡国だと!!」

巫山戯るな!!

また、不幸な人を作りたいのかよ!!

単一仕様『修羅の刹那』を発動!!」

「はっ、速過ぎてみっ、見えない!」

「うおおお!!」

単一仕様『零落白夜』発動!!」

「キヤアアア!」

刹那の最中のスピードに加速した白椿は神龍は斬り裂かれる。

そして、空から落ちて来るのは斬り裂かれた腕や脚のパーツが雨の  
様に降り注いだのだった。

彼女の神龍は大破して、解除された状態で落下するが、一夏によっ  
て抱えられて試験官によって呼ばれた警察に逮捕されたのだ。

二次試験はケシを気付かずに食べた5人を入れた6人が不合格と  
なり、一夏と香蓮を含めた4人が合格となったのだった。

## 夏休み 特級厨师試験 最終試験

二次試験も終わり、3次試験の会場である北京の紫禁城へと向かいながら、あたしは車中で一夏を問い詰めた。

何故、ケシの実を知っているのかと。

答えは単純だった。

「鈴、忘れてないか？」

ほら、俺達が現役時代の時はフリーランスだったから、行き先の国に訓練場所を借りる替わりに色んな任務をやらされただろ？」

「そう言えば、カナダのプロリーグの大会に呼ばれた時に訓練場を借りる代わりにやったわね…あたしが空港警備と案内で一夏は何故かは知らないけど、麻薬取締班の誰よりも鼻と舌が効くから空港の麻薬取締局に行かされていたわね…」

いくら、フリーランス（自由国籍）であっても国家代表の様な軍事的任務や空港警備など相互監視の観点からやらされる。

それが、亡国機業事件以後にIS委員会が定めた自由国籍の専用機持ちの規定だからだ。

「俺は麻薬取締りをやされた訳だ。で、ケシの実と大麻や拳銃の密輸が最も空港が多かったからな。匂いだけは嫌でも覚えてたんだよ」  
「私は漢方薬の処方で、禁止薬物だから匂いの特徴で判っただけよ？」

と一夏が運転し高速をひたすら走るランクルの後部座席から香蓮の声がしていた。

「で、なんであんたが乗っているのよ!!」

「だって、北京に向かう足が無いもん。それに、一夏さんに聞いたらオツケーだった？」

そう、香蓮も一夏に断り後部座席にいつの間にか乗っていたのだ。

「一夏!!」

あんたねえ!!」

「別に大丈夫だろ？」



「んな訳あるか!!」

あんたはそうやって、いつの間にか世界中を周っている時だって、散々国家代表とか候補生を手助けして恋する乙女化して墜ちているでしょうが!!

判りなさいよ、このフラグ一級建築士いや朴念神!!」

「ひっ、ひでえ!!」

「確かに、鈴の言う通りね♪」

「香蓮さんまで!?!」

「ねえ♪」

現役時代でもそうだったけど、いつの間にか香蓮の様に恋に墜ちている乙女が居るのだから油断出来ない。

流石に、アメリカの国家代表イーリス・コーリングが一夏に対して恋する乙女化した時は流石に焦った。あたしと一夏がアメリカで寝泊まりするホテルに酒瓶片手に学園の夏休みで帰省したナターシャと二人で『一夏、飲むぞ!!』と言いながら部屋に突入して、コニヤックをロックで飲まされあたしと一夏は酔いつぶれた。そして、あたしは『にやははは、暑いわね!!』と酔った勢いで服を全部を脱ぎ捨てて一夏に抱き付き、二人もチャンスと思ひ脱ぎ捨てて抱き付いて既成事実を作ろうとするが、あたしは『一夏とスルから邪魔よ!!』と叫び二人を蹴り飛ばして気絶させていた。それ以後、一夏から飲酒の禁止を言われたのが懐かしい。

まあ、あたしも香蓮やイーリス達を強くは言えないが中学生時代に落された乙女ではあるが…

なったら、成ったであたしの第一夫人は揺るぎないが香蓮については不安しかないのは気のせいだと思いたい。

そして、3次試験は世界にネット中継されながら紫禁城での満漢全席を制限時間内に手早く作り上げる事。それは、どれだけ過酷なのかは想像出来ないだろ。

だから、あれだけはお店で提供するとあの値段になるのだが、お店のメニュー表にあるが注文自体は完全予約制である。

話は逸れたが、南陵から北京までは距離にして約1200kmある。

高速鉄道なら数時間で北京なのだが、3次試験までは一週間ある為に車で移動中なのだ。

助手席に乗るあたしは南陵を出る時に水筒に淹れた、ブラックコーヒーを紙コップに入れて一夏に渡す。

「一夏、コーヒーよ」

「サンキュー、鈴」

「眠そうだったからね」

あたしはコテンと一夏の肩に頭を乗せて、二人(?)の時間を楽しむ。

「一夏、3次試験が受ければ特級厨师よ。頑張りなさいよね。あたしも、出来る事をサポートするから」

「なら、頑張らないとな」

「つて、ナチュラルにいちやつくな!!」

「独り身の私に対する嫌味か!!」

「いちやついて無いが(わよ)?」

「何処がよ!!」

「ん?」

二人から漂う天然のピンク色空間に煽られ砂糖を吐き掛ける香蓮が叫ぶ。しかし、二人にしたら唯の夫婦の会話でありいちやついていない。

某脳筋女王が自宅のリビングで新婚夫婦の様な甘ったるい空間に居る二人を観て名言を残している。

『娘の二人までもが砂糖を吐く空間』

と言いながらゲンナリしていたらしい。

同じく、某ポンコツ元貴族も空気に煽られてゲンナリしていたと言うまでもない。

そして、途中でホテルに泊まり2日後の午後に北京入りを果たしたのだった。

時を同じくして、織斑邸の地下アリーナでは…

プツン…

アーリイによって締め縄付き岩の下に封印された駄女神の二人に巻かれた締め縄が切れ掛かっていた事に誰も気付かないでいた。

「やつと、出られそうだな？」

「ええ、お姉様」

「十夏と千秋には仕返しをしないと？」

「お姉様、そんな事が在ろうかと時空神から面白い物を借りていましたわ」

「流石は、我が妹だ」

「フフフフ…」

こんな会話をしているとも知らない織斑姉妹は夏休みの宿題を済ませて、マドカと話していた。

「十夏、千秋は留守番だ。良いな？」

「えっ!？」

マドカ伯母さんだけ、北京に行くのは狡い!!」

「鈴姉さんから呼ばれたのだ。仕方ないだろ!!」

そう、マドカも鈴に呼ばれて弾と一緒に北京に行く事になった。しかし、十夏も千秋もだが文化祭とキャノンボールファストに向けて、生徒会への大量の書類が自宅に届けられていて処理しなければならなかった。

「くっ、書類が来なければ!!」

「お姉ちゃん、その前にママに叱られるよ?」

「むっぐっ!？」

姉妹は親の言付けを守り、自宅の自分の部屋で書類整理をしたのだった。

北京の紫禁城。

中国が清の時代に建てられた、皇帝の居城であり現在は世界遺産に登録されている。しかし、特級厨师試験は伝統に乗っ取り現在でも最終

試験である3次試験の会場とされていた。

「相変わらずにでかい城よね」

「だな」

織斑夫妻も紫禁城入りしており、残った受験者達が腕を振るうために集まっていた。

『これより、3次試験を始める!!』

試験官の掛け声により、料理人達が一齐に動き出す。

二人も決められた手順と打ち合わせ通りに動き、調理を開始する。

満漢全席は全部で108皿に上る料理。

仕込みに時間が掛かるものから、一夏は一齐に下処理を済ませて行く。

他の受験者達は最終試験だけに許可された人数以内なら大丈夫な為、応援に駆けつけた料理人達が手伝い料理を完成させて行く。

「流石にキツイわね…」

「流石にな…」

調理開始から30分で完成させた料理は約20皿。

しかし、他は応援もあり40皿近くを完成させている。

「諦めんじやないわよ!!」

一人の料理人があたし達の所に来る。

真紅の髪をした歌舞伎役者の様な鋭い目付きをした女性。

「しっ、師匠!」

そう、陽泉酒家の総料理長の周鈴だった。

そして、もう一人。

「あら、周も来たの?」

「劉、あんたもやるんでしょ?」

「当然」

マドカの師匠であり師匠とは従姉妹の四川飯店の総料理長の劉さんだった。

キイイイイイン

と空を切るような音に上を向けば、落ちて来るのは

「ギャアアアアア!」

ズドン

「「……」」

着地に失敗した弾と、もう一人。

「おおおおいいいいちやああああん!!」

黒騎士を解除して一夏に目掛けて落下して抱き付くのはマドカだった。

最後は

「私、試験を辞めるわ」

「「何だ?!」」

「新しいオーナーに行くわ。あんた達にイジメられながら働くよ  
り、鈴が居る店が楽しいもん」

3次試験を放棄し、俺達に加わるのは香蓮だった。

「織斑オーナー、改めて宜しくね♪」

虐められてきた大連飯店の料理人達を無視して、自身が持つ中華包  
丁を片手に俺達の料理の下処理を素早くこなしていく。

そして、蘇るかのように凄まじいスピードで仕上がる料理達。

周師匠が鱻鱻の姿煮を中華鍋を振るいひっくり返し、劉さんは片  
手に家鴨を持ちながらお玉で煮えたぎる油を掛けながら北京ダッグ  
をつくる。

気絶から復帰した弾は片っ端から野菜関連の炒め物を作り、マドカ  
は自分が得意とする麺料理を作り、鈴は点心を作り上げたのだ。

まるで、ドリームチームの様に息が合い満漢全席があつという間に  
出来上がる。

そして、試験結果は

『陽泉酒家の臨時調理人の織斑一夏、並びに特別枠として大連飯店  
の調理人の楊香蓮の二名を合格とする!!』

俺は特級厨师として合格したのだった。

そして、俺と香蓮は龍が画かれた特級厨师の紋章入りの調理服と中国政府からは証明書を買ったのだ。

しかし、試験後に香蓮が辞めた事に納得しない人物達が居た。

香蓮が大連で勤めていた大連飯店の連中だった。

「テメエ!!」

辞められると…」

「あたしのダチを虐めんな!!」

キレた鈴とにつこり笑顔の周師匠と同じくにつこり笑顔の劉師匠の同い年三人組により蹂躪される様に全員ぶっ飛ばされ、紫禁城の外壁にロープで縛られて逆さ吊りにされたのは言うまでもない。

## 時空旅行 駄女神再び

夏休みも残す所で一週間。

私と千秋はドイツから戻るレナス達三姉妹の部屋の片付けをしたり、中国から帰って来たパパとママに全力で甘えている最中だ。

「パパああ…!」

「ほら、十夏に千秋。ママが睨んでるぞ?」

「別に良いじゃん。ママは散々パパに甘えたの知っているんだよ?」

「なっ!?!」

十夏、何故知っているのよ!?!」

「ほら、ソファーに寝てる人」

「十夏に売られた!?!」

ソファーに寝転びながら週間ISストラトスを読んでいた香蓮は十夏に言われて焦っていた。

「香蓮!!」

娘に何を喋ってるのよ!!」

十夏の情報元の香蓮に駆け寄る鈴だが、香蓮は元中国の国家代表。ソファーから瞬時に立ち上がり、部屋へ逃げ込み籠城を決め込むが廊下で、イギリスから帰りそのまま入浴して来た風呂上がりのセシリア親子に遭遇する。

「あら、香蓮じゃありませんか?」

「げっ!?!」

「げつとは酷いじゃありませんこと?」

「セシリア!!」

あの阿呆を確保しなさい!!」

「鈴さんに何をやらかしたかは知りませんが、私も鈴さんには逆らえませぬのでね?」

「はくなくせく!!」

娘に鈴の中国でのホテルの出来事を話したのバレたから絶対に殺

される!!」

につこり笑うセシリアは背中から香蓮の腰を抱き上げ

「あら、そうでしたの？」

なら、鈴さんチャンスですわよ!!

それと、死んでこいですわ!!」

「セツ、セシリア!？」

「でかしたわよ!!」

あなたは娘にホテルでの、あたしと一夏の『R18』を喋ってんのよ!!」

「ゴツフツ!？」

鈴が飛び蹴りを香蓮を蹴り飛ばし、セシリアは一緒に蹴られた反動を利用してプロレスラー顔負けのジャーマンスープレックスを香蓮にかましていた。確かに、夜の惰情を娘に知られるのは恥ずかしいし、鈴を気絶するまで食うケダモノだと娘に思われたくないので香蓮に手を併せて拝む。

「今度、シロウに覗かれたらやろうかお姉ちゃん?」

「シロウより、駄女神かな?」

織斑邸に居る女性陣が狂暴かつ物騒になっているのは気のせいだと一夏は観ながらだが思っていた。

しかし、娘がシロウに?

「あら、一夏様?」

新しい女ですか?

それとも、愛人ですか?

まさか、嫁候補でしょうか?」

もう一人、セシリア親子と入り、風呂上がりの女性にして第三夫人予定のメアリーがにつこり笑って立っていた。だが、眼は全く笑っていない。

「メアリー?」

「はい、織斑様?」

「苗字呼び!？」

「メアリー、安心して大丈夫よ。」



香蓮は割り込む気は無いし、一夏には本気になったらへし折るからって言うてあるわ」

「夜が楽しめなくなるから、へし折っては駄目ですわよ？せめて、私とセツシーに子供が授かるまではね？」

「メアリー、大丈夫ですわよ。そうなる前に私達三人で囲ってしまえば万事解決ですわよ」

鈴とセシリアの助け舟に安堵する。

しかし、ジャーマンスーププレックスを食らった香蓮は床でぐったりしながら思う。

この家の真の主は鈴音だと。

しかし、中国で寝泊まりしたホテルでの二日間、ホテルの壁越しに響き聴こえて来る鈴音の嬌声に悶々とされたのは独り身の私には辛かった。

夫婦の営みと言われてしまえばそれまでだが、退職金すら貰えず文無しの私をホテルへ泊めて貰った以上は文句は言えない。

そして、鈴音の娘の十夏は学園の生徒会長らしい。

学生時代、本来なら学園に行くのは私だった。鈴音はオーナーに逢いたい為に学園に行く事を選んだ。

私は軍に残り研鑽を重ねても、国家代表選定会議では学園の卒業後に鈴音が内定していた。しかし、鈴音はオーナーについて行く事を選び、代表候補生すら上層部と喧嘩して辞めてしまった。

そして、舞い込む様に私が国家代表になったのだ。

辞めなければ、鈴音が国家代表だったのに：

そして、私はモンドグロツソ第四回大会では三回戦ではイギリスの元国家代表の近衛騎士団団長となり引退したサラ・ウィルソンに代わり国家代表となったセシリアと戦った。

彼女の戦い方は、セシリアの専用機であるティターニアが妖精を従える女王の様にビットを巧みに従え、レーザーの嵐と偏向射撃で私を蹂躪した。

そして、専用機になる筈だった神龍を受領すること無く引退したのだ。そして、元から料理が得意だったのと漢方薬を取り扱う店が実家

だった私は母親に弟子入りして違う道を選び、薬膳料理を専門とする料理人として研鑽した。

鈴音も第五回のタッグトーナメントを最後に引退して夢だった中華料理店を開いた時には違う道で競える事に喜びを感じた。だが、私は母親の実家である大連飯店は虐めの温床で私の母親を知らない料理人から虐められたのだ。

母親から学んだ薬膳料理の素晴らしさを貶す様に…

ここで働く様になってからは充実していた。

私が処方する漢方薬の効き目に喜ぶ老人やダイエットをしたい女子高生には薬膳料理を勧めたりと忙しくもあり楽しいと思える。

最後に一夏さんと博士の尽力により、引退しなければ受領する筈だった神龍は、二次試験で亡国機業の残党から奪い返して中国へ返還されたが、博士が中国政府と交渉してくれて新たなコアと引き換えに私が神龍を受領したのだ。

だから、この子と一緒に戦いたいし、空を自由に飛びたい共思う。

無限の空へ…

翌日、私は漢方薬が届くまでは暇な為に鈴音の娘である十夏に模擬戦を申し込んだ。

「うん、香蓮さんやろう」

地下アリーナで展開される彼女の専用機は名前のアテナの様にギリシャの女神アテナを思わせる様な美しいISだった。

私は中国版ハルバードであり、三国志の英傑呂布の武器だった方天画戟を振り回しながら、瞬時加速しながら斬り付けようとするが学園の最強である生徒会長と思わせる様にシールドで受け流しながら、三叉槍で三連続の突きをカウンターの様にしてくる。

「くっ!？」

まさかのフアランクス!？」

「じゃあ、行くよ!!」

二重瞬時加速のスピードを生かしてシールドバツシユから体勢を

崩しに掛かられ、突きや払いに連続突きなどを流れる動作で攻めてくるが元中国の国家代表の私は簡単にはやられない。突きは払い返し、連続突きはスラストスターを軽く吹かして左右に動いて躲す。

そして、方天画戟を振り回しながら遠心力とパワーでシールドを叩き込み後退させる。

「香蓮さん、強い!!」

「じゃあ、本気で!!」

アテナの全身に至る所にある展開装甲がを展開し、更に加速する。そして、翼の様なウイングバインダーは巨大な光の翼を形成していたのだ。

まるで、女神の様に…

「光の翼…まさか、七世代!?!」

「残念、六世代機だよ」

「六世代!?!」

六世代だと聞き驚愕する。

六世代の特徴は小型化高性能機を示していた。四世代はマルチロールと展開装甲、五世代機は巨大化とビーム兵器の採用が特徴だった。そして、高出力と巨大化してきた機体を小型化して、さらなる高性能化を示すのが第六世代なのだ。

さらに、言えばナノマシンを利用した超高出力の光の翼とバイオセンサーシステムのオーバーロードにより全体に高熱を帯びるが展開装甲を排熱利用として展開し(その際、全身が黄金色に輝く)超ハイパワーとハイスピードを可能にしたスーパーモードは第七世代の特徴だったりする。

副産物として、唯一の七世代型の白椿と黒椿は質量のある残像が理論上可能となっているが燃費が悪くなったのは言うまでもない。

十夏は知らないが実はアテナはセカンドシフトした際に6・5世代型に世代間シフトしている。なので、光の翼の展開が可能となったのだ。

ハイパーセンサーでも、捕らえきれないスピードに加速するアテナはラピッドスイッチで片手直剣である魔剣レヴァティンを抜き、神龍

の方天画戟を細切れにする。

「くっ、はっ早い!？」

「これで!!」

超加速したアテナはシールドを前面に構えてシールドバツシュで私を吹き飛ばす。

そして、何故かアリーナの端にある岩に叩きつけられ岩と一緒に碎ける様に、私も気絶し神龍のシールドエネルギーもゼロになったのだ。

香蓮さんには勝ったけど、嫌な予感しかしないのは何故だと私は思う。

砕けた岩？

「あっ、ヤバイ…」

思い当たる節はあった。

それは…

『ふっ、ははははは!!』

やっつと、出られたぞ!!』

『そうですね!!』

十夏、千秋覚悟なさい!!』

綺麗だった髪はボサボサで締め縄で締めていたせいで古代ギリシャの純白ドレスはヨレヨレの姿だが、あの二人だった。

女神アテナと女神アルテミス

慌てて、妹の千秋がアルテミスを展開してアリーナに来る。

「お姉ちゃん!!」

そして、パパとママも管制室から飛び出し、パパが白椿を展開して、ママは直ったばかりの黒椿を展開して来たのだ。

「十夏、まさか彼女達が?」

「一夏、まさかよ」

「うん、パパ、ママ。」

アレがアテナとアルテミスだよ」

『十夏、我をアレとは酷いでは無いか?』

「駄女神、酷くないよ?

アテナもアルテミスもメアリーママとセシリアママの結婚式用の  
お酒飲んだでしょ?

だから、当然!!」

「お姉ちゃんの言う通り!!

パパとママが苦勞して集めた年代物のお酒だったんだよ!!」

「良い娘に育ったわね、一夏」

「そうだな、鈴」

『だが、我達を封印した報いは受けてもらう!!』

「「「なっ!?!」」」

アテナが胸の谷間から取り出した砂時計。

砂時計を逆さにすると、私達姉妹とパパとママの4人の下に魔法陣  
の様な模様が浮かび上がり吸い込まれたのだ。

「「「きやああああ!!」」」

そして、私達4人は意識を失ったのだ。

白い砂浜、奇麗な海。

目覚めたあたしの他には砂浜で娘達と一夏が気絶していた。

黒椿のモニターに映る日付は…

「嘘?」

20 ■■■年7月■■■ですって!?!」

決して忘れもしない。

大好きで大切な一夏が重傷を負った、あたしが学生時代に起きた銀  
の福音事件の当日の朝だった。

そして、あたしが力の無さを実感した事件なのだから…



時空旅行 銀の福音事件 前編

目が覚めると砂浜で、先に目覚めただる鈴が泣きながら錯乱していた。何時もなら気丈な鈴の面影は一切無く泣きじゃくる。まるで、迷子で母親と離れた幼子の様に…

「一夏…」

一夏が…

一夏がまた傷付くの？

嫌アアアア!?!」

白樫のモニター示す日付はやはり…

「鈴!」

「ふっ、ふえ?」

い…ち…か…な…の?」

「そうだ!!」

俺の心臓の音が聞こえるだろ?」

「うん…聞こえる…」

錯乱する鈴を優しく抱きしめる。

抱き締められ左胸に埋める鈴が、俺の心臓の音を聴き落ち着いている。少女と言ったら殺されるが、一人の少女の様に小さくなり安心した様に抱き締め返して甘える。

「大丈夫だ。」

俺が居る」

「うん…い…ち…か…」

やはり、鈴が錯乱した原因なのは銀の福音事件だった。過去に俺は鈴を庇い死に掛け、今回は十夏もだったから無理も無い。

そして、今日の日付があの日なのだから仕方ない。

そう、あの日…

一度は銀の福音を専用機持ち全員で撃墜するが、セカンドシフトした銀の福音には一切敵わず一度は壊滅的打撃を受けた。

その時に、俺は紅椿を纏う箒を銀の福音の凶弾から我が身を盾にし

て庇い、背中には大火傷とお腹を貫かれて一度撃墜された。

そして、俺は銀の福音から受けた攻撃により海に落下して意識不明の重傷を負いセシリアに抱えられ、シャルが護衛して搬送される形で旅館へ運ばれた。

旅館で目覚めた時には、鈴やラウラにセシリアやシャルに箒に簪が旅館から抜け出してセカンドシフトした銀の福音と戦っていた。そして、皆の危機にセカンドシフトした白式・刹那で皆の所に合流して銀の福音を再び撃墜した。

だが、ここで銀の福音は終わりナターシャを保護する筈だった。しかし、銀の福音はサードシフトしてしまったのだ。

銀の福音は自分を愛し大切にしてくれるナターシャが大好きで、大切な一人の女性いやパートナーを守る為に世代間シフトしてまでも：

手が付けられ無い程の圧倒的な戦闘能力を有したサードシフトした銀の福音は、回復能力がある最も厄介だと自己判断して箒の紅椿を狙い秒殺し撃墜するが箒は海に落ちて無事だった。

次に、低燃費で戦闘持続能力で厄介だと判断した鈴の甲龍を狙い、リミッターを切っただろう収束ビーム砲は鈴をロックオンしていた。もし、直撃すれば鈴が貫かれて死ぬ。

だから、俺は再び庇った。  
この時には、鈴が好きだと気付き鈴も同じ気持ちだと判ってしまっ  
たから：

鈴を突き飛ばしたが、収束ビーム砲は絶対防御が貫通して俺の胸を貫いた。胸を貫かれ意識を無くしながら俺は大量出血して鈴の胸の中に落ちて抱えられた。

抱き締めながらも、俺から流れる大量の血でISスーツと甲龍が血で染まり、泣き叫ぶ鈴の姿を俺は意識が朦朧としたまま観ていた。  
今でも、あの日の泣きじやくり泣き叫ぶ鈴の姿を忘れられない。

この時に、庇われた鈴が力の無さを目の当たりにして、俺の隣を歩みながら強くなろうと決断したと鈴から聞いていた。そして、卒業と同じくして無理矢理ついて来た理由でもある。



この時に、俺も普通の人ではない事に気付いた瞬間でもあった。

貫かれた胸は俺の本来の回復能力（後に、千冬姉と束さんを問い詰めたす事になる。そして、娘二人が俺の遺伝子により人外化する理由だった。無論、鈴には全て話している）と白式の人体回復能力が傷口を瞬時に塞ぎ、白式も俺を失いたくない一心からコアが独自に進化してサードシフトしてしまった。

白式のサードシフトした名前は白式・織天。

白式も銀の福音のお互いのコアはパートナーを無くしたくない想いでサードシフトしながらも、世代間シフトまでも果たした五世代型同士の恐竜対決となったのだ。

結果的には銀の福音を撃墜し、ナターシャを保護するも白式・織天も銀の福音との激戦で中破する。

これが、銀の福音事件の真相と鈴のトラウマの原因だ。

因みに、ナターシャはこの事件で兵士として使い捨てにされていた為にアメリカでの戸籍が抹消されていた。そこで、俺と千冬姉の提案により学園の教師となったのも、この事件が原因だったりする。

そして、未だに胸の中で甘える鈴。

「エツへへ…い…ち…か…」

「んっ、んん!!」

わざとらしい咳払いにジト目で母親を睨む目覚めたばかりの娘が二人。

「目覚めたか？」

「うん、目覚めたよ。パパ」

「うん、だね。」

なんで、ママが子猫みたいに甘えているのかな？」

「あっ…十夏と千秋に…見られたアアア!？」

鈴がトラウマから復帰し、これみよがしに甘えていたが娘二人が目覚めた事に見られ絶叫するも遅かった。

「何時もの事だしね？」

「そうだね、お姉ちゃん…」

「何ですって…」

「ママ、そんな激甘の空間に居たら誰でも起きるよ？  
事実、千秋が砂糖を吐きかけていたしね」

「お姉ちゃん、口の中がザラザラしてまだ甘ったるいよ…」

コレをネタに娘から弄られる鈴。

何時もの光景だが、そんな時に白椿のレーダーに写る7つの反応。  
レーダーに映る友軍表示から示される機体は白式、紅椿、甲龍、シユ  
バルツア・レーゲン、ラファール・リヴアイブカスタム、ブルーティ  
アーズ、打鉄式式の7機だった。

「二夏、始まったわね…」

「ああ、不味いな…」

「うん？」

娘二人は銀の福音事件を資料でしか知らないから、首を傾げるのは  
仕方ない。

しかも、資料は事実を隠す為に銀の福音がセカンドシフトした段階  
で解決した事になっており、ナターシヤさんはアメリカ軍を退職する  
形で教師になった事だけしか資料にない。

謂わば、事実を隠す為に嘘で塗り固められた資料なのだ。

ナターシヤの身の安全と銀の福音を護る為に。

「なら、二夏を助けなきゃ!!」

再び、鈴が錯乱する。

「落ち着け!!」

「二夏が傷付くのを、あたしに観ろって言うのあんたは!!」

「だから、落ち着け!!」

「むっぐっ!？」

んっ…」

「わっおおお…パパ大胆…」

遂には、黒椿を展開しようとするが、俺が鈴を無理矢理抱き締め唇  
を奪う。そして、娘は咄嗟の出来事に顔を真っ赤にしながら手で覆う  
が指の隙間からまじまじと覗いていた。

「ぶっはあ…あんだ、娘の前で何してんよ!!」

二人の唇の間に唾のアーチを作りながら唇を離す。そして、顔を真っ赤に鈴は怒るが何時もの鈴に戻っていた。

「でも、落ち着いただろ?」

「まあね。」

十夏と千秋は見た事を忘れなさい!!」

「……」

まだ、親の濃厚なキスを前に免疫の無い娘二人は固まったままだった。

「一夏は暫くは手を出さない?」

「歴史改変となったら恐ろししな」

「パパ、私と千秋が行けば?」

「駄目だな。」

只でさえ、十夏と千秋は俺と鈴に似ているからな、勘の良い千冬姉だとバレル可能性が在るし、この時代の俺と鈴の関係が崩れかねない場合ある」

「一夏、平行世界の可能性は?」

「だからの様子見だ。」

一応、何時でも介入が出来る様に準備だけはして置いてくれ」

パパの締め括りに、ハイパーセンサーで監視する。

ママの言う通り、学園の一学年の専用機持ちがナターシャ先生の専用機銀の福音を撃墜していた。

「ちい!?!」

鈴、十夏、千秋行くぞ!!」

パパが舌打ちした時には、セカンドシフトした銀の福音がママやセシリアママにラウラさん、簪博士を纏めて一掃し、簪先生を狙う銀の福音と簪先生を庇おうとするパパだった。

パパとママは白椿と黒椿を展開して、展開装甲と光の翼を展開して加速する。

私も千秋もアテナとアルテミスを展開して、同じ様に展開装甲と光の翼を展開してパパ達を追ったのだ。

同じ頃、織斑邸では親子四人のI Sコアの反応が消えた事に慌てたのがドイツから戻った束だった。学園の車庫に走り乗り込むのは、自分の愛車である赤いトヨタ2000GTに乗り国道1号線を疾走する。

「いっくん、鈴ちゃん、十夏ちゃん、千秋ちゃん：」

眩きながら、クラッチを蹴り急カーブをセンターラインを割らないまま時速120km/hを維持して慣性ドリフトしながら曲がっていく。

「凄えドリフトだったな：」

「ああ：」

最早、レーサー顔負けの技術であり細胞レベルの人外は現在だった。

織斑邸に着き、店内と二階と三階の部屋を探すがマドカと脳筋に残念貴族を探すが居ない。居るのは、セシリアの娘のオーロラと厨房に居たシロウと新しい女性（香蓮）だったが女性からアリーナに向かったと聴き、地下アリーナへ向かう。

そして、束が見たのはアリーナの床には二丁のドラムマシンガンを持ったまま倒れて気絶したセシリアと二人の女性（アテナとアルテミス）とマドカと脳筋の二人が戦う光景だった。

「貴様!!」

お兄ちゃん達を何処にやった!!」

「二夏様達を返しなさい!!」

マドカはナイフで二人に斬りかかり、メアリーも同じく二人に大剣片手に斬りかかる。

そして、アリーナの空中の中心に浮かぶ砂浜時計。

二人の激闘はまだまだ続く。

セカンドシフトした銀の福音は余りにも強かった。

「箒、無事か!!」

「ああ、無事だ一夏!!」

白と紅のコントラストに銀色の戦う光景は砂浜に倒れている赤と黒と蒼に橙に緑の機体は鈴達だった。まだ、シールドエネルギーはあるが戦闘能力は既に無かった。

牙を折られた獣の様に

「La♪」

全身から放たれるビーム砲の弾幕に近づく事は勿論の事だが、ここまで濃密な弾幕は大切な女性を守るナイトだとハイパーセンサーから見る俺は思ってしまう。

「カウントダウンで零になったら、千秋は遠距離からの狙撃、十夏は俺と鈴が斬り込むからイージスの盾で銀の福音を拘束する良いな!!」

「了解!!」

「くっ!?!」

「近寄れない!?!」

「一夏!!」

単一仕様『絢爛舞踏』を発動!!」

「箒、助かる」

俺達二人でも勝てない状況と更に狂暴化する銀の福音。そんな時だった。

「セカンドアビリティ『アルテミスの矢』を発動!!」

アローレイン!!」

「えっ!?!」

銀の福音に多数刺さる矢。

「単一仕様『イージスの盾』を発動!!」

メデューサに睨まれて固まりなさい!!」

「へっ!?!」

針鼠化して逃げようとする銀の福音は真っ赤な鎧の様なISを纏う少女に拘束されていた。

「行くわよ!!」

単一仕様『獅子奮迅』を発動!!

これでも、食らいなさい!!

デッドリーアサルト!!」

「なっ!?!」

赤いISを纏い、鈴を大人にしたような女性が消えると銀の福音が上下左右に揺れながら装甲を撒き散らす。

そして、最後は俺が使う単一仕様と同じだった。

「単一仕様『零落白夜』を発動…」

唯一の閃だが、俺には全く見えなかった。

そして、謎の4人は俺達の前に現れた。

「無事だったか?」

「ちよつと、一夏狡いわよ!!」

「そうだそうだ!!」

金髪の女性は白いISを纏う男性にお姫様だつこで抱えられているが、三人の女性からジト目で睨まれて抗議していたのは気のせいだと思いたい。

だが、よく男性を見れば俺の顔に似た顔だったが、漂う雰囲気は千冬姉と同じだった。

そして、腕に抱き着く女性は鈴を大人にしたような女性だが、口調そのものは鈴だったと言える。

しかし、もう二人いた筈だが居ない。

「なあ、鈴。

アレは不味くないか?」

「そうね。

アレは流石に、あたしでもキレるかも…」

「えっ?」

下の砂浜を見れば、二人の女性が鈴音を抱き締めていた。

「ママの若い頃だ〜!!」

「本当だ!!」

かなり、可愛いだけど!?」

「うつつがアアア!!」

誰が、あんた達のママよ!!

デカイ胸であたしの顔を挟むなあアアア!!

デカイ胸は嫌味か?

あたしに対する嫌味よね?

頭を撫でるなあアア!!」

十夏と千秋が『ママだ!!』と叫びながら、若い頃の鈴音(若い方)を抱き締めて愛でている最中だった。急成長した二人の胸は千冬姉クラスまであり、二人の胸に挟まれた鈴音には少し拷問に近い。

そして、カオスは更に混迷を極める。

「鈴さんを抱き締めているのが娘ですって!?

一夏さん、ご説明を!!」

スナイパーライフルを構え、青筋を浮かべるセシリア。

「へえ…一夏にこんな可愛い娘が居たんだ…

しかも、鳳さんの娘なんだ…」

ヤンデレ顔のシャルロットはショットガンを構え、一夏と鈴音を狙う。

「シャル!?

違わうわよ!!

そうしたら、あたしは何歳で生んだのよ!!

それよりも、あたしはまだ処女よ!!」

顔を真っ赤にしながらか叫び、処女だとカミングアウトする鈴音。

「ほう、嫁には娘が居ると?」

浮気は良いが、娘が居たとなるとな?」

パンツアーカノーネを一夏に狙いを定めるラウラ。

「なあ、一夏の娘なのか!?

いつの間に鈴音と作ったんだ!?

白式の肩を揺らしながら問答を始める筈。  
娘が巻き起こしたカオスである。

そして、無邪気に今度はセシリアを抱き締める。

「あつ、セシリアママだ!!」

「若くて、お肌がスベスベだよ!!」

「ちよつと、辞めてくださいまし!」

私も処女ですのに!」

「なあ、止めた方が良いか?」

「そうね。」

十夏、千秋

辞めなさい!!」

「は〜い!!」

セシリアと鈴音はカミングアウトしたせいで顔を真っ赤にしていた。あたしでも恥ずかしい。

戻って来た二人に拳骨を鈴が落として騒ぎは沈静化する。

「ちゃんと二人に謝りなさい!!」

ゴツチン

「はっつう!」

((((アレ、絶対に食らったら頭が吹き飛ぶ…)))

若き一夏を含み、鈴の拳骨を観て同じ意見で合意していた。

「で、あんた達は誰よ?」

「あんた、少しは敬語を覚えなさい」

鈴がため息を吐き、若き鈴に忠告する。

「悪かったわ。あたしは鳳鈴音よ」

「あたしは織斑鈴音、隣に居る織斑一夏の妻よ。若き日のあたし」

「」「」「えっ?」

ええええええ!」「」「」

鈴が落とした爆弾に絶叫の嵐だった。

「じゃあ、隣りに居るのはまさか?」

シャルの質問に鈴は答える。

「あたしと一夏の娘で双子の十夏と千秋よ。」



で、十夏は学園の生徒会長よ」

「「「なっ、何だっつてえええ!?!」「」」」

既に鈴は若き日の俺達で未来を暴露しながら遊んでいた。

暴露され絶叫するのは当然だが、十夏と千秋は若き日の鈴とラウラが気に入り抱き締めながら愛でている。

若き日の俺は、砂浜の隅っここでラヴァーズに問答無用でズタボロにされ放置されていたの言うまでもない。

そして、一先ずエネルギー切れで展開出来ないシャルとラウラを抱えて旅館へと戻ったのだ。

時空旅行 銀の福音事件 後編

旅館に戻ると入口で仁王立ちする女性は千冬姉だった。しかし、俺達四人を観るなり警戒していた。

当然だと言えば当然である。

俺の実力は第四大会の時点では千冬姉を超えており、鈴も状況によつては千冬姉に勝つ場合があるのだ。

そして、十夏と千秋にも言えるが、現代の国家代表すら勝てる実力は千冬姉の4歳から始めたスパルタ教育で既に在るのだ。事実、元中国の国家代表の楊香蓮にはSEを六割残した状態で十夏は勝っているし、元生徒会長で元日本代表（現ロシア国家代表）の更識白百合にも勝利して生徒会長の座を奪っている。

それを見抜き、警戒は当然なのだ。

「旅館から抜け出した馬鹿共は後で説教だが、生徒達を護って頂きありがとうございます。しかし、一夏や鈴音にも見えるが、誰だ？」

「そうだな。」

俺は織斑一夏だな」

「で、あたしが一夏の妻の織斑鈴音よ」

「やはり、大人の一夏と鈴だったか。では、他の二人は娘か？」

「ああ、俺と鈴の娘だ。二人とも、自己紹介だ」

「娘の織斑十夏ね。IS学園の1年生だけど、生徒会長をしてる」

「同じく、織斑千秋。生徒会副会長をしてるよ」

「（（（えっ?! 1年生で生徒会長?! つまり、学園の生徒で最強!?!)))))」

「ほう、詳しくは旅館の中で事情聴取だな」

「千冬姉、じゃあ二人は…いっだあ!」

「エッへへへ…あたしが一夏と…」

「「「……………」」」」

やはり、ここでもお約束をする一夏。鈴を除くラヴァーズにはジト

目で睨まれるが、何故、俺が皆から理不尽を受けなければイケないと思っていた。

そして逆に鈴音は、両頬に手を当てながらイヤンイヤンして完全に恋する乙女化して一夏と結婚式を上げる妄想に浸っており、頭の中がお花畑化しているのは言うまでもない。

「馬鹿者、織斑先生だ。」

お前達も作戦室来い。

それと、鳳はいい加減に現実に戻れ!!」

「あつだあ!？」

あれ？

結婚式は?」

「「「……」」」

鈴音の駄々漏れの妄想に呆れて物が言えないラヴァーズを余所に、旅館の地下にある作戦室に案内されて専用機持ちが一同に介する。ナターシャの身体には大したダメージは無いが医務室にて検査を受けて寝かされている。

「おい、鈴!？」

胸が当たってる!？」

「当たてんのよ。」

悪い?」

「いや……」

「鈴さん、一夏さんから離れてくださいまし!!」

「そうだ、一夏から離れろ!!」

「フフフフ：後で一夏を監禁しないとかな?」

「鈴、嫁は私のだ!!」

離れろ!!」

「エツへへへ：いちか♡」

「鈴♡」

「「「何とかしないと……」」」

十夏は見えていたが、更に積極的になった若き日のあたしはラヴァーズから抜け駆けして一夏の腕に組み一緒に来たのをジト目で見てい

たらしく、後ろと前ではピンク色空間を作るダブル一夏とあたしにゲンナリしていた。

「お姉ちゃん…」

「千秋、言わないでよ…」

私でも、この空間から逃げたい…」

無論、ラヴァーズも抜け駆けした鈴音を引き離そうとするが、あたし達の介入で両想いになってしまった二人をどうにも出来ない事を頭では理解しようとしても心までは無理の様だった。

「さて、事情聴取をしたいが、いい加減離れろ!!」

「はい!」

「よし、そちらも済まないが?」

「織斑先生、バカ夫婦に言っても無駄なので」

「そうなのか?」

「万年おしどり夫婦だから無理です」

と娘二人からデイスられる始末のあたしと一夏。特に十夏は会長モード全開で報告を淡々と済ませる。

そんな時に束さんがやって来る。

「ちーちゃん!!」

「フツゴツ!」

「行き成り現れるな!!」

今では余り見なくなった、千冬義姉さんが束さんにアイアンクローをする光景。

「それよりも、なんで同じコアが有るのか気になって見に来たのだ。

何故かな?

いっくんの白式のコアナンバーの001。

束さんが嚴重に保管してあるコアナンバー004に、途中で製造段階のコアナンバー686とコアナンバー687があるのが不思議なのだ。

うくん…

そこにいる四人かな?」

「東、あの四人は未来から来た一夏と鈴音だ。残りの二人は娘だ」

「なんと!？」

「箒ちゃん、残念だったね」

「ガツキン」

「姉さん殴りますよ?」

「殴つてから言つたあ!？」

「いつの間にか出した木刀で東さんを殴る箒。」

「なあ、鈴?」

「何よ?」

「もの凄い、デジャヴを感じるのだが気のせいかな?」

「大丈夫よ。」

「あたしも同じ事を感じていたから」

「それよりもさ、観いていたけど君たちの I S は東さんが構想中の六世代型と七世代型だよね?」

「ううん、4機共七世代型かな」

「「「六世代と七世代!」「」」」

「東さんが落とした爆弾により騒然となる作戦室。」

「ええ、白椿と黒椿は確かにフォースシフトして七世代型ですよ」

「「「フォースシフト!」「」」」

「そりゃそうよ。一夏は二代目ブリュンヒルデだし、あたしと一夏はタッグトーナメントでは四連覇したからね。それに、世界中の大会を引退するまで出まくって、優勝して賞金を稼いだわね。一応、あたしは一夏に次いで強いわよ?」

「なるほど、経験値が貯まりに溜まってフォースシフトか…」

「ラヴァーズはいちやつく二人を見ながら思う。」

「そこまで強くなるのかと。」

「だが、忘れてはいけない。」

「おしどり夫婦の強さは血の滲む努力の結果だと。」

「作戦室での事情聴取は終わり、一先ず俺達は宛行われた部屋に泊まる事になった。」

「夕飯前、千冬姉が部屋に来る。」

「寛いでいる所で済まないな」

「千冬姉、大丈夫だ。」

で、俺達に何か用か？」

「ああ、悪いが一夏達と模擬戦をしてくれないか？」

それと、一夏は私より年上だから千冬さんで呼んでくれ」

「それは構わない。」

だが、やるのは十夏と千秋だけだ。

俺と鈴は引退しているし、白椿と黒椿は今回を除いて娘を護る時  
しか使わないと決めているんだ」

「判った。」

その様に手配する。

それとは別件だが、一夏と鈴音が料理人だと聞いてな、夕飯を頼め  
ないか？

旅館の料理人が怪我をしたらしく夕飯が出せないらしい」

「良いわよ。」

向こうだと、自宅兼お店が壊されて学園で食堂をやりながら一時住  
んでいたから」

「そうだな。」

やるか鈴？」

「当然」

千冬さんに厨房へ案内され、材料を確認しながらメニューを決めて  
いく。

「一夏、メニューはコレでどうかな？」

「そうだな。」

夏だし、海鮮をテーマにするか？」

「そうね。」

テーマが海鮮なら新鮮な真鯛があるわね」

「じゃあ、タレは胡麻のピリ辛ダレにして、真鯛の氷山盛りは確定だ  
な。あとは、揚げ物には師匠から教わった真鯛の春巻きに、人数分あ  
る伊勢海老は昇竜餃子、お吸い物は真鯛のアラで出汁を取って、エビ  
のすり身団子と三つ葉だな。後は白米か？」

「膳ならそんなもんね」

「始めるか？」

「点心はあたしがやるわ」

「了解」

メニューも決まり取り掛かる。

まずは、春巻きとお吸い物の準備だ。

真鯛を刺し身用と加熱用に素早く切り分けて三枚降ろしにして大量の身のついた背骨は寸胴へ投入して行く。

寸胴に投入した真鯛の身付きの背骨は酒と塩のみで味付けして、エビ団子のエビの香りを際出せるために乾燥椎茸の戻し汁と合わせながら調整する。

戻した椎茸はスライスして春巻きの具材へ。

真鯛の春巻きと昇竜餃子は鈴が作る。

次は真鯛の冰山盛りだ。

生徒と教員併せて約250名。

先に胡麻ダレを作り、刺し身を切り分けてから冷凍庫から氷の塊を大量に出して、拡張領域から氷の彫刻用の道具を一式出して真鯛の刺し身盛る為の冰山を掘る。

「これが、手間が掛かるよな…」

鈴も真鯛の春巻きの下処理しながら昇竜餃子の皮を作り、大量の蒸籠を準備する。そして、駅弁ではお馴染みの紐を引くと弁当が熱く温まり大量の水蒸気がでる箱を下に敷き準備する。

「全くね」

愚痴りながらも全ての料理が完成し仲居達が大広間へと運ぶ。

大広間では若き日の俺達が集まる。

「ねえねえ、聞いた。」

今日の夕飯は臨時の料理人が作ったらしいよ」

「えっ？」

「それって、大丈夫なの？」

騒ぎ出す生徒はどうせ臨時料理人だから大した事は無いだろうと騒ぐ。

大広間の片隅で座る織斑姉妹はその話を聞いて不機嫌になるが、料理自体は楽しみで仕方がない。

何故なら、父親であり日本人初の特級厨师が作る料理だから。

仲居達が大広間に膳を運び込む。

料理を見た生徒は騒ぎ出す。

「旅館なのに中華!？」

「有り得ない!!」

若き日の鈴は思う。

「えっ…こんな料理、特級以上の料理人じゃないと作れない料理ばかり…」

だが、中居が料理を説明しながら、紐が引かれ料理を蒸していく。そして、食べ始めた生徒は驚くばかりだった。

「凄い!？」

餃子が背って行く!？」

「美味すぎるんだけど!？」

そんな中でも、教員達は絶賛の嵐だと言えた。

「真鯛の春巻き、まるで生きているようだ!？」

「真鯛の刺し身にこの胡麻ダレ。」

酒が有ったら進むぞ!？」

十夏と千秋も絶賛しながら料理を楽しんだのだ。

食べ終えた若き日の鈴は一人厨房へ向かっていた。

「何で、特級クラスの料理が…」

厨房には二人の夫婦が片付けをしていた。

そして、一夏と名乗った人物の調理服を観て納得出来たのだ。

何故なら

「えっ、特級厨师!？」

そう、一夏の着る調理服にある独特の龍の紋章は特級厨师しか着れ



ない服なのだから。そして、調理服の上着を脱ぎタンクトップ姿の大人の鈴に見つかり声を掛けられたのだ。

「あら、あんた来たのね？」

「いえ…」

タンクトップから判る、大人の鈴音の大きな胸の膨らみを直視してしまい、あたしは逃げる様に走り出したのだ。

「なんで、大人のあたしはあんなにデカイのよ!!」

虚しく、光る星は応えてくれない。

## 時空旅行 学園最強姉妹VSラヴァーズ

翌日、織斑先生から頼まれたのはまたもや朝食だった。どうやら、調理人の怪我が酷いらしくて出来ないらしい。

パパもママも朝早くから朝食の仕込みに厨房入りしていて、朝から中華だけで無く生徒からの意見を取り入れて和洋中のバイキング形式で作るらしい。

無論、料理の味はパパとママの二人なら問題ない。

だけど、今日の生徒達の訓練では私と千秋対パパ達の若い頃の人達と模擬戦をすることが決まっていた。

「お姉ちゃんなら誰を真っ先やる?」

「零落白夜がある厄介なパパ（若）とA I Cがあるラウラさんかな?」

「じゃあ、箒先生の紅椿は?」

「技術も甘いし、はつきり言って雑魚以下ね」

「本人には絶対言わない方が良いかもよ?」

絶対に泣くから…」

「大丈夫」

「?」

「私が泣く前に蹂躪するだけだからね♪」

「やっぱり、お姉ちゃんは前衛馬鹿だった…」

「何だとお!!」

頭を抱える千秋。

仕方ない。

お姉ちゃんの前衛馬鹿は父親と母親譲りなのだから、文句の言い様がない。千秋の弓矢の師匠は意外にも東さんやセシリアだったりする。

さて、話を置いとくが学生時代の一夏達はあの双子姉妹との模擬戦と織斑先生から聴き、葬儀の様に暗くなっていた。

事前情報で双子姉妹は国家代表クラスの實力者だと織斑先生が映

像から分析して、一夏（若）達に教えていた。

特にラウラはAIC技術のあるシバルツア・レーゲンでも織斑姉のアテナの単一仕様『イージスの盾』を諸に警戒していた。

「アレは、絶対に広範囲拘束だ…」

銀の福音戦で見せた単一仕様を自分なりに解析しても教官からの情報にしても、ギリシャ神話にあっさり辿りついた結論だと言えた。

「負けたら…十夏と千秋に愛でられる…絶対にな…」

そして、もう一人はセシリアだった。

「何ですの…千秋様の正確無慈悲な弓の腕前は…」

同じく、銀の福音戦で見た弓矢の雨は無慈悲にも全て銀の福音に突き刺さり刺さっている。

まるで、針鼠の様に…

ライフルのスナイプ技術なら負けなれないと思っていたが、対峙したら銃口に矢が刺さるのではと思ってしまう。

旅館の部屋では、厨房から大人の鈴の胸を覗いて逃げる瞬間、鈴（大）に瞬時加速の様な抜き足で廊下で捕まり耳に囁かれた鈴音（若）は部屋で八つ当たりしていた。

「確かに嬉しいけど、大人になってから貧乳は改善されるけど…

卒業して妊娠するまではずっと貧乳で、妊娠して出産してから大きくなるは酷いじゃない!!

うっがアアア!!」

「鈴ちゃん!?!」

しかし、驚き鈴の八つ当たりを止めに入るティナを尻目に鈴音は考えた。

悪魔（大人鈴）から一つだけ解決するわよと囁かれた最悪な方法だが、やったらやっただで恥ずかしさから死ねる自信はある。

しかし、成功すればライバルから出し抜けるだろう。

まさか、裸エプロン（下着無し）で誘惑して、流されたらぶん殴り一夏を性的な意味で食べる。

確かに、朴念神には一番だろう。

それに…

「一夏(若)は既にあたしの恋人なんだから、食べても良いんじゃないの?」

「いや、年齢的に駄目だからね!」

一夏と両想いになり、大人の鈴からの悪魔の囁きにより肉食系女子になった鈴音だけに、同室のテイナは二人を祝福しながらも内容を瞬時に理解して顔を真っ赤にして鈴音に突っ込む。

即ち、七年も早まる『夜の大魔神降臨事件』を構想していたのだった。

そんな三人をきて置き、厨房では織斑夫妻が和洋中の様々な料理を仕上げて行き、出来た料理から仲居が運んでバイキングを準備して行く。

「大部出来たな…」

「やっぱり、慣れね」

学園と試験での経験が物を言うのを実感出来る。

だが、鈴が鈴音(若)に肩入れ過ぎているのは見逃せない。

「なあ、鈴?」

「どうしたのよ、一夏?」

「なんか、鈴音に肩入れ過ぎてないか?」

「まあね。ある事に気付いたからよ」

「何だ?」

「気付いたってよりも、あたしの師匠の東方不敗が居ない世界なのよ。この世界は…」

たしか、台湾で師匠として従事したという武術の達人にして世界最強と言われる東方不敗は生身でISを軽々と倒せるらしい。

「まさか、鈴?」

「当たり前じゃない。」

まだ、現役時代の師匠と殴り合いたいじゃない?

だから、秘匿回線で師匠に連絡したら全く通じないし、夜中に抜け出して見に行ったら台湾の師匠の自宅は全く無かったし、人物自体が存在して無かったのよ」

「じゃあ、まさか?」

「全く違う、平行世界ね。」

だから、若き日のあたしと一夏を両想いにしたのよ。まあ、中華の師匠は居たからね」

俺は鈴の昔から高い行動力には呆れていたが、まさかの行動力に脱帽するしか無かった。

朝食を済ませ、砂浜には私と千秋に哀愁漂う7人の専用機持ちと七人に呆れる織斑先生と山田先生がいた。

「では、2対7での模擬戦を始める!!」

「織斑先生、少しよろしくて?」

「どうした、セシリア」

「私達が二人に対して過剰戦力では無いでしょうか?」

「大丈夫だ。貴様等の腕では、この姉妹にすぐ負ける」

「「「「「やっぱり!?!」「「「「「」」」」」」」」

「正直言えば、山田先生も加えたいくらいだ」

「「「「「セシリア、頼むから山田先生を!!」「「「「「」」」」」」」

「織斑先生、そんなにですか?」

山田先生が織斑先生に質問する。

「当然だろうな。世代間による専用機の力の差もだが、技量だけなら国家代表の上位ランカーに近いだろうな」

「えっ!?!」

「そこまでですか!?!」

「だから、胸を借りるつもりで挑め!!」

「「「「「やっぱり、挑むのね!?!」「「「「「」」」」」」」

始まった模擬戦。

「千秋、作戦通りに行くよ!!」

「うん、お姉ちゃん!!」

その前に、セシリアさんを…」

十夏は展開装甲と光の翼を展開して、二重加速で白式を捉える。

「何で、俺が最初に!?!」

「白式が厄介だから!!」

「はっ、早過ぎる!？」

一夏（若）は三叉槍のネプチューヌを構えた十夏に真っ先に狙われた。砂浜で見せた紅椿の瞬時加速の比ではない加速力はハイパーセンサーですら捉えきれない。

そして、千秋はアルテミスをヘカーテモードに切り替え、景色と同化しながら姿を消しラウラのシユバルツァ・レーゲンを斬り伏せる為にデスサイズを得物に近付く。

だが、ヘカーテに切り替わる瞬間を狙い、セシリアのブルーティアーズのスターライトで狙撃しようとするが

ドツガン

「きゃあ!？」

スターライトのレーザーを撃った瞬間に暴発し、砲身が爆発して使えなくなったのだ。

そう、開始と同じくして千秋がセシリアのスターライトの銃口に矢を放ち、セシリア本人は銃口に矢が刺さった事に気付かず射撃をしたので暴発したのだ。

「ラウラちゃん、貰ったよ!!」

「なっ、いつの間に!？」

「模擬戦が終わったら、着せ替え人形よ!!」

ラウラのシユバルツァ・レーゲンの真後ろに現れたヘカーテに驚愕している間に斬り伏せられ海に落下。

「着せ替え人形だけは、やだアアアア!？」

バツパン

ラウラは千秋に着せ替え人形となる事が決まった瞬間だった。

千秋はヘカーテから再び、アルテミスへモード変換して簪が纏う打鉄式とシャルロットが纏うラファール・リヴァイブカスタムを狙うべく、展開装甲と光の翼を展開して加速したのだ。

「何処だ!？」

「遅いよ!!」

「シールドクラッシュ!!」

「グツエ!?!」

「バイバイ、パパ!」

「ゲツホ…ゲツ!?!」

「グツアアア!?!」

同じくして、白式も十夏のアテナのシールドの先端で首元をシールドクラッシュユされ、怯んだスキにネプチューヌに連続突きを食らって海に落下したのだ。

「貴様!!」

「一夏を!!」

「あたしの一夏に何すんのよ!!」

「うっげえ、そこまでママと同じ!?!」

瞬間加速で突っ込んで来るのは、一夏を落とされてキレたママ(若)の甲龍と箒先生(若)の紅椿だった。

ネプチューヌを直ぐに量子変換して、自宅でインストールしてあった巨大な戦槌をラビットスイッチで変える。

「厄介な順から落としただけだよ?」

「可愛く言うなアアア!!」

首を傾げながら可愛く言ってママを煽る。更にキレて衝撃砲を放とうとするが、射線には紅椿が居て撃てない。

「箒、邪魔よ!!」

「何だと!?!」

「十夏をぶん殴るから邪魔って、言っているのよ!!」

「それには同感だが、邪魔はないだろう!!」

仲間割れをし始めた二人を無視して、紅椿に瞬間加速で瞬時に紅椿の真裏に近づき、戦槌を振りかぶり紅椿が甲龍に当たる様に振り抜いた。

「仲間割れする、暇は無いよ!!」

「グツアアア!?!」

なっ、後ろから卑怯な!!」

「ちよつと、箒!?!」

「あたしまで巻き込むなああ!!」

「早く離れろ!!」

「うっがアアア!!」

「あんたが離れなさいよ!!」

見事にママの甲龍を巻き込み落下するが、光の翼を全開に加速して、ラビットスイッチで戦槌から巨大で両刃のダブルマホークに変える。

「仲間割れはどれ程愚かか身を持って感じなさい!!」

「ギヤアアア!?!」

そのまま、言い合いながら絡み合う二人を追い抜くと二人纏めてダブルマホークを振り抜き、シールドエネルギーを奪い去ったのだ。ラビットスイッチしながら遊ぶ十夏を尻目に、千秋はシャルロットのラファール・リヴァイブカスタムと簪の打鉄式式とやり合っていたが、既に二人は矢を大量に射られて針鼠状態だった。

「うっげげ…あの姉妹、強過ぎでしょ…」

「マルチロックのミサイルでも、捉えきれないなんて…」

「じゃあ、止め行くよう!!」

「あつ、終わった…」

「お姉ちゃんより強い!?!」

弓を量子変換して仕舞い、腰にある剣を抜き三重瞬時加速ですれ違いざまに打鉄式式とラファール・リヴァイブカスタムのスラストーナニツトだけを斬り裂く。

二人は叫びながら海に落下。

「なんか、理不尽く!!」

「お姉ちゃん!!」

「イエエイ!!」

七人の専用機持ちは海に落下して、ハイタッチをする私達姉妹を悔しそうに見るのだった。

圧倒的な強さとしか言い様がない状況を作戦室から見ていたが、血が騒ぐのはいつ以来だろうか。

「織斑先生…」



「ここまではとはな…」

父親の一夏からは、娘二人は国家代表の上位ランカークラスだと聞いていたが実際に観て納得が行く。山田先生は馬鹿共を回収に作戦室から出て行き、入れ替わる様に一夏がやって来たのだ。

「どうだ、うちの馬鹿娘達は？」

「一夏か…あの歳であそこまでとは驚きだ」

「だろうな。だが、単一仕様は使わない様にキツク言っている。それでも、使わせたのは基本的な技術と応用だけだな」

「ほう、単一仕様は無しか…アツハハハハ!!」

それを聞いた連中は落ち込むだろうな」

流石に単一仕様無しは可哀相だが仕方ない。

「それに、使わせても構わなかったが馬鹿姉妹の単一仕様は自然その物を替えてしまうからな。十夏ならフィールドを火の海に変え、千秋は密林に替える。だから、禁止を言い渡しんだ」

「なるほどな。更識姉の水と同じか？」

「いや、全く次元が違い過ぎるよ。確かに、ナノマシンの応用だがな」

「そうか…見る事が出来なくて残念だな。だが、あのモニターに映るバカツプルはどうにか出来ないか？」

モニターに映るのは抱き合い、お互いの無事を確認しあう一夏と鈴音の二人のバカツプルと各々の得物を出して引き離そうとするラヴアーズ。

これを観ながら、俺は平常運転だと納得する。

「無理だな。それよりも、可愛い姪が早く見られるかもな？」

「なっ、いいいいいいかああ!!」

残姉化した千冬姉を無視して、昼ご飯の準備に厨房へと戻ったのだ。



## 時空旅行 臨海学校終結

模擬戦終了後は、大広間ではズタボロに負けて包帯やら湿布やらで怪我人姿で落ち込む七人とラウラを抱きしめて愛でながら、昼食を食べる双子姉妹の光景は異様な空気を醸し出していた。

「はい、あ〜ん」

「ひっ、一人で食べれる!!」

「は〜い、お口開いてあ〜ん」

「うむ…モグモグ…」

「マジ、レナス並みに可愛い…」

((((ラウラさんにあんな事が出来るなんて勇者だ!)))

双子姉妹に抱き締められながら、あ〜んされながら昼食を食べさせられ、見守る生徒達は双子姉妹を勇者だと思ってしまう。

しかし、ラウラの服装は浴衣姿では無く、クロエ謹製でありレナスの小さい頃の黒のゴスロリドレスに着せ替えられている事を生徒達は気付いているが、似合い過ぎて愕然としながらもサラリと流してくれている当たりはラウラへのせめてもの情けだったと言える。

そして、もう二人は模擬戦で負けて落ち込みながらも、二人だけの甘い空間を作り上げていた。

「二夏、はいあ〜ん」

「鈴、美味しいな。」

「じゃあ、鈴にもあ〜ん」

「もう／＼／一夏ったら…」

((((甘過ぎる…)))

二人で食べさせ合っている空気に、醤油やら塩やらの減りが早くて仲居は別の意味で忙しかった。

だが、もう一組を忘れてはいけない。

調理服を纏う二人の男女は厨房で食べていたが、甘過ぎる空間から耐え切れなかった仲居達から厨房を追い出されて娘の隣りで賄い飯を仲良く食べている。

「二夏、頬にご飯粒が付いてるわよ」  
チユ

「あつ、悪いな鈴」

(((もう、イヤ!!)))

そう、その男女二人とは十夏と千秋の両親であり織斑夫妻だった。夫妻の天然ないちやつき振りは、二人仲良く食べる若い二人よりも、新婚の夫婦のような濃厚でピンク色空間へと大広間全体を染め上げていた。

流石の娘である十夏と千秋ですら、ラウラを甘やかしながらも更に愛でる事で甘ったるい空間を誤魔化すが他の生徒からしたら迷惑この上ない。

「ブラックコーヒーを買いに行ってくる!!」

一人の生徒が我慢出来ずにととう砂糖を吐き、ピンク色空間に耐え切れずに自販機へ逃げ出すと

「私も行く!!」

「私も!!」

芋づる式の様に一斉に大広間から自販機へと逃げ出したのだった。

「「学園最強の実力の半分だなんて……」」

ただ、唯一逃げなかったのは織斑先生により双子姉妹が実力の半分も出していなかった事と単一仕様無しでズタボロに負けて、事実を知って落ち込む専用機持ち達だけと言って置こう。

場所は変わり、旅館の側の崖では

「ちーちゃん、この世界は楽しい?」

「まあまあだな」

「そう…ちーちゃん、バイバイ…グツエ!」

束は帰ろうと崖から落ちようとするが、千冬に慌てた様に首根っこを掴まれて行くことが出来ない。

「待て、束!!」

学園の地下にある暮桜の封印を解いて欲しい」

「へっ?」

ちーちゃん?」

「本気で闘いたい奴が出来た」

「もしかして、大人のいっくん?」

「ああ、私ですら無し得なかった二連覇をした一夏と本気でやりたい。我が儘だと言われても仕方ないがな」

「でもさ、世代間による性能の差はでかいよ、ちーちゃん?」

「そこは、束の領分だろ?」

「ちーちゃんから逃げられそうに無いし、仕方ないから束さんも学園に行くよ…」

束は暮桜の封印の解除と改修の為に学園へ行く事になるとは当初は全く思ってもなく、多分だが行けば必ず織斑親子に玩具に成るだろうと内心思いながら肩を落とすしか無かった。

IS学園の生徒会室では水色の跳ねた癖毛の女性が、織斑先生からの秘匿回線より送られた報告書では平行世界の生徒会長とその両親が学園に来るから頼むとしか無い内容に頭を抱えていた。

「虚ちゃん、向こうの世界の生徒会長って…」

「報告書では、2対7の模擬戦では無傷で勝ったとしか…」

「マジなの?」

「映像ありますが?」

「……………」

そんなの知りたくも無かったし見たくも無い。

化け物じみた向こうの生徒会長に喧嘩でも売れば唯では済まない。

だが、大人となった姿の一夏くんには興味がある。

何せ、二代目ブリュンヒルデにして二連覇を果たし、タッグトーナメントでは怒涛の四連覇を果たした猛者。

気になるし、悪戯を試してみようかとは思ってしまう。

だが、この時の彼女の思い付きは伴侶と娘の逆鱗に触れてしまうとは知らなかったのだ。

自宅で甘えるセシリアとメアリーなら新しい妻であり母親でもある為に娘の嫉妬の嵐は吹き荒れないが、箒やシャルが腕を組んだだけで台風のように娘が荒れる。

そして翌日、旅館では生徒達がバスに乗り込み学園へと帰る準備をしている最中だった。

「大人の方のイチカ・オリムラはいるかしら？」

一組のバスに乗り込んで来たのは、学園に一緒に帰り教師となる予定のナターシャ・ファイルスだった。

「俺だが？」

「貴方がイチカなのね。」

私とゴスペルを助けてくれてありがとう。

それと、私に新しい場所もね♪

私の王子さま♪」

「ムツグウ!？」

「「なっ!？」」

『キヤアアア!?!』

お礼を言おうと胸倉を掴み引き寄せると、一夏の唇を無理矢理奪ったのだ。

大人の濃厚なキスに黄色い悲鳴を上げる生徒達。

再び、一夏のフラグ一級建築によりナターシャが墜ちて、目の前で  
のキスと言う光景にこめかみに青筋を浮かべる伴侶はズカズカと車  
内を歩き、一夏の肩を掴んだのだ。

「一夏、アッチでちよつとO・H A・N A・S H Iでもするわよ？」

「待て!!」

「話せば判る!!」

「問答無用よ!!」

問答無用で一夏は鈴に首根っこを掴まれてバスから引きずり降ろされ、ズルズルと引き摺りながら旅館の側の林へと二人は姿を消したのだった。

「一夏、悪いことは言わないから鈴と付き合うのは考えたらどうだ

？」

「多分、大丈夫だろ？」

「何故、疑問系なんだ？」

「大丈夫だ……多分、浮気さえしなければ……」

「多分しか言っていないぞ一夏!?!」

夫婦のやり取りを見ていた箒は、将来的に鈴と一夏の仲を予想して心配だった。

逆に、一夏はヤキモチを妬いた鈴の怖さを知り、絶対に浮気をしないと誓うのだった。

そして、林から聴こえたのは鈴の折檻する音と一夏の断末魔だった。

『一夏の馬鹿ああああ!!』

我流奥義、デッドリーアサルト!!』

『待て、そんなの食らったら死ぬ!!』

『死ねって、言っているのよ!!』

『ギャアアアア!?!』

チユドオオオオン

((((あつ、これは死んだな……)))

しかし、二人がバスに戻ると一夏の頭にたんこぶが出来ているだけで、無事だった事には生徒達は驚愕するも双子姉妹だけはいつも通りだどため息を吐くだけだった。

「全く、一発以外は防ぐんじやないわよ……」

「いや、防がないと普通に死ぬから!?!」

林に向かった二人のやり取りを影から見ながら、一夏を折檻した鈴の拳の速さに全く見えなかったナターシャと織斑先生の二人は

「ナタル、アレ見えたか？」

「見えなかったわね。チフユ……」

「夫の一夏に私は挑もうと思うが？」

「親友として、棺桶と葬儀だけは準備しますね……」

「ありがとうと言いたいが」

ベッシン

「痛あ!？」

「多分、死ないだろ？」

「……」

「ナタル、無言はないだろ!？」

こんな二人のやり取りが合ったとか無かったとは知らないが、元世界ランカー一位の一夏と二位の鈴音の実力を垣間見た瞬間だったのは事実だろう。

学園に戻り、双子姉妹は寮部屋に入る事になり学生寮へと向かい、俺達夫婦は一時的に実技担当臨時教員と食堂で調理人として働く事となる。

織斑先生から職員寮の鍵を貰い部屋へと向かったが、ドアを開けると水色の癖毛のある少女は学園の生徒会長の更識楯無、本名は更識刀奈が裸エプロンもとい水色エプロンでいたのだ。

ガチャリ

「お帰りなさいませ〜ご主人様。

ご飯にします？」

それとも、お風呂？」

それとも、わ・た・し?。」

俺と鈴は慌ててドアを閉める。

「なあ、デジャヴなんだが?。」

「あたしに聞かれても困るわよ……」

学生時代に刀奈本人に一度やられているから慣れてはいたが流石に困る。

「一夏、次はあたしが開けるわ」

「ああ……」

鈴が扉を開けると

「お帰りなさいませ〜ご主人様。

私にします?。」



それとも、わたし？

それとも、わ・た・し？」

「二夏、廊下で待つてなさい。

この、痴女を再教育してくるわ」

「私は痴女じゃないわよ!？」

「黙らっしゃい!!」

バツタン

「……刀奈、死ぬなよ……」

刀奈を猫を首根っこを掴む様に部屋の中へ連行する鈴は勢い良く扉を閉めたのだが、中からは刀奈の悲鳴が響いたのだ。

『あんだねえ、裸エプロンはこうやるのよ!!』

『やっ、辞めて!?!』

水着取られたら、本当の裸エプロンになっちゃうから?』

『裸エプロンであたしの夫を誘惑するんでしょ?』

だったら、水着は邪魔よ!!』

『いやあああああ!!』

しばらくしてから静かになり、扉が開いた。

そして、刀奈が裸エプロンで立っていた。

「あなた、お帰りなさいませ。

ご飯にしますか？

それとも、お風呂にしますか？

それとも、あ・た・し？

……いやあああああ!!?

恥ずかしい!?

うわああああん、虚ちやあああん!!」

「痴女が出た!？」

「痴女じゃないもん!!」

顔を真っ赤して、やり切ると泣き叫びながら逃げ出し、室内には刀奈が履いていただろう水着の残骸と浴室にはたたまれた制服が置きっぱなしだったのだ。

裸エプロン姿で逃げた為か、見られた教師や生徒には痴女扱いされ

たの言うまでもない。

だが、その話を聞いた十夏は織斑先生から生徒会長の部屋番を聞き出して白い手袋を楯無の顔面に投げつけたのだ。

「なっ、何すのよ!!」

「なっ、決闘!?!」

「パパを裸エプロンで誘惑したの許さないから。」

明日の13時に第三アリーナで貴女と公開戦をやるから来なさいよ。逃げたら、妹と探しだすから…」

「えっ………」

自分で喧嘩を売らないようにとしていたのに、知らずも喧嘩を売ってしまった事に気付くが公開戦をやると聞いて、目先が暗くなったのだ。

こうして、キレた十夏と更識楯無（刀奈）との公開試合する話は瞬く間に学園内に広がったのだ。

## 時空旅行 学園最強VS学園最凶

翌日、一組のクラスでは二人の姉妹が編入を果たした。

「初めまして、私は織斑十夏。」

向こうの世界では生徒会長をしました。

特技は料理の他に様々な近接武器を扱う事です。

帰るまでですがよろしくね」

「次は私ね。」

私は織斑千秋です。

私は隣に居るのは先程紹介されたお姉ちゃんの双子の妹になります。

同じく、向こうの世界では生徒会副会長をしました。

特技は料理と可愛い物を愛でる事。

お姉ちゃんと同じく、元の世界に戻るまではよろしくね」

と自己紹介を済ませる。

クラスに居る専用機持ちの四人は一昨日の悪夢を再び思い出して顔を青くする。

特に一夏は開始してからたったの3秒で十夏に秒殺された事に恐怖していたし、髪の色は茶髪ではなくプラチナシルバーと違うが顔が鈴に似ている事に気付く。

しかし、クラスメイトが騒ぐのはお約束だった。

「「「「キヤアアアアア!?!」「」」」」

「双子よ双子!!」

「しかも、向こうの学園では最強よ!!」

「じゃあ、クラス代表にしたら?」

「「「「デザートのフリーパスは確定よ!!」「」」」」

「静かにしろ!!」

残念だが、織斑姉妹はクラス代表には出来ない。

いつ、元の世界に帰還できるか未定だからだ。

それに、今日の午後は授業は学園長により取り止めとなって、十夏と更識姉との公開試合となっている」

クラス代表に出来ない事に落ち込むクラスメイトだが、理由を聞くのと納得していた。職員会議より先にクラスに来ていた山田先生が午後の授業が無くなった理由だけ判らずに織斑先生に質問していた。

「えっ、確かに授業が無くなりましたが、そうだったのですか織斑先生？」

「山田先生、職員会議で急遽決まった」

「……公開試合!?!」

「千冬姉!! 織斑先生だ馬鹿者!!」 あだっ!?!」

「十夏、済まないが事情説明してやれ」

「わかりました」

十夏の説明の内容はこうだった。

昨日、臨海学校から帰り両親は職員寮に入る事になったが、時間外で寮から出られない時間に両親の部屋に更識さんが侵入して水着エプロン姿で居たらしい。

しかし、居るなら構わないが父親を誘惑した事を十夏が聴ききれたらしくて、決闘騒ぎになったらしい。

コレって、完全に更識さんが悪いと思うのは気のせいだろうか？

「なあ、シャルどう思う?」

「うーん、どう見ても会長が悪いよね」

「ラウラは…あつ、ゴメン」

裏を振り向けばラウラは千秋に捕まり、愛玩動物の様に愛でられる最中だった。

しかもタイミングが悪く、振り向いた視線は千秋がラウラの制服を脱がしてゴスロリドレス風に制服を改造しながら着せ替え人形の真最中で織斑先生にバレないようにへカーテの能力で景色との同化させてる辺りは念の入れようだった。

そう、最悪のタイミングとは着替え中のラウラの慎ましやかな双丘が丸見えで、ラウラはプルプルと身体を震えながらキツリと睨んでいたのだ。

「嫁よ、思い残す言葉は何だ?」

へカーテの能力で姿を消して貰っているラウラは、ナイフを抜いていたのだ。

「ごちそうさま?」

「ふん!!」

「へっブラ!」

「騒がしい!!」

「千冬姉、頭が割れる!!」

「織斑先生だ!!」

「馬鹿者!!」

「ギャアア!?」

一夏はラウラに蹴られて吹き飛ぶが、まだショートホームルーム中であり、一夏が吹き飛んだ先は運悪く、教壇方向だったため理不尽にも織斑先生により片手で頭をキャッチされてアイアンクローを食らい沈黙したのだった。

S H Rが終わり、織斑先生にアテナの仕様書と武器に関する書類を纏めて渡す。

アテナは織斑先生からの忠告から本来の六世代型の登録では無く、四世代型として登録したのだ。

しかし、念には念を入れて六世代型の性能を四世代型まで落とした弊害で、六世代型でのシステムの時しか使えない神槍ネプチューヌと神剣プラハに神楯イージスは使えない。

無論、魔剣レヴァティンもだ。

だけど、余り使っていないけど、アテナにはハードウエポントシステムがある。元々、アテナには槍と剣以外は武装が無いが、近接武器を格納できるパススロットにはかなり容量があり余裕がある。

そして、ハードウエポントシステムなら性能を落としても世代間を全く関係なく使えるのだ。

専用装備なら一組だけなら在る。

向こうの束さんを千冬叔母さんが食事に呼んだ時だった。

東さんをお酒を飲ませて酔わせた勢いで、私と千秋がハマっていたとある狩猟ゲームの装備一式をハードウエポンスステムの装備として造れないかと東さんと話した所、笑いながら製作して、東さん謹製のUSBメモリーに保存してあるのだ。

仕様書を読み、一組の装備システムに懐疑的になる織斑先生。

「なあ、織斑妹？」

この浪漫の塊の装備でやるのか？」

「織斑先生、四世代型まで性能を落としましたんですよ？」

システムの関係で武器が全て壊滅したんだから仕方ないですよね？」

「そうだが、向こうの束が作った装備だろ？」

「大丈夫ですよ。」

向こうの学園でも、アテナから換装して二、三回使って生徒会長に挑む馬鹿をその装備で蹂躪してましたから」

「なあ、まさかだと思うが、更識の関係者か？」

織斑先生の読みは大当たりである。

殆どの被害者は元生徒会長の更識白百合だった。

「まあ、向こうでの楯無先輩の娘ですね……」

「ああ……」

二人して納得しながら遠い目になり、織斑先生は餌食になるだろ更識楯無に呆れ、私は向こうの学園にいるだろ白百合先輩に呆れていたのだった。

私はアテナの整備を理由に1限目から授業には出ずに、整備室でアテナのシステムとして切られていたハードウエポンスystemを再び復旧して、システム変更を行いながら東さん仕込みの速さで打ち込みながらUSBメモリーに保存してある装備をインストールして行く。装備をインストールしたアテナをハンガーに展開したところ、赤い鎧から銀色の鎧へと変わり、左腕に在った楕円形のシールドは巨大なタワーシールドへ変わる。

「うん、上出来だね。」

次は…」

ハンガーに立て掛かける様に量子変換してある武器を取り出してシステムチェックと大量の特殊火薬入りの薬莖を武器に内装されたマガジンに装填する。

「あんたねえ、まさかそれでやんの?」

不意に声を掛けられ振り向くと、ハンガーの装備変換を終えたアテナを見ながら呆れ顔のママだった。

「うん、やるよ?」

「東さんも呆れた装備を造るわね…」

「まあ、東さんだし?」

「はあ…お昼置いて置くから食べなさい」

「ママ、ありがとう…」

ママの手作りのおにぎりを食べながら、最終チェックを済ませてアテナを待機状態の装飾された金の腕輪に替える。

整備室の影では、とある妹が見ていたのは気付いて居たが放置していた。

「やっぱり、六世代型だった。

ううん、四世代型まで落としても小型化したISと高性能で高度に組み上げられたシステム、最大の特徴のハードウエポンステムだけは誤魔化せない…

でも、凄いな…」

私はハンガーに立て掛けられた大砲付きランスいや、ガンランスに目を奪われる。

「あれは…ガンランスの近衛隊正式銃槍なの?」

モンハンネタなの?」

十夏さんのアテナの装備に首を傾げながら簪は整備室を後にした。

時間となり、第三アリーナの控え室から見る観客席は殆どの学年が集まり満員御礼でアテナの待機状態の金の腕輪を撫でながら思うの

は、レナスや友達がいる世界に帰りたい気持ちだった。

「いくよ、アテナ・シルバーソウル」

カタパルトに射出されてアリーナに出てバルルロールを空中に描き、更識楯無いや刀奈が纏うミステリアス・レディと対峙したのだ。

「覚悟は出来ましたか？」

刀奈先輩？」

「なっ!？」

何故、私の本名を!？」

更識楯無には正直、ムカついていた。

私だって、自宅ならあの時間はパパとママに抱き着いて甘えていた筈だった。

あの世界では、娘に楯無を譲り本名で学園長をしている。

だから、本名を知っているから本名で呼んでやった。

「さあ、何でしょうね？」

煽るだけ煽る。

「十夏ちゃん装備といい態度といい、私を舐めてるの?」

「それを言うなら、私に勝ってから言ってください?」

「ロシア国家代表、更識楯無を舐めるなあ!!」

刀奈先輩がキレた。

こう成れば、卸すのは楽だ。

キレた勢いで、ラストイーネイルを片手に瞬時加速で突っ込む刀奈。

「パパとママには秘密だったけど、あの世界では世界ランカー12位、織斑十夏を見くびらないで!!」

スタートのブザーと共に、ガンランスを構えタワーシールドを前面に出しながら、二重瞬時加速で加速して最初にシールドクラッシュをお見舞いする。

しかし、水に覆われた障壁でシールドクラッシュは止められる。

ガッツン

「ぐっ、アクアヴェールに包まれた私には攻撃は無駄よ!!」

「それで何?」



最初から止められるのは知っている。

散々、白百合先輩のミステリアスレディーの後継機で経験している。

だから、ガンランスの持ち手に力を込めて、連続突きから袈裟斬り、斬り上げなどで連続攻撃をする。

無論、ラストイーネイルで払われるのは折り込み済みだ。

「だから、攻撃なんて無駄よ!!」

「それで?」

「へっ?」

それ、飾りじゃないの!」

ガンランスを上から叩くようにミステリアスレディーに叩き付けて、ガンランス特有の龍撃砲の引金を引き、五発が装填された特殊火薬入りの薬莖を全て使いながら零距离で龍撃砲を放つ。

ドツゴツオオオオン

龍撃砲の凄まじい爆発。

「キャアアア!」

呆気にとられた刀奈先輩のミステリアスレディーを覆うアクアヴェールが爆発により全て弾き飛ばされ、爆風から吹き飛ばされるミステリアスレディーは装甲やらスラストユニットなどのパーツをばら撒きながら観客席を守る壁に叩き付けられるように吹き飛ばぶ。

無論、激突した場所にいた観客席の生徒は逃げる様に避難する。

しかし、追撃をしない私ではなく、三重瞬時加速しながら立つことすら困難にすべくタワーシールドとアリーナの壁挟む様にシールドクラッシュをお見舞いする。

「グッヘエ!」

私を立たせない気!」

「アクアクリスタルが邪魔ね…」

挟まれた衝撃でドサリと転落するミステリアスレディー。

刀奈校長を立たせてアクアクリスタルを使われるのが厄介だから、ガンランスの突きでアクアクリスタルを破壊しながら、ガンランスを振り回して龍撃砲の残弾を遠心力を利用して装填する高等テク

ニツクのクイックリロードで再装填しながら龍撃砲を食らわせて壁へとミステリアスレディーを壁へと再び叩き付ける。

「あつ、アクアクリスタルが!？」

「これでも、食らってなさい!!」

「また、零距离からの砲撃!？」

最早、立つことすら許さない蹂躞劇。

「悔しかったら、立ってみなさいよ!!」

「グツヘエ!？」

立てる訳が!？」

「ほら!!」

言い切る前に、ガンランスで突き、払い、カ一杯にガンランスを叩き付ける。

そして、再びガンランスの龍撃砲のフルバーストを食らわす。

再び、壁に吹き飛び叩き付けられて立ち上がるとしている間に、石突を地面に叩き龍撃砲の残弾を一気に全弾装填する。

そして、再びガンランスで連続突きを食らわせたり足元を払い転倒させる。

ミステリアスレディーは大破状態だが、刀奈自身は諦めていない。

「刀奈先輩、終わりにしましょ?」

「まだ、終わらない!!」

「いえ、終わりよ!!」

ガンランスで右足のスラストを突き刺したまま突き上げると、パワーボムの様にミステリアスレディーを床に叩き付けて全弾装填した龍撃砲をフルバーストしたのだった。

ドツゴツオオオオン

無慈悲な龍撃砲のフルバースト。

ミステリアスレディーは二転三転と転がりながら吹き飛び、アリーナの中央で止まるとミステリアスレディーは解除され刀奈は気絶したのだった。

アリーナの客席から見ていた、ダリルは一方的にやられた更識に同情しながらも試合映像を亡国のスコールに送り『ヤバイ奴が現れた』と報告したらしい。

試合終了後、目覚めた私はここが病室だと気付く。

「私、負けたんだ…」

「お嬢様!!」

虚ちゃんが慌てた様に病室へと入って来たのだ。

「あはは…負けちゃった…」

「相手が悪過ぎです。」

「ですが、お嬢様がご無事で…」

私に抱き着き、大泣きする虚ちゃんを抱き締めて私も泣いたのだ。

「ごめんね…ごめんね…うっううう…」

結局、私のミスティアスレディーの損傷は大破判定によりロシアで送られて修理となった。

だが、私が負けたのに生徒会長は継続となった。

「なんで、生徒会長やらないのよ!!」

と一年一組に怒鳴り込むと、十夏には

「どうせ、たんまり書類が溜まっているんでしょ!!」

こっちの世界まで、生徒会長はやりたく無いわよ!!」

「少しは…片付けて…」

「じゃあ、何で私の生徒会長の代まで未処理の書類が在るのよ!!」

特に、先輩のが殆どよ!!」

「少しは…」

二人の額と額を合わせてメンチの切り合いに、絶対零度の空間になる一組は生徒達が自分を抱き締めながら怯えたのだった。

## 時空旅行 兔を狩る者たち

私と楯無先輩との決闘から数日。

「十夏ちゃんお願いだから、副会長をお願い!!」

「だから、絶対にやらない!!」

「お姉ちゃん、道場で近接格闘訓練を理由に締めたら?」

「ちっ、千秋ちゃん!」

サラリと怖いこと言わないで!」

お姉さん、マジで死んじゃうから!」

「えっ?」

楯無先輩とは言つて無いよ?」

「「「じゃあ、誰だ!! (ですわ!!)」「」」

「さあ?」

「「「千秋(ちゃん)は千秋(ちゃん)で、尚更心臓に悪いわ!!」「」」  
専用機持ちのツツコミはさておき、この様に楯無先輩がしつこく生徒会勧誘をして来るのだ。

決闘の翌日には、サラリと『お願い!!生徒会長をやつて』と叫び一組に来たが『やらない』と言つたのだが、ヒートアップした二人は織斑先生が来るまで額と額を合わせてメンチの切り合いとなった。

そして、織斑先生が来ると同時に先生に承諾を貰い、道場に連行して再び第二次最強対最凶の決闘となったのだが、超重量級の近接武器で私の背丈よりも巨大な両刃の戦斧をコールして出して、『さあ、殺ろうか?』と言いながら軽く片腕だけで振つただけで先輩は『死にたくないから!』と叫び、ジャンピング土下座で謝つたのだった。

因みに、その後に先輩も私の武器に興味を持ち、軽いだらうと舐めて戦斧を持ってみたいと騒ぎ渡した瞬間に余りの重さに下敷きになりながら叫んだのだ。

「何て、重さなのよ!!」

可弱い、私に持てる訳が無いじゃない!!」

と叫び、戦斧の下敷きになったのだった。  
仕方ない。

戦斧は重量だけなら、軽く100kgを越える重量級の武器なのだ。更に重い戦槌、ゴルディオンハンマーもある。

まあ、使わないけど…

そう言えば、こっちでの束さんは真っ白な束さんへとビフォーアフターしていた。

理由は知っているけど、わかり易く言えばパパとママが肉体的言語で束さんを徹底的にシメた。

あの時のパパとママはハッキリ言っただけ怖い。

思い出しただけでも泣きたくなる程だった。

だって…

アリーナで、お姉ちゃんと楯無先輩との決闘する前日だった。

私のアテナと妹のアルテミスを学園への編入に伴い四世代型まで性能を落とす事を話し合う為に織斑先生を交えた家族会議で決まった夜の事だった。

家族会議で決まり、その日の内に織斑先生に許可を貰って、放課後に無人になる時間を利用して整備室で作業する筈だった。

しかし、作業中の無人の整備室に忍び込んだのが束さんだった。

「ねえねえ、君達はその専用機を解析させてくんないかな？」

それ、六世代型機だし、君達には不相応だよ」

向こうでの束さんからの誕生日プレゼントであり、束さんから可愛がられていると実感できるパートナーだ。

答なんて、決まっている。

「やだ、絶対に渡さない!!」

「うるさい、渡せ!!」

解析して箒ちゃんの紅椿をグレードアップするんだ!!」

紅椿を臨海学校で瞬殺された事が気に食わない事が理由だと思う。そもそも、箒さんの技量など私達姉妹と比べたら無いに等しい。でも、シールドエネルギー回復系の単一仕様は紅椿以降は登場していない。

順番は狂ったが、紅椿を瞬殺した事には変わらない。

渡す事に拒否すると、痼癩をおこしながら私達姉妹の専用機を奪おうと格闘戦を仕掛けて来る。

私達も奪われたくないから、アテナの待機状態の金の腕輪を私は抱き締めながら束さんの蹴りを蹴り飛ばしながら守り、千秋もアルテミスの待機状態の三日月型の飾りが付いた銀のペンダントを握り拳を捌きながら守っていたのだ。

「束さん、俺の娘の専用機が不相応だつて?」

「そうね。」

あたしの娘から専用機を奪うつもりだった?」

「げっ!!」

大人のいっくんと鈴ちゃん!」

「助かった…!」

私達姉妹が整備室内を逃げ回る最中、如何にも不機嫌な顔でパパもママも束さんを睨みながら、パパとママの専用機も整備に来た所だったのだ。

そして、状況を見ただけで把握したパパはお玉をコールして取り出して束さんにお玉を向けながら夕飯のメニューを教えてくれた。

「十夏、千秋喜べ。」

今日の夕飯は中華風子兔のリゾットだ」

「そうね。」

丁度良く、食材が其処に居るから狩るわよ!!」

ママは束さんを物理的に狩るらしい。

「わあああいい!!」

兔のリゾットだ!!」

勘違いしたママを無視しても、子兔のリゾットは一度は食べたいと

思っていた。

「ちよつと待つて!？」

東さんを物理的に狩る気なの!!」

「「「そうだけど?」」」

一家揃って東さんにボケるが、本人はママの言葉を鵜呑みしたらしい。

「いやあああああ!？」

脱兎の如く、東さんは叫びながら逃げ出したのだ。

だが、私達にした事を親二人が許す訳が無く、追いかけたのだ。

パパはお玉を片手に東さんを追いかけて、ママは撲殺用の黒檀製の棍棒を持ち追いかけて、私は狩猟で使う解体用ナイフを抱えて二人を追いかけて、千秋は矢筒を腰にベルトで引き下げて弓を持ちながら私達を追いかけたのだ。

織斑一家による兎（東さん）狩りの始まりだった。

逆に東さんは四人から逃げなくてはならないデスマーチの始まりだった。

兎に角、東さんの逃げ足は早かった。

「待てや!!」

駄兔!!」

「いっくん、キャラが変わってる!？」

何処のヤクザ!？」

「待ちなさい!!」

待たないと、本気で駄兔のリゾットにするわよ!!」

「東さん、美味しくないから!!」

さっさきの事は謝るから、解体用ナイフは辞めて!!」

「大人しく捕まれ!!」

「チャ〜ンス!!」

千秋が矢を放ち、東さんの機械仕掛けのうさ耳が片方に矢が当たり飛び散る。

「うっげえ、マジで狩る気だよ!？」

「「「待て、駄兔!!」」」

「こう成ったら、あそこの窓に!!」

東さんは逃げながら学生寮の寮官の部屋の窓ガラスを割り中へと逃げ込む。

パパは女性部屋だと判り窓から入るのを諦めて入口へと周り、私達三人は東さんを追い窓から侵入する。

そして、その部屋の住人はお約束の人物だった。

部屋の中はゴミ、ゴミ…

ゴミ部屋は学園では一人しかいない。

窓から侵入した私達三人は先に東さんに踏まれて悶絶する女性を三人同時に踏みつけたのだ。

仕事も終わり寝酒を飲み、床に入るとガラスが割れて私の腹部にアホが降り立つ。

「グツハア!?」

「ちーちゃん!?!」

気を抜いていた為にお腹がかなり痛い。

そう、窓ガラスを突き破り私のお腹に踏み付けて降り立ったのは束だった。

「東、貴様!!」

「ゴメン、ちーちゃんそれどころじゃあ…」

窓から再び入り込む三人の影。

「「駄兔!!」」

「グツヘエ!?!」

「あつ、織斑先生だった…」

「相変わらず汚い部屋ね。」

十夏、1025室の一夏を呼んで来なさい!!」

「一夏さんと説教ね?」

「じゃあ、ママに東さんを任せる。お姉ちゃんは一夏さんの三人で説教タイムに入るよ」

「待て!!」



一夏に、この部屋を見られたら…」

「だったら、綺麗に片付けろ!!」

そして、怒られる!!」

ゴツチン

「はっう!?!」

何故か、私は理不尽にも織斑姉から拳骨を貰ったのだ。

そして、向こうでの私も同じ扱いだろうと思ったのだ。

鈴が束を追いかけている間、私は織斑妹に監視され正座をさせられた。

「なあ、織斑妹?」

「せ・い・ぎ」

「あつ、はい…」

お姉ちゃんに呼ばれた一夏さんが寮官室へ来たのだ。そして、部屋を見るなりプルプルと怒りを露わにする。

そして、拳骨を落とすと同時に一夏さんがキレた。

「十夏さんと呼ばれて来たんだが、千冬姉、部屋を綺麗にしろって言ったよな?」

「一夏?」

「二昨日、部屋を綺麗にしたのにゴミ部屋じゃねえか!!」

三人で説教だ!!」

「そんなあ…」

織斑先生はガツクリ項垂れ、夜通しで三人から説教されたのだ。

十夏、千秋の二人は織斑先生を説教する為に離脱。

学園内を逃げ回る束さんに追い回す二人。

ただ、可哀想なのは黒兎で部屋のベッドで寝ていたら

、私達の『兎待って!!』の叫び声に自身が狩られると勘違いしてルームメイトの寝ているシャルのベッドに忍び込み、抱き着きながら一晩中震えていたらしい。

追いかけて回すこと、一時間で駄兔はパパによって確保された。

「捕まえたぞ、駄兔!!」

「食われる!!」

「一夏、まさか性的な意味で食べないでしょうね?」

「食うか!!」

「これから、いろんな意味でやらかすからぶっ飛ばす!!」

「辞めて!?!」

東さん、死んじやうから!!」

「そう言えば、キャンボールファストやエクスカリバー、東さんの潜伏先の王女様のアイリス王女にも召使いにされそうだったわね…」

「なのじゃ王女に召使いにされかけたのは、確かに懐かしい。」

「だが、未だにエクスカリバーの一件とワールドパージをやらざらる負えなかったクロエは後悔の念を抱いている。」

「だから、ここでシメる。」

「東さん、覚悟!!」

「ギャアアアア!?!」

東さんの断末魔が学園中に響き渡り、東さんは鈴によって医務室へと搬送されたのだ。

そして、十夏と刀奈との決闘から一週間後に全世界を震撼させる出来事が起きたのだ。

東さんが、学園所属の教師として赴任すると、東さんが世界に公表したのだった。

## 時空旅行 敗北と織斑邸で過ごす夏休み

少し遡る事、織斑一家が平行世界の過去に飛ばされて直ぐに異変に気付いたのが三人居た。

一人はこの店の主人の妹のマドカ。

そして、もう二人は元女王にして最強の姫騎士のメアリーと主人の学生時代の同期で元国家代表のセシリアだった。

二人は結婚式で使うウェディングドレスの採寸を終わらせてイギリスから戻り、セシリアの養女のオーロラを十夏達の部屋に寝かし付けた後に地下アリーナから四人の気配が消えた事に気付く。

「セツシー!?!」

「メアリー!?!」

「二夏(様)さん達が消えた!?!」

二人が驚く最中、部屋にマドカが慌てて入って来たのだ。

「セシリア、メアリー!!」

「お兄ちゃんが!!」

「やっぱりですわ」

「ですわね」

三人は其々の武器を片手に地下アリーナへ降りたのだ。

ただ、幸運だったのはオーロラが起きなかった事だろう。もし、起きたら寝起きで機嫌の悪いオーロラによって三人は駄女神に挑む事なく壊滅していただろう。

だが、アリーナへ向かう三人を見て厨房で片付けをする四郎は思った。  
「眠ったオーロラちゃんをアリーナで起こせば良いんじゃないやねえ?」

地下アリーナには二人の女性が高笑いしながら立っていた。

「あはははははは!!」

「十夏め、お仕置きだ!!」

「そうですね、お姉様。

私、千秋にお仕置きが出来ましたわ。

ですが、要らぬ者が二人程行きましたか?」

「親子だから構わんだろう。」

さて、今日入った酒でも煽るとしようか?」

アリーナへ降りた三人は、二人の女性が高笑いしながら言っていた事を聴き、それを聞いたマドカがブチ切れた。

「お前たちがお兄ちゃんを?」

「如何にも」

「お兄ちゃんを返せえええ!!」

お兄ちゃんを殺し愛するのは、この私だアアア!!」

ブラコンモードを炸裂し、真新しい金色のナイフを二本取り出して二人の女性に斬りかかる。

「マドカ様!!」

無闇矢鱈に突っ込んで駄目よ!!」

「うるさい!!」

お兄ちゃんを、お兄ちゃんをよくも!!」

私もイギリスに帰った時に宝物庫からパツクた聖剣エクスカリバーを抜き、逆上し血が頭に登ったマドカの後を追う。

セシリアも二丁のドラムマシンガンを両手に持ち、私達二人を援護射撃をしていた。

「マドカさん、メアリー援護射撃致しますわ!!」

素が激情家であるセシリアは愛する人とライバルだった友人の仇だとマシンガンを乱射して、高笑いする二人の女性の動きを止めさせるが弾丸は全て斬り払われていた。

「我を止めるなど、片腹痛いわ!!」

私の剣技が全く通じない。

それどころか、マドカもデスサイスを振るう女性に苦戦を最初からしていた。

私も次第に女性が振るう槍を捌けなくなり、至る所に斬り傷を増や

す一方だった。

「ほう、エクスカリバーを扱いきれる者を観るのは、アーサー以来か？」

「二夏様を返しなさい!!」

「十夏に巻き込まれた男など知らぬわ。」

「ほれ、余所見は禁物だぞ?」

「くっ!?!」

私のエクスカリバーが槍に弾かれて手を放したエクスカリバーはアリーナの天井に突き刺さる。

だが、終わりじやない。

クレイモアをコールして具現化する。

だが、後ろから悲鳴が木霊する。

「キヤア!?!」

影と同化した女性に奇襲されデスサイスの石突で腹を突かれ気絶したセシリアだった。

「セツシー!!」

「あらあら、人間って脆いわね?」

「貴女、貴女はああ!!」

大親友をやられた事に逆上してクレイモアを握り女性に斬りかかるが、いとも簡単にクレイモアは槍で弾かれる。

一人の女性が影に同化して姿を消えている事に気付くが遅かった。

「マドカ様!!」

「なっ!?!」

私が気付き叫ぶが遅く、目の前から消えた女性は二人してマドカを攻め、ナイフ捌きで捌き切れない連続攻撃に鮮血を撒き散らしながら吹き飛び空を舞ったのだ。

「ぐっ……お兄ちゃんの仇を取るまでは……負けられない……」

顔面から床に落ちながらも、それでもふらつき全身から血を流しながらも執念で立ち上がるマドカ。

「眠れ!!」

「グッハア!?!」

一人の女性には止めに顔面を殴られ、もう一人には殴られ浮いた力を利用して背中に踵落としを入れてマド力を屠ったのだ。マド力は余りの背中の激痛に気絶したのだ。

「本当、こいつ等はヤバイですわね…」

「残るはお前だけだが？」

私も遂には一人となり、槍で突かれるも受け流してデスサイズで斬りつけられるもクレイモアを盾に凌ぐ。

「ホレ、ホレホレホレ!!」

「くっ!!」

「私も居ますわよ？」

「!？」

次第にクレイモアは二人からの攻撃に耐え切れなくなり剣全体が罅割れて折れそうだった。しかし、クレイモアは砕けてしまい、残すは専用機のエクスカリバーだけとなった。

「一思いにやって殺ろうか？」

「くっ、殺せ!!」

そして、姫騎士のエクスカリバーも砕け、心まで折れた私は死を選んだのだ。

「愛する一夏様が居ないのなら、いつそのこと死を…」

「メーちゃん!!」

「ここは引くよ!!」

「くっ!!」

束さんが、いつの間にか現れて二人を抱えて居たのだ。

私は悔しくもあり、引くしか無かった。

束さんはセツシーを私に放り投げるとエレベーターの扉を蹴破り三角跳びの要領で地上のお店へと跳び上がる。私も束さんから新たに渡されたクレイモアを振り、エレベーターを落とすと束さんと同じく三角跳びでお店まで上がったのだ。

「逃げ切れたかな？」

「メーちゃんまだだよ。」

「いっくんには後で謝るから…」

胸の谷間から取り出した爆弾のスイッチを押して、エレベーター内部を爆発させて壁を崩落させてアリーナの入口を埋めたのだ。

「皆には、このまま学園に避難してもらおうよ。」

おい、その女。

悪いけど部屋で眠っているオーロラちゃんを連れて来てね」

「えっ、私?」

「うん、変な事したら鈴ちゃんに言い付けるからね?」

「確かに可愛いけど、オーナーの娘に手は出さないわよ!!」

私はよろめきながら、この店の宴会時に使う送迎バスに乗り込み気絶したセツシーを後部の長椅子に寝かせる。一番重傷なマドカは束さん特製の治療用ナノマシンを注射されてぐっすりと眠っていた。バスに乗り込む二人。

花蓮は起こした事でオーロラに頭を殴られて頭にタンコブを作り運転席に乗り、オーロラは起こされた事で不機嫌ながらもメアリーに駆け寄り気絶するセシリアの手を握る。

「ねえ、メアリーお母様、お母様は大丈夫だよね?」

気絶したセツシーの手を握り心配するオーロラ。

「気絶しているだけだから大丈夫ですわ…」

「えっ、メアリーママ!」

とオーロラを安心させると私も余りの出血の酷さからバスの床に倒れて意識を手放したのだ。

「メアリーママ!!」

起きてよ!!

嫌だよ!!」

泣き叫ぶオーロラに揺さぶられ、メアリーを起こそとするがメアリーは大量の出血により気絶していた。

「オーロラちゃん、ちよつとごめんね」

メアリーにも医療用ナノマシンを打ち込み、バスの空いている長椅子に寝かせて、花蓮がバスを運転して学園へと向かう最中にドイツに居るレナスへと連絡したのだ。

『ババ様どうしたの?』

「うん、レナスちゃん。

驚かないでね。

「十夏ちゃん達が過去の平行世界へ飛ばされちゃったんだよ」

『えっ?』

「十夏ちゃん達が!?!」

「うん、辛うじて間に合ったけどセツシーとメアリー、マドカも重傷なんだ。

だから、レナスちゃん達にはギリシャに行つて貰いたいの」

『まさか、パルテノン神殿ですか?』

「多分、レナスちゃんならゼウスに会える筈だから…」

『ババ様、任せて!!』

「白百合先輩には代理で生徒会長をやる様に伝言をお願いします」

電話を切り、気絶し目覚めない三人の治療をしながら学園へ戻つたのだ。

平行世界の学園のアリーナでは、千秋がアルテミスをハードウェアシステムにより換装したアルテミス・アサルトを駆り、クラスメイとのシャルと模擬戦をしていた。

ただ、アルテミスの動きが若干悪いのは千秋がシステムに情報を打ち込みながら調整しているせいであるが、シャルにしたら悪夢以外でもない。

何故なら

「ちよつと!?!」

「えっ、何が?」

「何がじゃないよ!!」

ひっ、ひえええ!?!

その弾丸躲せないよ!!

当たるとびに弾が弾けて中の爆弾が爆発するのアリなの!?!」

「そうだけ?」

「うん、拡散弾の小爆弾の破裂するスピードを早くしようかな?」



「えっ……マジで？」

ロングバレルのヘヴィーボーガンを撃ちながら悩む千秋。

拡散弾の信管のタイマー調整している所にシャルが模擬戦を挑んだのだから文句の言いようは無い。

まあ、実際はシャルのラファールリヴアイブカスタムの装甲にノックする様に拡散弾の弾頭が当たり、中身の小爆弾が雨の様にシャルに降り注ぎ爆発するのだから仕方がない。

「シャル、完全に遊ばれてるな……」

「あたしはやりたく無いわよ……」

あれ、モンハンの拡散祭りじゃない……」

「シャルロット様を見ないで射撃を当てるなんて、私のアイデンティティが……」

「全く、千秋は調整しながら遊んでいるんだから」

「十夏、あれはモンハンのヘヴィーボーガンじゃない？」

「そうだよ簪。ヘヴィーボーガン、浪漫武器だよ」

「羨ましい……」

「良かったら、ライトボーガンの鬼ヶ島使う？」

「いいの!？」

「素早くマガジンの換装が出来たらね？」

「私には無理……」

アリーナで見ている内にシャルは拡散祭りの餌食となり、落下したのだった。

一応、パパと織斑先生と新任の東先生の新たな方針で一年生の専用機持ちを私と千秋で鍛える事になった。

夏休みになり、私と千秋は織斑先生の計らいでパパの実家に泊まる事になった。

一応、ママの話では妊娠して半年位までは、この旧織斑邸に住んでいたらしい。その後、壊されたが今の湘南市の中華料理店織斑を建て引越したのだ。

そして、両親は学園に残る事になり教師部隊の実力の底上げの訓練

を行う為に臨時教官として鍛えるらしい。

ただ、中には両親の実力を認めない女尊男卑に染まる教師に対して、新しく教師になった元アメリカの国家代表のナターシャ先生が両親の実力を判らせる為にママに挑んだらしい。

結果は言わずとも、二重瞬時加速で加速したママの肘鉄を額に食らい、シールドエネルギーがゼロになる事なく気絶し負けたのだった。

それでも、認めない十人の教師は十人掛かりでパパに挑んだ。

パパも本気を見せる為に、白椿の三つある単一仕様（最後の単一仕様は相手のISを初期化する能力なので使えない様に嚴重にロックしてある）の内の2つの単一仕様『修羅の刹那』と単一仕様『零落白夜』を併せて試合時間がたったの2秒で十人を瞬殺したのだ。

こうして、教師達から認められて訓練を始めたのだ。

ただ、不安なのは両親が現役時代に生み出した織斑流フィジカルトレーニングをやらせて死人が出ないかは心配だったりする。

何せ、私達一家でもメアリーママとセシリアママがグロツキーになったトレーニングだからだ。

そして、今日も…

「ぜっ、ぜっ…」

「まだ、終わってないよ!!」

とお姉ちゃんが織斑流フィジカルトレーニングで一夏さんを扱っている光景は見慣れた物になりつつある。既に、息が絶え絶えで路上に大の字に成りながらへばる一夏さん。

私も既にメニューをこなして柔軟体操をして終わる所だった。

そして、こっそりと私達を覗くために電柱に見える金髪の女性。

シャルロット・デュノアだった。

「シャル、覗いてないで出て来たら?」

「うっげっ!」

バレた!?

えっと…今日はお日柄も良く…じゃなくて、来ちゃった…」

「はあ…いらっしやい、シャル」

彼女が家に来た様に言うシャルに呆れるが、シャルは路上にダウン

する一夏さんを心配する。

「で、何で一夏が路上で伸びてるの？」

「織斑流フィジカルトレーニングに耐えられなくてダウンしている  
見たい？」

「何で疑問系なのさ!!」

「まあ、馴れないとキツイ訓練だしね」

「えっ？」

「そうなの？」

私は一夏さんに渡したメニューをシャルに見せる。

「こんなメニューだけど？」

「これ、僕でもダウンするかも…」

「そうかな？」

「そうだと、僕は思うよ」

シャルと話している内に、片手にケーキが入っているだろう箱を持ち蒼いワンピース姿の女性が歩いて来る。

「シャル、アレってセシリア？」

「ん？」

「そうだね。セシリアだ」

「なぜ、シャルロットさんが居ますの!？」

「私達も居るよ?。」

「十夏様に千秋様まで!？」

「私達姉妹が自宅で過ごす代わりに一夏さんを鍛える様に織斑先生  
に言われたからだよ」

「うらやま、じゃなくて狡いですわ!!」

「同じ意味だと思うな…」

「なっ!？」

「千秋、訓練も終わりだから中に入ろうか？」

「だね」

「ほら、一夏さん起きて中に行かないと、明日のメニューを二倍にするよ!!」

私は先にシャワー浴びるね」

「!?」

私の一言に勢い良く立ち上がり、自宅へと入り込む一夏。だが、シャワーを浴びる為に先に上がったお姉ちゃんが心配に成る。

『あつ、十夏!?!』

『へッ?』

……!?!?……キヤアアア!!

こつ、このおとお馬鹿一夏ああああ!!』

『あつ、ゴメン!?!』

『ゴメンで、済むかアア!!』

私の裸を観たことを後悔しなさい!!

ママ直伝!!

デッドリーアサルト!!』

『うっ、ギヤアアアアアアアア!?!』

自宅の中から響く二人の声を聴き呆れる私。

「ああ、やつぱり…」

「千秋さん、やつぱりって何ですか?」

「うん、一夏の馬鹿タレがお姉ちゃんがシャワー中の浴室に突入し

たかも…」

「ああ、僕と同じラッキースケベか…」

「シャル様、その辺を詳しく?」

「うっげえ、セシリアが居たの忘れてた!?!」

セシリアがシャルに詳しく詳細を尋問する最中、私も室内へ急ぐとママの必殺をやったお姉ちゃんのデッドリーアサルトを直に食らい顔が痣だらけに変形した一夏が廊下にボロ雑巾の様に倒れていた。

そして、カンフー映画の様に片足立ちで技を決めた裸のお姉ちゃん

の構図。尋問が終えた二人がこの状況を見て呆れるしか無かった。

「……………擁護できない(ませんわね)」

一夏さんの愚行に呆れる二人。

「お姉ちゃん、お客さん来てるから着替えて」

「そうね。」

でも、裸を見られたから、もう一発!!」

「グッハア!?」

『一夏、来たわよ!!』

『こら、鈴凶々しいぞ!!』

『大丈夫よ。』

その内に、あたしと一夏の愛の巣だから』

『鈴、認めんぞ!!』

嫁は私のだ!!』

玄関から響く三人の声。

廊下を走り来たのは鈴だった。

「何で、一夏がズタボロなの?」

「ああ、お姉ちゃんの入浴中にシャワー浴びようとして突入した」

「一夏、バカなの?」

十夏さんの入浴中に突入したら、あたしでも十夏さんの格闘技を食らって死ねる自信があるわよ?」

「ほら、大丈夫。」

お姉ちゃんに死体蹴りされてるから」

「あたしも恋人としてシメとく?」

「大丈夫じゃない?」

明日のメニューは絶対に二倍になるから」

「でも、十夏に悪いからやるわ」

「鈴!?!」

「反省しろ、馬鹿一夏!!」

「理不尽だああ!!」

「此方、見るな!!」

「グッハア!?!」

鈴さんが一夏さんをお仕置きで踏み付ける最中でも、お姉ちゃんは  
お構い無しに着替えていた。そして、再び着替え中のお姉ちゃんに振  
り向き蹴られる一夏さん。

結局、一夏さんはラヴァーズにより正座にさせられてお説教を受け

たのだ。特にお姉ちゃんと同じ被害者である箒さんやシャルからはこつ酷く説教をされたのは言うまでもない。

お昼は皆へのお詫びとして、お姉ちゃんと私が作るお店での賄い飯を ご馳走したのだ。

「美味しいじゃない」

「美味しいですわね」

「うむ、美味しい」

「美味しい」

「僕、病み付きになるかも…」

ラヴァーズに出したのは、天津八宝菜餡掛け飯である。

白いご飯にとろふわに仕上げた少し甘めの卵焼きを乗せて、白菜に人参、キクラゲ、筍、海老、烏賊、豚肉、鶏のゆで卵の八種類の具を炒めて餡なし天津飯に鶏ガラ出汁の餡の代わりに八宝菜餡掛けを掛けたのが天津八宝菜餡掛け飯である。

「なあ、俺の飯は？」

「はい、一夏さんにはこれです!!」

「なっ!?!」

「「「天井!?!」」」」

一夏さんに出したお昼は和食の天井。

だが、ただの天井じゃない。

「どうやって、作ったか答えて見なさい!!」

「鈴さん、判ります?」

「どうやって生卵を天婦羅にしてんのよ?」

逆に知りたいわよ…」

私は千秋の必殺飯、生卵を天婦羅にした卵天井。

私も作り方を知っている。

生卵を一度、卵を割らずに冷凍して凍らせた生卵の殻を? いて天婦羅にする料理だ。

一夏さんには、やり方すら判らないだろうな…

「これ、冷凍卵だろ?」

「うっなあ!？」

一夏に答えられた事に驚愕する姉妹。ただ、姉妹の驚き方が鈴に似ているのは親子所以だろう。

「だって、千秋さんは昨日はニパックほど冷凍してただろ？」

「そうよ。どうせ皆が集まるだろうから特売の卵をこおらしたのよ。で、冷凍卵の殻を?いて天婦羅にしたのよ」

「手間が掛かるな…でも、美味しい」

「／／／」

「（（（千秋さんが顔を真っ赤に?!）））（（（

まあ、紅くしているのは千秋のファザコンモードなだけだから恋愛感情には関係ない。

「ほう、一夏？」

美味そうなのを食べているな？」

「千冬姉!？」

「「「織斑先生!？」」」」

ご飯を食べるリビングに来たのは、着替えを取りに来た織斑先生だった。

「織斑先生の着替えセットは私達が作っておきましたが、お昼食べますか？」

「ふっ、十夏。

一応は、未来の姪っ子だ。

千冬叔母さんでも構わん。

昼は十夏達の両親が食堂で作っているから直ぐに戻る。

だが、ハメは外しすぎるなよ？

特に、言わずとも判るが一夏と鈴はな？」

「うっなあ!？」／／／／／」

「「「まさか!？」」」」

「「「しちやった?？」」」

「おいコラ、姉妹揃って二人とも生々しいわ!!」  
シタ事を顔を真っ赤して誤魔化そうと一夏と

「だって、鈴さんが夜明けのママ見たく肌がツヤツヤしてんだもん」

「「「初体験済!」」」

「千秋!!」

「あんたねえ!!」

身長差が在るが姉妹の様にじゃれ合う、顔を真っ赤した鈴と千秋。

賑やかな織斑家の一日だった事は語るまでも無い。



## 時空旅行 篠ノ之神社での夏祭り

夏休みも佳境に入り、一夏さんが織斑流フィジカルトレーニングも大部こなせる様になったと思う。

しかし……

「ゼアアア!!」

「はい、残念♪」

「グツハア!?!」

お姉ちゃんが一夏を扱いた剣術の訓練では、私達を姉妹を除き一年の中では上位に入る位は強くなっただろうと思うけど未だにお姉ちゃんに一撃すら入れられないのだ。

そして、目の前では木刀でお姉ちゃんに袈裟斬りで斬りかかるが、斬撃を簡単に受け流して一夏さんの腕を掴んで芝生に投げ飛ばしていた。

「くうく!!もう少しだったのに!!」

「前衛馬鹿のお姉ちゃんには真っ直ぐな剣術は無意味だって教えたじゃん。はい、タオルとポカリ」

「サンキュー、千秋」

「そう言えば、もう直ぐ夏祭りだったな…十夏と千秋の世界の未来に夏祭りはやって居たのか?」

篠ノ之神社の話だろう。

私達の時代には篠ノ之神社は神社の跡地となっている。

パパ達がエクスカリバー事件で宇宙に上がる時に、東さんが残した宇宙船を巡り、亡国機業の残党と激戦を繰り広げた場所が宇宙船を地下に隠した篠ノ之神社だった。宇宙船を確保出来たが神社は激戦の煽りで焼け落ちてしまい、それ以降は夏祭りは開催されていないと此方の箒先生から聞いた。

「私が産まれた頃にはやって無かったよ。神社が焼け落ちたし、今はエクスカリバー事件の前哨戦の激戦で亡くなった数名の学園の教師達の慰霊碑があるだけ」

「そんな事件があつたんだな…」

「まあ、亡国関連の事件だと学園の関係者が初めて死者が出た事件だったから、私達の時代の生徒会室に詳細な報告書が在ったからね。生徒会長のお姉ちゃんと副会長の私が千冬叔母さんから読んで置くようにって言われたかな」

「じゃあ、俺達を鍛えているのは、まさか？」

「うん、パパが学園で起きるだろ亡国機業関連の事件を全て千冬さんに話したからだと思うよ。」

「そうだね。パパとママはあの事件全ての当事者だし、弱かったから護れなかったから後悔しているんだと思うよ」

「だから、一夏貴方には最初の亡国機業の襲撃がある文化祭までには、せめて私達姉妹の半分位には強くなつて貰うつもりだから」

「まさか…」

「そうね、私が覚えた瞬時加速系の技術と近接戦闘技術は最低でも叩き込むからね？」

「どうやら、俺の夏休みの訓練地獄はまだ続くと肩を落としたのだ。」

同じ頃、学園のアリーナでは二人の男女が教師陣に織斑流フィジカルトレーニングをさせており、私達姉妹からしたらお約束と言っても過言でもない。

無事にフィジカルトレーニングを済ましたが体力を使い果たし床へと倒れる教師部隊の教師達と辛うじてクリアし近接戦闘訓練をパパに直接施されるナターシャと山田先生に織斑先生の三人でしている。

「はあああ!!」

「ナターシャ、甘い!!」

「えっ、嘘!？」

ナターシャは海兵隊仕込みの軍隊式格闘術で格闘に持ち込むがカウンターで回し蹴りを入れられ吹き飛ばされ、回し蹴りのスキを狙った織斑先生が木刀で斬りかかる。しかし、身体を少し逸して木刀の斬撃の力を利用して腕を掴み投げ飛ばす。

「バレバレだ!!」

「なっ!？」

「貰いました!!」

「殺気が、だだ漏れだ!!」

「きゃあ、そんな!？」

ゴム製ナイフで刺突しようとする山田先生は腕を掴まれて一本背負いを食らう。

そして、ロシアに帰る事が出来ずに強制参加させられた生徒会長の更識楯無は前者の様に床に大の字になり倒れていた。

「うっげえ、マジでフィジカルトレーニングはキツイわよ…これ、ロシアの合同訓練よりキツイ?」

「あんたは喋れる力が残っているのね?」

「あっ、鈴音教官!？」

「じゃあ、あたしが特別に格闘訓練の相手をしてあげるわ」

「げっ……」

私はこの後に鈴音教官からみっちり扱かれたのだ。

思い出したく無いから割愛するが、更識として鍛えた格闘技術では鈴音教官の拳法に全く歯が立たない。

たしか、流派東方不敗。

私自身、聞いたことの無い流派だった。

そして、私は呆けている間に鈴音教官からの正拳突きを諸に食らったのだった。

「全く、これで学園最強なの?」

まだ、バカ娘の方が強いわよ…」

「マジで強過ぎよ…」

私は倒れながら、鈴音教官の背後には一夏教官を相手にして息が絶え絶えになり織斑先生を加えて床に倒れた教師三人が見えたのだ。

「全く、引退して弱くなったか?」

「お互いに全盛期では無いにしろ、一夏がここまで強いとはな…」

「一夏さんがこんなにも鬼畜だなんて…」

「おいコラ、ナターシャ!!」

鈴が勘違いする様な事を「へえ、一夏が鬼畜なんだ？」鈴!？」

「ねえ、どんな風に鬼畜なのかな？」

「いや、その……」

「まあ、一夏は確かにベッドの上なら鬼畜だけど」

「「なっ!?!」」

「一夏さんが激しいだなんて……」

「ワオ……ベッドの上で……」

鈴のボケに顔を真っ赤に反応したナターシャは、そのままフリーズして訓練から離脱した。山田先生までも似たような状況であり最早訓練どころでは無かった。

両親二人が夫婦漫才をしている頃、私達姉妹は箒さんに呼ばれて篠ノ之神社に来ていた。

「十夏と千秋に聞きたいのだが、二人共篠ノ之流を収めているって本当か？」

「うん、私は剣術は古代王国流剣術の他は、確かに束さんの指導で篠ノ之流槍術は収めてるよ。だけど、修行した際に若干だけ型が崩れたけど?」

「私も同じく、篠ノ之流鉄扇術と篠ノ之流弓術だよ」

「収めているなら、神楽を一緒に舞ってくれないか？」

「「えっ……無理……」」

「何故だ!?!」

「「私達、神楽舞いを習ってないもん」」

「なっ、何だと……」

ガックリと膝を付き落ち込む箒だった。

そして、持って来た浴衣に着替えて、夏祭りを満喫したのだった。

「あっ、たこ焼きだ!!」

「お姉ちゃん、食べよ!!」

「うん!!」

たこ焼きを買い、椅子に座りながら千秋とたこ焼きを食べていると

「一夏、あ〜ん」

「やっぱり、揚げたての唐揚げは美味しいな。ほれ、チョコバナナ食べるか?」

「もつ、貰うわ…ハツム…良いわね」

「だな。次は、アレを食べに行くか?」

二人揃って、両親の様な甘い空気を出しながら屋台の料理を食べ歩きするのは一夏さんと鈴音さんだった。

ただ、鈴音さんのチョコバナナの食べ方が少しエロいのは気のせいだろう。

「あつ、観てた?」

「うん、バツチリ」

「やっぱり、双子ね。あんた達は姉妹で周ってるの?」

「だって、屋台の料理は祭りじゃないと楽しめないじゃん」

「全く、千秋は食い意地だけは「お姉ちゃんだって、さつきからチョコバナナやりんご飴ばかり食べてるじゃん!!」ギックウ!」

アレ?

そう言えば、綿飴やりんご飴にチョコバナナしか食べてないし、千秋からあーんされたたこ焼きが初めてだったりするかも知れない。

「シャル、セシリア、アレを狙うぞ!!」

「この、セシリアにお任せになって!!」

「僕も援護するよ!!」

聞いたことのある三人組の声の主は、射的をやるラウラとシャル、セシリアの三人が巨大な招き猫を狙っていたのだ。

「お姉ちゃん、倒れると思う?」

「倒れないかな?」

「じゃあ?」

「行つてくれれば?」

「うん、行つて来る!!」

私もやるよ!!」

千秋は三人組へと走っていったのだ。

「「千秋さん!」」

「狙うのアレでしょ?」

「千秋、頼めるか?」

「ラウラ、任せて!!」

「それでは、皆様合わせて行きますわよ!!」

「総員構え!!」

「放て!!」

「うっなあ!?!」

ラウラの号令で四人が構え放ったライフルからは、コルクが跳び巨大な招き猫を倒したのだ。ただ、射的屋のおじさんは顔を真っ青にしながら倒された招き猫をラウラに渡したのだった。

ただ、花火が終わるまでは一夏さんは浴衣姿の鈴音さんと二人でラブラブの夏祭りデートをしたのは言うまでもない。

私と千秋は花火を鑑賞した帰り道

「千秋、篠ノ之神社の神楽舞い良かったわね」

「うん、良かった」

二人、手を繋ぎながら夏休みの下宿先の織斑邸へと歩くが、私はふと殺気を感じたのだ。

「そこ、出て来なさい!!」

「居るのは判ってるよ!!」

殺気を感じた林へ叫ぶと、フードを被る一人の少女が出て来たのだ。

だが、私達姉妹を見るなり驚愕した。

「私の殺気を感じるとはな…」

「嘘…」

「マドカ叔母さんの若い頃かな?」

「!?!」

亡国機業のMとの初めての出会いだった。

そして、自分より年上に叔母さんと言われるのは釈然としないが名前がバレた事に逆に驚いていた。

「千秋、当たり前見たいだね…」

「じゃあ、やっぱり?」

「なぜ、貴様が私の名前を知っている!!」

そして、共通して言えるが千冬叔母さん、パパ、マドカ叔母さんは無自覚の天然だったりする。

「ほら、自分で言っている時点で、ほら」

「なるほど…」

「無視するなあああ!!」

「それに、沸点が低いのも、ほら…」

「じゃあ、若い頃のマドカ叔母さんだね…」

無視され、キレたマドカはナイフで斬りかかる癖も同じだった。お姉ちゃんも浴衣なのにナイフの柄を蹴り上げてフードを脱がせる。

「貴様!?!」

「うん、やっぱりマドカ叔母さんだね」

「私はまだ14歳だ!!」

なせ、貴様らの叔母になる!!」

「だって、私は織斑十夏。」

織斑一夏の未来の双子姉妹の姉よ」

「同じ、妹の織斑千秋」

「なっ!?!」

殺すターゲットの織斑一夏の未来の娘だと…」

「どうする?」

まだ、やるなら捕まえるけど?」

「ねえねえお姉ちゃん。」

やるなら、私がマドカ叔母さんとやっても良い?」

「千秋、何でよ?」

「だって、若い頃のマドカ叔母さんだよ?」

あんなに可愛んだから、着せ替え人形にしたいかな?」

「本音はそっちなか!!」

私とマドカ叔母さんとハモリ千秋に突っ込む。

だが、既にマドカ叔母さんは千秋は浴衣なのにマドカを捕まえ抱きあ上げて愛でていた。

「うわああ、若い頃のマドカ叔母さんだああ♡

マジで可愛い♪♪」

「やっ、止めろ!？」

「こら、何処触ってる!？」

「おい、路上で服を脱がすな!!」

千秋に愛でられているマドカ叔母さん。

たまに、胸を揉まれたり、路上なのにパーカーや短パンを脱がされてクロエ謹製のセーラー服や拡張領域から出した様々な衣装を着せられたりとマドカは着せ替え人形化していた。

そして、千秋が着せ替え人形をやり過ぎたのかマドカは

「ひっくう…ひっくう…ひっくう…うわアアアアアん!!」

千秋、覚えてろよ!!」

と千秋の拘束を振り解き大泣きしながら逃げたのだった。

おまけ

泣き叫びながら、隠れ家に帰ったマドカは会いたくない奴に会ってしまった。

「あら、M帰ったのね……

えっ？

何、その格好……」

「スコール、笑いたければ笑え!!」

「ウツフ♡

か・わ・い・い・い♡」

「うっなあ!？」

スコールまで、私の格好に目をハートマークに変えて私を抱き締める。

だが、忘れない。

「私をゴスロリドレスを着せた千秋!!

覚えてろおお!!」

「だから、M。



逃がさないわ♡」

叫ぶが、スコールのツボに嵌ったらしく逃げられず、一晩中スコールに愛でられたのと言うまでもない。

## 時空旅行 文化祭 未来のママに青椒肉絲

夏休みも終わり、二学期が始まった。

私達姉妹には辛うじてだが、一夏さんが四世代機まで性能を落としたりアテナ・シルバースウルを駆る私に一撃を入れられるまでには強くなったと思うがやはり、本来での六世代機のアテナには全く対抗出来なかった。

「十夏の本気の槍さばきが捌けねえ」

「パパと織斑先生から許可が下りたからね。本来での性能のアテナは臨海学校以来だけど、アテナのフル加速に着いて来られた。それだけは自信を持って構わないかな」

「それにしても、アテナは展開装甲と光の翼を併せた加速は速過ぎだろ」

「エネルギーが馬鹿食いするのが難点だけどね」

「そんなにか？」

「全力で加速したら零落白夜より酷いの一言だよ」

「うわあ…酷いな…」

零落白夜を使う一夏ですら、アテナの展開装甲と光の翼の燃費の悪さを知り顔を顰めた。

「まあ、イージスの盾で拘束してタコ殴りにするから、余り燃費は気にして無いけどね」

「タッグだと、私がアルテミスで仕留めるのが仕事だし」

「うっわあ、極悪姉妹…」

「何か、言った？」

タッグトーナメントでアテナの単一仕様『イージスの盾』で拘束しながら姉妹で相手をタコ殴りにする光景を想像し、極悪姉妹と言ったのが聴こえたのか同時に姉妹から睨まれる。

だが、現世界最速を誇るイタリアのイグニッションプラン機のテンペスターIIを駆る国家代表でも、姉妹の前では絶対に涙目に成ると俺は思う。

それに、死にたくない。

「なっ、何も…」

席に座り、SHRが始まると文化祭の出し物について話し合いとなるが彼女持ちの一夏さんに酷な内容の出し物には私達姉妹でも頭を抱える。

たがら、私は意見を言ったのだ。

「皆が言っていたポツキーゲームとかツイスターゲームなどをやっても構いませんが『マジ!』『とっ、十夏!』『当日、生徒会の見回りが有り、女子生徒が言った内容で営業すれば即時営業停止なりますが嫌ですよ?』」

歓喜する女子生徒と嫌がる一夏。

しかし、後半の生徒会の見回りによる即時営業停止を聞いた途端、女子生徒は一斉に静まった。

「さて、これらに代わる意見はあるか?」

「そう言えば、織斑姉妹は中華料理店の娘だよ?」

相川さんが織斑姉妹の実家が料理店だと知っていた。

「そうだけ?」

「なら、中華喫茶はどうか?」

嫌な予感しかない。

確か、ママが学生の頃の文化祭の出し物は確か中華喫茶だった気がする。そして、パパのクラスはご奉仕喫茶だった。

「ちよつと待って!!」

「なら、十夏さんと千秋さんに指導して貰って、中華料理店はどうか?」

流れは確かに変わったけど、中華料理店をやる勢이었다。

『じゃあ、中華料理店で!!』

クラスの声により中華料理店と決まったのだ。

料理が出来る生徒を中心に簡単に出来るメニューと私達姉妹が作るのは中華料理店織斑のメニューと決まった。

ただ、セシリアさんだけは納得して無かった。

「何故、私がチャイナドレスを着てのウエイトレスですか!?」  
「なら、作って貰おうかな?」

「この、セシリア・オルコットに掛ければ調理など!!」

千秋は目は笑っていないが物凄い笑顔で調理器具と食材を出してチンゲン菜炒めをセシリアに作らせたが、試食した一夏さんは

「見た目は普通のチンゲン菜炒めだな……!!?!…グツハア!?!」

「一夏さん!?!」

「二夏!?!」

「「やっぱり…」」

案の定、チンゲン菜炒め(世界一辛い青いババネロのペースト入り)を食べた一夏さんは大量の吐血をして気絶したのだった。気絶した一夏さんを箒さんが抱えて保健室へと運ばれ、セシリアさんを正座に座らせてから千秋は言ったのだ。

「と、言う事でセシリアさんは調理は一切禁止です!!」

千秋に言われて、意気消沈しながらウエイトレスとなったセシリアだった。

クラスメイトとの話し合いの末にメニューが決まる。

一夏さん達、料理が出来る生徒達の作るメニュー

棒棒鶏 海老炒飯 回鍋肉 マンゴープリン 杏仁豆腐 天津飯  
カシューナッツとピーマンのオイスターソース炒め エビチリ炒め  
胡麻団子 五目春巻

の10品。

私達姉妹が担当する料理は

業火野菜炒め 青椒肉絲 鶏の塩釜蒸し 上海蟹のピリ辛炒め  
酢豚(広東風) 鴨肉のナッツ炒め 各種の焼売 四川麻婆豆腐など  
含む中華料理店織斑の正規メニューだった。

一応、私達姉妹も料理店の跡継ぎとして修行はしている。

特に業火野菜炒めと青椒肉絲だけは、お昼時の看板メニューだけにパパの指導は厳しかった思い出がある。

「お姉ちゃん、大丈夫だよね?」

「まあ、何とかなる」

私も心配には成りながらも、パパに連れられて豊洲市場へと買い出しへ向かった。

私達が産まれた頃には無かった豊洲市場。

築地市場の建て替えにより代わりの市場となったのが豊洲市場だった。漂白された束さんにより、パパの仲買資格はハッキングして今の年代に更新してあるが、それよりも前に学園長と話し合いで、帰るまでは食堂で働く事を条件に新しく貰っていた。

聞いた束さんは

『じゃあ、十夏ちゃんに上げるね』

と私が仲買資格を貰ったのだ。

しかし、パパはこの際だから食材の良し悪しを見極める修行をする  
と鶴の一声で決まってしまった。

文化祭で出す料理は各100皿を目安に買い揃える予定だ。

まずは、海鮮問屋からだ。

買い揃える食材は

上海蟹 ナマコ スズキ 真鯛 黒鯛などだ。

パパが上海蟹が入った発泡スチロール前に立ち

「まずは十夏からだ。

上海蟹を選別してみろ」

「うん」

腹を見たり甲羅の感触で身入りを確認しながら、卵がある雌の上海蟹だけを選別して行く。元の世界で、マドカ叔母さんに見てもらいながら広州から入った上海蟹を選別したのは記憶に新しい。

「どうかな、パパ？」

「うん、マドカからの教えを忠実に守って選別したな。おじさん、選別したこれを三十箱くれ」

「まさか、子持ちだけを正確にか。

全部で15万だな」

パパが現金一括で支払い、学園の冷蔵庫付きのトラックに運び、千秋が魚類を選別して運ぶ。

青果でも同じ様に買い込み学園へと戻ったのだ。

文化祭まで、後一日。

前日に仕込まなくてはいけない、鶏ガラや完熟した渋柿のペースト、各種料理に使う合わせ調味料などをママに見て貰いながら仕上げたのだった。

寮へ戻ろうと調理室を出ると、隣の調理室には鈴音さんが仕込みの真最中だった。

「鈴音さん、仕込み中？」

「あんた達姉妹もなの？」

「そうだよ。明日からの文化祭用に出汁と調味料一式全部かな」

「そう言えば、一夏からは聞かなくなったけど一組の出し物は何よ？」

「中華料理店」

「はああ!？」

マジなの?？」

鈴音さんの空いた口が塞がらない様な驚き方をする。

「うん、向こうの世界の実家は中華料理店だから、中華料理を出す出し物だよ」

「うわあ、そりゃあないわ。

あたし達の二組と一組との潰し合いじゃない。

ねえ、あんた達姉妹の料理の腕前知りたいから一品ご馳走しなさいよ。あたしも看板メニューの酢豚をご馳走するわ」

「いいよ。

じゃあ、私達姉妹は明日出す、中華料理店織斑の看板メニューの青椒肉絲を作るわ」

鈴音さんは各種材料を揃えて作り始め、私達姉妹も調理室に戻り青椒肉絲に使う牛肉、筍、ピーマンを揃えて調理を始めたのだ。

「千秋、行くわよ!!」

「うん!!」

二人で自分用の中華包丁を握りピーマンと筍を細切りにして行く。  
(中華包丁だけはパパが知り合いの鍛冶師に特別注文した私達姉妹の癖に併せた一品物の中華包丁)

だが、ただ切るだけでは火の通りにムラが出るから、全て均等に切らねけばならない。

その技術は、跡取りとしてパパとママに厳しく鍛えられた刀工技術。

私は拡張領域にある自分用の中華鍋を出して、細切りにした材料を炒めていく。

合わせ調味料と完熟した渋柿のペーストを入れ、一気に強火で炒めて青椒肉絲は完成したのだ。

出来た青椒肉絲をお盆に乗せて、ご飯も欲しくなるだろうから夕飯用に炊いたご飯と私が炒めている間に仕上げた帆立出汁の卵スープを持ち、隣の調理室へと向かったのだ。

三人で夕飯を食べながらの実食。

あたしは、織斑姉妹が作った青椒肉絲に箸を着ける。

「頂くわよ……」

噛めば噛むほどシャキシャキと歯応えのある筍とピーマン、牛肉の旨味が口の中に広がる。

「美味しいわね」

確かに美味しい。

此れだけ美味しいならお店に出しても文句がないレベルだった。そして、僅かに感じる甘味だけは何だかは判らない。

「お姉ちゃん、ママが作る酢豚と同じ味の酢豚だよ!？」

「本当だ!？」

向こうでは、織斑姉妹があたし謹製の酢豚を絶賛していた。だが、酢豚のタレの合わせ調味料の割合は一夏を唸らせる為に試行錯誤してきたのだ当然だ。

だけど、気になる単語が一つ。

ママ？

ママとは母親の別称…

違うわ!!

内心、頭に浮かんだ広辞苑の内容に自分に全力で突っ込んでいた。そして、『ママが作る酢豚と同じ味』もどろという事なのか知りたかった。

「どういう意味よ？」

「あれ、鈴音さんはママに臨海学校で会っているじゃん？」

「あつ、会っていたわね。」

「じゃあ……」

「同じ味になるのは……鈴音さんが未来の私達姉妹のママだからだよ」

千秋に言われて気付いた。

「あつ……」

二人はもしかしたら違うかも知れないけど、未来のあたしの娘だった事に気付いたのだ。

三人で囲み、未来の娘と食べる嬉しさを噛み締めながら夕飯を食べたのだ。

「鈴、三人で楽しそうに食べてるな」

「そうね。」

あたしも羨ましくなるわ」

三人仲良く食べる光景を観る夫婦二人。

「二夏、元の世界に戻ったら産婦人科に付き合いなさい」

「どうしてだ？」

「あんたねえ、盛った猿みたくあたしを抱いておきながら言えるわね？」

生理が来ないって言えば分かる？」

馬鹿二夏／＼／＼

「まさか、鈴？」

「出来たかも……」

まさかの鈴が三人目を妊娠したらしい。

「でも、馬鹿娘には言うじゃないわよ。」



一夏がスコールを、あたしが逃げ出すオータムか回収に来たマドカをやるから」

「無理はするなよ」

二人は仲良く手を繋ぎながら廊下を歩き寮の部屋に戻ったのだった。

## 時空旅行 文化祭 亡国機業の襲来

文化祭当日、私達姉妹は教室である物を出した。

「じゃあ、出すよ」

「だね」

「セーの、それ!!」

『はああああ有りなの!?!』

どよめくクラスメイト達。

無理もない。

アテナとアルテミスの拡張領域から出したのは四角い1メートル四方のキューブで、キューブをISの様に展開すると三面が天井まで高さがある耐火と防弾仕様の特殊ガラスと天井には特殊装甲製の換気扇付き天井と中華料理に必須な高い火力があるコンロやオーブンが一体となった専用機持ちなら持ち運びが可能なシステムキッチンだった。

無論、向こうの束さん謹製でこのキッチンにもISコアが使用されているのだ。

勿論、教室で調理が可能な様に生徒会長にはOHANASHI(十夏の物理的説得)して許可を貰い、織斑先生(パパ謹製おつまみセツトを贈呈)にも許可を貰ったのだ。

そして、どうでしょう。

中華料理店特有のターンテーブルしか用意が無かった教室は二対のシステムキッチンが現れた事により、お客さんの前で調理のパフォーマンスが可能な中華料理店に早変わり。

展開したキッチンの黒板側はキューブの展開がまだ続き、更に黒板が見えなくなる数のステンレス製の冷蔵庫まで現れ、中には双子姉妹が手掛けるだろう仕込み済の食材が入っている。

「ISの常識が崩れて行きますわね…」

「僕もそう思うな…」

「向こうの姉さん、やり過ぎだ…」

「おお、凄い…」

一組のラヴァーズ四人は眩きながら唾然と成るしか無く、同様にクラスメイト達は未来の技術力に度肝を抜かれていたのだった。

「お〜い、十夏に千秋。」

頼まれた仕込み済の寸胴鍋を持って来たぞ!!」

「サンキュー、一夏さん」

教室に入って来たのは、寸胴鍋を2つ載せた台車を押して来た一夏だった。右側のキッチンに二口コンロに腕を部分展開した白式で寸胴鍋を載せて、鶏ガラスープと乾貨の乾燥帆立の貝柱から取った帆立出汁を温め始めていた。

そして、キューブの展開が終わり教室の三分の一が厨房へと早替わりしたのだった。

文化祭も始まり、一組の中華料理店は大繁盛だった。

「千秋、上海蟹のピリ辛炒めよろしく!!」

私は青椒肉絲セットをやるから!!」

「お姉ちゃん、任された!!」

凄まじい数の注文と廊下に並ぶ人々。

調理室ではクラスメイトが鍋を振るい料理を仕上げたり、出来た料理をチャイナドレスを着たクラスメイト達がテーブルへと運ぶ。

「二夏、来たわよ!!」

二組の鈴音さんが入って来た。

「鈴も食べるのか?」

「二夏、文化祭の出し物で本格中華が食べれるって噂の一組よ!!当たり前じゃない!!」

「鈴音さんは何食べるの?」

「あら、十夏じゃないって、何よ!?!」

そのシステムキッチンは!?!」

「許可なら貰ってるよ。これ?」

私と千秋の個人所有の移動式システムキッチンだよ」

「もう、あんた達姉妹には驚かないわよ…」

じゃあ、四川麻婆豆腐ランチを貰うわ」

「四川麻婆豆腐ランチ入ります!!」

鈴音さんがシステムキッチンを観て呆れながらも四川麻婆豆腐ランチを注文する。冷蔵庫からタッパーに入れた仕込んだ麻婆豆腐用のセットを出して炒めて仕上げる。

「四川麻婆豆腐ランチ出来たよ!!」

「は〜い」

出来た、四川麻婆豆腐ランチを鈴音さんに運ぶ。

「じゃあ、早速……山椒の痺れと四川唐辛子の粉末と黒豆からつくる豆板醤……本当に四川麻婆豆腐ね……」

「どうだった?」

「十夏、完敗だわ。これじゃあ、二組の中華喫茶に閑古鳥が鳴くのも仕方ないわね」

「十夏さん、八番と十三番テーブルにフカヒレの姿煮入りました!!」

「九番と三番テーブルに青椒肉絲ランチと真鯛の氷山盛り!!」

「七番テーブル三種の卵の焼売ランチ、二番テーブル金華豚の壺入り角煮ランチ入ります!!」

注文を聞いたクラスメイトからキッチンに来る注文の数に忙しくなる事に溜め息しかでない。

「はあ……」

「ほら、ため息吐かないで行きなさい。嬉しい忙しさなのよ。あたしからしたら羨ましいわよ」

鈴音さんに言われ、キッチンに戻る。

その後、意地と根性で全ての注文を姉妹二人で捌き切り一段落する最中、パパとママが来たのだ。

「あら、大盛況じゃない」

「そうだな。十夏、千秋はこのクラスの専用機持ちを呼んでくれ」

「パパ、どうしたの?」

「アテナとアルテミスにはアンチリムーバ（対IS用剥離剤無効システム）をシステムに組み込んであるが、学園の専用機持ちにはリムーバ対策すらしてないだろ?」

「初めて知ったよ。パパ」

「だから、白樫のアンチリムーバを人数分をUSBメモリーにコピーして持って来た。直ぐにインストールする様に渡してくれ」

「言われた意味を直ぐに理解した。」

「もう直ぐ、亡国の襲撃があると。」

「千秋は察したのか、一組の専用機持ちを全員呼んでくれていた。」

「「「これは何だ?」「」」」

「USBを渡すと首を傾げる一組の専用機持ち達。」

「パパからの贈り物だよ。アンチリムーバだから自分の専用機にインストールしてね。」

「アンチリムーバだと!?!」

「ラウラさんが驚いた表情で私に詰め寄る。」

「うん、アンチリムーバだよ」

「十夏さん、お待ちになってくださる?」

「各国ではリムーバの開発で血なまこになって開発してますのよ!?!」  
「リムーバなら亡国が開発を成功させてるって、パパとママが今の文化祭の時には言ってたの。だからだと思おうよ」

「これ、自国に報告は?」

「無論、駄目に決まっているでしょ」

「ママ!?!」

「あたしと一夏は少し学園から離れて奴らの合流ポイントで待ち伏せするから、十夏と千秋は一夏を守りなさい」

「それなら、私達が!!」

「セシリアとあんた達は亡国を舐め過ぎ。馬鹿娘達でも戦闘経験と技量の点で不安なのにあんた達代表候補生如きに集団でも勝てると思わない事ね」

「ママの鋭い眼光に怯むセシリアさん。」

「これが、ママの瞬殺の女王としての眼光…」

「アンチリムーバをインストールした後は普通に一組の中華料理店は営業した。」

そして、3時頃になると一人の女性が一夏さんを目当てに会いに来たのだ。

そう、私達の世界で一年三組の担任。

だが、この世界のこの時代では亡国機業のオータムだった。

「すいません、織斑一夏さんは」

「一夏、お客さんだぞ」

「で、そちらさんは？」

「申し遅れました。」

ミツルギの営業の巻紙礼子です。

そちらの白式の武装を…えっ？」

私達姉妹は直ぐに得物をコールして槍を首に突き付け、巻紙礼子を困う。無論、クラスメイトには悪いが全員退避して貰っている。

「悪いけど、お縄頂戴になってくれると助かるかな？」

「うん、私達姉妹からは逃げられないと思った方が良いでしょう？」

「おい、一夏、千秋!？」

「一般客に!!」

「一夏、黙ってて。ねっ、亡国機業のオータムさん？」

「亡国機業!？」

驚く一夏を無視して、更に槍を突き付ける。

そして、巻紙礼子はどうとう本性を合わせたのだ。

「ちっ、ただの餓鬼かと思ったら、Mを泣かした餓鬼じゃねえか!？」

「えっ？」

私、泣かしてないよ？

ただ、着せ替え人形にしかただけど？」

「一緒じゃねえか!!」

「千秋も黙ってて…」

千秋の天然に頭が痛くなりながらも警戒は忘れない。

「ちっ、バレたらしゃあねえ!!」

白式を貰いに来たぜ!!

リムーバでも食らいな!!」

一夏さんに向けてリムーバを放つが、既にアンチリムーバはインス

ツール済だったから全く効いていない。

「リムーバが効かないだど!?!」

「ごめんね。」

アンチリムーバを専用機持ちにはインストールさせたから無意味だよ?。」

「クソガキがあああ!!」

ぶっ殺す!!

来い、アラクネ!!」

私達姉妹にキレた巻紙礼子は教室内でアラクネを展開する。

「千秋、一夏さんを頼むわよ!!」

アテナ、行くわよ!!」

お姉ちゃんがアテナを展開する。

私は一夏さんを避難させつつ教室から退避したのだ。

「てめえも専用機持ちかよ!?!」

「素直に捕まって欲しいな?」

「舐めてんてじゃねえぞ、クソガキ!!」

ブレードが襲い掛かるが、イージスの盾を全面に出して受け流す。

空気を縫いながらネプチューヌで突き刺しスラスターを破壊して行く。

「なんか、つまらない」

「なんだと!?!」

「単一仕様『イージスの盾』を発動!!」

メデューサに睨まれなさい!!」

「糞!!」

アラクネが動けねえだど!?!」

「だって、弱過ぎるもん……」

「グッワアアア!?!」

アラクネを単一仕様で拘束すると、一気にタコ殴りの様にネプチューヌで連続で突き刺しシールドエネルギーを奪い去る。アラクネを解除されたオータムは逃げようとするが、逃げるオータムを許す十夏では無かった。

「終わりだよ？」

「糞が!!」

「逃さない!!」

逃げようとするオータムにヤクザキックを食らわして意識を奪い、拘束用ワイヤーでオータムを拘束したのだった。

同じ頃、教室から退避した千秋と一夏は職員棟にある生徒会室へ向けて避難していた。

「十夏さん、大丈夫なのか？」

「お姉ちゃんなら大丈夫。教室みたいな狭い場所でも負けないから」

「見つけたぞ、織斑一夏!!」

「あつ、あの時の!!」

「織斑千秋、貴様まで居たのか!？」

なら、丁度いい。

着せ替え人形にした借りを返してやる!!」

「着せ替え人形？」

「うん、だって可愛かったからつい…」

「千秋、何してんだよ…それにしても、あの少女は千冬姉に似てるな？」

「まあ、一夏さんの妹だからね。そうでしょ、織斑マドカ!!」

「貴様!？」

なぜ、私の名前を!？」

「だって、私は織斑一夏の娘で次女の織斑千秋だから。糞爺と糞ババアが蒸発した時に連れ攫われた一夏さんの妹なのは、私が娘だから知ってて当然でしょ？」

「なあ、千秋本当か？」

「うん、一夏さんの2つ下の妹だよ。それに、ブラコンを拗らせて千冬叔母さんを殺せば一夏さんの唯一無二の妹に成れるって思い込んだお馬鹿さん？」

「くつ、やはり貴様は未来から来た娘だったのか!？」



「そっだよ。ねえ、マドカ叔母さん？」

あと、叔母さんマドカから聞いたけど懐の内ポケットに一夏さんの…」

「貴様より年下なのに叔母さんだと言われたくない!!」

「しゃ、写真など…」

確信出来た。

やっぱり、持っていた。

「叔母さんの脳にある裏切り防止のナノマシンが除去出来るって言ったら、降伏しない?」

「出来るのか?」

「束さんには頼んであるから出来るよ。それに、一夏さんに『お兄ちゃん』って言いながら甘えながら頭を撫でて貰うと気持ち良いよ?」

「本当か!?!」

やっぱり、マドカ叔母さんはブラコンだった。

「さあ、どうする?」

「くっ、甘えたいから降伏するに決まっている!!」

「マジかよ…」

ブラコンが発動したマドカさんは甘えたいからと呆気なく降伏。

そして、束さんが待機している整備室まで向かう途中のマドカさんは

「お兄ちゃん♡」

猫のように甘えていたのだった。

この後、束さんにより裏切り防止のナノマシンを除去されたマドカさんはコロツと生徒会長に全てを話したのは言うまでもない。

時空旅行 文化祭 瞬殺の女王と元の世界への帰還

学園の文化祭に入り込んだ二人は捕まり残すのはスコールだけとなった。

既に一組の出し物は教室が半壊により出せる状況ではなくなり中止となったのだ。

私達姉妹も生徒会長と織斑先生に呼ばれた。

「二人を捕まえたのは構わないがな、何故午後の生徒会の出し物を利用しなかった？」

「だって、ウエディングドレスなんか着たら動きづらいし。」

「うん、槍が振り回せない」

「判るが、次からは言うようにしろ」

「はい……」

織斑先生には叱られたが後悔は無い。

そして、事前にパパが説明してインストールさせたアンチリムーバについて生徒会長が質問して来たのだ。

「十夏ちゃん、アンチリムーバってなに？」

「コアの剥離剤を無効にするシステムですよ。私達の時代では当たり前のシステムらしいです」

「コアの剥離剤ですって!？」

「会長、驚く事じゃないですよ。織斑先生と会長には、確かパパが全て話したと思いますか？」

「織斑姉、束にも聞いたがリムーバの存在自体が怪しかったのだ。まさか、アメリカが開発に成功していて亡国機業が使うとは全く予想していなかった」

「だから、学生時代にリムーバでやられた経験があるパパが説明したと思いますか？」

「うっぐう……忘れてたわ……」

「はあ……」

溜め息しか出なかった。

同じ頃、当たりを引いたのはあたしだった。

確かに、あの事件後のスコールの取り調べでの調書では一夏が向かったレゾナンス前の雑居ビルだった筈が、学園に掛かる橋を渡った直ぐのサービスエリアだった。

一台だけ駐車している真っ赤なホンダのNSX。

どれだけ金を掛けて買ったか問い詰めたい位に高く二千万はするだろう。

あたしも、自前のバイクであるハーレーダビッドソンを隣に停めて軽く窓を叩く。

コンコン

「何よ？」

「あんたが、スコールね」

「!？」

亡国機業でのコードネームを言われ驚くスコールは、懐から拳銃を取り出す。

「あなた、一体何者なの？」

「あたし？」

あたしは織斑鈴音よ」

「まさか、貴女がMを泣かした千秋達の母親!？」

「はあ、全く馬鹿娘は何をしたんだか…」

「母親として苦労しているみたいね…」

「まあ、二児の母親だからね」

「聞きたいけど、ここに来たって事はオータムもMも捕まったって事かしら?」

「そうね、オータムは十夏に捕まり、マドカは千秋に降伏したわよ。まあ、千秋にはマドカの内ポケットに一夏の隠し撮り写真を持っていた事を話したからね」

「やっぱり、Mはブラコンを発動したのね……」

「やっぱりって何よ?」

「組織にいた時からよ…」

「じゃあ、話は早いわね。」

降参しなさい。

「今なら、あんたをぶっ飛ばさずに済むわよ?」

「降参しろって言われて、大人しく降参するとでも?」

「そうね、亡国機業の中では一番まともなあんたならしてくれって信じてもらおう?」

「あら、嬉しいわ。」

でも、降参する前に貴女の強さが知りたいわね。

来なさいゴールデン・ドーン!!」

「上等よ!!」

来なさい、黒椿!!」

二人がサーブスエリアにてぶつかり会ったのだが、スコールは黒椿を観て驚愕した。

八枚四対のウイングバインダーは閉じたままだが、一纏めに斜め上方に向くと天使の様な光の翼が現れた。

「まさか、臨海学校で見たけど……六世代機!」

「七世代機よ!!」

「七世代!」

「どうするの?」

ヤルの?」

ヤラないの?」

「七世代でも!!」

「そう……」

降伏する事を願いながらも、挑んで来る事に落胆する鈴音は黒椿の展開装甲を展開し光の翼を最大出力で二重加速する。

狙ったのはスコールの額。

肘鉄の一撃で沈める為だけにスコールが展開したゴールデン・ドーンの額に打ち込んだのだ。

額に打ち込まれた肘鉄、打ち込まれた衝撃で碎けるバイザー。

どんなに頑丈でも、スコールが頭と身体以外がサイボーグでも脳を

揺らしてしまえば脳震盪により気絶する。

そして、二重瞬時加速に反応出来ずに額に肘鉄を打ち込まれ、一言も発する事無く気絶により強制解除されてアスファルトに崩れ落ちるスコール。

織斑鈴音が現役時代に瞬殺の女王と言われる所以の一撃。

「全く、弱くて仕方ないわね…」

鈴音はスコールの手足の義手義足を取り外して拡張領域に仕舞うと、スコールを抱えて学園へと戻ったのだった。

元の平行世界では…

ボーデヴィツヒ三姉妹はギリシャのパルテノン神殿に来ていた。復元中とは言っても中のゼウス像だけは一切の風化がなく威厳を醸しながら佇む。

「レナス、ここか？」

「アーリイ姉さん、ゼウスが居るね…」

「やっぱりか…」

「レナス姉様、戦うことにはなるのでしょうか？」

『フハハハ!!』

北欧の女神である三姉妹が我がゼウスに何の様だ？

まさか、我に嫁入りか？』

「『そんな訳、あるか!!』」

神殿内のゼウス像が光出し、ギリシャ神話の主神ゼウスが高笑いしながら現れた。『嫁に来たか』と言う当たりは相変わらずの女好きは変わらない様だったし、好きでもない男に嫁入りはしたくない。

だって、夏休み初旬に十夏と千秋から送られた四郎の写メ。あの姉妹が四郎に惚れた様に私達三姉妹も惚れてしまっていた。

「そちらの馬鹿娘二人を引き取って貰いたい!!」

『アーレイ・ヴァルキリアと言ったか?』

まさか、アテナとアルテミスの馬鹿娘では?』

「そうだ!!」

私の妹であるレナスの大親友の姉妹と両親を何処ぞの時空神から神具を借りて平行世界の過去に飛ばしたのだ!!」

アーレイ姉さんがゼウスに事情を全てを話したのだ。

そして、ゼウスは私達に頭を下げて謝ったのだ。

『うちの馬鹿娘が済まなかった。

来い、馬鹿娘共!!』

「えっ?」

私達の目の前に魔法陣が浮かび上がり、アーリーナで地下倉庫から持ち出した酒を煽り宴会最中の駄女神二人が強制召喚されたのだ。

やはり、ギリシャ神話の主神ゼウスと言った所だろう。

だが、強制召喚された二人は何故ギリシャに居るのだと頭にはてなマークが浮かび上がっていた。

『この、馬鹿娘が!!』

「ひゃう!?!」

突然のゼウスのカミナリに背筋を伸ばす二人は壊れたブリキの玩具の様にカミナリが落とされた方に振り向くと顔を真っ青にして叫ぶ。

「父上!?!」

『まさかだと思ったが、お仕置きが必要だな?』

「おっ、お許しを!!」

『ならん!!』

まずは、アテナからだ!!』

二人は土下座しながら父親のゼウスに赦しを乞うが、アテナはゼウスに抱えられて履いていたジーンズとパンツを一緒に下ろされ尻に平手打ちを食らっていたのだ。

俗に言う、お尻ペンペンだった。

「ひゃん!?!」

父上、お許しを!!」

『どれだけ、人に迷惑を掛ければ済むのだ!!』

二人の女神が父親の主神にお尻を叩かれる光景はシユールだった。アテナとアルテミスは椅子に座る事が不可能な位に叩かれてお尻が真っ赤に腫れて、怒ったゼウスにより二人は織斑家に謝罪して酒代と自宅の修繕費を全て支払うまでとゼウスからの厳罰により神格と権能を奪われたのだ。

そう、二人は私達三姉妹と同一年であり、唯の人として少女にされたのだった。

無論、地下アリーナに浮かぶ神具の砂時計はゼウスが手元に呼び寄せて、握り潰して壊したのだった。

再び戻り、文化祭後。

無論、束さんの手によりナノマシンを脳から除去したマドカは千冬が委員会に話を付けて監視を理由に身柄を引き取ったのだ。

マドカの専用機サイレント・ゼフィルスは束さんがイギリスに新たなコアを作り渡す事で引き取り、マドカの専用機としたのだ。

スコールとオータムは会長の更識楯無と司法取引を行い、全て話す条件に更識の精鋭として働く代わりに罪を抹消したのだ。

ただ、ゴールデン・ドーンとアラクネはアメリカへ返却となったが、学園の防衛任務を更識から請け負い教師となった二人は束さんから専用機を送られるらしい。

そして、一夏と鈴音は恋人同士となったがラヴァーズが猛反発したが、『今の一夏は無国籍よ。あたしが一番なら重婚すらも認めるわよ?』と包容力を発揮した鈴音は言いながらラヴァーズを挑発。しかし、ラヴァーズは恋人に成れるならと、まさかの承諾してラヴァーズとも一夏は恋人として付き合うらしい。

そして、私達一家はキャノンボールファストを前に元の世界に戻っ

たのだ。



## 結婚式

私達一家は無事に元の世界へ帰還したのだが、レナスは大泣きして私達姉妹へ抱き付いたり、マドカ叔母さんはパパに退院するまでは看病してと甘え、メアリーママとセシリアママも同じ病室に入院していた様でマドカ叔母さんと同じ理由で看病を頼んでいた。

そして、私達姉妹に嬉しい朗報があつた。

ママの3人目の妊娠だつた。

しかも、男の子らしい。

しかし、二人のママは何故と疑問符していたが、私達一家が消えたのはたったの3日間だけらしいが平行世界では優に4ヶ月も過ぎた事を二人のママに私達姉妹が説明した。

「まっ、まさか、二人は私の学生時代をみつ、見たのですの!？」

「「えっ?」」

妙な慌て方をするセシリアママ。

「もしかして、セシリアママの黒歴史?」

「ハウッ!？」

胸を抑え苦しむセシリアママ。

そして、向こうの若い頃の箒先生と意気投合した結果、千秋は若い頃のラヴアーズの黒歴史を聞いたらしくてセシリアママを前に話そうとしていた。

「そう言えば、若い頃の箒先生から聞いたけど、入学して2日目に…ムツグウ!？」

「おホホホ…お気になさらずに…」

「セシリアママ!？」

ち、千秋が!!」

「ムゴゴゴ!!」

ムムムム!？」

チーン

……………」

誰かがお見舞いで持って来ただろうフルーツバスケットに有った林檎をセシリアママの黒歴史を話そうとしていた千秋の口にセシリアママが笑いながら誤魔化して無理矢理振じ込んだ瞬間だった。

林檎を押し込まれ栗鼠の様に頬が膨れた千秋は顔を真っ赤にして手をバタバタしながら苦しみ、遂には喉を抑えながら真っ青になり遂には白目になりながら酸欠で気絶したのだった。

病室を同じくするメアリーママとマドカ叔母さんは事情を知っている為、セシリアママを白い目で睨み、私が千秋を復活させようとアタフタする光景が病室に広がっていたのだ。

「全く、あんた達は何やってのよ…」

マドカ叔母さんの花瓶の水と花を交換して病室に入って来たママがこの光景を観て呆れた様に呟く。

ママは千秋の肩を掴むと背中を叩いて林檎を吐き出せたのだ。

「ふん!!」

「あれ?」

川の向こうのお花畑にいた糞ババアと糞爺が此方に来て…」

「それ、絶対に行っちゃ駄目なやつだからね!」

「あつ、お姉ちゃん…」

何故か、千秋は糞爺と糞ババア三途の川で手招きされ逝き掛けたらしい。

それに、幼かった四歳のパパと中学生だった千冬叔母さんを見棄てて蒸発し、二歳のマドカ叔母さんを連れて行き亡国機業にマドカ叔母さんを身売りした奴などは絶対に許さない。

そして、今度は千秋を三途の川で手招きして連れて行くとした。

「ユルサナイ…」

「お姉ちゃん?」

「十夏、あんたまさか?」

「クタバレ!!クソジジイ、クソババア!!」

私は魔界での修行中、ダンジョンを攻略して拾った魔槍ロンギヌスの槍をコールして槍に神威を纏わせて窓を開けて上空に投擲する。

そして、暫くして上空から

『フツギヤア!?!』

どうやら、男女の悲鳴から二人に当たったらしい。

「十夏、死んだ一夏の糞両親に槍を当てたんじゃ無いでしょうね?」  
ママの言う通り、ロンギヌスの槍を当ててやった。

今頃、二人仲良く三途の川で串刺しになっているだろ。

「今頃、串刺しじゃない?」

「はあ……まさか、亡国機業事件で一夏に殺され、今度は十夏にね……呆れて、糞両親には何も言えないわね……」

ママとセシリアママも、あの事件で副総帥だったパパの両親達と戦っている。そして、パパは自身の出生の秘密をしり二人を殺した。無論、ママは全て知った上でパパを愛した。

じゃなければ、私達姉妹は生まれなかつたし、弟であり産まれる予定の一春（既に名前は決まっていた。命名主は千冬叔母さん）もだろ  
う。

何やかんやで、3日後には三人は仲良く退院した。

夏休み、最終の日曜日。

横浜のイギリス聖合教会の大聖堂では、パパとセシリアママにメアリーママの結婚式が盛大に行われた。

無論、結婚に呼ばれた人達は凄まじい数になった。

「よう、一夏。

また、結婚おめでどうと言いたいが、オレもそちら側に混ぜやがれ  
!!」

パパを前に挨拶するのは、元アメリカ国家代表のイーリス・コーリ  
ングに

「お姉ちゃんだけで無く、あたしもよ一夏!!」

ママの従姉妹の元台湾国家代表の鳳乱音叔母さん。  
たまに遊びに来て、お店を手伝ったりしていた。

他にも沢山の著名人や芸能人なども来てはいたが最も多かったの  
は学園関係者だろう。

そして、私達姉妹は凄い物を観てしまった。

受け付けで対応するのはママだった。

「…」

「…」

ママの前に立つのは初老の女性、無言で見つめ合った二人は、次の瞬間に拳を打ち合い蹴り合い漢詩を叫ぶ。

「はああアアア!!」

流派東方不敗は 王者の風よ

全新系列 天破侠乱 見よ!

東方は赤く燃えている!!」

『…………』

いきなりな出来事に啞然となる結婚式に参加した人々と身内の家族。そして、打ち合った後は二人はがちりと抱き合い再会と結婚式の祝福していた。

「馬鹿弟子、腕は訛っていないようだな」

「当たり前よ!!」

「師匠!!」

最後はお互いに抱き合い、お互いの無事と成長を喜び合っていた。

「ママ、誰?」

「ほう、馬鹿弟子の娘か」

「ママの娘、長女の十夏です」

「次女の千秋です」

「私は流派東方不敗の継承者で東方不敗の孫娘よ」

「あれ?」

「本名は?」

「東方不敗の名前を継承して名前が東方不敗よ」

流石は、ママの師匠。

名前は流派東方不敗を継承した時点で捨てたらしい。最も、本名は聞かなくても知っている。

女子総合格闘技の覇者の張彩希（チャン・ユイリイ）だ。若く幼く見えるが、歳は50近い年齢のロリババアだ。

他にも、ママの中華の師匠の広州の陽泉酒家のオーナーや四川飯店

のオーナーなど大多数が押し寄せたのだ。

だけど、残念な事だけどセシリアママの親戚関係とメアリーママの親族はメアリーママの専属メイドにして近衛騎士団副団長のサラさん親子しか来なかった。

祝辞に關しても同じだった。

メアリーママの話だと、イギリス王家はメアリーの結婚に關しては一切祝福しない方針だった。

だけどね、知っちゃった。

ウエディングドレスを着込みメイク中の準備室にシスターに変装した一人の女性がメアリーママの妹にしてエリザベス四世だったのは驚いたけどね。

「メアリー姉様…」

「えっ、エリザベート!?!」

「私には女王の立場で無理でしたが、私の代わりに愛に生き人生を謳歌して下さいな、メアリー姉様」

「ア리가どう…うわああ!!」

「メアリー姉様、折角の綺麗な化粧が崩れますわよ」

そう、妹にして現イギリスの女王エリザベス四世がお忍びで姉の結婚を祝福したのだ。二人の姉妹の隔たりは無くなり式が始まるまで抱き合ったのだった。

そして、無事に教会と寺院での結婚式が終わり、披露宴会場の中華料理店織斑は束さんの発明した『元に戻す君』の活躍により一晩で修理していた。

修理が間に合い、披露宴は盛大に開かれテーブルにはパパやママの他に広州のママの師匠やマドカ叔母さんの四川の師匠が協力して作り上げた満漢全席と様々なお酒やジュースがならんだ。

「それでは、乾杯!!」

ママの音頭で披露宴が始まり、中国式の結婚式は派手だった。

だけど、幸せそうにするセシリアママとメアリーママ。

「羨ましいね」

「うん」

「千秋、あんたも四郎が好きなの？」

「ぶっふうふう?!」

私の質問に千秋はジューズを吹き出す。

「はあはあ…お姉ちゃんもなの？」

「私もかな。」

裸を見られたのもあるけど…」

「じゃあ、ライバルだね」

「そうだね。」

千秋には負けないから」

「じゃあ、私も混ざるわよ!!」」

目の前に現れたのはボーデヴィツヒ三姉妹だった。

「うそ、レナスちゃんまで…」

「千秋、四郎は私の嫁だ。」

異論は認めない」

「アーリイさん、意味が違うからね!!」

「なら、五人で四郎を…」

「お姉ちゃん？」

「十夏ちゃん？」

「いやいや、千秋、レナス？」

「誰が一番になるか競争よ!!」」」

四郎を巡り、五人の乙女達が争う日は近い。

だが、一夏は知らない。

娘二人が四郎を好きになつていた事実を…

そして、四郎は直面する。

一夏の学生時代と同じ運命になる事を…

## 最終話 中華料理店織斑

パパとセシリアママにメアリーママが結婚してあれから一年が過ぎた。

私達姉妹はと言えば…

『さあ、モンドグロツソダックトーナメント部門の決勝戦は無所属の織斑姉妹とドイツ国家代表ボーデヴィツヒ姉妹との好カードだああ!!』

モンドグロツソのダックトーナメント部門に出場したのだ。

無論、両親は渋々だったけど学生での出場に学園は大いに騒ぎになったし、中継を観ようと実家は大繁盛だろう。

「全く、馬鹿娘は…」

「二夏、それはブーメランよ…」

中華料理店織斑は今日の決勝戦で大繁盛だった。

四郎や花蓮も鍋を振るい料理を仕上げて行く。

呆れて何も言えないが、鈴は一春を出産しセシリアとメアリーも娘を妊娠していた。

そして、四郎は五人から一斉に告白されて娘達とボーデヴィツヒ三姉妹が卒業したら結婚すると頑張っている。

レナスはモンドグロツソの個人戦を馬鹿双子姉妹とアーリイとシルメリアはタッグトーナメント部門へ、セシリアの長女のオーロラはキャノンボールファストへとそれぞれ出場している。

「二夏、あんたも頑張らないと花蓮に叱られるわよ?」

「うっげえ…」

ラウラは目的だった軍政改革を成功させてから、軍を辞めて日本に来て、うちの店でウェイターとして働いている。

花蓮は、俺に猛アタックをして、三人の嫁から認められて来年には妻になる予定だ。

そして、全員が驚いたのがマドカだった。

「フフフ：お兄ちゃん、食べても良いよね？」

「やっ、やめ!？」

「大丈夫、安全日（排卵日）だから…」

「ぬっわアアア」

マドカがかなりブラコンを拗らせて、一人でベッドに寝ていた俺に夜這いを仕掛けて襲い、一晚中絞るだけ絞り取り俺の子を妊娠したのだ。

「お兄ちゃんを襲ったら、子共を妊娠しちゃった」

「マドカ、あんたねえ!!」

「何してますの!？」

「聞いてますの!!」

「「「「マジ!?!」」」」

無論、妻達はマドカに激怒し娘達は驚く最中、マドカは涼しい顔でやり過ごした。しかも質が悪い事に、妊娠六ヶ月になるまで俺達に黙っていたらしくて確信犯だった。

そして、悲しい別れも在った。

「二夏、やっと長男が産まれたな…」

「義姉さんが名付けてくれた一春よ」

「抱いても良いか？」

「二夏に似て、優しい子になるだろうな…」

そして、千冬姉だが長年の深酒による飲酒が祟り、今年の春に肝硬変を患い再入院。入院中、産まれた長男の一春を抱きしめる事が出来た後、肝不全に陥り夜間に病状が急変してこの世を去った。

享年43歳だった。

葬儀には千冬姉世代の元国家代表のライバルや多数の学園の教え子達が参列した。

葬儀後だが、居候が二人も増えた。

一人は鈴の従姉妹の鳳乱音と、もう一人はアメリカの元国家代表のイーリス・コーリングだった。

二人揃って共謀し、俺に夜這いを仕掛けたが一緒に眠っていた鈴と



花蓮により捕縛され、一晚中だが二人共にロープで巻かれて外に逆さ吊りにしたのが懐かしい。

『アルテミスのファーストアビリティ『女神の狩場』の発動だアアア!!』

「相変わらず、ぶっ飛んでるわね…」

「そうだな…」

モンドグロックのアリーナを密林へ替えたアルテミスを駆る千秋に密林を縫うように加速しながら、アーリイとシルメリアの駆るヴァルキリーのモビルドールビットを十夏の駆るアテナがハルバードを振り回して斬り裂く。

そんな二人を見守りながらも、夫婦二人は鍋を振るう。

そして、ホールではチャイナドレス姿の乱やラウラ達が駆け回りながら注文された料理を運ぶ光景は今や日常だと言えるだろう。

「決まったな…」

「姉妹揃って、えげつないわね…」

十夏が単一仕様『イージスの盾』を発動させて、レナス達を一気に拘束し、セカンドアビリティの『アルテミスの矢』によるアローレインによる矢の雨を降らす光景。

無論、身動きが出来ない二機のヴァルキリーはハリネズミの様に矢が刺さり、シールドエネルギーを減らして行く。

『きつ、決まったアアア!!』

優勝は織斑姉妹に軍配が上がったアアア!!』

十夏が二重加速し、ヴァルキリーをハルバードで斬り、タッグトーナメントは双子姉妹が勝ち優勝したのだった。

「さて、赤字覚悟でビールの無料配布でもやりますかね一夏?」

「そうだな。」

娘の優勝でも祝うか」

『うおおおおお！ 今日にはビール、飲み放題だアアア!!』

常連客が聞いて騒ぎ出すが、お玉を飛ばすのは今日は無しでと決め

て娘達の優勝を祝ったのだ。  
そして、今日も中華料理店織斑は繁盛していたのだった。